

福島県文化財調査報告書415集

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告 3

荒屋敷遺跡（2次）

2004年

福島県教育委員会
財団法人福島県文化振興事業団
国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告 3

あらかやしき
荒屋敷遺跡 (2次)



口絵1 遺跡全景（1次調査と合成）



口絵2 遺跡出土貿易陶磁器（白磁）



口絵 3 遺跡出土貿易陶磁器 (白磁他)



口絵 4 遺跡出土貿易陶磁器 (青磁)

序 文

「会津縦貫北道路」は、喜多方市と会津若松市を結ぶ延長約13.1kmの地域高規格道路です。平成8年度に都市計画道路として決定され、平成9年度からは建設省（現国土交通省）直轄事業として建設工事が進められています。

この計画路線内には、先人が残した貴重な埋蔵文化財が所在しております。この埋蔵文化財は、各地域の長い歴史の中で生まれ、今日まで大切に受け継がれてきたものであり、我が国の歴史や文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものであります。

そこで、福島県教育委員会では、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所と埋蔵文化財の保護・保存について協議を重ね、現状保存が困難な埋蔵文化財については、記録として保存することとし、平成13年度から発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、耶麻郡塩川町に所在する荒屋敷遺跡の発掘調査の成果をまとめたものですが、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

おわりに、この発掘調査の実施にあたり、御協力いただいた国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所、財団法人福島県文化振興事業団等の関係機関並びに関係各位に対し、感謝の意を表するものであります。

平成16年2月

福島県教育委員会
教育長 高 城 俊 春

あ い さ つ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模な開発に伴う埋蔵文化財の調査業務を行っております。会津縦貫北道路に関連する埋蔵文化財の調査もそのひとつであり、平成13年度より本格的に事業を開始いたしました。

平成14年度は、予定路線上で工事が優先される塩川町遠田地区の荒屋敷遺跡について発掘調査を実施いたしました。本報告書は、この荒屋敷遺跡の2次調査の成果をまとめたものであります。

荒屋敷遺跡は、日橋川右岸の河岸段丘に立地する遺跡で発掘調査により平安時代及び中世を主体とする複合遺跡であることがわかってまいりました。出土遺物の多くは平安時代から中世に属する土器であります。これに加えて中世の輸入陶磁器であります白磁や青磁も出土しており、当該期の会津地域はもとより他地域との流通経路を知る上で、貴重な資料になるものと思われま。

今後、これらの調査成果を考古学や歴史学など研究の基礎資料として、さらに地域社会の理解や生涯学習の場で幅広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、発掘調査当初から報告書刊行に至るまで、御指導・御協力いただきました関係諸機関並びに関係各位に対し、深く感謝申し上げますと共に、埋蔵文化財の保護に対し、今後とも一層の御理解と御協力をお願い申し上げます。

平成16年2月

財団法人 福島県文化振興事業団
理事長 佐藤 栄 佐 久

緒 言

1. 本書は平成14年度に実施した会津縦貫北道路（会津若松～喜多方間）遺跡発掘調査の報告書である。埋蔵文化財番号：403-00073 荒屋敷遺跡；耶麻郡塩川町遠田字荒屋敷 他
2. 当遺跡調査事業は、福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し、調査に係る費用は国土交通省が負担した。
3. 福島県教育委員会は、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。
4. 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部遺跡調査課の下記の職員を配して調査にあたった。

文化財副主査 井 憲治

なお、臨時的に次の職員の参加・協力を得た。

文化財主査	高橋 信一	文化財主査	安田 稔
文化財副主査	大河原 勉	文化財主事	福田 秀生
文化財主事	笠井 崇吉	文化財主事	稲村 圭一
文化財主事	奥山 誠義		

5. 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を明記した。
6. 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院長の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図・2万5千分の1地形図を複製したものである（承認番号 平15東複第275号）。
7. 本書に掲載した自然科学分析については、次の機関の協力を得、付章にその結果と考察を掲載している。（順位不同・敬称略）

自然科学分析： 土壌分析・種実同定・・・(株)古環境研究所
漆器分析・・・(株)パリノ・サーヴェイ

8. 石質の鑑定・指導には、(株)パリノ・サーヴェイ石岡智武氏の御協力を賜った。
9. 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
10. 発掘調査から本報告書を作成するまでに、次の機関および個人の方々から指導・助言・協力をいただいた。（順位不同・敬称略）

国土交通省東北地方整備局郡山国道事業所・福島県喜多方建設事務所・塩川町教育委員会
・遠田地区・和田 聡・植村 泰徳・山中 雄志

用 例

1. 本文中および遺物整理に使用した略記号は次のとおりである。

塩川町…CK 荒屋敷…AYS 竪穴状遺構…SI 掘立柱建物跡…SB
柱列跡…SA 土坑…SK 溝跡…SD 小穴・ピット…P
グリッド…G トレンチ…T 遺構外堆積土…L 遺構内堆積土…ℓ

2. 本書における遺構実測図の用例は、以下のとおりである。

(1) 方位記号の表記がないものは、すべて真上を真北とする。

(2) 遺構番号は、基本的に1次調査からの連続番号である。

(3) 遺構平面図は、原則として座標軸経線の北を上にして割り付けを行った。

(4) 遺構図は原則として、竪穴状遺構・建物跡・柱列跡を1/50・1/60、土坑を1/40、溝跡を1/100～1/300の縮尺とした。スケール脇に縮尺率を表示した。

(5) 原則として遺構内の傾斜面は $\overline{\text{III}}$ で表示したが、相対的に緩傾斜の部分は $\overline{\text{I}}$ で表している。また、後世の削平や人為的な削土部分は $\overline{\text{T}}$ の記号で表記した。風倒木跡やその他の攪乱による範囲には、 $\overline{\text{T}}$ のケバを使用し、「カクラン」などの語句を記している。なお、これら「カクラン」や盛土等には、必要に応じて網点を貼り付けている。

(6) 断面図および地形図における標高・水系レベルは海拔標高を示す。また、断面図における水準線脇の数値は標高である。

(7) 遺構外の自然堆積土はローマ数字、遺構内堆積土は算用数字で表記した。

[例] 遺構外自然堆積土：L I・L II…，遺構内堆積土：ℓ 1・ℓ 2…

(8) 各ピットの深さは、平面図に示したピット番号の側に()付数値、または一覧表に明記している。単位cm。

3. 本書における遺物実測図の用例は、以下のとおりである。

(1) 縮尺率はスケールの脇に表示したが、原則として土器・石器は1/3に縮小し、他の遺物については大きさ・性格等により適宜決定した。

(2) 土器の断面は、土師器を白ヌキ、須恵器はベタ黒、中世陶器類を網点とし、必要に応じて凡例を設けた。粘土紐の積み上げ痕は器面で実線、断面図では一点鎖線で表記した。

(3) 遺物番号は挿図版ごととし、文中では下記のように省略している。また、掲載土器の出土位置・層位は、右下に示している。

[例] 図28の10番の土器 … 図28-10

(4) 計測値は一覧表として章末に掲載した。推定値()、遺存値[]で表示した。

4. 文章中の土器などの点数は、接合・復元された遺物も含め、すべて破片点数である。

5. 本書における遺物写真の中で個々に付した番号は、挿図番号と一致する。

6. 引用・参考文献は、執筆者の敬称を省略し、参考文献として章末に収めた。

目 次

第1章 遺跡の環境と調査経過	1		
第1節 調査に至る経緯	1		
第2節 調査経過	1		
1. 平成13年度までの調査(1)			
2. 平成14年度の調査(4)			
第3節 遺跡の位置と自然環境	5		
第4節 周辺の遺跡と歴史的環境	7		
第5節 調査の方法	12		
第2章 遺構と遺物	15		
第1節 遺跡の概要と基本土層	15		
1. 遺構の分布と出土遺物(15)			
2. 基本層序(19)			
第2節 竪穴状遺構	21		
2号竪穴状遺構(21)			
3号竪穴状遺構(22)			
第3節 掘立柱建物跡・柱列跡	24		
2号建物跡(24)	3号建物跡(26)	4号建物跡・2号柱列跡(28)	
5号建物跡(30)	6号建物跡(31)	7号建物跡(33)	
第4節 土 坑	35		
61号土坑(35)	62号土坑(35)	63号土坑(36)	64号土坑(36)
65号土坑(36)	66号土坑(38)	67号土坑(38)	68号土坑(40)
69号土坑(40)	70号土坑(42)	71号土坑(42)	72号土坑(42)
73号土坑(43)	74号土坑(43)	75号土坑(45)	76号土坑(45)
77号土坑(47)			
第5節 溝 跡	47		
4号溝跡(47)	6号・7号溝跡(50)	9号・12号・45号溝跡(52)	
10号溝跡(63)	25号溝跡(63)	36号溝跡(66)	
37号溝跡(66)	38号溝跡(67)	39号溝跡(69)	
40a・40b号溝跡(69)	41号溝跡(71)	42号溝跡(71)	
43・44号溝跡(71)	46号溝跡(72)	47号溝跡(72)	
48～50号溝跡(74)	51号溝跡(74)	52号溝跡(74)	

第6節	その他の遺構	76
	1号性格不明遺構(76)	
	2号性格不明遺構(77)	
	ピット群(79)	
第7節	遺構外出土遺物	84
第3章	ま と め	92
第1節	遺物について	92
	1. 土器組成・器種構成(92)	
	2. 編年的検討(99)	
	3. 遺構内における遺物の共伴関係(102)	
第2節	遺構について	103
	1. 遺構群の構成(103)	
	2. 遺構群の性格(107)	
第3節	調査の成果	108
	1. 遺跡の性格と歴史的景観(108)	
	2. 今後の課題と問題点(109)	
付 章	自然科学分析	151
付章1	土 壌 分 析 (株)古環境研究所	151
付章2	漆 器 分 析 パリノ・サーヴェイ(株)	163

挿図・表・写真目次

〔挿 図〕

図1 会津縦貫北道路位置図	1	図29 9'・12'・45号溝跡(1)	53
図2 調査遺跡位置図・一覧表	3	図30 9'・12'・45号溝跡(2)	54
図3 会津盆地および遺跡周辺地形 ・地質概略図	6	図31 9'・12'号溝跡出土遺物(1)	56
図4 周辺の遺跡	9	図32 9'・12'号溝跡出土遺物(2)	57
図5 調査範囲と予定路線図	13	図33 9'・12'号溝跡出土遺物(3)	59
図6 遺構配置図とグリッド配置(1)	16	図34 9'・12'号溝跡出土遺物(4)	60
図7 遺構配置図とグリッド配置(2)北半部	17	図35 9'・12'号溝跡出土遺物(5)	61
図8 遺構配置図とグリッド配置(3)南半部	18	図36 9'・12'号溝跡出土遺物(6)	62
図9 グリッド別遺物出土点数と内訳	19	図37 25'・43・44・48~52号溝跡(1)	64
図10 基本土層図	20	図38 25'・43・44・48~52号溝跡(2)	65
図11 2号竪穴状遺構, 出土遺物	21	図39 36号溝跡	66
図12 3号竪穴状遺構, 出土遺物	23	図40 37・38号溝跡	68
図13 2号掘立柱建物跡(1)	24	図41 39・42号溝跡	70
図14 2号掘立柱建物跡(2)	25	図42 41・46・47号溝跡	73
図15 3号掘立柱建物跡(1)	27	図43 25'・37・38・44~46号溝跡出土遺物	75
図16 3号掘立柱建物跡(2)	28	図44 1号性格不明遺構	76
図17 4号掘立柱建物跡, 2号柱列跡	29	図45 2号性格不明遺構, 出土遺物	78
図18 5号掘立柱建物跡	31	図46 ピット群(1) A	80
図19 6号掘立柱建物跡	32	図47 ピット群(2) B	81
図20 7号掘立柱建物跡	34	図48 ピット群(3) C	82
図21 61~63号土坑	37	図49 ピット群(4) D	83
図22 64~67号土坑	39	図50 遺構外出土遺物(1)	85
図23 68~70・72号土坑	41	図51 遺構外出土遺物(2)	86
図24 71・73~75号土坑	44	図52 遺構外出土遺物(3)	87
図25 76・77号土坑, 土坑出土遺物	46	図53 荒屋敷遺跡出土遺物(1)	93
図26 4'・40a・40b号溝跡	48	図54 荒屋敷遺跡出土遺物(2)	95
図27 4'号溝跡出土遺物	49	図55 荒屋敷遺跡出土遺物(3)	97
図28 6'・7'・10'号溝跡, 出土遺物	51	図56 荒屋敷遺跡出土遺物(4)	98
		図57 荒屋敷遺跡遺構配置図(1次・2次)	104

〔表〕

表1 周辺の遺跡一覧(1)	10	表5 グリッドピット一覧表	90
表2 周辺の遺跡一覧(2)	11	表6 石製品観察表	90
表3 掘立柱建物跡一覧(1)	88	表7 遺構内外における土器組成	91
表4 掘立柱建物跡一覧(2)	89		

〔写真図版〕

1 調査区全景	113	6 調査区北半部2	115
2 調査区全景	113	7 調査区南半部1	116
3 航空写真1	114	8 調査区南半部2	116
4 航空写真2	114	9 2号竪穴状遺構全景	117
5 調査区北半部1	115	10 3号竪穴状遺構全景	117

11	2号掘立柱建物跡全景	118	37	37・38号溝跡	134
12	2号掘立柱建物跡(1)	118	38	39号溝跡全景	135
13	2号掘立柱建物跡(2)	119	39	39号溝跡	135
14	3号掘立柱建物跡全景	120	40	40～43号溝跡	136
15	3号掘立柱建物跡(1)	120	41	46号溝跡全景	137
16	3号掘立柱建物跡(2)	121	42	46号溝跡	137
17	3号掘立柱建物跡(3)	122	43	47～50・52号溝跡	138
18	4号掘立柱建物跡, 2号柱列跡全景	123	44	旧河川, 作業風景	138
19	4号掘立柱建物跡	123	45	1・2号性格不明遺構	139
20	5号掘立柱建物跡全景	124	46	ピット群	140
21	6号掘立柱建物跡全景	124	47	基本土層	141
22	土坑(1)	125	48	土坑出土遺物	142
23	土坑(2)	126	49	4'号溝跡出土遺物	142
24	土坑(3)	127	50	9'・12'号溝跡出土遺物(1)	143
25	4'号溝跡全景	128	51	9'・12'号溝跡出土遺物(2)	144
26	4'号溝跡	128	52	9'・12'号溝跡出土遺物(3)	145
27	6'・7'号溝跡全景	129	53	9'・12'号溝跡出土遺物(4)	145
28	6'・7'号溝跡	129	54	25'・37・38・44～46号溝跡出土遺物	146
29	9'・12'号溝跡, 2号掘立柱建物跡全景	130	55	遺構外出土遺物(1)	146
30	9'・12'号溝跡(1)	130	56	遺構外出土遺物(2)	147
31	9'・12'号溝跡(2)	131	57	出土貿易陶磁器(1)	147
32	9'・12'・45号溝跡全景	132	58	出土貿易陶磁器(2)	148
33	9'・12'・45号溝跡	132	59	出土貿易陶磁器(3)	148
34	25'号溝跡全景	133	60	出土貿易陶磁器(4)・銅製鈴・木質遺物	149
35	25'号溝跡	133	61	出土石器・砥石	149
36	37・38号溝跡全景	134			

付 章

〔挿 図〕		
図1	荒屋敷遺跡における花粉ダイアグラム	158
〔表〕		
表1	荒屋敷遺跡における寄生虫卵分析 および花粉分析結果	156
表2	トイレ遺構分析種実同定結果	156
〔写真図版〕		
1	荒屋敷遺跡の花粉・孢子	157
2	荒屋敷遺跡の木材	160
3	荒屋敷遺跡の種実	162
4	木材・漆断面	166

第1章 遺跡の環境と調査経過

第1節 調査に至る経緯

会津縦貫北道路（地域高規格道路）は、喜多方市関柴町大字西勝から耶麻郡塩川町・河沼郡湯川村を経て会津若松市高野町大字木流の2市1町1村に至る延長13.1kmの4車線自動車専用道路である。平成8年度に都市計画道路の決定が行われ、平成9年度から建設省（現国土交通省）直轄事業として進められている。

この事業は喜多方市と会津若松市の会津北部地域の縦軸を強化し、「会津地方拠点都市地域」・「会津リフレッシュ構想」・「会津西北地域活性化対策事業」等の広域的な地域開発プロジェクトを支援し、会津地方の定住化と活性化を図ることを目的としている。この事業の完成により、磐越自動車道との一体化によって会津北部地域は東北地方の高速交通体系に組み入れられ、産業・経済の発展が期待される。将来的には北へ向かっては東北中央道路の米沢IC（仮称）と、南では会津縦貫南道路を経て栃木県北部とを結ぶ計画である。（高橋）

第2節 調査経過

1. 平成13年度までの調査経過

福島県教育委員会では、路線内に所在する埋蔵文化財の保護を図るため、平成9年度に財団法人福島県文化センター（現財団法人福島県文化振興事業団）に表面調査を委託した。表面調査は、建

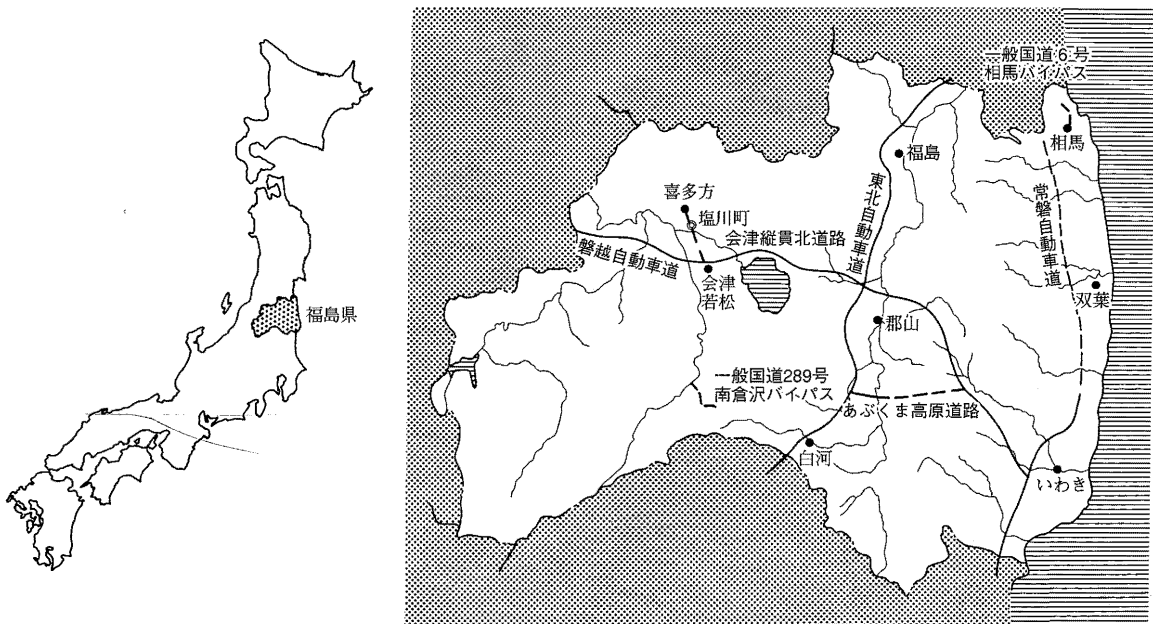


図1 会津縦貫北道路位置図

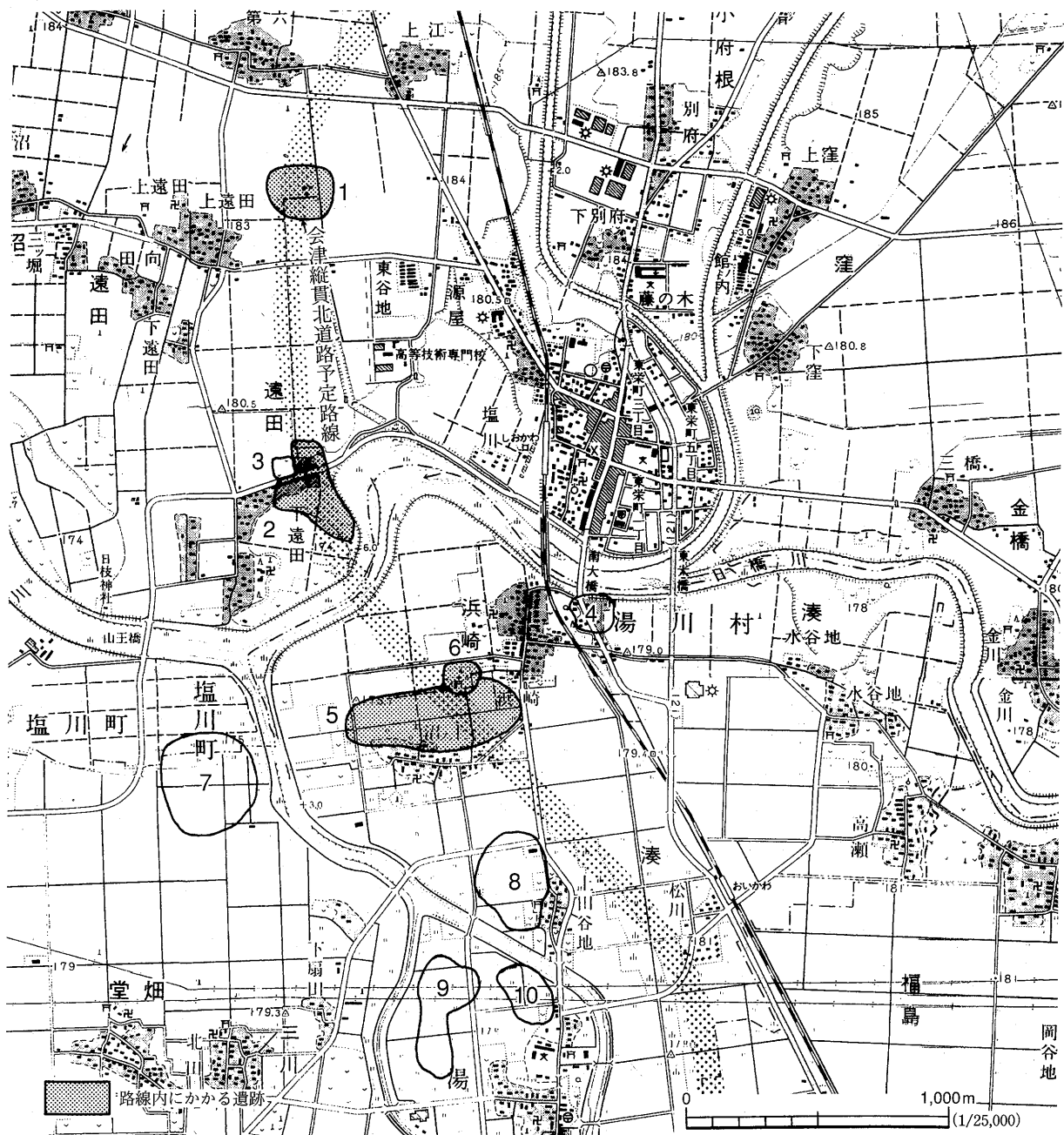
第1章 遺跡の環境と調査経過

設省（現国土交通省）東北地方建設局（現東北地方整備局）郡山国道工事事務所から提供された計画路線図（1：2,500）を基に、喜多方市から会津若松市までの延長約12.3km・幅150mを対象として、平成9年11月12～26日まで現地調査を実施した。調査対象地点の登録は、遺物が表面採集できた地点を遺跡(A)として認定した。また、遺構や遺物は発見できなかったが地形的条件から遺跡の可能性が高く、試掘調査を必要とする遺跡推定地(B)とに分けた。前者には原則として遺物散布地の小字名を遺跡名としたが、複数の小字にまたがる場合には大字名を遺跡名とした。遺跡推定地(B)については、市町村名の頭文字に該当するアルファベットを用いてY-B1（湯川村遺跡推定地No.1）のように示した。また、周知の遺跡についても、今回の表面調査で遺跡範囲を再確認した。名称・所在地・遺跡範囲に関しては、『福島県埋蔵文化財包蔵地台帳』ならびに『福島県遺跡地図 会津地方』（福島県教育委員会：1996年）に準拠したが、所在地について一部補足して表記している。当初、道路予定全区間を対象に計画したが、会津若松市中沼地区12haは除外した。調査の結果、2市2町1村で21遺跡と遺跡推定地3箇所を確認した。その内訳は、喜多方市で5遺跡、塩川町で5遺跡、湯川村は河東町側に広がる範囲も含めて4遺跡と推定地3地点、会津若松市で7遺跡である。この調査結果は、平成10年刊行の『福島県内遺跡分布調査報告4』（藤谷他1998）に掲載した。

平成12年度は、福島県教育委員会と国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所との協議の結果、最初に建設工事に着手する塩川町遠田地区の麻生館跡・荒屋敷遺跡の計39,100㎡を対象とした試掘調査を実施した。この調査は、10月2～27日と11月27～30日まで実施された。麻生館跡は館跡との関連が想定される建物跡の他、奈良・平安時代の建物跡・井戸跡やピット群など集落跡が確認されたため、名称を麻生館遺跡と変更した。また、荒屋敷遺跡では、古墳時代後期および平安時代の竪穴住居跡や土師器・須恵器などの遺構・遺物を確認した。この調査成果については、同年度刊行の『福島県内遺跡分布調査報告7』（斎藤他2001）に掲載した。なお、同年度には会津縦貫北道路建設に伴う付属施設整備のため、麻生館遺跡・荒屋敷遺跡について10月4～7日と20～27日にかけて塩川町教育委員会で試掘調査を実施している。試掘調査の結果、荒屋敷遺跡から土坑や溝跡など、奈良～平安時代・中世の遺構が検出された。このため、塩川町教育委員会では大型排水路建設に伴う1,180㎡を11月22日～12月20日に本発掘調査を実施した。調査の結果、土坑18基・溝跡16条・ピット約226個・遺物包含層1ヵ所と旧河川（河川跡）5条が検出・確認された。遺物は、縄文土器および古代・中世の土器類などが出土している。各遺構や遺物を検討すると、時期は奈良～平安時代と中世初頭の大きく2時期に分かれる。その後、年が明けて平成13年3月には荒屋敷遺跡にかかる路線の測道や上水道管敷設に関連して立会調査を実施している。

平成13年度は、平成12年度の試掘調査成果を踏まえ、本線部分にかかる麻生館遺跡6,200㎡と荒屋敷遺跡9,700㎡の計15,900㎡を対象に調査を実施した。条件整備が整った4月から麻生館遺跡の調査に着手し、荒屋敷遺跡の調査は5月16日から12月21日まで行った。なお、両遺跡報告書は「会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告1・2」として刊行している。以上のような調査経過を経て、平成14年7月から荒屋敷遺跡の発掘2次調査が開始された。

（高橋）



No.	遺跡名	遺跡番号	所在地	時代	備考
塩川町	1 麻生館遺跡	4030049	塩川町遠田字麻生館	平安・中世	H13発掘調査
	2 荒屋敷遺跡	4030073	遠田字荒屋敷・灰塚他	縄文～古墳 平安・中近世	H13～14 発掘調査
	3 下遠田館跡	4030050	遠田字荒屋敷・館ノ腰	中世	
湯川村	4 浜崎城跡	4220001	湯川村浜崎字北殿町	中近世	
	5 沼ノ上遺跡	4220020	湊字沼ノ上	奈良・平安	
	6 浜崎館跡	4220029	浜崎字宮前	中世	
	7 北田城跡	4220002	三川字大館	中世	
	8 上田谷地遺跡	4220021	湊字上田谷地	奈良・平安	
	9 下川原遺跡	4220022	笈川字下川原	奈良・平安	
	10 西川原遺跡	4220023	笈川字西川原	奈良・平安	

図2 調査遺跡位置図・一覧表

2. 平成14年度の調査

本年度の荒屋敷遺跡の発掘調査は、福島県教育委員会により6月21日付けで指示された2,100㎡を対象に、継続調査（2次調査）として行われた。平成13年度に県道会津坂下・塩川線の南側で本線と日橋川堤防とに挟まれた範囲について、県教育委員会・（財）福島県文化振興事業団が実施した試掘調査によって確定された要保存範囲である（『福島県内遺跡分布調査報告8』：2002）。発掘調査に先立ち、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所喜多方出張所・福島県教育庁文化課・（財）福島県文化振興事業団遺跡調査部遺跡調査課の4者で協議を行い、現状確認や調査区範囲、路線幅、排土置き場の確認等を行い7月から調査に着手する運びとなった。

調査にあたっては、遺構番号は基本的に1次調査からの継続番号とし、塩川町教育委員会で調査を実施した大型排水路部分確認の遺構（溝跡）と連続するものについては遺構番号右上に「'」を付した。なお、各遺構における概要・検出数等については、第2章各節の冒頭等において記述した。

今回の荒屋敷遺跡の発掘調査は、条件整備等が整った7月1日から開始し、調査区北側から重機による表土剥ぎを行った。調査区南側ではLⅠ直下で遺構検出面となるLV上面まで、北側付近では現耕作土および盛土層を重機によって撤去した。

7月1日には、現地調査連絡所や駐車場を予定路線内の県道会津坂下・塩川線沿いに設け、発掘資材搬入等に備えた。3日から作業員を投入し、調査区北側から手掘りによる調査を開始した。また、遺構の検出・精査作業と並行して測量基準杭の設定と水準点の移動を随時行った。調査開始当初は、梅雨による長雨や雷雨、台風等の影響により調査の進捗に遅れを来したが、水中ポンプ等による排水作業を随時行いながら調査を展開した。

8月は比較的好天に恵まれたが、遺跡の基盤層が粘土質のため、乾燥して固くなり遺構検出には苦渋を強いられた。調査区北側の掘り込みも終盤を迎えた8月下旬には、高所作業車により、各地点の全体撮影を行った。

9月には調査が本格化し、土坑や溝跡等の掘り込みを精力的に進め、古代末から中世の土器・陶磁器等を発見するに至った。調査区南側では遺構の密度が高く、大溝に区画された大型建物跡や土坑のほか、本遺跡では希薄な縄文時代の遺構も確認できた。

10月中旬には、悪天候の合間を縫って高所作業車やラジコンヘリにより高高度からの写真撮影を行った（口絵1）。その後、地形測量を行い、全面的に遺構の基盤面を下げ、遺構の存否の再確認を行った。同月下旬には発掘器材の撤収を行い、調査は10月31日に終了した。

なお、11月上旬には福島県教育庁文化課が調査の終了を確認し、11月15日に国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所に対して現場の引き渡しを行い調査の全工程を完了し、重機による埋め戻しを行った。

最終的に今回の調査で発見された遺構は、竪穴状遺構2軒、掘立柱建物跡6棟、柱列跡1基、土坑18基、溝跡24条等である。遺物は1次調査同様、古代末から中世（12世紀～13世紀）にかけての土器・陶磁器類が主体的に出土し、該期の良好な資料を得ることができた。（井）

第3節 遺跡の位置と自然環境

福島県は、東北地方の最南端に位置し、首都圏からの玄関口の役割を持つ。面積は13,782km²で、県としては岩手県に次いで全国2番目の面積を持つ。県土のおよそ8割は山地で占められていて、東は太平洋に面し、中央やや西寄りには国内有数の大湖である猪苗代湖がある。また阿武隈川・久慈川・阿賀川など大きな河川も流れている。東部には太平洋岸に沿って阿武隈高地が、中央部は磐梯吾妻を含む那須火山帯に属する奥羽山脈が連なり、西には越後山脈が迫っている。これらの高地山脈により、県全体は3つの地方に区分される。太平洋に面した浜通り地方、阿武隈高地と奥羽山脈に挟まれ阿武隈川の流れに沿って広がる中通り地方、奥羽山脈から西側の山々や高原、盆地を含めた会津地方である。

会津地方の気候は内陸性気候を示し、冬は寒冷で積雪が多く、山間部では数mに及ぶことも多い。春は雪解け水により河川が増水するが、治水工事が発達している現在では被害はない。梅雨時は中・浜通りに比較すれば好天の日が多く降水量もあまり多くない。夏は高温多湿であり、雷雲の発生も多い。秋は盆地霧が多く発生し、時として視界が大変悪くなり交通事故等の原因にもなる。

荒屋敷・麻生館両遺跡がある耶麻郡塩川町は、会津地方の中央北部に広がる、会津盆地のほぼ中心に当たり、地質学上は西南日本内帯の東端に位置する。会津盆地は、南北におよそ30km、東西およそ12kmの南北に長い形状を示す。盆地の地表部は、北からは濁川、東からは猪苗代湖を源流とする日橋川、南からは南会津の山々を源流とする大川とその支流が葉脈状に盆地内を西進している。これらの河川により盆地内は、周辺の山地から運ばれた堆積物に広く厚く覆われ、なだらかな沖積平野および扇状地となっている。これら堆積物は、年代的には第四紀完新世に属する。堆積物を運んだ河川は喜多方市慶徳町付近で一つに合流し、阿賀川となって越後山地の地峡をさらに西進し、新潟県に入り阿賀野川と名を変えて新潟市から日本海に注ぐ。

会津盆地の周辺は、東に奥羽山脈、西に越後山地が南北に走る。東の山々は、新第三紀層を基岩とし、南部の会津若松市南東域では背炙山安山岩、北部の塩川～喜多方市東部では猫魔ヶ岳火山噴出物が地表を覆っている。西の山々は、新第三紀鮮新世および第四紀更新世の堆積岩層を基岩とし、只見川流域には沼沢火山噴出物が堆積する。盆地の南東部および北西部にそれぞれ南北に断層が走るが、この断層は有史以来しばしば活動しており、特に江戸初期の1611年の地震では、慶徳町付近の地峡で崩落および断層隆起があり、阿賀川がせき止められて「山崎新湖」が形成され、付近の集落が水没して多大な被害を生じ、元どおり開削するまでに34年もの年月を要したことが記録として残っている。

今回発掘した荒屋敷遺跡は、盆地内堆積土のうち、氾濫原と段丘・扇状地の境界に位置する。そのため、遺跡東南部は旧河川流路、西北部は自然堤防および微高地となっている。また麻生館遺跡は、段丘・扇状地上に位置し、ごく僅かに南に傾斜した平坦面となっている。 (高橋)

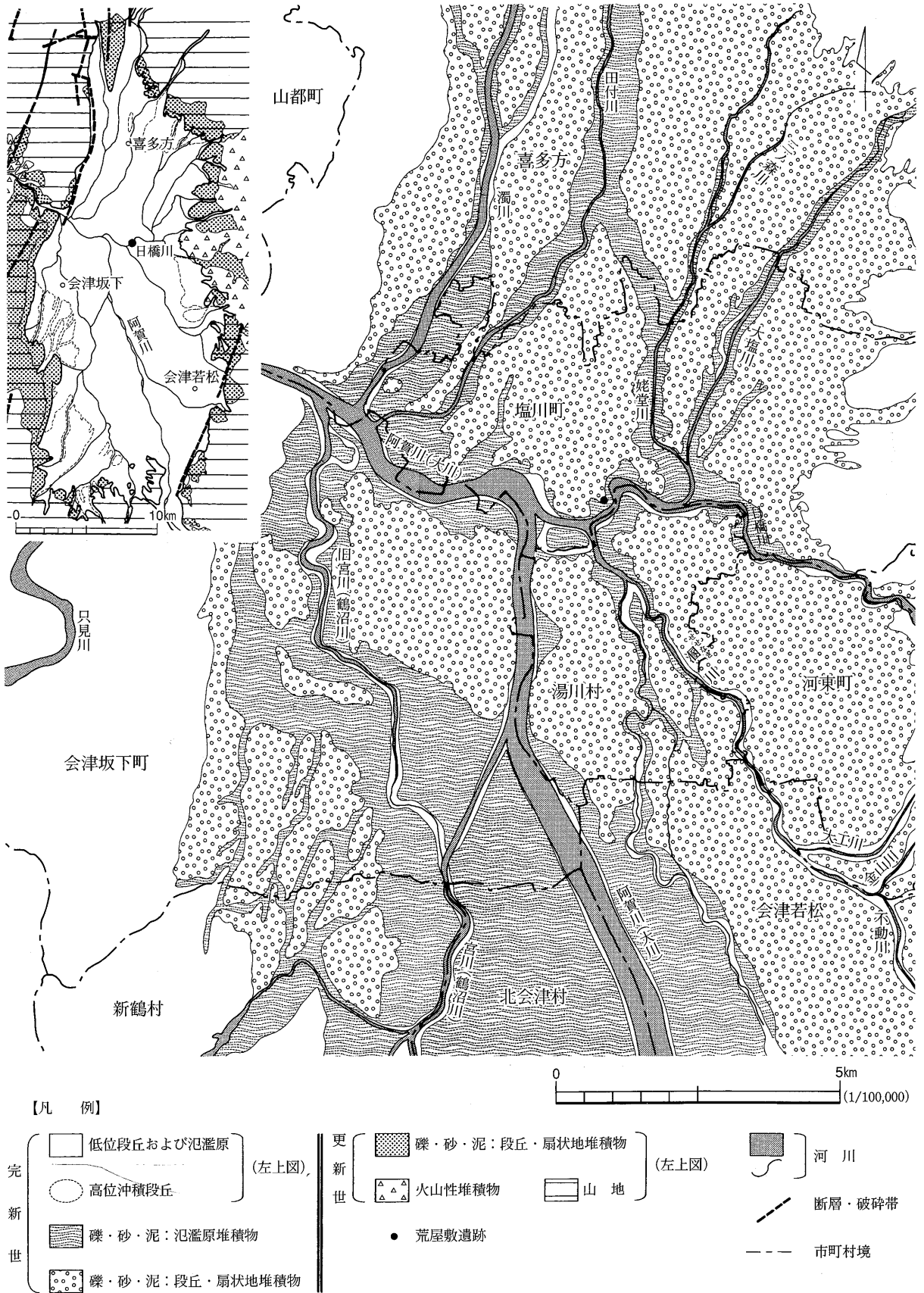


図3 会津盆地および遺跡周辺地形・地質概略図（鈴木・吉田・真鍋他：1976, 1987をもとに作成・簡略化）

第4節 周辺の遺跡と歴史的環境

塩川町内では埋蔵文化財分布調査が終了していないので、歴史的環境については不明な点が多い。そこで、『福島県埋蔵文化財地図及び一覧表』（1984・10刊行）、『福島県遺跡地図』（1996・3刊行）、最近の文化財調査報告書を参考に概観して行く。『福島県遺跡地図』では町内には69ヵ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている。その後、遺跡数はしだいに増加しており現在では74ヵ所を数える。

旧石器時代の遺跡・遺物は現在まで町内では確認されていない。近隣では旧石器時代後期の遺跡として西会津町山本遺跡や高郷村塩坪遺跡がある。

縄文時代の遺跡は、町東部にある標高1271.2mの雄国山の西側山麓を中心に数多く発見されている。地形的には西側に広がる扇状地の扇央から扇端に分布する傾向にある。遺跡地図には11ヵ所が確認されている。これらの遺跡の中で、常世原田遺跡は縄文時代早期中葉の貝殻条痕文系土器群で「常世式」の標識遺跡である。常世式土器は、貝殻腹縁文・平行沈線文・各種刺突文・波状文と底部が乳房状を呈する尖底土器等の特徴を持ち、その分布は広く東北地方一円に及んでいる。この他に、縄文時代の遺跡として上ノ台・南原・堀込・大原・森台・鶴塚(14)遺跡がある。発掘調査を実施した麻生館(1)・荒屋敷(2)遺跡からは縄文時代後期～晩期にあたる新地式期・大洞BC式期の土器が出土している。

弥生時代の遺跡は、町内平坦部の沖積地に立地する館ノ内(20)・堂後(36)・村南(38)・長内(51)・高畑(91)遺跡から土器片が出土している。まだ本格的な調査が実施されておらず、遺跡の性格や時期等は不明点が多い。荒屋敷遺跡からは弥生土器の小片が出土しているが、時期は明確でない。

古墳時代に入ると会津盆地内でも数多くの古墳が築造されており、周辺の開発が進み支配階級の台頭が著しい時期である。会津盆地内では、前期の古墳群として塩川町から喜多方市周辺の深沢・田中舟森山・観音森(竹屋古墳群)・高森山古墳・十九壇古墳群等が、会津若松市周辺では会津大塚山・堂ヶ作古墳等などが、会津坂下町の亀ヶ森(85)・鎮守森(86)古墳等が分布している。これらの古墳分布から会津盆地には、盆地東部・北西部・北東部に大きな勢力を持つ豪族の存在が考えられてきた。近年、塩川町館ノ内遺跡から2基の方形周溝墓が発見されている。共に一辺10m程の規模で周溝のみの確認であったが、いずれも四隅が張り出す平面形態を示しており、周溝内からは北陸系土器も出土している。これらの特徴から山陰・北陸地方で確認されている「四隅突出型墳丘墓」の影響が推定され、東北地方における最古段階の周溝墓と考えられている。このような古墳を形成する有力者の出現の背景には、会津盆地北部の地域が濁川・田付川・姥堂川・大塩川・日橋川等の中小河川の洪水等がもたらした肥沃な土壌が生産性の高い地域を形成していたからと考えられる。

次の中期～後期の古墳は、前期古墳同様に雄国山麓の末端部に数多く築造されており、七ツ壇(5)・金森(12)・狐壇・松崎・前畑・常世竹花・茶臼森古墳、明蓮寺・深沢前山古墳群などが確認されている。また、中通り地方で特色的な横穴墓の発見例は少なく、盆地西側の丘陵縁部に分布し

ている喜多方市山崎横穴群や盆地東側の丘陵縁部に分布する河東町駒板新田横穴群等があるものの概して会津盆地では5地点と少ない。

古墳時代の集落跡では、塩川町の西端で濁川の自然堤防上に古墳時代中期の豪族（首長）居館跡とされる古屋敷遺跡(13)があり、盆地平坦部の鶴塚遺跡や館ノ内遺跡などが後期の集落跡として確認されているが町内に多くの古墳群が築造されているのに比べて現在のところ集落跡の数は少ない。今後の可能性として阿賀川（大川）に注ぐ中小河川流域の自然堤防や沖積地に集落遺跡の発見が期待される。

奈良・平安時代に入ると、律令体制の地方浸透に伴い安定した社会が形成されたものと考えられ、会津盆地内では集落跡を中心として遺跡の数は増加する。町内においても、沖積地にも遺跡が多く分布しており、盆地平坦部の田付川沿いに位置する鏡ノ町A遺跡を中心に館ノ内遺跡をはじめとして、古屋敷・鶴塚・墓ノ前(15)・鏡ノ町B(17)・妙見(18)・内屋敷(19)・沼の上(33)遺跡などが確認されている。鏡ノ町遺跡A(16)からは、数多くの建物や倉庫群、そして奈良三彩小壺や瓦塔片等の遺物が出土しており、地方官衙に関連する在庁官人の居宅跡と推定されている。麻生館遺跡からは3×5間の大型建物跡が検出されたほか、同時期と推定される比較的小型な建物跡、土師器・須恵器片が検出され、同時代の集落の様相が明らかになってきた。また、荒屋敷遺跡からも平安時代の9世紀後半を中心とした土師器、須恵器が流路跡を中心に数多く出土しており、土師器杯には墨書や線刻が施されたものもあり、遺跡の性格を考える上でも興味深いものがある。

武家社会が成立した中世には、新たな支配者が台頭する。鎌倉時代後半以降の会津地方では、三浦・蘆名氏の勢力が伸び、その一族が各地を領して行ったと考えられている。本町内も位置的に北田城の北田氏と、新宮城の新宮氏の支配下にあったものと推定される。中世以降には城館跡を中心とした遺跡が町内外で多く確認されており、昨年度発掘調査を実施した麻生館遺跡近隣には沖館跡(25)・上江館跡(26)が、荒屋敷遺跡近隣には下遠田館跡(21)・新屋敷跡(31)が所在している。城主名は記録も少ないが、沖館跡には山口沙弥道光、上江館跡には栗村弾正清政、下遠田館跡には三橋備前定重と二男の刑部重治との伝承が残っている。本年度発掘調査を実施した荒屋敷遺跡でも貿易陶磁器である青磁・白磁が出土しており、当時の日本海側での海運が発達していたことを窺わせる。

戦国時代に入ると、会津地方でも戦乱が相次いだ。その多くは戦国大名化する蘆名氏と中小在地領主との戦いであり、文亀2(1502)年には常世・三橋など会津盆地北東部の在地領主らが追い払われ、天文年間(1532～1554年)には、会津地方の領主達の殆どは蘆名氏に服属し、蘆名氏は盛氏の時代に全盛期を迎える。その後、蘆名氏は、内部で支配体制の矛盾が顕在化したり、家督相続や重臣間の対立が深まって、しだいに家勢も衰えてきた。天正17(1589)年6月には蘆名義広と伊達政宗による磨上原の戦いが行われ、伊達政宗が勝利した。蘆名氏を滅ぼして会津へ入った伊達政宗により、金川・三橋・塩川などが片倉景綱へ安堵されている。その後、豊臣秀吉による奥州仕置き以後の会津地方は、蒲生氏郷・秀行から上杉景勝と支配者が変遷し、関ヶ原の戦いを迎える。遺跡の周辺には、中世～近世にかけての塚・供養塔・石造物等が建立されており、当時の人々の信仰に関連する

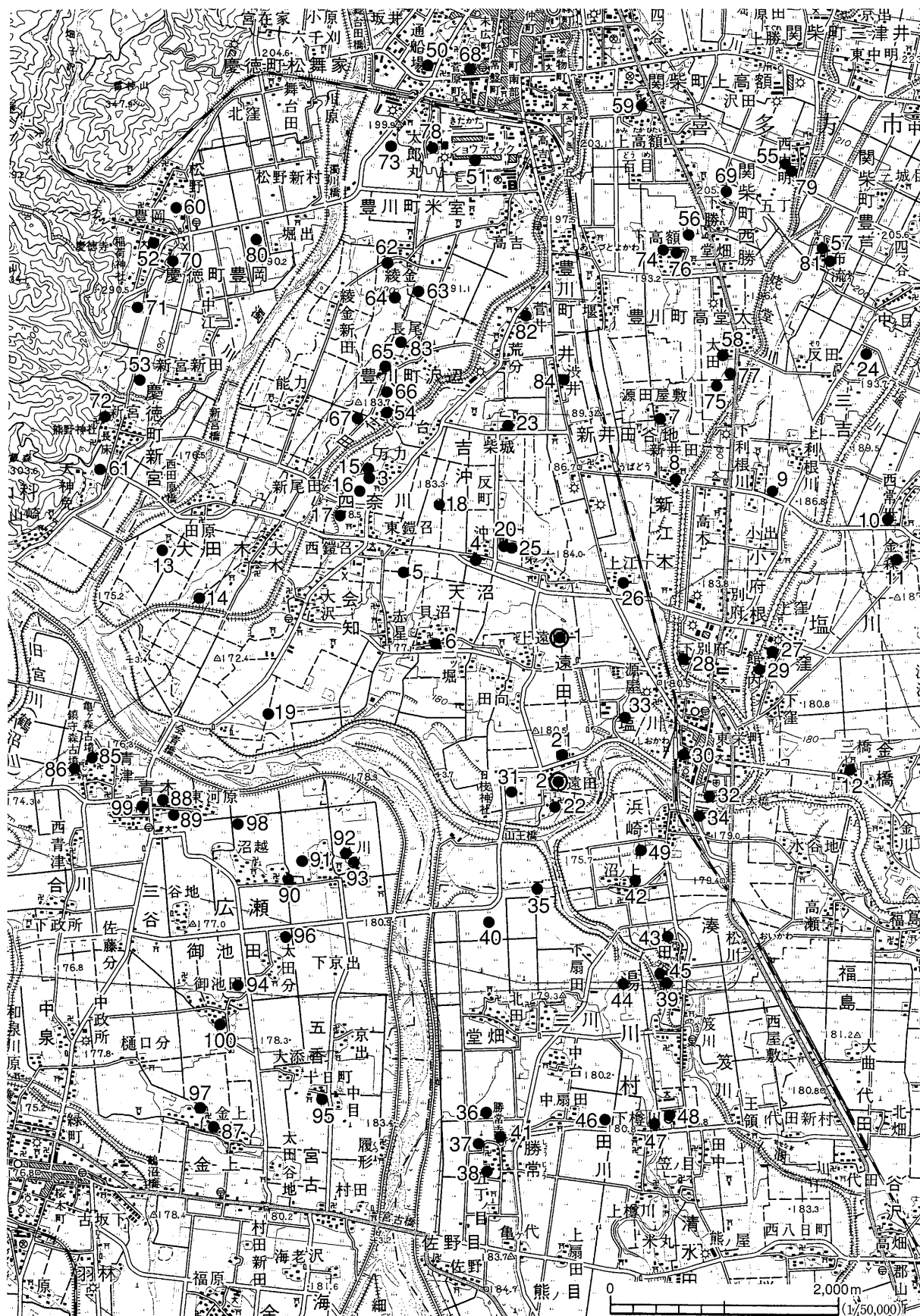


図4 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧(1)

※Noは図4, 遺跡番号は『福島県遺跡地図』(1996)に対応

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要
1	40300049	麻生館遺跡(麻生館跡)	塩川町 遠田字麻生館	平安の集落跡・中世の館跡
2	40300073	荒屋敷遺跡	遠田字荒屋敷・灰塚他	縄文～古墳・平安・中近世の散布地
3	40300001	牛塚	四奈川字墓ノ前	古墳時代～近世の塚
4	40300002	沖舍利塔	吉沖字村前	中世・近世の石造物
5	40300003	鑑沼・七ツ壇塚群	四奈川字千刈	古墳時代～近世の塚
6	40300004	貝沼館跡	天沼字貝沼	中世の城館跡
7	40300005	鏡ヶ城跡	源太屋敷字前畑・館ノ腰	中世の城館跡
8	40300007	新井田・田辺館跡	新江木字新井田	中世の城館跡
9	40300008	下利根川石造供養塔	下利根川字仲田	中世の石造物
10	40300010	常世館跡	常世字西町	中世の城館跡
11	40300039	金森古墳	五合字金森甲	古墳時代の古墳
12	40300023	三橋館跡	金橋字館ノ内	中世の城館跡
13	40300040	古屋敷遺跡	大田木字古屋敷	縄文・古墳～平安時代の散布地
14	40300042	鶴塚遺跡	大田木字鶴塚・下屋敷	縄文～平安時代の散布地
15	40300043	墓ノ前遺跡	四奈川字墓ノ前	奈良・平安時代の散布地
16	40300044	鏡ノ町遺跡A	四奈川字鏡ノ町	奈良・平安時代の散布地
17	40300045	鏡ノ町遺跡B	四奈川字鏡ノ町	奈良・平安時代の散布地
18	40300046	妙見遺跡	吉沖字妙見	奈良・平安時代の散布地
19	40300047	内屋敷遺跡	会知字内屋敷甲	奈良・平安時代の散布地
20	40300048	館ノ内遺跡	吉沖字館ノ内	奈良・平安時代の散布地
21	40300050	下遠田館跡	遠田字荒屋敷・館ノ腰	中世の城館跡
22	40300051	下遠田石造供養塔	遠田字谷地中	中世の石造物
23	40300054	柴城跡	吉沖字柴城	中世の城館跡
24	40300056	南館館跡	三吉字南館・内屋敷・沢田	中世の城館跡
25	40300057	沖館跡	吉沖字館ノ内	中世の城館跡
26	40300060	上江館跡	新江木字館跡	中世の城館跡
27	40300061	丹波館跡	窪字館	中世の城館跡
28	40300063	別府館跡	小符根字館ノ内	中世の城館跡
29	40300064	上窪南館跡	窪字館ノ内・館野	中世の城館跡
30	40300066	小十郎館跡	塩川字館ノ内・堀目	中世の城館跡
31	40300067	新屋敷跡	遠田字新屋敷	中世の城館跡
32	40300068	柏木城館	塩川字古町・古城	中世の城館跡
33	40300069	沼ノ上遺跡	遠田字沼ノ上	縄文時代の貝塚, 弥生・平安時代の散布地
34	42200001	浜崎城跡	湯川村 浜崎字北殿町	中世・近世の城館跡
35	42200002	北田城跡	三川字大館	中世の城館跡
36	42200003	堂後遺跡	勝常字堂後	弥生・奈良・平安時代の散布地
37	42200004	覚成上人墓	勝常字堂後	中世の墳墓
38	42200005	村南遺跡	勝常字村南	弥生時代の散布地
39	42200008	笈川館跡	笈川字館	中世の城館跡
40	42200018	堂畑館跡	堂畑字大館	中世の城館跡
41	42200019	勝常寺薬師堂	勝常字代舞	中世の社寺跡
42	42200020	沼ノ上遺跡	湊字沼ノ上	奈良・平安時代の散布地
43	42200021	上田谷地遺跡	湊字上田谷地	奈良・平安時代の散布地
44	42200022	下川原遺跡	笈川字下川原	奈良・平安時代の散布地
45	42200023	西川原北遺跡	笈川字西川原	奈良・平安時代の散布地
46	42200024	下樽川西遺跡	笈川字下樽川	奈良・平安時代の散布地
47	42200025	下樽川遺跡	笈川字下樽川	近世
48	42200026	殿田遺跡	笈川字殿田	縄文時代の散布地
49	42200029	浜崎館跡	湊字宮前	中世の城館跡
50	20800017	塚原壇	喜多方市 長源壇	中世の塚

表2 周辺の遺跡一覧(2)

※Noは図4, 遺跡番号は『福島県遺跡地図』(1996)に対応

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地	遺跡の概要
51	20800019	長内遺跡	喜多方市 豊川町米室字長内	弥生時代の散布地
52	20800020	慶徳城跡	慶徳町富岡字今町	中世の城館跡
53	20800021	新宮城跡	慶徳町新宮字館内	中世の城館跡
54	20800022	八幡塚古墳	豊川町沢部字宮下	古墳時代の古墳
55	20800030	西中明板碑	関柴町西勝字三島	中世の石造物
56	20800036	水谷地古墳	豊川町高堂太字水谷地	古墳時代の古墳
57	20800037	布流板碑群	関柴町豊芦字村中	中世の石造物
58	20800041	太田板碑	豊川町高堂太字村中	中世の石造物
59	20800058	台畑遺跡	関柴町上高額字宮越	平安時代の散布地
60	20800067	木曾原遺跡	慶徳町豊岡字木曾原	古墳・平安時代の散布地
61	20800068	招木遺跡	慶徳町新宮字招木	平安時代の散布地
62	20800069	村前遺跡	豊川町米室字村前・綾金	奈良・平安時代の散布地
63	20800070	塚田A遺跡	豊川町沢部字塚田	奈良・平安時代の散布地
64	20800071	塚田B遺跡	豊川町沢部字塚田	奈良・平安時代の散布地
65	20800072	長尾遺跡	豊川町沢部字長尾	平安時代・中世の散布地
66	20800073	前田遺跡	豊川町沢部字前田	奈良・平安時代の散布地
67	20800074	四十苺遺跡	豊川町沢部字四十苺	奈良・平安時代の散布地
68	20800076	塚原館跡	天満前	中世の城館跡
69	20800089	下勝館跡	関柴町西勝字館ノ内	中世の城館跡
70	20800094	新館跡	慶徳町豊岡字本町	中世の城館跡
71	20800095	八幡館跡	慶徳町豊岡字不動前	中世の城館跡
72	20800097	駿河館跡	慶徳町新宮字熊野	中世の城館跡
73	20800098	太郎丸西館跡	豊川町米室字館跡	中世の城館跡
74	20800099	下高額館跡	豊川町高堂太字千苺・村東	中世の城館跡
75	20800100	太田館跡	豊川町高堂太字館ノ内	奈良時代の散布地, 中世の城館跡
76	20800108	下高額板碑	豊川町高堂太字村東	中世の石造物
77	20800110	於壇遺跡	豊川町高堂太字於壇	奈良・平安時代の散布地
78	20800129	太郎丸東館跡	豊川町米室字太郎丸	中世の城館跡
79	20800130	中明館跡	関柴町西勝字館ノ内	中世の城館跡
80	20800133	谷地ノ城館	慶徳町豊岡字柳町	中世の城館跡
81	20800134	布流館跡	関柴町豊芦字布流	中世の城館跡
82	20800135	菅井館跡	豊川町一井	中世の城館跡
83	20800136	長尾館跡	豊川町沢部字長尾	中世の城館跡
84	20800137	渋井館跡	豊川町一井	中世の城館跡
85	42100009	亀ヶ森古墳	会津坂下町青津字館ノ越	古墳時代の古墳
86	42100010	鎮守森古墳	青津字館ノ越・中西	古墳時代の古墳
87	42100030	金上城跡	金上字館	中世の城館跡
88	42100093	吉原遺跡	青木字吉原	縄文・古墳・平安時代の散布地
89	42100094	青木遺跡	青木字青木	平安時代の散布地
90	42100099	辻田遺跡	沼越字辻田	平安時代の散布地
91	42100100	高畑遺跡	沼越字高畑	縄文・弥生・平安時代・中世の散布地
92	42100101	中立川遺跡	立川字中立川	平安時代の散布地
93	42100102	東立川遺跡	立川字東立川	平安時代の散布地
94	42100105	御池田山ノ神遺跡	御池田字山ノ神・江免	平安時代・中世の散布地
95	42100131	中目経塚	五番字家ノ西	中世の塚
96	42100133	稲荷北遺跡	沼越字稲荷北	平安時代の散布地
97	42100163	金上村東遺跡	金上字村東	弥生・平安時代の散布地
98	42100176	古館遺跡	沼越字古館	平安時代・中世の散布地
99	42100179	樋渡館跡	樋島字樋渡	中世の城館跡
100	42100181	旭田館跡	御池田字旭田	中世の城館跡

遺構が多数残っている。

近世（江戸時代）に入り幕府と藩で全国の土地や人民を支配する幕藩体制が確立し、会津藩でも上杉景勝から蒲生秀行(再蒲生)・忠郷，加藤嘉明・明成氏の支配を経て保科(松平)氏の治世を迎え、明治時代に至る。現在では町の中心地である旧塩川村は、慶長13(1608)年出羽米沢に通じる檜原峠越米沢街道の宿駅に定められた。また、毎年暮れには旧塩川村に詰市と称される市が開設され、諸産物の売買が盛んに行われた。当時の塩川は会津藩内における阿賀川水運の起点であり、このため船問屋・米問屋が軒を並べ、藩の大阪廻米を納めるための蔵などが建ち並び、阿賀川水運や米沢街道の陸運の中継地として栄えたと伝えられる。この地域の主な特産物は米であったが、この他に薬用ニンジンの栽培があり、藩の専売品として全国有数の生産高を誇った。 (高橋)

第5節 調査の方法

今回の荒屋敷遺跡の調査では、遺構・遺物の明確な位置関係を記録するために前回の1次調査で設けたグリッド網をそのまま利用した。高規格道路計画用基準点(基-9・10)を視準点とし、本遺跡のグリッド設定における基準杭としたものである。この基準杭のデータを基に、遺跡内に5m四方のグリッド網を設定した(図5)。

各グリッドは、X:176,230.00, Y:4,16.00を起点(A0)に南から北に向かって1・2・3……35・36と付した算用数字と、西から東に向かってA・B・C……X・Y・Zと付したアルファベットとの組み合わせによって表示し、V19グリッドやY8グリッド等と呼称した。ただ、今回の調査区範囲はZより更に東側へ延びるため、この部分についてはAZ・BZ……等と呼称した。調査区範囲はR~DZ-6~26グリッド内に相当する。これらの各グリッドは、遺物の出土位置表示、遺構の大まかな位置表示を行うためのものであり、さらに平面図作成のための基準線を1m方眼で割り付けしている。地点の表記については、国土座標のX・Y座標をそれぞれN(北)・E(東)に置換し、下3桁の数字を使用した(起点:N230・E160)。調査区内においては、測量基準点が調査区南西外に設定されているため、N〇〇とE〇〇のみが存在する。

上述のグリッド設定方法は、塩川町教育委員会が行った1・2次調査の方法と基本的には国土座標第IX系を基準としている点で同様であるが、15m四方の大グリッド網を用いている点や基準点等で異なっている。図5に示したとおり、町調査区の起点b-1はX:176,220.00, Y:4,095.00であり、南北軸1が98~0, 2が1~3……13が34~36, 東西軸DはC~E, EはF~H……IはR~Tに各々対応している。

遺構の掘り込みにあたっては、遺構の大きさや重複関係を考慮して、土層観察用ベルトを随時設定し、写真撮影や実測図等の作成を行った。土層の注記には、新版標準土色帖(1997年版)を使用した。また、溝跡等の長く大きい遺構から出土した遺物については、グリッド名や遺物Noを記載し、遺構外出土遺物は基本土層に準拠して取り上げている。

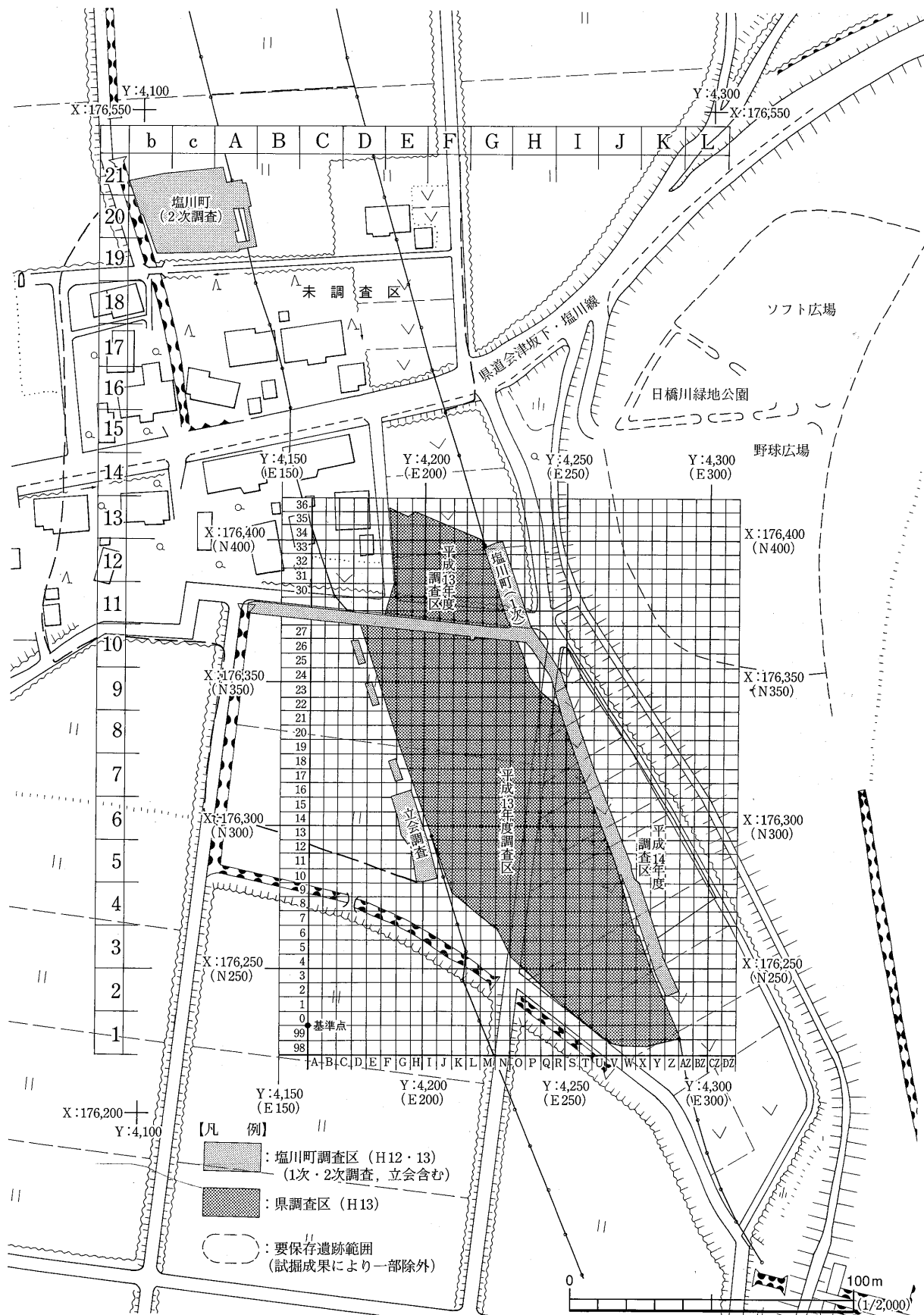


図5 調査範囲と予定路線図

記録写真撮影は、調査の進捗に合わせて随時35mm判の小型カメラを使用，遺物出土状態や全景など必要に応じて6×4.5判の中型カメラも併用した。フィルムは、モノクロームとカラーリバーサルフィルム2種を使用し，遺構の検出・土層断面・完掘状況のほか，遺物の出土状態の撮影を適宜に行った。また，遺構図は1/20の縮尺を基本としたが，大型の溝跡等は遺構の性格上，平面図と断面図の縮尺率を変えて作成している。

これらの発掘調査で得られた出土品・実測図・写真等の資料は，当事業団の整理基準に準拠して整理を行い，報告書作成終了後，それぞれの台帳を作成し，福島県教育委員会で収蔵・保管する予定である。

(井)

引用・参考文献

- | | | |
|-------------|-------|----------------------------------------------|
| 井 憲治 他 | 2003 | 「会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告2」福島県教育委員会 |
| 小山正忠・竹原秀雄 他 | 1997版 | 新版 標準土色帖 |
| 香川 慎一 他 | 2001 | 「福島県内遺跡分布調査報告7」福島県教育委員会 |
| 久保田鉄工株式会社 | 1987 | 「URBAN KUBOTA 26」久保田鉄工株式会社 |
| 塩川町史編纂委員会 | 1966 | 『塩川町史』 塩川町 |
| 鈴木 敬治 他 | 1973 | 「喜多方地域の地質」 福島県 |
| 福島県教育委員会 | 1988 | 『福島県の中世城館跡』 |
| 福島県教育委員会 | 1996 | 『福島県遺跡地図 会津地方』 福島県 |
| 藤谷 誠 他 | 1998 | 「福島県内遺跡分布調査報告4」福島県教育委員会 |
| 文化6年会津藩編 | 1983 | 『新編会津風土記』 雄山閣 |
| 森 幸彦 他 | 1999 | 『常世原田遺跡－吉田格氏昭和23年調査資料－』福島県立博物館 |
| 横須賀 倫達 他 | 2002 | 「福島県内遺跡分布調査報告8」福島県教育委員会 |
| 横須賀 倫達 他 | 2002 | 「会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告1」福島県教育委員会 |
| 和田 聡 他 | 1998 | 「館ノ内遺跡」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書3』
福島県耶麻郡塩川町教育委員会 |
| 和田 聡 他 | 1999 | 「古屋敷遺跡」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書4』
福島県耶麻郡塩川町教育委員会 |
| 和田 聡 他 | 2001 | 「鏡ノ町遺跡B」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書5』
福島県耶麻郡塩川町教育委員会 |
| 和田 聡 | 2002 | 「荒屋敷遺跡」福島県耶麻郡塩川町教育委員会 |

第2章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と基本土層

1. 遺構の分布と出土遺物

今回の荒屋敷遺跡の調査で検出された遺構は、竪穴状遺構2軒、掘立柱建物跡6棟、柱列跡1基、土坑18基、溝跡24条、性格不明遺構2基、ピット群などである。前回の1次調査分と塩川町調査の1次・2次調査で検出された遺構数を合わせると、竪穴状遺構3軒、掘立柱建物跡7棟、柱列跡2基、土坑96基、溝跡75条、性格不明遺構2基、小ピット多数となる。ただ、溝跡については1次調査や塩川町調査（大型排水路部分）で検出された溝跡と連続する同一遺構もあるため、本来は40条ほどの検出数と考えられる。これらの遺構全体の配置は図6に示したが、これとは別に地形や隣接する遺構同士の間隔を明確化するため図7・8にも縮尺率を変えて掲載し、ピット群は便宜的にA～Dなどの区割りを設けた（図46～49）。

検出された遺構の分布状況を概観すると、旧河川跡が確認された中央付近は遺構・遺物は希薄であり、比較的標高が高い調査区北側と自然堤防上となる南側で遺構・遺物の密度が高い傾向を示している。建物跡や土坑、区画溝跡などが大半を占め、遺物は1次調査同様、古代末から中世にかけての土器・陶磁器類が主体を占めている。特に溝跡（S D04'・09'・12'）からかわらけ（椀・小皿・柱状高台皿）や貿易陶磁器（白磁・青磁）、中世陶器等がまとまって出土したことや、土坑内（S K70）から出土した瓜科植物（2個体分）は希少な例として特筆される。また、調査区北側では該期の中心的な施設が集中した区域と判断されるが、調査区南側では大溝で区画された大型建物跡が確認され、遺構の性格・遺物の分布等はやや異なっている。

なお、これまでの試掘調査成果や1次調査、町調査の所見でも明らかなように、後世の削平や盛土が著しい区域もあり、該期の遺構群への影響が少なからず認められた。特に、中央付近では盛土が80cm以上となる部分もあり、基盤整備やほ場整備、用水路建設等に伴う掘削や整地によって改変された区域も存在している。

出土遺物については、図9および表7に内訳とグリッド別の出土状況を示した。遺構の分布状況とはほぼ同様な傾向を示しており、遺構内から約8,000点（約85%）、遺構外から約1,400点（約15%）の総数約9,400点が出土した。内訳は、縄文土器片約4,300点、土師器・かわらけ片約3,800点、陶磁器類約250点（貿易陶磁器約180点、中世陶器約70点）、須恵器片約230点、木質遺物11点、種子類6点、石製品・鉄製品約70点、その他約720点である。遺構内出土遺物のうち、縄文土器はS X02・S K74b、古代末～中世のかわらけ・陶磁器類はS D04'・09'・12'からの出土量が圧倒的に多いが、竪穴状遺構や建物跡、土坑等からの出土量は少なく時期比定に至らなかったものも多い。

なお、今回の報告に当たっては、土器・分類等は基本的には1次調査に準拠した。

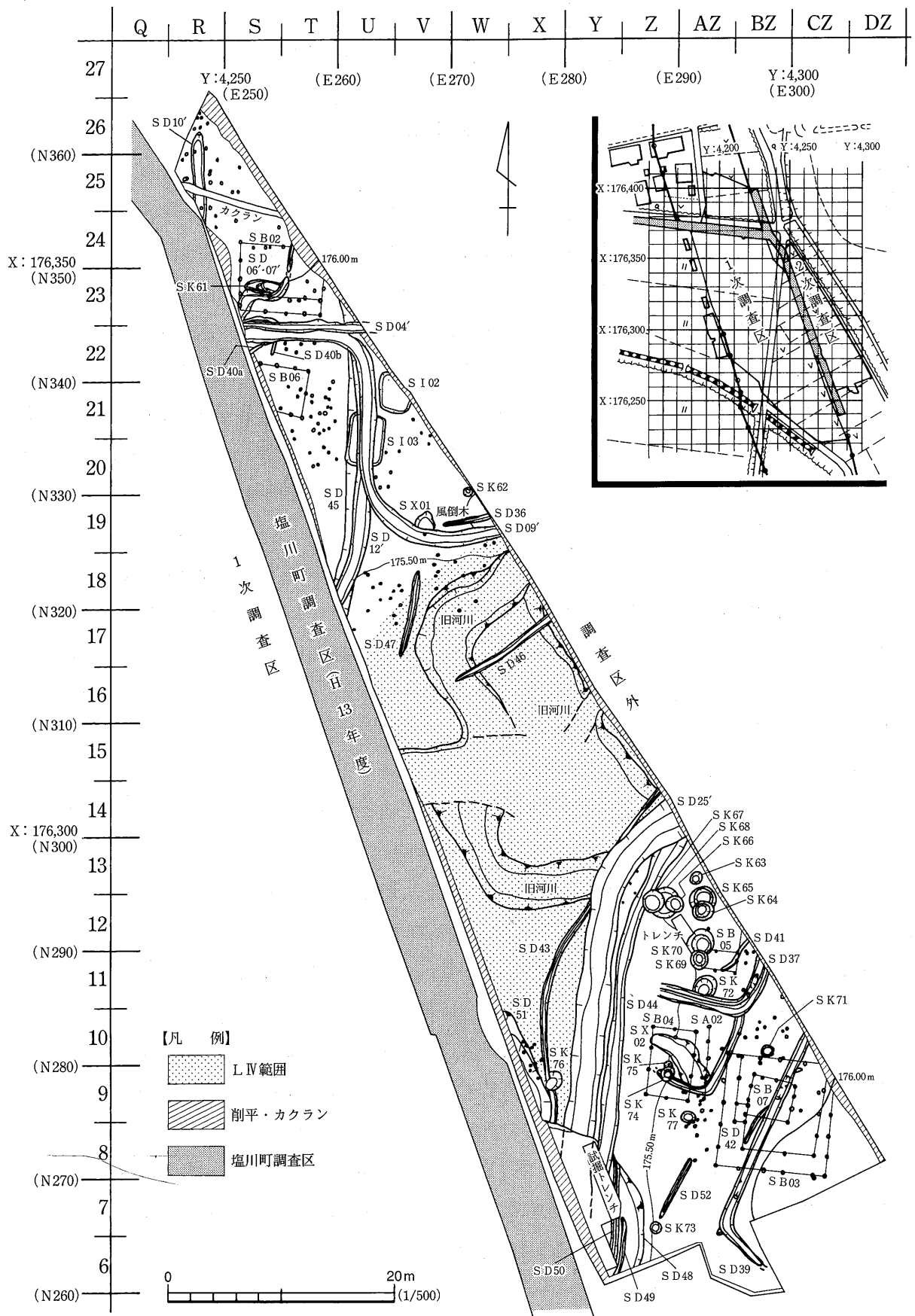


図6 遺構配置図とグリッド配置 (1)

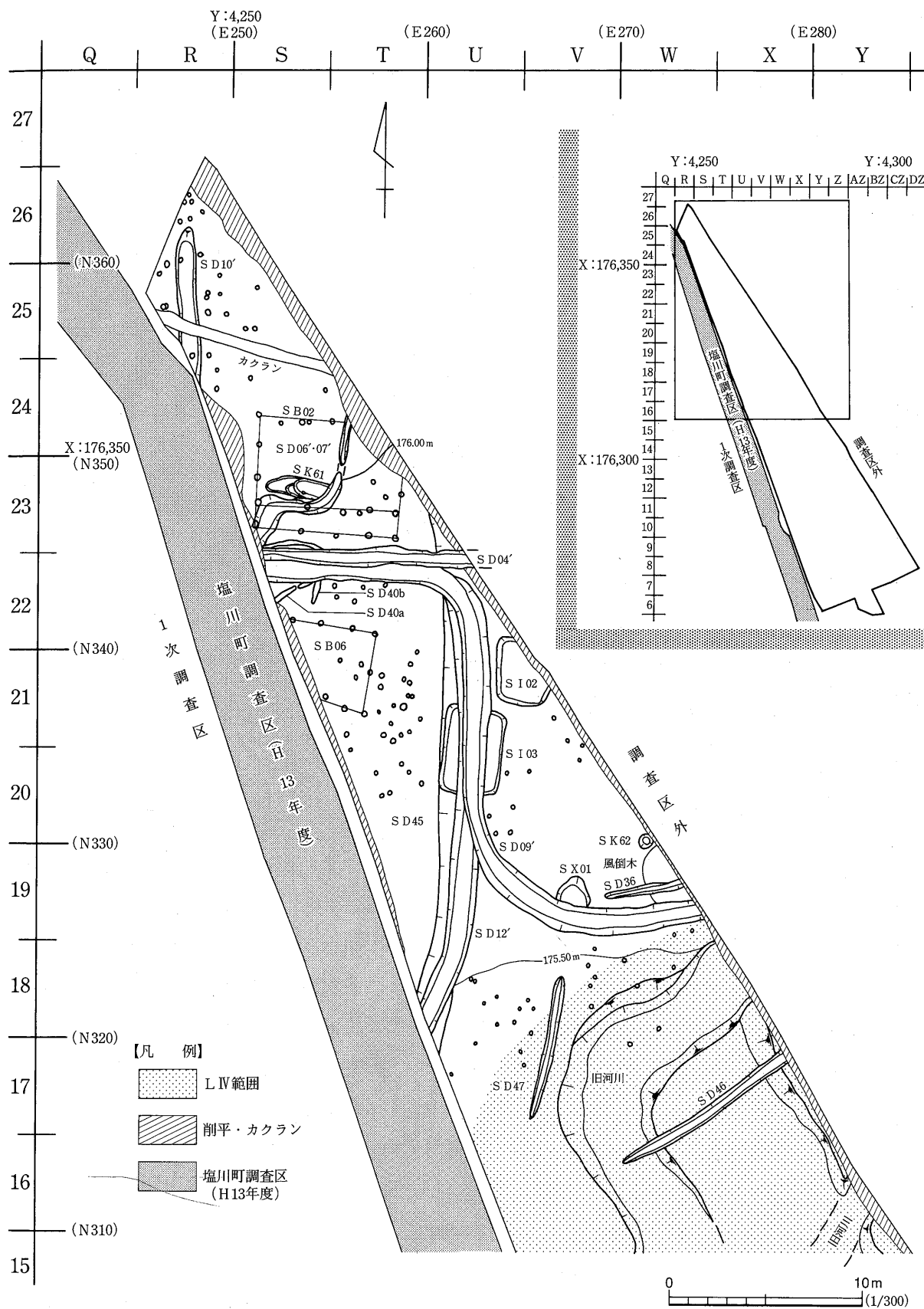


図7 遺構配置図とグリッド配置 (2) 北半部

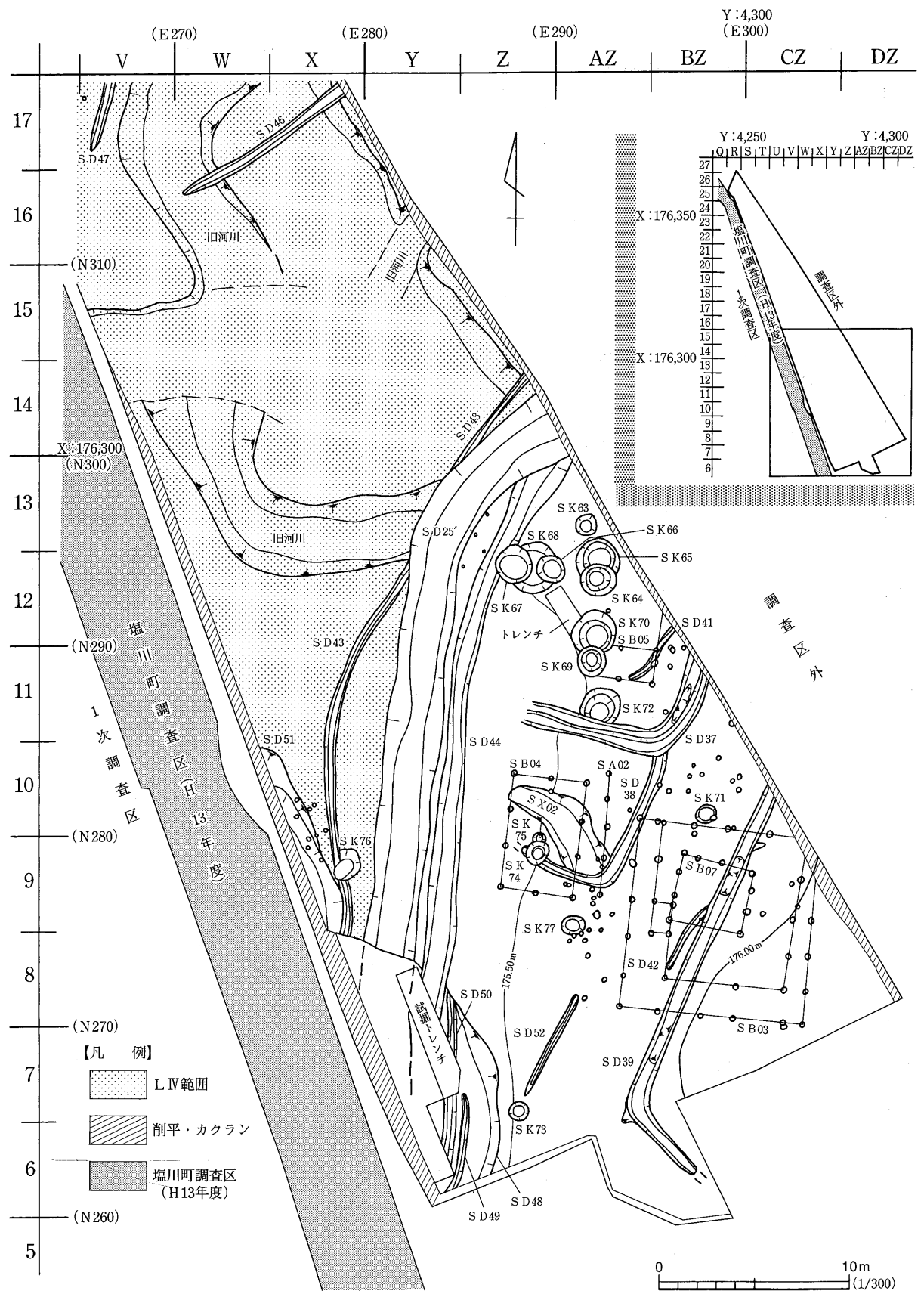


図8 遺構配置図とグリッド配置 (3) 南半部

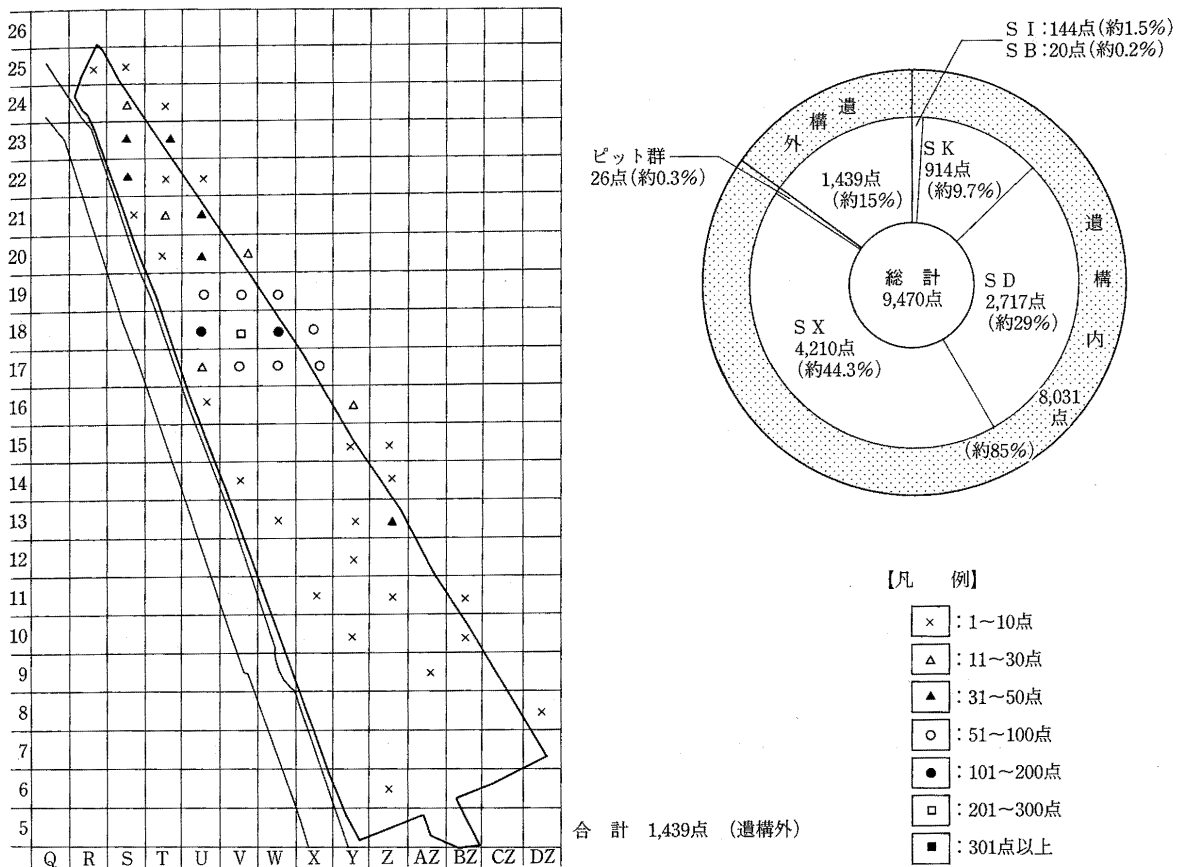


図9 グリッド別遺物出土点数と内訳

2. 基本層序

荒屋敷遺跡は、阿賀川の支流である日橋川右岸の標高177.00m~175.50m程の低位段丘および自然堤防上に位置する。第1章第3節で述べたとおり、塩川町の東から北部の山々にかけては、新第三紀鮮新世および第四紀更新世の堆積岩層を基岩とする火山性の堆積物（猫魔ヶ岳火山噴出物）が覆い、西側平野部はなだらかな沖積層および扇状地となっている。本遺跡が所在する遠田地区は、複数の扇状地の先端部が集まってできた三角州性の低地に分類されている。現在、遺跡周辺は日橋川の氾濫を抑える堤防が築かれ、南西へ緩やかに傾斜する畑地・水田跡地となっている。大正7年頃の基盤整備や平成6年のほ場整備等によって地形が著しく改変されているが、遠田地区南側では幾分残った旧地形の観察から日橋川の蛇行の痕跡が読みとれる。

遺跡内における基本土層は、調査区が南北に長く、整地・盛土が著しい場所が存在することや地形的にも氾濫原および低位の段丘境に位置することから、調査区の各地点で異なった堆積状態を示している。そのため、遺跡各所に設定した土層の観察地点と、土層柱状図を図10に掲載し、できる限り調査区境を利用して遺構の断面図の作成を行った。

今回の荒屋敷遺跡の調査では、平成6・9・12年度の表面調査・試掘調査成果『福島県内遺跡分布調査報告4・7・8』および1次調査に準拠した基本土層を設定している。ただ、調査区北側の

U~W-17~20グリッド付近では、古代末~中世の遺物を多く包含する堆積土(L I b・c)が認められ、調査区南半の土層とは必ずしも一様ではない。調査区中央付近では80cm程の盛土による地形の改変が著しく、河川氾濫に起因するL III・IVが認められる。以下、各堆積土の特徴と遺構・遺物の関係について概略する。

L I : 10YR3/3 暗褐色土。調査区全体を覆う耕作土で、一部盛土も含まれる。層厚は平均して15cm程である。U~W-17~20グリッド付近では、L IとL IIの間層が確認され、L I b・L I cと呼称した。現耕作土を含むL Iには平安時代から現代に至る遺物が、L I b・cには古代末~中世の遺物が多く包含されている。

L II : 10YR3/1 黒褐色土。基本的には遺跡全体で認められるが、調査区中央付近~南側では遺存状態が悪く欠層する。2層に分層され、層厚は平均して10~20cm程である。中世以降の遺構検出面である。

L III : 7.5YR4/4 褐色土。調査区中央付近に堆積する河川氾濫に起因する堆積土。

L IV : 10YR3/1 黒褐色粘質土。L IIIと堆積状況やその分布域がほぼ類似し、縄文~古代の遺物を包含する。

L V : 10YR5/6 黄褐色土。遺跡の基底面である。整地・削平等が著しい調査区南側では、L II~IVが欠層するため、遺構の検出面となる。これより下層は無遺物層である。(井)

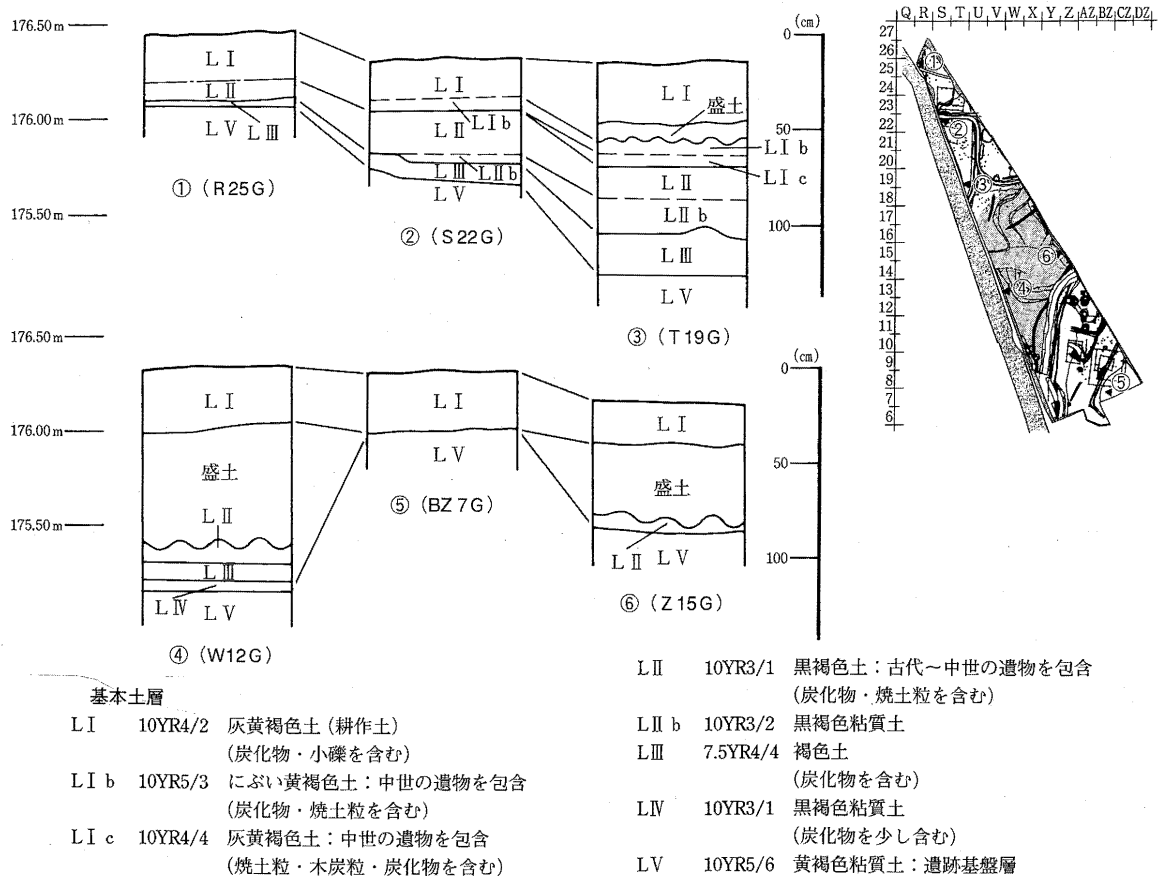


図10 基本土層図

第2節 竪穴状遺構

本節で扱う遺構は、1次調査で比較的整った形状や規模および床面の踏み締まり痕等竪穴住居跡に近い要素があるものの、カマドや炉あるいは柱穴等が検出されなかったことから竪穴状遺構と呼称したものである。検出数は2軒であり、1次調査分を含めると3軒となる。

2号竪穴状遺構 S I 02 (図11, 写真9)

遺 構 本竪穴状遺構は、調査区北側のU・V-21・22グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は、比較的平坦な立地を呈する場所で、L II 上面で検出した。重複関係はなく、隣接して3号竪穴状遺構や9'・12'号溝跡が存在する。遺構内堆積土は2層に分層され、炭化物を含む黒褐色系の土層を主体とする。下層のl 2は自然堆積と考えられるが、上層のl 1には小礫やLVに起因するブロック状の混入物が多く認められることから、人為的に埋め戻されたものと判断している。

平面形は北東部分の約1/3が調査区外となるが、四隅がやや丸くなる長方形基調と思われる。西側隅は整っていないが、規模は長軸の南北辺が3.65m、短軸の東西辺が約2.8mである。主軸はや

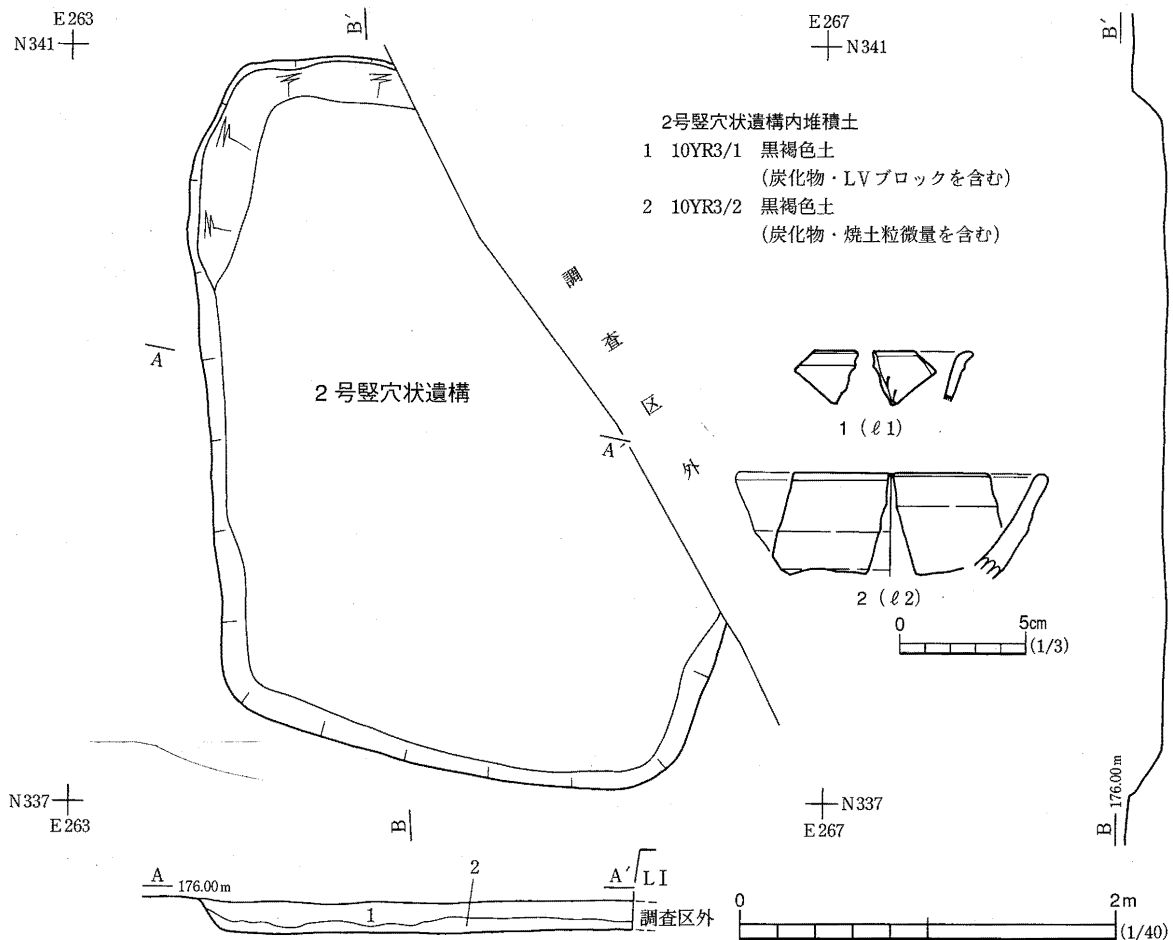


図11 2号竪穴状遺構，出土遺物

第2章 遺構と遺物

や東に振れるがほぼ真北を示す。周壁は床面から緩やかに立ち上がり、壁高は検出面から床面までの最深部で約18cmを測る。床面は平坦で、比較的固く締まっていた。床面からは炉跡や小穴、壁溝等の施設は認められなかった。

遺物 本遺構内からは土器片が27点出土している。大半の資料は細片で摩滅が著しいため、判然としないものが多いが、かわらけ・土師器類18点、中世陶器1点、白磁1点等が出土している。うち、かわらけ1点、白磁1点について図示した。図11-1は白磁碗の口縁部資料の細片である。口縁端部が短く外反し、やや褐色系の釉が内外面に施釉されている。2はかわらけ碗あるいは杯の口縁部資料と思われる。推定口径12.4cmを測り、器壁は比較的厚い。体部外面には判然としないが一段あるいは二段の横位削り調整が施されているものと思われる。

まとめ 本遺構は、平面形が不整隅丸長方形を呈する竪穴状遺構である。柱穴や炉跡などは認められず上屋の有無さえ明らかではないが、床面の踏み締まり等から一時的な居住あるいは作業場等に使われた施設と考えられる。所属時期は、出土遺物が少なく特定することは難しいが、隣接する3号竪穴状遺構との類似性から概ね古代末～中世頃の所産と考えている。(井)

3号竪穴状遺構 S I 03 (図12, 写真10)

遺構 本竪穴状遺構は、調査区北側のU-20・21グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は比較的平坦な地形を呈し、溝跡や小穴群の密度が高い地域である。検出面はL II 上面および西側では45号溝跡覆土である。重複関係は、45号溝跡より新しく、9'・12'号溝跡よりも古い。また、U20P6に切られている。遺構内堆積土は炭化物を含む黒褐色系の単層である。

平面形は南北に長い長方形基調で、規模は長軸の南北辺約4.8m、短軸の東西辺約3mである。主軸は若干東に振れるが2号竪穴状遺構や9'・12'号溝跡と同様にほぼ真北を示す。周壁は床面からほぼ垂直気味に立ち上がり、検出面から床面までの深さは20cm前後である。床面は平坦で、比較的固く締まっていた。床面からは炉跡や小穴、壁溝等の施設は認められなかった。

遺物 遺物は総計117点出土している。細片で摩滅しているものも多いが、かわらけ・土師器類約100点、須恵器2点、中世陶器2点、白磁2点等が出土している。うち、比較的遺存状態の良い7点を図示した。図12-1・3は底部回転糸切り・無調整のかわらけで、1・2は小皿、3は杯(大皿)である。1の体部中央はやや薄くなり、口縁端部がやや上方へ摘み上げられている。3の体部中央には判然としないが成形段階の緩い段が認められる。4は回転ヘラ切りによる須恵器杯の底部片、5は胎土・成形技法から珠洲系中世陶器甕と思われる。6は白磁碗の底部資料で、内面には白色釉が施釉されているが、外面体部下半から底部は露胎となる。見込み部分には沈線が一条巡る。

まとめ 本遺構は平面形が不整隅丸長方形を呈するやや大型の竪穴状遺構である。柱穴や炉跡などは認められなかったが、床面の踏み締まり等から一時的な居住あるいは作業場等に使用された施設と考えられる。所属時期は、重複関係や出土遺物等から判断して古代末～中世頃の所産と考えられる。(井)

第3節 掘立柱建物跡・柱列跡

今回の調査では、掘立柱建物跡6棟と柱列跡1基を検出した。調査区北側と南側の平坦地に構築されており、南側では大溝（SD25'）に区画された大型建物跡（SB03）も確認された。報告にあたっては、柱列跡（SA02）が建物跡（SB03・04）に付随する施設と判断されたため、別節を設けず本節で合わせて報告する。また、各柱穴規模や底面標高、柱間距離等を表3・4に掲載した。なお、遺構番号は1次調査からの継続番号である。

2号建物跡 SB02（図13・14、写真11～13、表3）

遺 構 本遺構は、調査区北西のS・T-23・24グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は標高176.00m程の比較的平坦な微高地で、若干ずれるものも含まれるが、概ね規則的に配列され

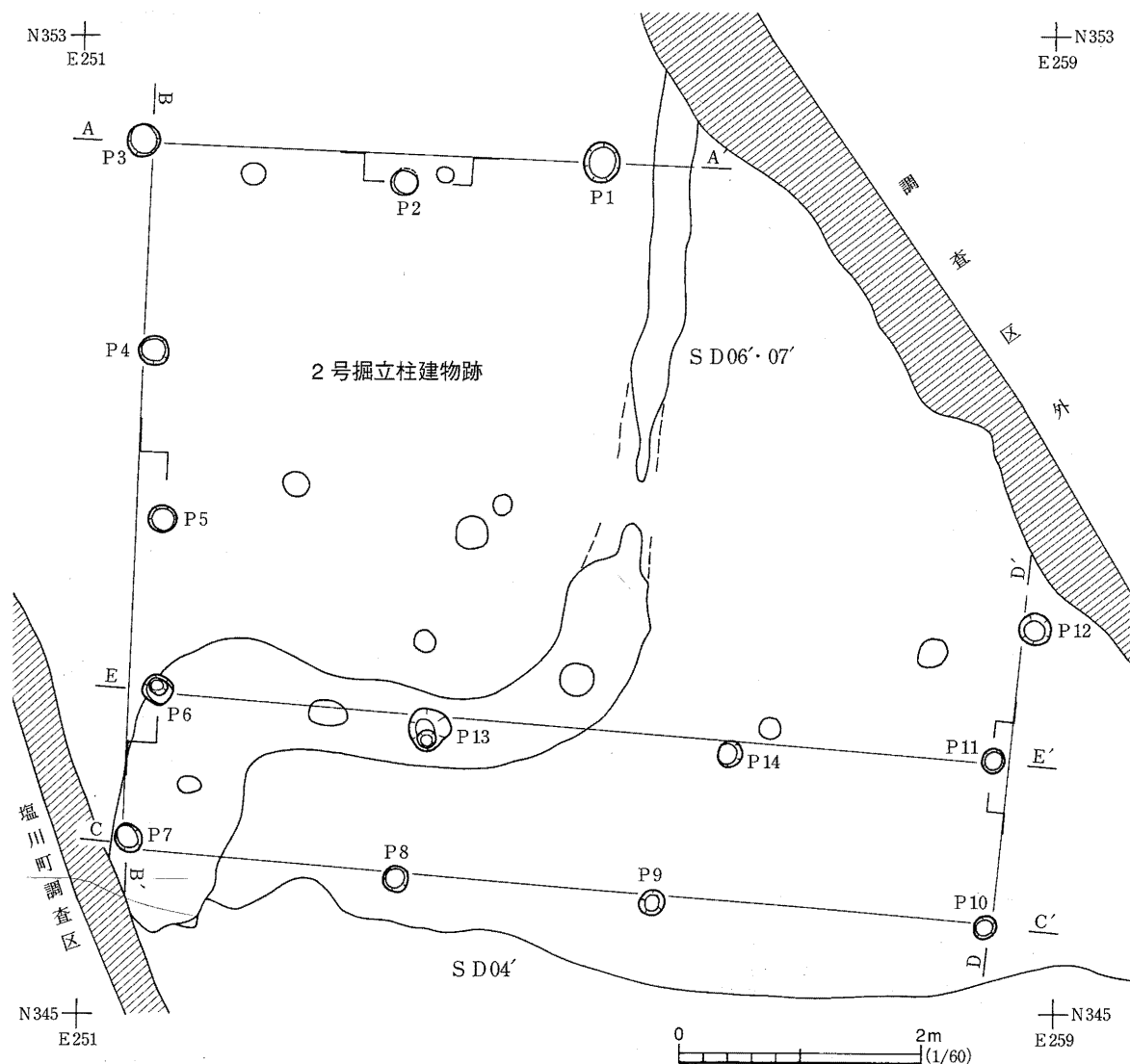


図13 2号掘立柱建物跡（1）

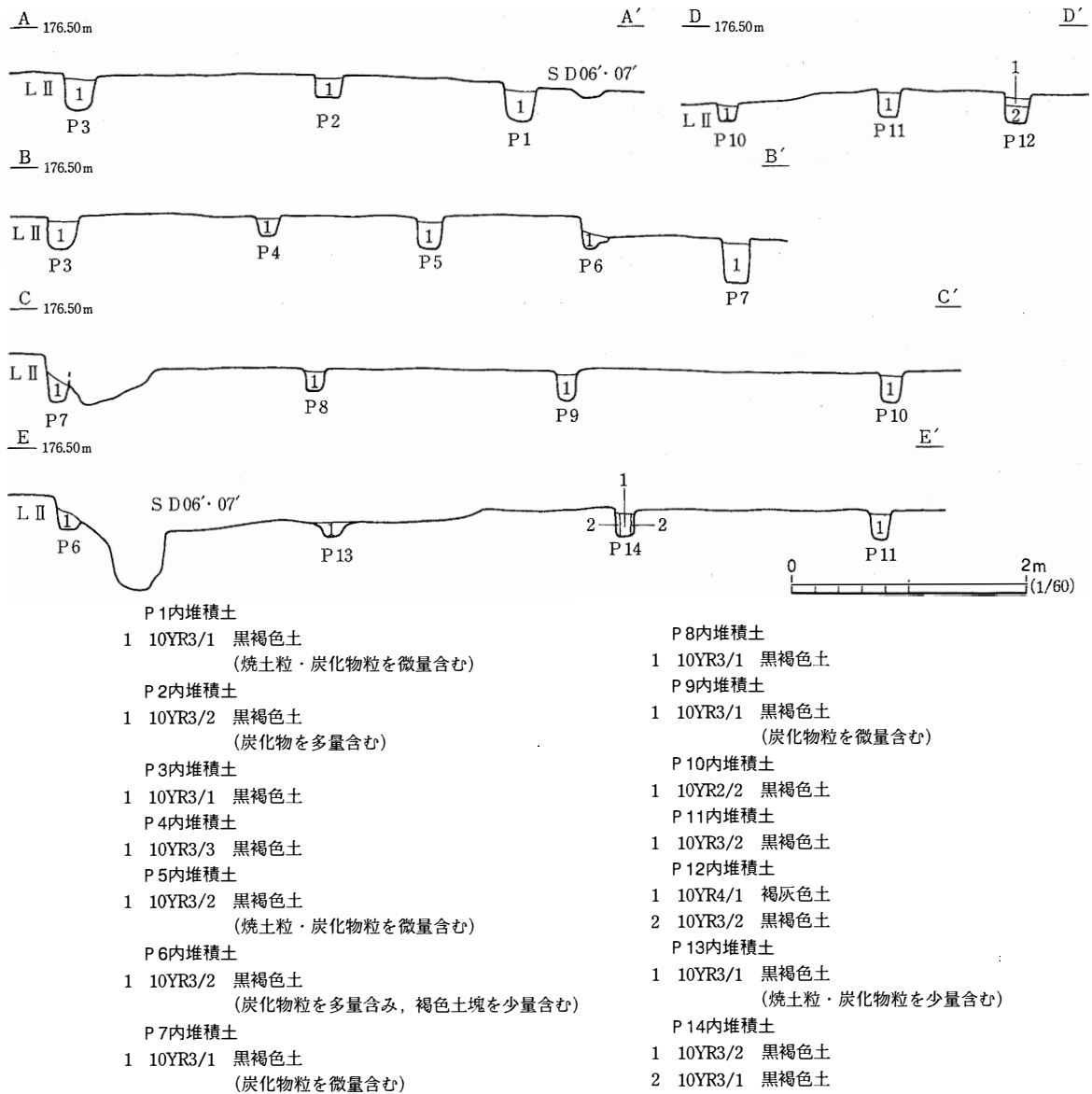


図14 2号掘立柱建物跡 (2)

た14個の柱穴跡を本建物跡として認定した。遺構検出面は中世の基盤層であるL II上面である。重複関係は61号土坑、6'・7'号溝跡と重複しており、いずれの遺構よりも新しい。また、南接して軸線が一致する4'・9'・12'号溝跡が存在する。

本建物跡は南北4間、東西3間で、南側に南北1間、東西3間の庇が付く側柱建物跡である。平面形は西辺に比べ東辺が若干長い不整な長方形を呈する。主軸方向は南側柱列を基本軸とした場合E 3° Sである。各柱列の全長は、東西軸のP 1 - P 3 (北側柱列)が検出長で3.80m(推定で7.60m)、P 6 - P 11 (南側柱列)が6.87m、P 7 - P 10 (庇柱列)が7.65m、南北軸のP 3 - P 7 (西側柱列)が5.73m、P 10 - P 12 (東側柱列)が検出長で2.4m(推定で6.10m)を測る。柱間は平均すると、東西柱列で1間約7尺、南北柱列で1間約4.5尺を示すが、各柱間はかなりばらつきが認められる。庇を含めた床面積は未調査部分を補って推定すると、44.3㎡程である。

第2章 遺構と遺物

建物跡を構成する個々の柱穴の平面形は概ね円形を基本としている。規模はP1・P13が30cm以上の長軸長をもつ他は、径17～27cmと均一である。柱穴の検出面からの深さは平均で25.5cmを測る。掘形内堆積土は、黒褐色および暗褐色粘質土で、いずれも土質に締まりがある。柱痕を検出できたのはP14のみで、径10cm程の痕跡が認められた。

なお、本遺構からは遺物が出土しなかった。

まとめ 本遺構は基本的には南北4間、東西3間で、南側に幅1間の庇をもち、東西に棟方向をもつ掘立柱建物跡であると考えられるが、北側柱列に関しては柱の間隔から4間あった可能性がある。柱の抜き取り痕や礎石・根石等の設置は認められず、また柱痕もP14を除いて確認することができなかった。本遺構の機能時期については、遺物が出土していないことから断定できないが、12世紀頃の所産と考えられるかわらけが出土した6'・7'号溝跡の覆土を掘り込んで構築していることから、少なくとも中世以降の所産と考えられる。(笠井)

3号建物跡 SB03 (図15・16, 写真14～17, 表3)

遺構 本建物跡は、調査区南端のAZ～CZ-8～10グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は標高176.00m程の比較的平坦な地形に位置し、規則的な配列構成が認められた29個の柱穴跡を本建物跡と認定した。ただし、北東端は調査区外に延びるため、建物を構成する北東柱穴(3個?)は確認していない。検出面は、LI直下の基盤層であるLV上面である。重複関係はP14が38号溝跡を切っていることから38号溝跡より新しい。また、直接的な重複関係はないが、7号建物跡や39・42号溝跡と同一地点での新旧関係にある。なお、柱間距離は柱痕遺存の場合は芯々間、その他は掘形中央間を計測値とした。

本建物跡は南北5間、東西5間の建物跡で、東西南に1間の庇が付く整った方形を呈する。検出できた各柱列の全長は、南北軸のP9-P14(西側柱列)がほぼ10m、東西軸のP4-P9(北側柱列)が約9.6m、P15-P27-P24(身舎西側柱列)が約8.2m、P22-P24(身舎南側柱列)が6.2mを測る。西側南北柱列および北側・南側東西柱列の1間は5.5～8.5尺でやや不規則であるが、東側柱列は6尺で規則的である。庇1間の幅は西側列P9-P14とP15-P27間が1.15m、東側列P1-P4とP19-P5間は1m程とやや狭いが、南側列P4-P9とP22-P24間は1.8mと広い。四隅の柱穴に囲まれた範囲の面積は96㎡、身舎部分が約56㎡である。主軸方向は、南北側柱列を基本軸とした場合N4°Eである。

建物跡を構成する個々の柱穴の平面形は、大半が円形であるが、P13やP23は楕円形を呈する。規模は平均して径20～30cmであるが、P1・P9・P13・P17・P18は35～40cm程でやや大きい。検出面からの深さは10～45cm程を測り、P3が45cmと最も深い。平均すると25cmである。比較的側柱や建物跡四隅側の柱穴が深い。掘形内堆積土は、いずれもLVブロック・炭化物を含む暗褐色粘質土を主体とし、土質に締まりがある。P1・P4～P7・P14・P16・P18・P21～P23からは径10～16cm程の柱痕、P2からは柱抜き取り痕が認められ、P17からは18cmの根石が検出された。

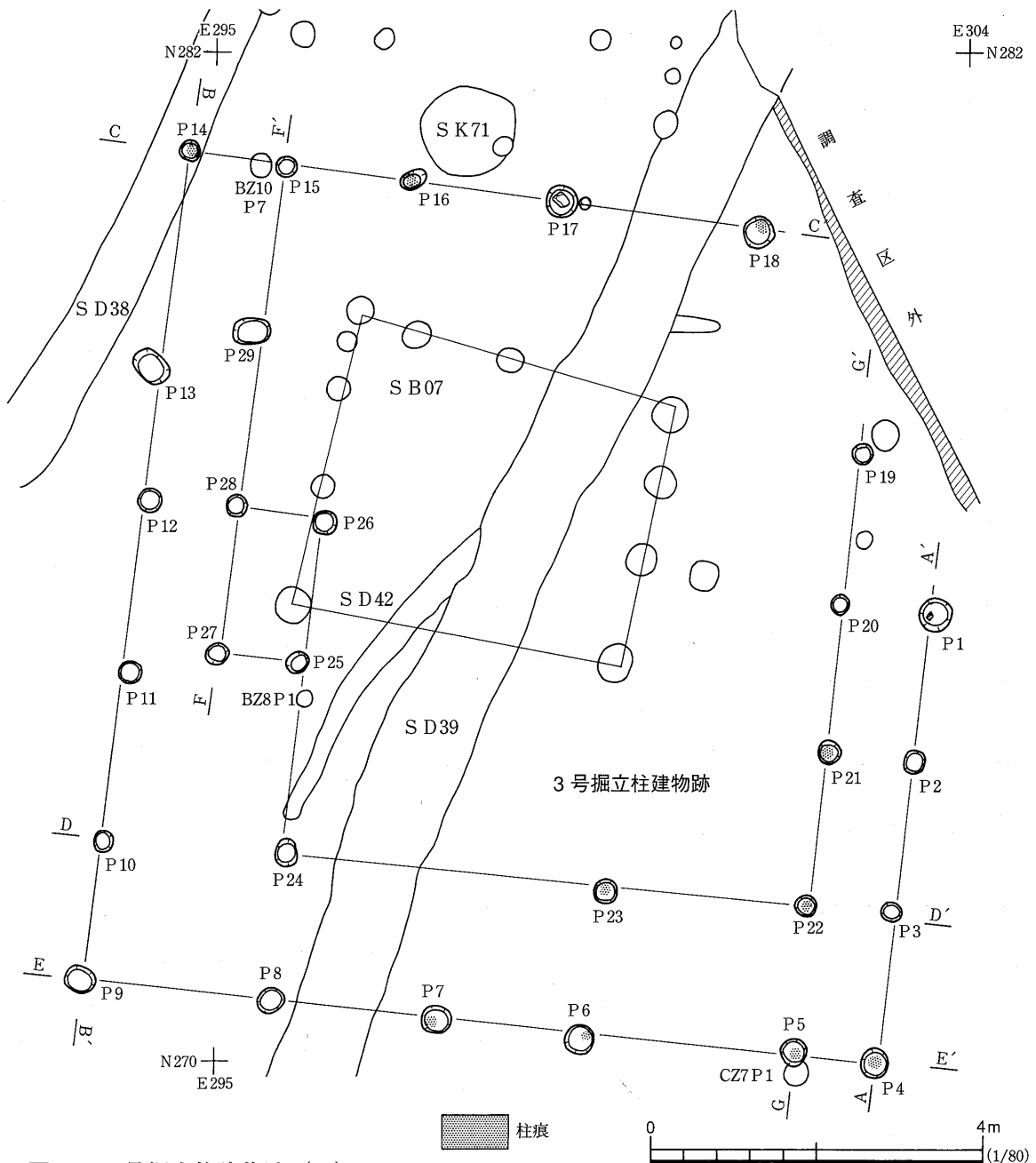


図15 3号掘立柱建物跡 (1)

遺物 本建物跡を構成する柱穴掘形内 (P2・P3・6・P9・P21・P29) から計13点が出土している。細片で摩滅が著しいため、図示できたものはないが、縄文土器片・かわらけ・土師器片などが出土している。

まとめ 本遺構は南北5間、東西5間の東西南に幅1間の底をもつほぼ方形基調の大型建物跡である。礎石等の設置は認められなかったが、P17から根石が確認された。本遺構の機能時期については出土遺物に乏しく、正確な時期は限定し得ないが、性格的には配置関係や主軸線方位を考慮すると、大溝の25号溝跡に区画された4号建物跡・2号柱列跡、井戸跡の73号土坑、北東に重複する64・65号土坑、69・70号土坑等と関連性が強い施設と考えられる。(井)

第2章 遺構と遺物

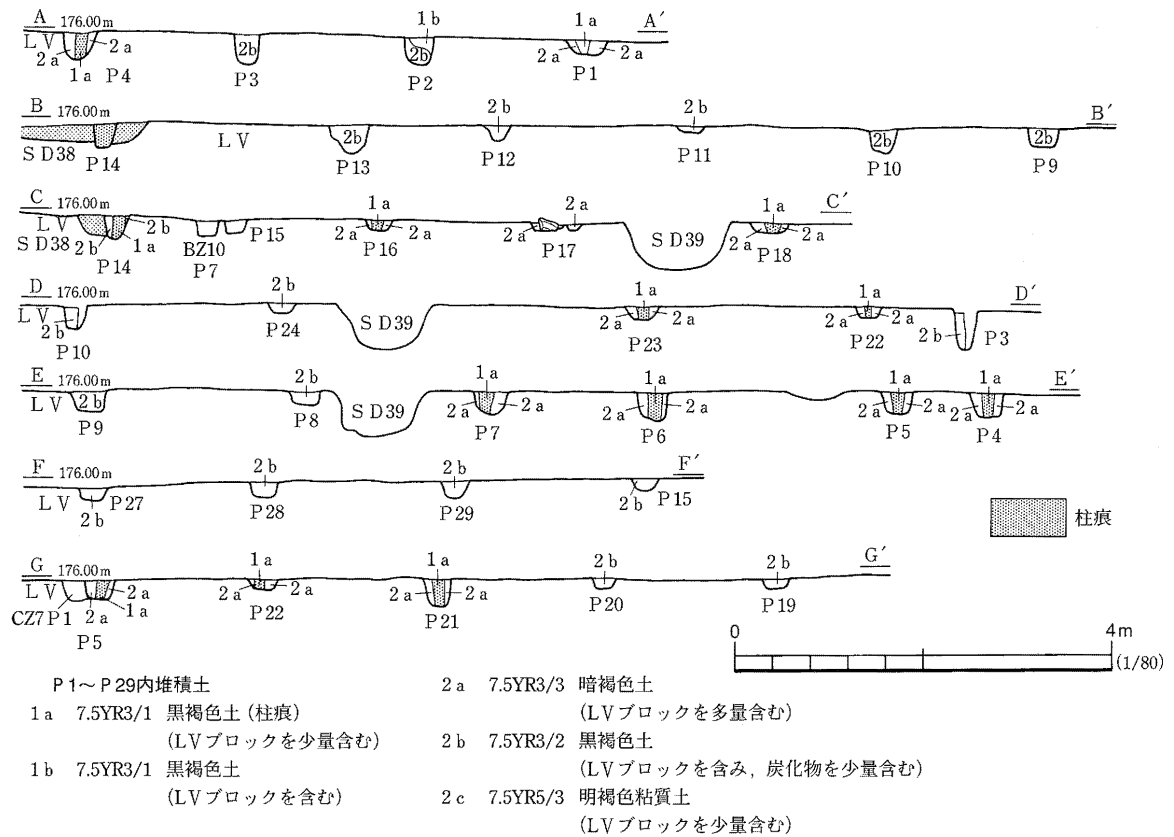


図16 3号掘立柱建物跡(2)

4号建物跡・2号柱列跡 SB04・SA02 (図17, 写真18・19, 表4)

遺 構 本建物跡は、調査区南側のZ・AZ-9・10グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は標高175.80mの西側へ向かって緩やかに傾斜する地形を呈し、規則的な配列構成が認められた10個の柱穴跡を本建物跡と認定した。検出面はLI直下の基盤層であるLV上面である。P3との重複関係から2号性格不明遺構より新しく、74・75号土坑、38号溝跡と同一地点での新旧関係にある。なお、軸線をほぼ同一にし、並列して隣接する2号柱列跡については、関連する施設と判断されるため本項で合わせて報告する。

本建物跡は南北桁行き3間、東西梁行き2間の側柱建物跡で、平面形は整った長方形を呈する。主軸方向は、南北側柱列を基本軸とした場合N6°Eである。各柱列の全長は、南北軸のP1-P4(東側柱列)およびP6-P9(西側柱列)が6.5m、東西軸のP1-P9(北側柱列)およびP4-P6(南側柱列)が共に3.68mを測る。南北柱列の1間は約7尺、東西柱列はほぼ6尺を測り、規則的な配置構成である。四隅の柱穴に囲まれた範囲の面積は24㎡程である。

建物跡を構成する個々の柱穴の平面形は、ほぼ円形基調を呈し、径20cm程の均一の規模である。検出面からの深さは平均して約20cmを測り、標高が高い東側柱や四隅の柱穴が深い。掘形内堆積土は、炭化物を含む褐色系を呈し、いずれも粘性・締まりがある。P4からは径12cm程の柱痕が検出された。

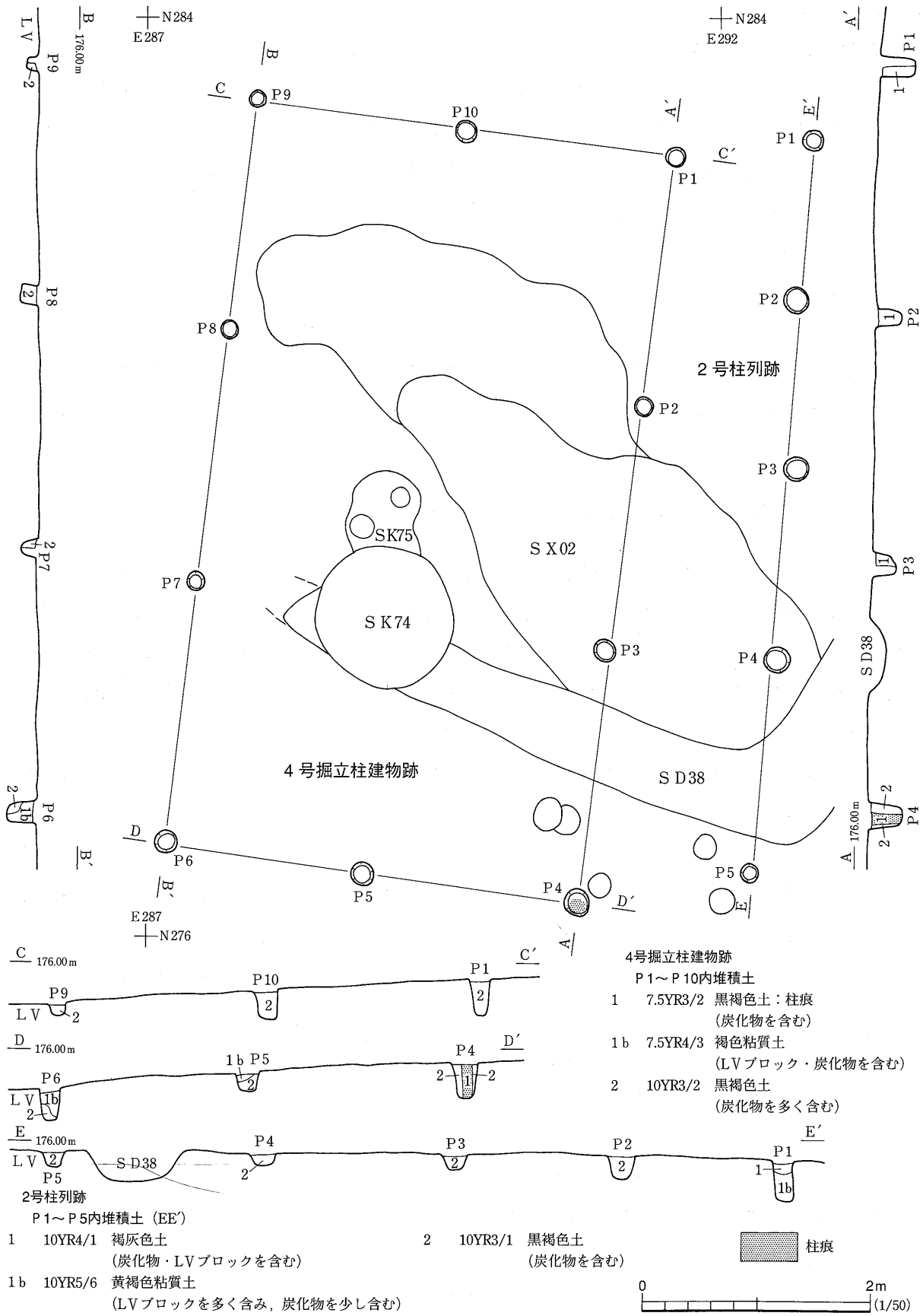


図17 4号掘立柱建物跡・2号柱列跡

第2章 遺構と遺物

2号柱列跡

2号柱列跡は4号建物跡の東側、AZ-9・10グリッドで並列して確認された。ほぼ南北に直線的に等間隔に並ぶ5個の柱穴を本遺構と認定した。主軸方向はN6°Eである。各柱列間の長さは、P1-P2が1.4m、P2-P3が1.5m、P3-P4が1.7m、P4-P5が1.9mで、P1-P5が6.5mを測る。南方ほど柱穴間隔がやや広がっている。掘形埋土は粘性の強い褐色系の堆積土で、いずれもLVブロック・炭化物を含む。検出面からの深さは10～14cm程であるが、P1は他柱穴と比して深い。柱痕や抜き取り痕は確認されなかった。

なお、本建物跡および柱列跡からは遺物が出土しなかった。

まとめ 本遺構は桁行き3間、梁行き2間の南北棟を呈する側柱建物跡であり、東側に2号柱列跡を付随する。柱の抜き取り痕や礎石・根石等は認められなかった。本遺構の機能時期については出土遺物がなく、明確な時期比定は判断し得ないが、隣接する3号建物跡や大溝の25'号溝跡と関連性が高い建物跡と考えられる。 (井)

5号建物跡 SB05 (図18, 写真20, 表4)

遺 構 本建物跡は、調査区南側のAZ-11グリッドに位置する。遺構は西側に向かって傾斜となる標高175.80m程に位置する。検出面は基盤層であるLV上面で、西側および北側には隣接して69・70号土坑や64・65号土坑、37号溝跡等が存在する。そのため、本来はこの部分にも建物を構成する柱穴が存在していたものと考えられるが、比較的平坦であった部分で規則的な配列構成が認められた5個の柱穴跡を本建物跡と認定した。重複関係はP1・P2が41号溝跡に切られているため、本遺構の方が古い。また、本建物跡と軸線がやや一致しないことから、調査当初37号溝跡を別遺構として取り扱ったが、本遺構に付随する施設の可能性がある。

本建物跡は検出できた部分で南北2間、東西1間である。各柱列の全長は、南北P1-P3(東側柱列)が約2m、東西列のP1-P5およびP3-P4が共に1.75mを測る。比較的規則的な配列であるが、南北軸と東西軸の間尺が異なるため、庇が付く可能性がある。主軸方向は、南北側柱列を基本軸とした場合N6°Eである。建物跡全体の規模が不明なため、床面積は判断できない。

建物跡を構成する個々の柱穴の平面形は、ほぼ円形基調を呈する。規模は径18～25cm程であるがP3は径約30cmを測りやや大きい。検出面からの深さは、根石を持つP3は10cmと浅く、柱痕が認められたP4は約40cmと深い。P3の根石は底面側がほぼ平らな約20cmの扁平礫を使用している。掘形内堆積土は、いずれもLVブロック・炭化物を含む黒褐色シルト土を基調としている。

なお、本建物跡からは遺物が出土しなかった。

まとめ 本遺構は南北2間、東西1間の範囲で柱痕を確認したが、本来はさらに西・北側へ延びる建物跡と考えられる。また、柱の抜き取り痕や礎石等は認められなかったが、P3で根石が認められた。本建物跡の機能時期については出土遺物が無く、正確な時期比定は困難であるが、遺構との重複関係や配置を考慮すると、古代～中世頃の所産の可能性が高いと考えられる。 (井)

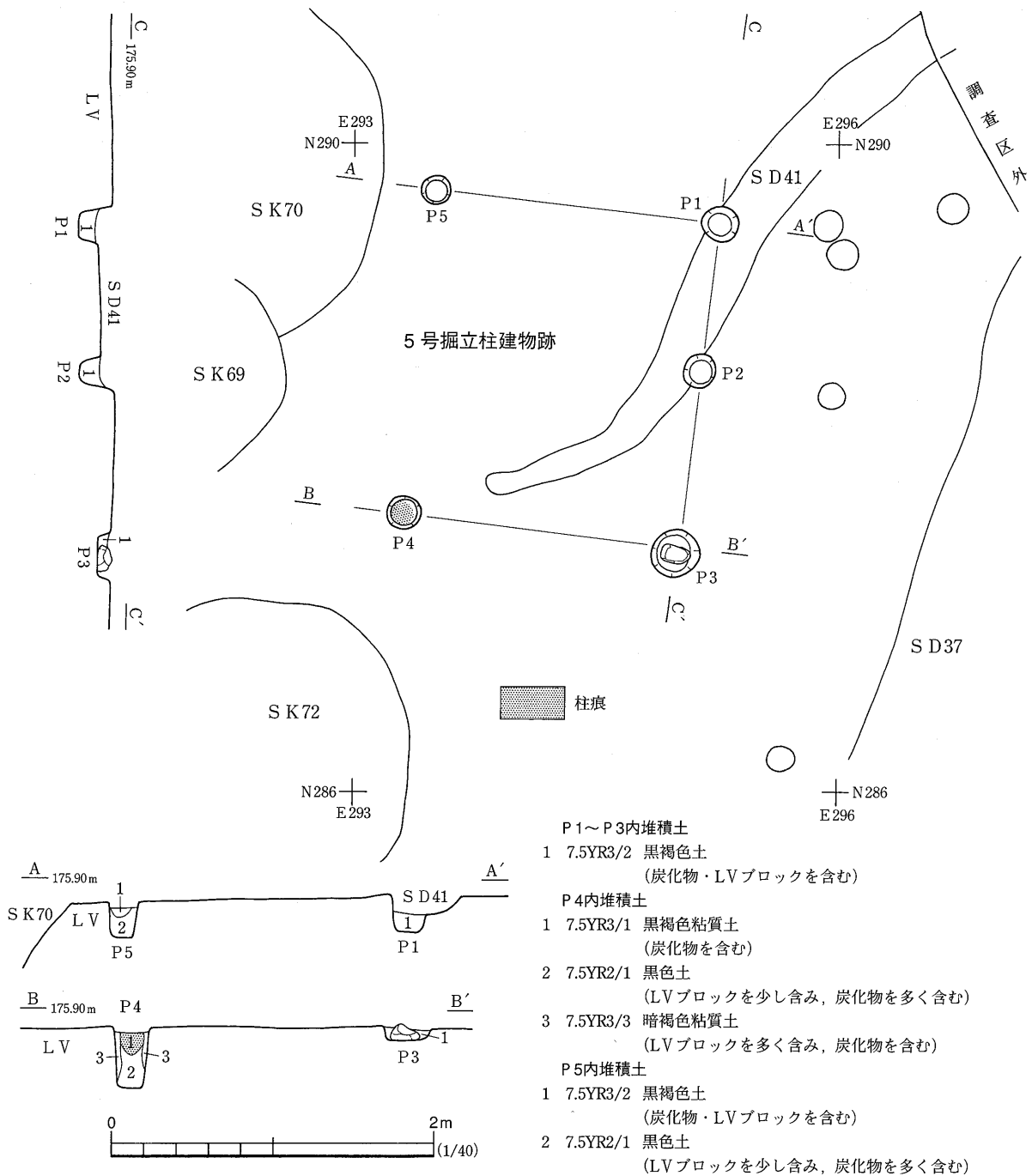


図18 5号掘立柱建物跡

6号建物跡 S B06 (図19, 写真21, 表4)

遺構 本建物跡は、調査区北西のS・T-21・22グリッドに位置する。遺構の周辺は標高175.90m程の比較的平坦な地形を呈し、調査区中央の旧河川のある南西方向に向かって緩やかに傾斜している。本遺構の付近には小穴が比較的多く認められたが、これらのうち規則的な配列構成が認められた7個の柱穴跡を本建物跡として認定したものである。検出面は、中世以後の基盤層であるL II上面である。重複する遺構は無いが、近接して4'・9'・12'号溝跡や小穴群が分布する。

本建物跡は西側が調査区外に延びることから確定できないが、南北2間、東西3間以上の側柱建物跡で、平面形は整った長方形を呈する。主軸方向は北側柱列を基本軸とした場合E 9° Sである。各柱列の全長は東西軸のP1-P4（北側柱列）が検出長で4.28m、P6-P7（南側柱列）が1.05m、南北軸のP4-P6（東側柱列）が4.08mを測る。各柱間は南北柱列で1間約6尺、東西柱列で1間約5尺を測るが、東西柱列の東端に位置するP3-P4、P6-P7は1間約3尺を測り、庇が付く可能性がある。

本建物跡の柱穴の平面形は、ほぼ円形である。径20~24cmを測り、ほぼ均一な規模である。検出

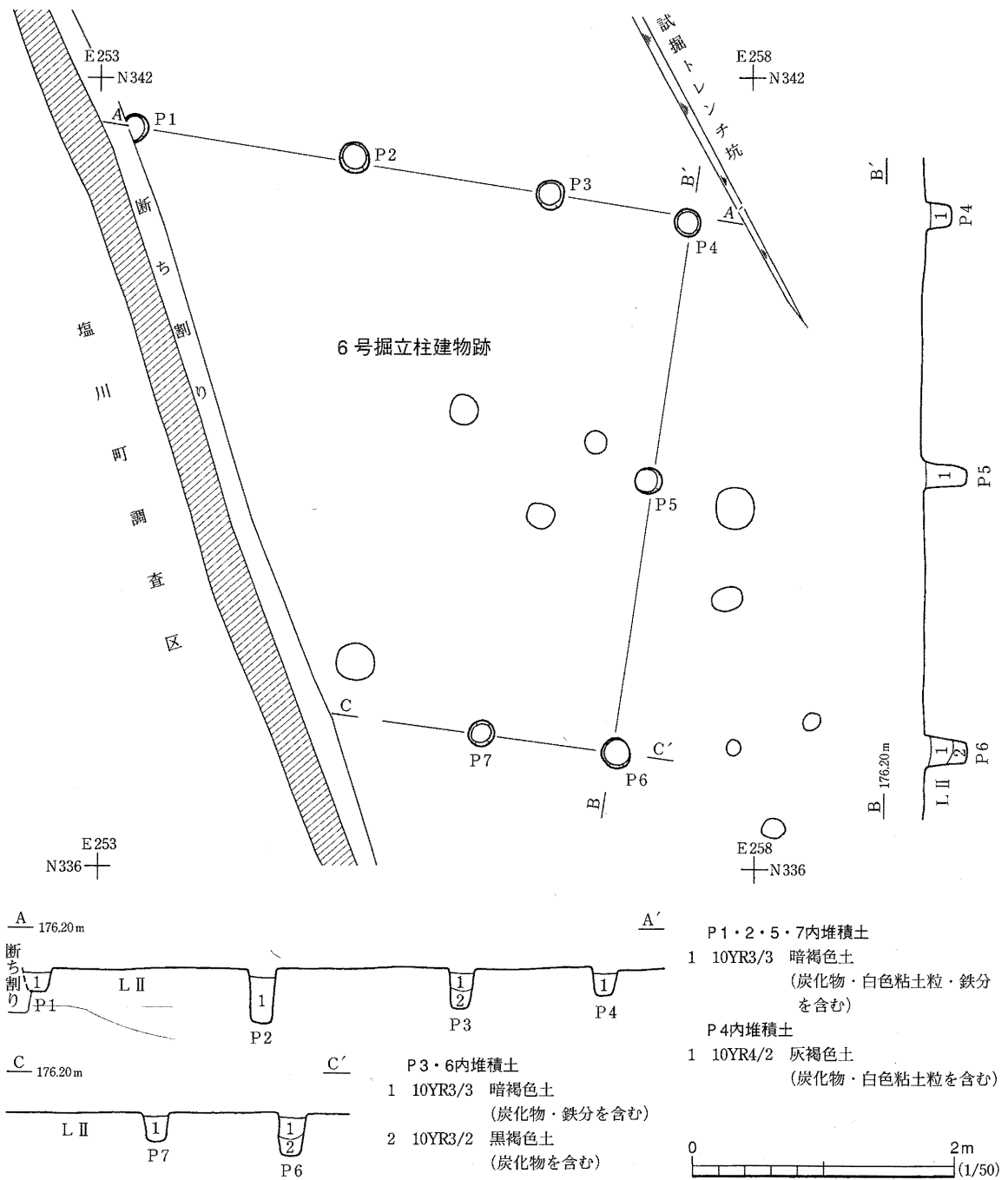


図19 6号掘立柱建物跡

面からの深さは17～37cmで若干のばらつきがある。掘形内堆積土は黒褐色粘質土を基調とし、土質に締まりがある。いずれの柱穴からも柱痕は確認できなかった。

本遺構からは遺物が出土しなかった。

まとめ 本遺構は南北2間、東西3間以上で、東西に棟方向を持つと考えられる平面長方形の側柱建物跡である。柱の抜き取り痕や礎石・根石等の設置は認められなかった。本遺構の機能時期は遺物が出土していないことから不明であるが、中世の基盤層であるLⅡ上面で検出したことから、少なくとも中世以後の所産の可能性が高いと考えている。(笠井)

7号建物跡 S B07 (図20, 表4)

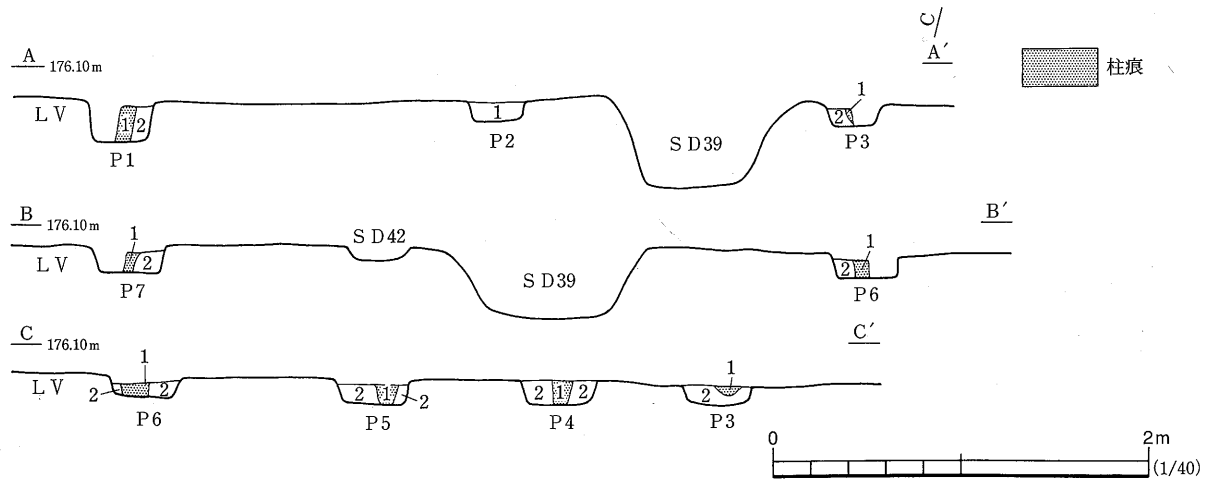
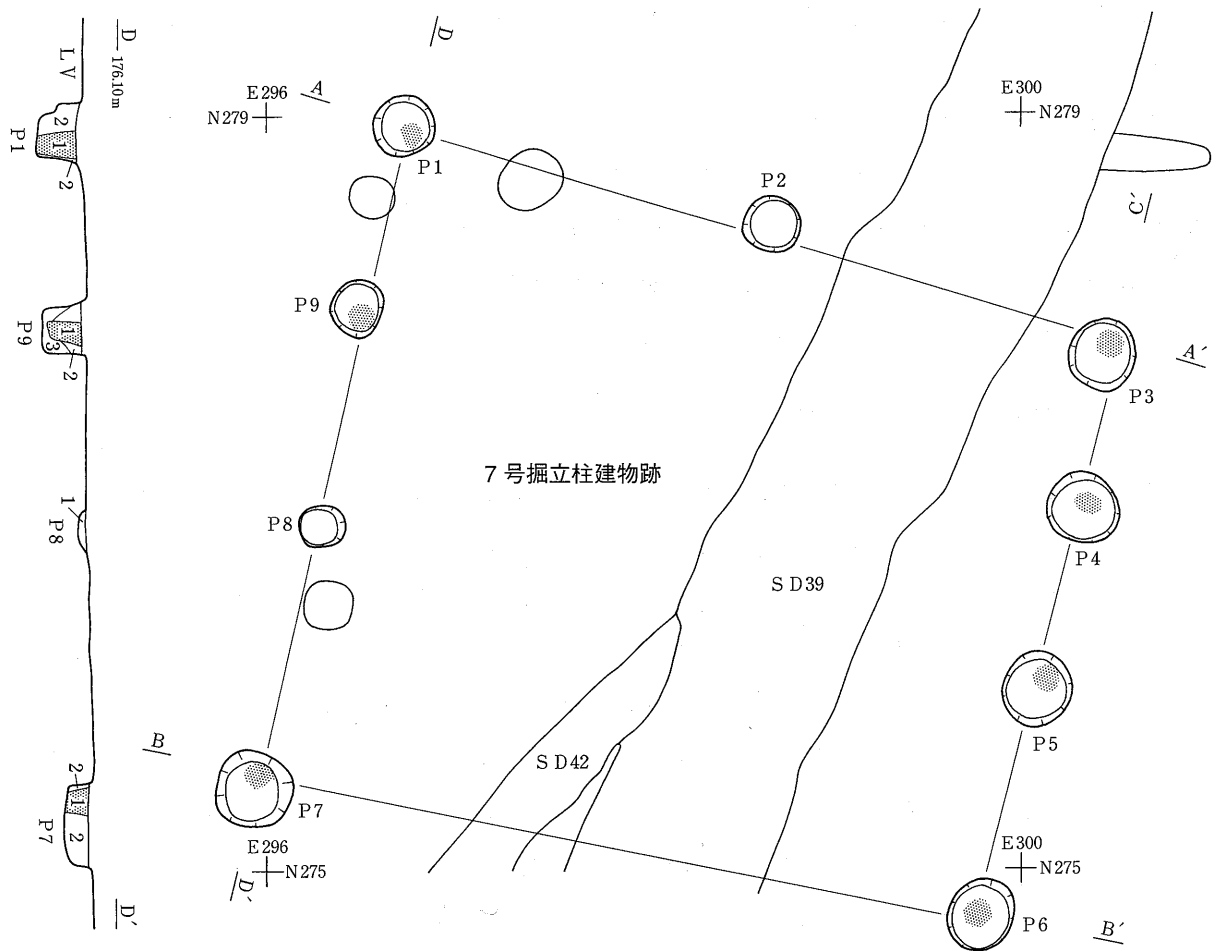
遺構 本建物跡は、調査区南側のBZ・CZ-9グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は標高176.00mの平坦な地形を呈し、比較的高い位置にある。規則的な配列構成が認められた9個の柱穴跡を本建物跡と認定した。検出面はLⅠ直下の基盤層であるLⅤ上面である。建物を構成する柱穴との直接的な重複関係はないが、3号建物跡や37・42号溝跡等と同一地点での新旧関係にある。なお、本遺構は3号建物跡と主軸線や柱穴規模等の差異から別遺構と判断した。

本建物跡は南北3間、東西2間の側柱建物跡で、平面形はやや歪んだ長方形を呈する。主軸方向は、南北側柱列を基本軸とした場合N14°Eである。各柱列の全長は、南北軸のP1-P7(西側柱列)が約3.6m、P3-P6(東側柱列)が約3.2m、東西軸のP1-P3(北側柱列)が約4m、P6-P7(南側柱列)が約3.9mを測る。南北柱列の1間は約6.5尺、東西柱列は3尺～4.5尺ほどで不規則である。東西柱列の1間幅は南側ほどやや広がっている。四隅の柱穴に囲まれた範囲の面積は11.5㎡である。

建物跡を構成する個々の柱穴の平面形は、ほぼ円形基調を呈する。柱穴の規模は径20～40cmである。P8は径20cmとやや小さいが、他柱穴は径35～40cm前後で比較的大きい。検出面からの深さは平均して10～14cmほどで比較的浅い。掘形内堆積土は、LⅤブロック・炭化物を含む暗褐色系の埋土で、粘性・締まりがある。P1・P3～P7・P9からは径10～15cmほどの柱痕が検出されたが、明確な柱抜き取り痕跡や礎石・根石等は認められなかった。

遺物 本建物跡を構成する柱穴掘形内からは、7点ほどの遺物が出土している。細片で摩滅が著しいため、図示できたものはないが、P1・P7からかわらけ・土師器片と思われる資料が出土している。

まとめ 本遺構は南北3間、東西2間のやや歪んだ長方形を呈する東西棟の側柱建物跡である。直接的な重複関係はないが、3号建物跡や37・42号溝跡と同一地点にあり、新旧関係にある。柱穴は規模がやや大きく浅いもので、柱痕(P1・P3～P7・P9)は確認されたが、柱抜き取り痕や礎石・根石等は認められなかった。本建物跡の機能時期・性格等については出土遺物が少なく、また3・4号建物跡等とは時期が前後し、周囲には本建物跡と軸線を同一にする関連遺構も認められていないことから明確には判断し得ない。(井)



- | | |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>P1・P3～P7内堆積土</p> <p>1 7.5YR2/1 黒色土：柱痕
(炭化物を多く含む)</p> <p>2 7.5YR3/1 黒褐色土
(LVブロック・炭化物を含む)</p> <p>P2内堆積土</p> <p>1 10YR3/2 黒褐色土
(炭化物・LVブロックを含む)</p> | <p>P8内堆積土</p> <p>1 7.5YR4/2 灰褐色土
(炭化物を含む)</p> <p>P9内堆積土</p> <p>1 7.5YR2/1 黒色土：柱痕
(LVブロック・炭化物を含む)</p> <p>2 7.5YR3/1 黒褐色土
(LVブロック・炭化物を含む)</p> <p>3 7.5YR2/2 黒褐色土
(炭化物を多く含む)</p> |
|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

図20 7号掘立柱建物跡

第4節 土 坑

今回の調査で検出された土坑は、18基である。昨年度の1次調査分60基と塩川町調査分18基を加えると総計96基となる。これらの土坑は、1次調査においては大半が散在して認められ重複するものは殆どなかったが、今回検出された土坑は、比較的遺構が密集する地点で重複して存在するものが多い。時期・性格等については、出土遺物が僅かなため不明なものが多いが、規模・形態・土層の堆積状況が類似するものが多く、大半は古代～中世頃に帰属するものと判断される。なお、今回の調査で使用した遺構番号は、1次調査からの継続番号である。

今回検出された土坑については、トイレ遺構の可能性を想定し、土壌分析用にサンプルを採取した。採取した試料のうち、64・65・69・70号土坑の4点について分析を行ったが（寄生虫卵分析・花粉分析・種実同定）、結果として消化残渣は検出されず、トイレ遺構である蓋然性は低いと判断された。また、花粉群集組成はヨモギ属やイネ科が優占し、種実類はアカザ属が主で、1次調査とほぼ同様な分析結果が得られている。なお、詳細については付章を参照願いたい。

61号土坑 S K 61 (図21・25, 写真22・48)

本土坑は調査区北西のS-23グリッドに位置する。周囲は平坦な地形で、2号建物跡および6'・7'号溝跡、S24P6と重複しており、これらに壊されていることから、本遺構が最も古い。検出面はLⅡ上面である。遺構内堆積土は色調および混入物から4層に分層できた。遺構下層に堆積したℓ3・4は黒褐色を基調とする粘質土で、炭化物・焼土粒を微量含む。上層のℓ1・2はやや明るめの色調をしており、LVを起因とする粘土塊や炭化物・焼土塊等が多量に混入している。堆積状況からℓ3・4を自然流入土、ℓ1・2を人為的埋土と判断した。

遺構の平面形は、西方に湾曲しながら窄まる「鎌」のような偏楕円形を呈し、長軸3.22m、短軸0.9mを測る。周壁は南北壁が50～60°程の急角度で立ち上がるのに対し、東西壁では30°以下の緩やかな角度で内湾しつつ立ち上がる。底面はLVまで掘り込んで構築されており、東から徐々に浅くなる3段の階段状を呈する。検出面から最深部までの深さは25cmである。

遺物は、土師器・かわらけ片5点、須恵器1点が出土している。いずれもℓ1からの出土で流れ込みの可能性が高い。図25-1は瓶類の底部資料で、体部下端と底部に削り調整が施されている。

本遺構の所属時期は、出土遺物や重複する2号建物跡および6'・7'号溝跡との前後関係から判断して、古代～中世頃と考えられる。 (笠 井)

62号土坑 S K 62 (図21, 写真22)

本土坑は調査区北側東境のW-20グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は、ほぼ平坦であるが、微妙に南側へ傾斜する地形に位置する。検出面はLⅡ上面で、重複する遺構はない。近接

第2章 遺構と遺物

して9'・36号溝跡，1号性格不明遺構が存在する。遺構内堆積土は2層に分層できる。共に炭化物を含む壁際からの流入が認められたことから，自然堆積と判断している。

平面形は円形を呈し，規模は径60cmほどである。周壁は底面からほぼ垂直に立ち上がる。底面は基盤層であるLV上面まで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。深さは20cmほどである。

本土坑内からは土師器片1点が出土したが，小片で摩滅が著しいため図示できなかった。

本遺構の明確な所属時期・性格等は不明である。(井)

63号土坑 SK63 (図21, 写真22・23)

本土坑は調査区南側東境のAZ-13グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，ほぼ平坦であるが，西側付近では緩やかに傾斜する地形である。検出面はLI直下のLV上面である。重複する遺構はないが，近接して64～68号土坑が存在する。遺構内堆積土は8層に分層できる。いずれも暗褐色系の粘質土を基調とし， $\ell 2 \sim 8$ は壁際からの流入により中央部が窪むレンズ状を呈するが，上層のLVブロックを多く含む $\ell 1$ は人為堆積と判断している。

平面形はほぼ円形を呈し，規模は径1.1mほどである。周壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり，検出面からの深さは42cmである。底面はやや凹凸はあるが，ほぼ平坦である。

本土坑内からは出土遺物がなく，所属時期・性格等は不明である。(井)

64号土坑 SK64 (図22, 写真22・23)

本土坑は調査区南側東境のAZ-12グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，比較的平坦な立地を呈するが，西側付近で北西へ向かって緩やかに傾斜している。検出面はLI直下のLV上面および北側では65号土坑覆土である。65号土坑と重複し，本遺構の方が新しい。また，規模・堆積土が類似する66～68号土坑や69・70号土坑等が近接して存在する。遺構内堆積土は7層に分層され，いずれも暗褐色系の粘質土を基調としている。下層の $\ell 4 \sim 7$ は壁際からの流れ込みによる自然堆積，LVブロック・小礫等を多く混入する上層の $\ell 1 \sim 3$ は人為堆積の様相を呈している。

平面形はほぼ円形を呈し，規模は開口部径1.8m，底面径約0.6mを測る。周壁は上位でやや広がるが，底面からほぼ急に立ち上がる。底面はLVIまで掘り込んで造られており，ほぼ平坦である。検出面から最深部までの深さは1.36mである。

遺物は総数約130点出土している。上層の $\ell 1 \sim 3$ からは土師器・かわらけ・須恵器・鉄滓などが出土したが，すべて小片で摩滅が著しいため図示できなかった。また， $\ell 5$ を土壤分析したが，消化残渣は検出されず，トイレ遺構である可能性は低いと判断された(付章参照)。(井)

65号土坑 SK65 (図22・25, 写真22・23・48)

本土坑は調査区南側東境のAZ-12グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は，比較的平坦な立地を呈するが，西側付近で北西へ向かって緩やかに傾斜する。検出面はLI直下のLV上面

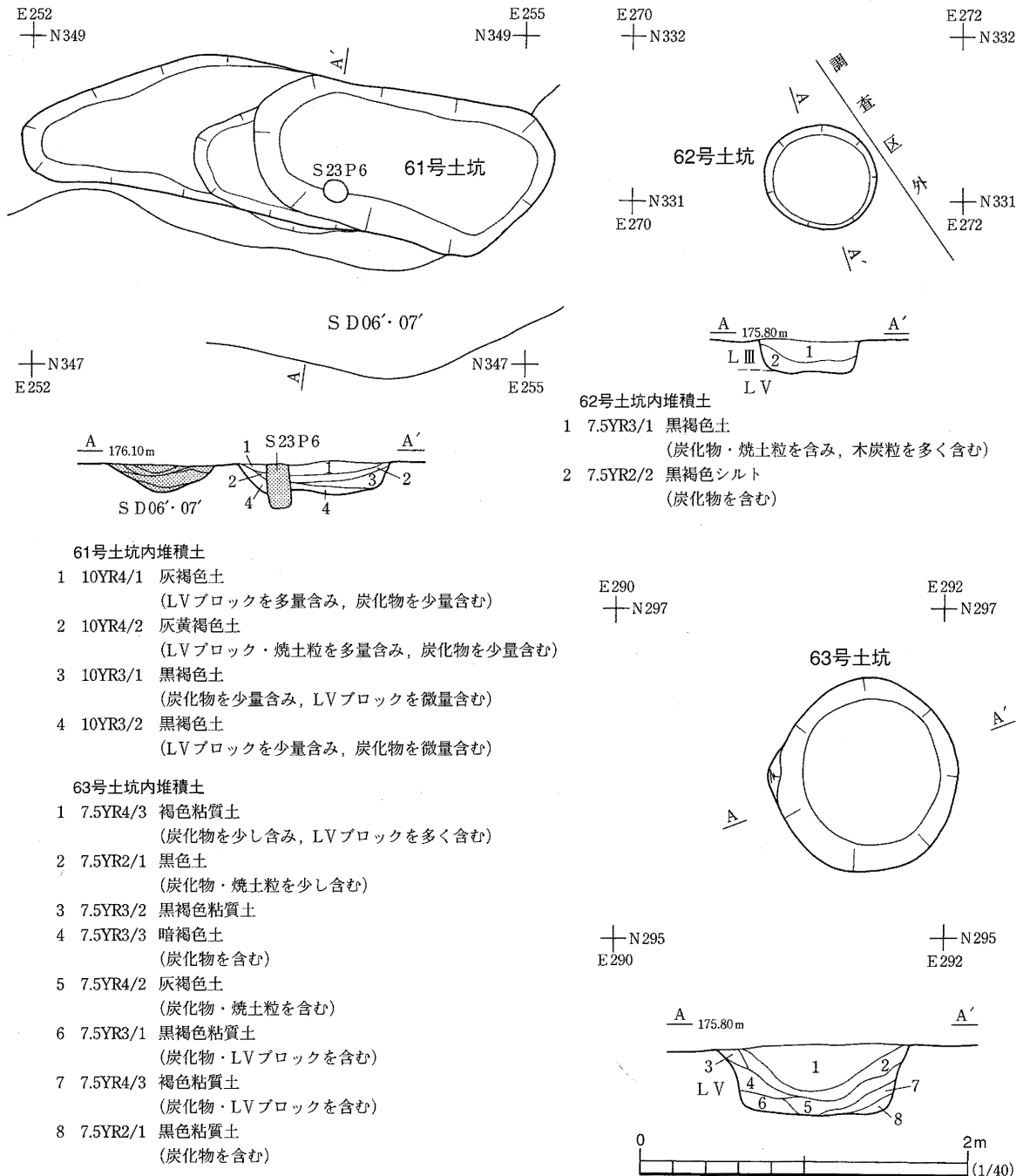


図21 61～63号土坑

である。64号土坑より古い重複関係にあるため、南側約1/3が遺存していない。また、本遺構と近接して規模・堆積土が類似する66～68号土坑や69・70号土坑が存在する。遺構内堆積土は11層に分層された。暗褐色系の粘質土を基調とし、最下層の11は緑灰色グライ層である。層4～10は壁際からの流れ込みによる自然堆積と判断されるが、LVブロック・小礫等を多く混入する上層の層1～3は人為堆積の様相を呈している。層3と層4境には10～18cm程の礫3個が認められた。

平面形はほぼ円形を呈し、規模は開口部径2.3m、底面径約0.8mを測る。周壁は上位でやや広がるが、底面から急に立ち上がる。底面は湧水点であるLVⅧの礫層まで掘り込んで造られており、検

第2章 遺構と遺物

出面から底面までの深さは約1.9mを測る。

本土坑内からは計18点の遺物が出土している。ℓ 1・2・4・7・10から土師器・かわらけ・須恵器片・木質遺物などが出土したが、小片で摩滅が著しいため図示できたのは須恵器1点と木質遺物1点である。図25-5は逆台形状の短い高台部が付く瓶類の体部下半から底部片である。体部下半には回転ヘラ削り調整が施されている。同図6は遺存長約29.1cm、幅0.8cmの棒状あるいは箸状製品の欠損品である。木取りは横木取り、材質はスギである。

本遺構の所属時期については出土遺物が判然としないため判断し得ない。また、性格的には本遺構ℓ10を土壌分析したが、消化残渣（寄生虫卵・回虫卵等）は検出されず、トイレ遺構である可能性は低いと判断された（付章参照）。
(井)

66号土坑 S K 66（図22・25，写真22・23・48）

本土坑は調査区南側東境のZ-12グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は、比較的平坦な立地を呈するが、西側付近で北西へ向かって緩やかに傾斜している。検出面はL I直下のL V上面および西半では68号土坑覆土である。68号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。また、規模・堆積土が類似する64・65号土坑や69・70号土坑等が近接して存在する。遺構内堆積土は3層に分層され、いずれも炭化物を混入する褐色系の堆積土である。壁際からの流れ込みが認められたℓ3およびℓ2は自然堆積、L Vブロック等を多く混入する上層のℓ1は人為堆積の様相を呈している。

平面形はほぼ円形を呈し、規模は開口部径1.42m、底面径約0.5mを測る。周壁は緩やかに広がる播鉢状を呈する。底面はL VIまで掘り込んで造られており、やや凹凸がある。検出面からの深さは70cmほどである。

本土坑内からは土師器・かわらけ・須恵器など計6点ほど出土しているが、小片で摩滅が著しいため図示できたのは須恵器片1点である。図25-2は甕の体部片で、外面に叩き痕、内面には雑な横位のナデが施されている。

本遺構の所属時期・性格については出土遺物が少なく不明である。
(井)

67号土坑 S K 67（図22，写真22・23）

本土坑は調査区南側東境のZ-12グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は、西側へ向かって緩やかに傾斜している。検出面はL I直下のL V上面および68号土坑・44号溝跡覆土である。68号土坑・44号溝跡と重複し、本遺構の方が新しい。また、規模・堆積土が類似する64・65号土坑や69・70号土坑等が隣接して存在する。遺構内堆積土は3層に分層され、いずれもL Vブロック・炭化物を混入する暗褐色系の堆積土である。壁際からの流れ込みによるレンズ状の堆積が認められたことから自然堆積と考えた。

平面形は東西にやや長い楕円形を呈し、規模は開口部長軸2mを測る。周壁は垂直気味に急に立ち上がり、L VIまで掘り込んで造られている。底面はやや凹凸があり、深さは最深部となる西側で

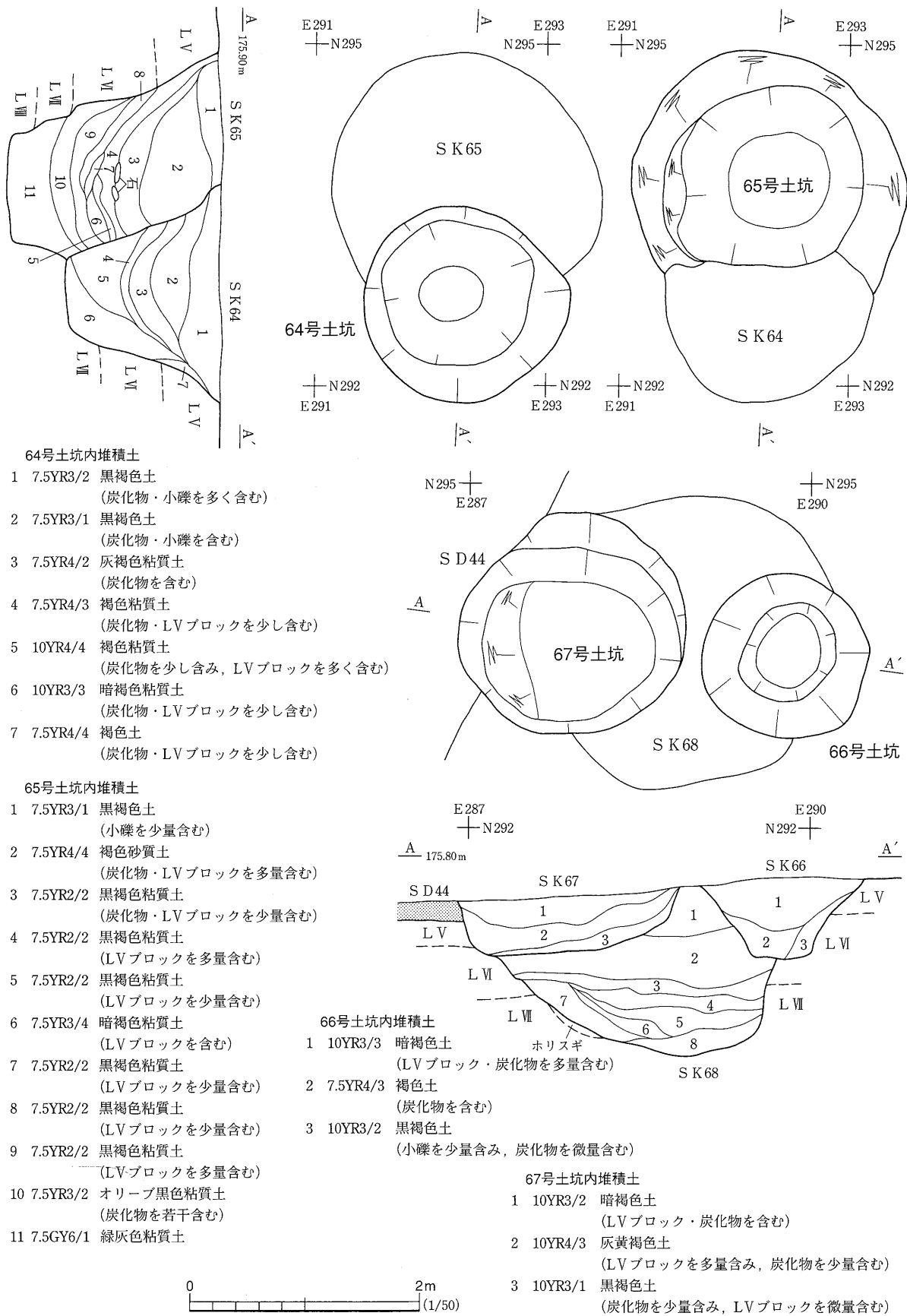


図22 64~67号土坑

50cmほどである。

本土坑内からは土師器・かわらけが計7点ほど出土しているが、小片で摩滅が著しいため図示できなかった。本遺構の所属時期・性格については出土遺物が少なく不明である。(井)

68号土坑 S K 68 (図23・25, 写真22・23・48)

本土坑は調査区南側東境のZ-12グリッドに位置する。本遺構は標高175.60mの西側へ向かって緩やかに傾斜する位置にある。検出面はL I直下のL V上面で、66・67号土坑と重複している。重複関係は本遺構が最も古く、また64・65号土坑や69・70号土坑等が近接して存在する。遺構内堆積土は8層に分層され、上層ほど粘性が強く、下層(ℓ5～8)は砂質土である。壁際からの流れ込みが認められた下層のℓ3～8は自然堆積、L Vブロック等を多く混入し厚く堆積した上層のℓ1・2は人為堆積の様相を呈している。

平面形は不整楕円形を呈し、規模は開口部長軸約2.8m、短軸2.4mほどである。周壁は西側は比較的緩やかな立ち上がり、東側は垂直気味に立ち上がる。底面はL VIIまで掘り込んで造られており、中央部が窪む播鉢状を呈する。検出面からの深さは最深部で1.5mである。

本土坑内からは縄文土器・土師器など約30点が出土している。ℓ1・2・4から出土しているが、小片で摩滅が著しいため図示できたのは縄文土器1点と土師器片1点である。図25-3はロクロ土師器甕の口縁部片で、口縁端部上方へ摘み上げられている。4は球形を呈する小型土器で、体部には斜縄文が回転施文されている。3は9世紀後半、4は縄文晩期頃の所産であろう。

本遺構の所属時期・性格については出土遺物が判然とせず、不明である。(井)

69号土坑 S K 69 (図23・25, 写真23・48)

本土坑は調査区南側東境のA Z-11グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は、比較的平坦な地形に位置し、検出面はL I直下のL V上面である。70号土坑と重複し、本遺構の方が新しい。また、規模・堆積土が類似する64・65号土坑と近接して存在する。遺構内堆積土は7層に分層され、いずれも暗褐色系の粘質土を基調としている。下層のℓ4～7は壁際からの流れ込みによる自然堆積、L Vブロック・小礫等を多く混入し厚い堆積土である上層のℓ1～3は人為堆積の様相を呈している。

平面形はやや歪んだ円形を呈し、規模は開口部径1.4mほどである。周壁は上位でやや広がるが、底面から急に立ち上がる。底面はL VIIまで掘り込んで造られており、中央部が窪む。検出面から最深部までの深さは1.3mである。

本土坑内からは計約140点の遺物が出土している。縄文土器・かわらけ・土師器が多く、比較的上層のℓ1～3の出土が多い。すべて小片で摩滅が著しいため図示できたのは1点である。図25-7は胎土・成形技法等から珠洲系中世陶器鉢の底部片と思われる。本遺構の性格はℓ6を土壌分析したが、消化残渣は検出されず、トイレ遺構である可能性は低いと判断された(付章参照)。(井)

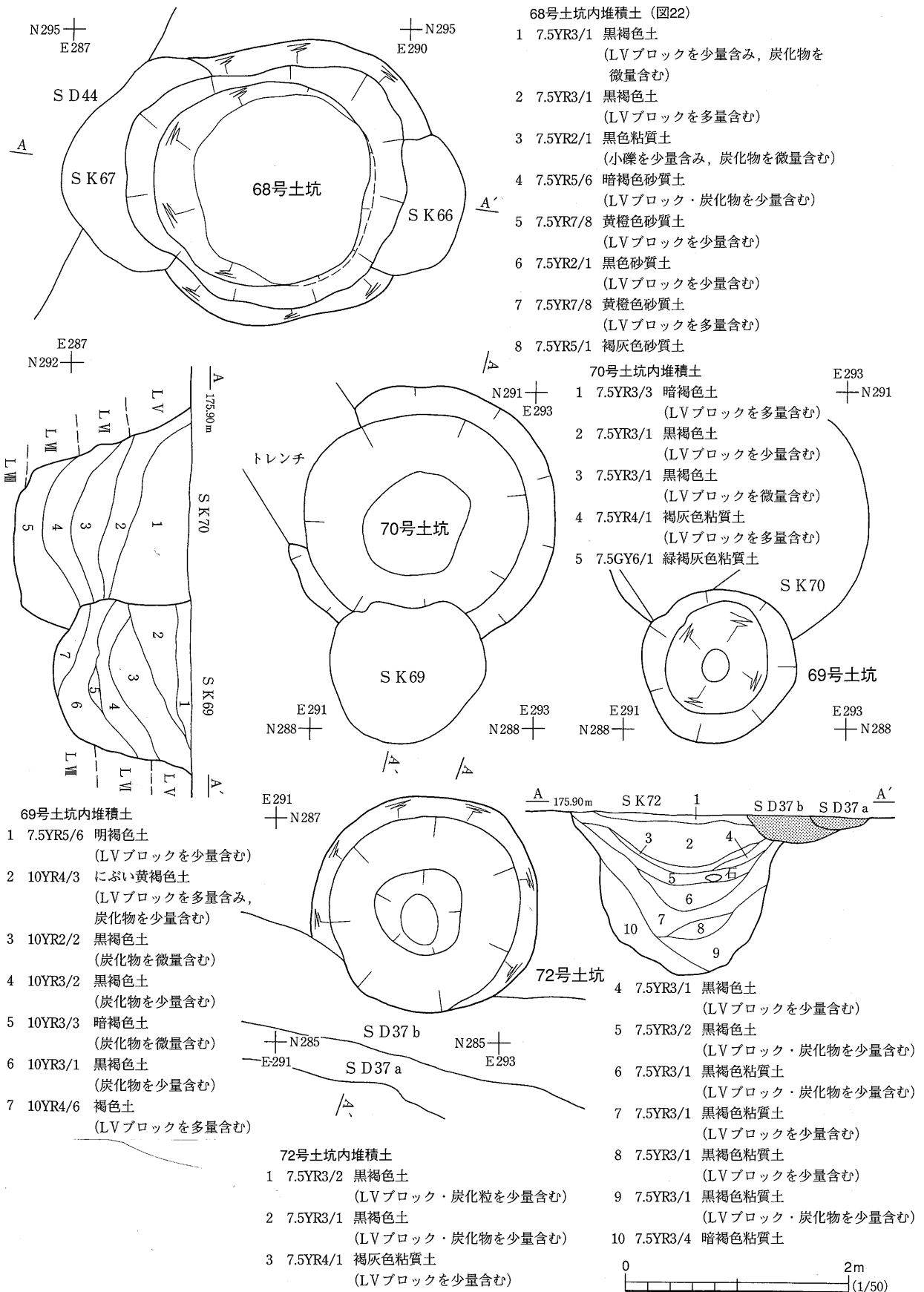


図23 68~70・72号土坑

70号土坑 S K 70 (図23, 写真23・60)

本土坑は調査区南側東境のA Z - 11・12グリッドに位置する。本遺構は比較的平坦な面に構築されており、試掘調査(10T:2002)で確認されていた遺構である。検出面はL I直下のL V上面である。69号土坑と重複し、本遺構の方が古い。また、本遺構北側には規模・堆積土が類似する64・65号土坑が隣接して存在する。遺構内堆積土は5層に分層され、暗褐色系の粘質土を基調としている。ℓ 2～4は中央がレンズ状に窪む壁際からの自然堆積と判断されるが、L Vブロック・小礫等を多く混入するℓ 1は人為堆積と考えられる。また、65号土坑ℓ 11と類似する最下層ℓ 5の緑褐灰色グライ層からは瓜科の植物遺体が2個体分出土している。

平面形はほぼ円形を呈し、規模は開口部径2.4m、底面径約1mを測る。周壁は上位でやや広がるが、底面から急に立ち上がる。底面は湧水点であるLⅧの礫層まで掘り込んで造られており、検出面から底面までの深さは約1.65mを測る。

本土坑内ℓ 1～5からは縄文土器・土師器・かわらけ・須恵器・木質遺物など計20点の遺物が出土しているが、いずれも小片で摩滅が著しいため図示できなかった。また、最下層ℓ 5から出土した植物遺体(瓜科)は写真のみ掲載した。

本遺構の所属時期については出土遺物が判然としないため判断し得ない。また、性格的には本遺構最下層(ℓ 5)を土壌分析したが、消化残渣は検出されず、トイレ遺構である可能性は低いと判断された(付章参照)。(井)

71号土坑 S K 71 (図24, 写真23)

本土坑は調査区南側のB Z - 10グリッドに位置する。本遺構は標高176.00mの平坦地に位置し、L V上面で検出した。根石が確認されたB Z 10 P 6に切られており、隣接して3・7号建物跡が存在する。遺構内堆積土は単層で、L Vブロック・炭化物を含む粘質土である。

平面形は円形を呈し、規模は径1.1mほどである。周壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは12cmである。

本土坑内からは遺物が出土しておらず、明確な所属時期・性格等は不明である。(井)

72号土坑 S K 72 (図23・25, 写真24)

本遺構は調査区南側のA Z - 11グリッドに位置する。本遺構は比較的平坦な立地に構築されていたやや大型の土坑である。検出面はL I直下のL V上面で、南側で37号溝跡に切られている。隣接して北側には69・70号土坑、南側には4号建物跡や2号柱列跡などが存在する。遺構内堆積土は10層に分層され、L Vブロック・炭化物を含む黒褐色系の土層である。ℓ 3～10は中央がレンズ状に窪む壁際からの自然堆積と判断されるが、上層のℓ 1・2は人為堆積と考えられる。また、ℓ 5には65号土坑等と同様に10～15cmほどの小礫が数個混入していた。

平面形はほぼ円形を呈し、規模は開口部径2mを測る。周壁は上位でやや広がるが、底面から急に立ち上がる。底面は中央が窪む挿鉢状を呈し、湧水点であるLⅧの礫層まで掘り込んで造られていた。検出面からの深さは最深部で約1.44mを測る。

遺物はℓ1・2・4・5・9から総数180点出土した。出土した遺物はいずれも細片で摩滅が著しく判然としないが、縄文土器片・土師器・かわらけを主体に、須恵器・石器類が僅かに出土している。図示できたのは縄文土器と思われる底部片（図25-8）のみである。

本遺構は重複する37号溝跡より古い。明確な所属時期・性格については不明である。（井）

73号土坑 SK73（図24, 写真24）

本遺構は調査区南側のAZ-6・7グリッドに位置する。本遺構は北西へ緩やかに傾斜するやや遺構群から離れた場所に位置する。検出面はLⅠ直下のLV上面で、近接して48~50・52号溝跡が存在する。遺構内堆積土は大きく4層に分層されたが、基本的にはLVブロック・炭化物・小礫を多量に含む単一層である。締まりが強く、人為的に一気に埋め戻された様相を呈する。

平面形はほぼ円形を呈し、規模は開口部径1.5mを測る。周壁は凹凸が著しく、オーバーハングしている部分もある。底面中央が挿鉢状に窪み、湧水点であるLⅧの礫層まで掘り込んで造られていた。検出面からの深さは最深部で約1.75mを測る。

本遺構からは土器や木質遺物等の遺物が出土せず、所属時期は不明であるが、性格的には大溝の25'号溝跡に区画された3・4号建物跡や土坑群（SK64・65・69・70等）と関連する井戸跡と判断され、堆積状況から井戸払いが行われた可能性が高い。（井）

74号土坑 SK74（図24・25, 写真24・48）

本遺構は調査区南側のZ-9グリッドに位置する。遺構は北西へ緩やかに傾斜する標高175.60mの比較的遺構が集中する地点に所在する。検出面はLⅠ直下のLV上面で、75号土坑や37号溝跡と重複し、本遺構が最も新しい。また、同一地点で重複する遺構が検出されたため、上位の新しい土坑を74a号、下位の古い土坑を74b号と呼称した。

74a号土坑 本遺構の堆積土は10層に分層され、LVブロック・炭化物を含む黒褐色系の土層である。基本的には中央がレンズ状に窪む壁際からの自然堆積と判断されるが、黄褐色粘質土であるℓ9は比較的まとまった堆積状況を呈している。

平面形はほぼ円形を呈し、規模は開口部径1.2mを測る。周壁は上位でやや広がり、下位は一部オーバーハングしている部分もあるが底面から急に立ち上がる。底面はやや中央が窪むがほぼ平坦である。検出面からの深さは90cmである。

74b号土坑 本遺構は74a号土坑底面で検出した。遺構内堆積土は3層に分層され、中央がレンズ状に窪む壁際からの自然堆積と判断される。

平面形はほぼ円形を呈し、規模は開口部径70cmを測る。周壁は開口部付近でやや広がるが、底面

第2章 遺構と遺物

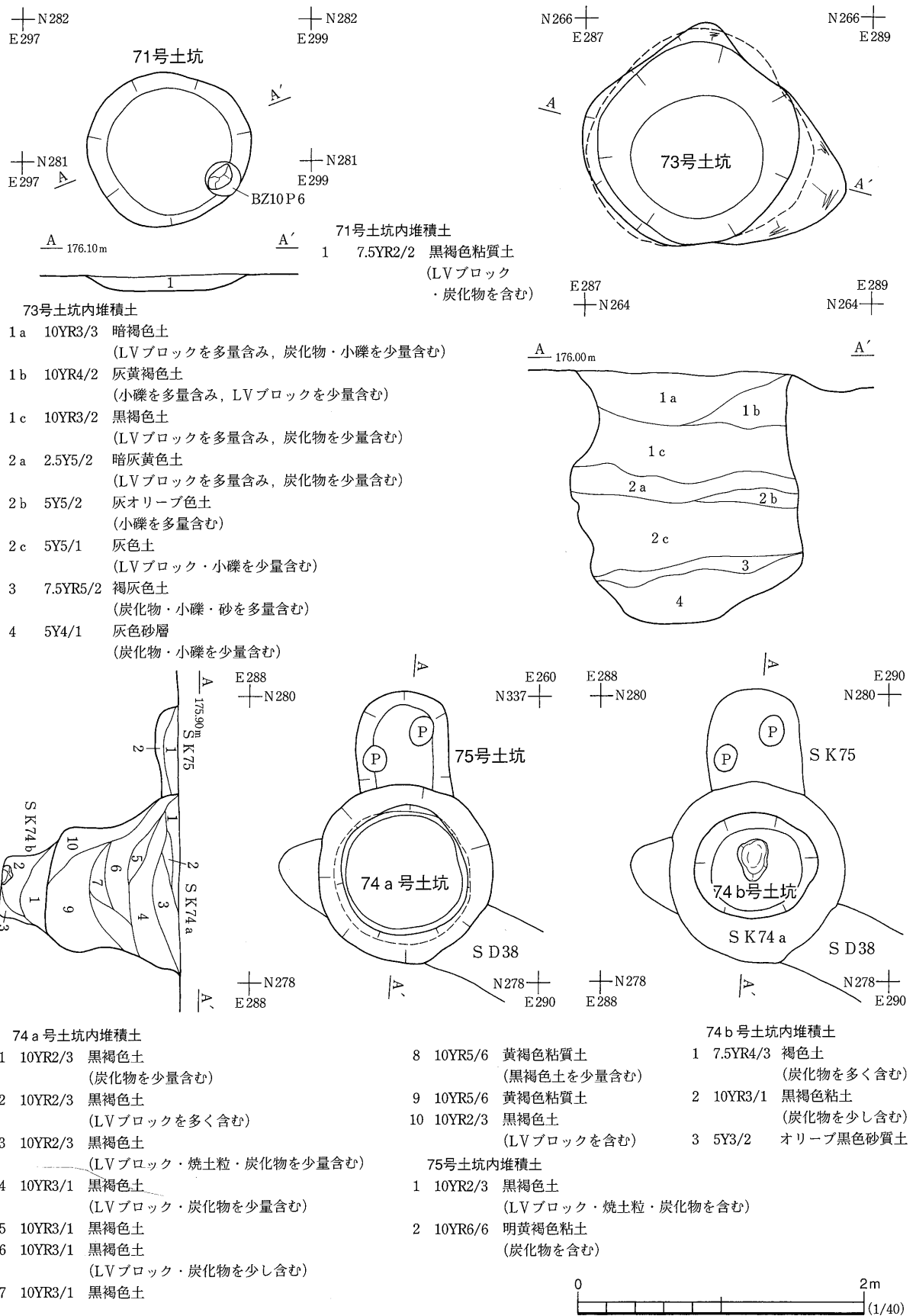


図24 71・73～75号土坑

から急に立ち上がる。床面はLⅦの砂礫層まで掘り込んで造られ、底面ほぼ中央には28cm程の礫が認められた。深さは、74a号土坑底面から約40cm、74a号土坑検出面からは125cmを測る。

本遺構内からは約250点の遺物が出土した。74b号土坑内から縄文後・晩期の資料、74a号土坑内から土師器・かわらけが多く出土しているが、すべて細片で摩滅が著しく、土器の器種や特徴、時期比定できたものは極僅かであった。比較的遺存状態が良い74b号土坑出土遺物6点を図25-9～14に掲載した。土器の表面が剥落しているが、9・10には釘状、11には小突帯が加えられた口縁部片で、11・12には横位沈線が施されている。13・14は粗製の胴部片で、14には網目状捺糸文が施されている。9～13は縄文後期末葉の新地式期頃、14は縄文晩期大洞C2式期頃の所産であろう。

遺構の性格は不明であるが、所属時期は出土遺物や重複関係から判断して、75号土坑・37号溝跡より新しい74a号土坑は古代～中世頃、74b号土坑は縄文時代の所産と考えられる。(井)

75号土坑 SK75 (図24)

本遺構は調査区南側のZ-9グリッドに位置する。遺構は北西へ緩やかに傾斜する標高175.60mの比較的遺構が集中する地点に所在する。検出面はLⅠ直下のLⅤ上面で、74号土坑や小穴と重複し、本遺構が最も古い。隣接して4号建物跡や2号性格不明遺構が所在する。遺構内堆積土は2層に分層され、いずれも流れ込みによる自然堆積と判断される。

平面形は楕円形を呈するが、南半は74号土坑に切られているため遺存していない。遺存する規模は南北軸・東西軸共に65cm程である。周壁は底面から急に立ち上がり、底面は凹凸がある。検出面からの深さは最深部で18cmである。

本土坑内からは縄文土器や土師器が約50点出土した。比較的縄文土器が多いが、すべて細片で摩滅が著しいため図示できなかった。本遺構の詳細は不明であるが、所属時期は重複関係や出土遺物から中世以前の所産と判断され、74b号土坑や2号性格不明遺構との関連性が指摘される。(井)

76号土坑 SK76 (図25, 写真24)

本土坑は調査区南側の西境、X-9グリッドに位置する。周囲は旧河川が所在する北西側へ緩やかに下る地形を呈しており、遺構はLⅤ上面で検出した。43・51号溝跡と重複しており、いずれの溝跡にも壊されていることから、本遺構が最も古い。遺構内堆積土は8層に分層できた。堆積状況からℓ7・8が周壁の崩落土、その他は周辺からの自然流入土と判断した。

平面形は楕円形を呈し、規模は遺存部の上端で計測すると、長軸1.42m、短軸1.02mを測る。周壁は底面からほぼ垂直に近い急角度で立ち上がり、中位程度から上端にかけては傾斜を緩めて立ち上がっている。なお、遺構の北東および南西側は、大規模な崩れが生じている。周壁底面はほぼ平坦で、深さは最深部で72cmを測る。

本土坑内からは、上層のℓ1～4から土師器7点が出土した。いずれの資料も摩滅が顕著で遺物の時期および特徴を特定しうる資料は認められなかった。

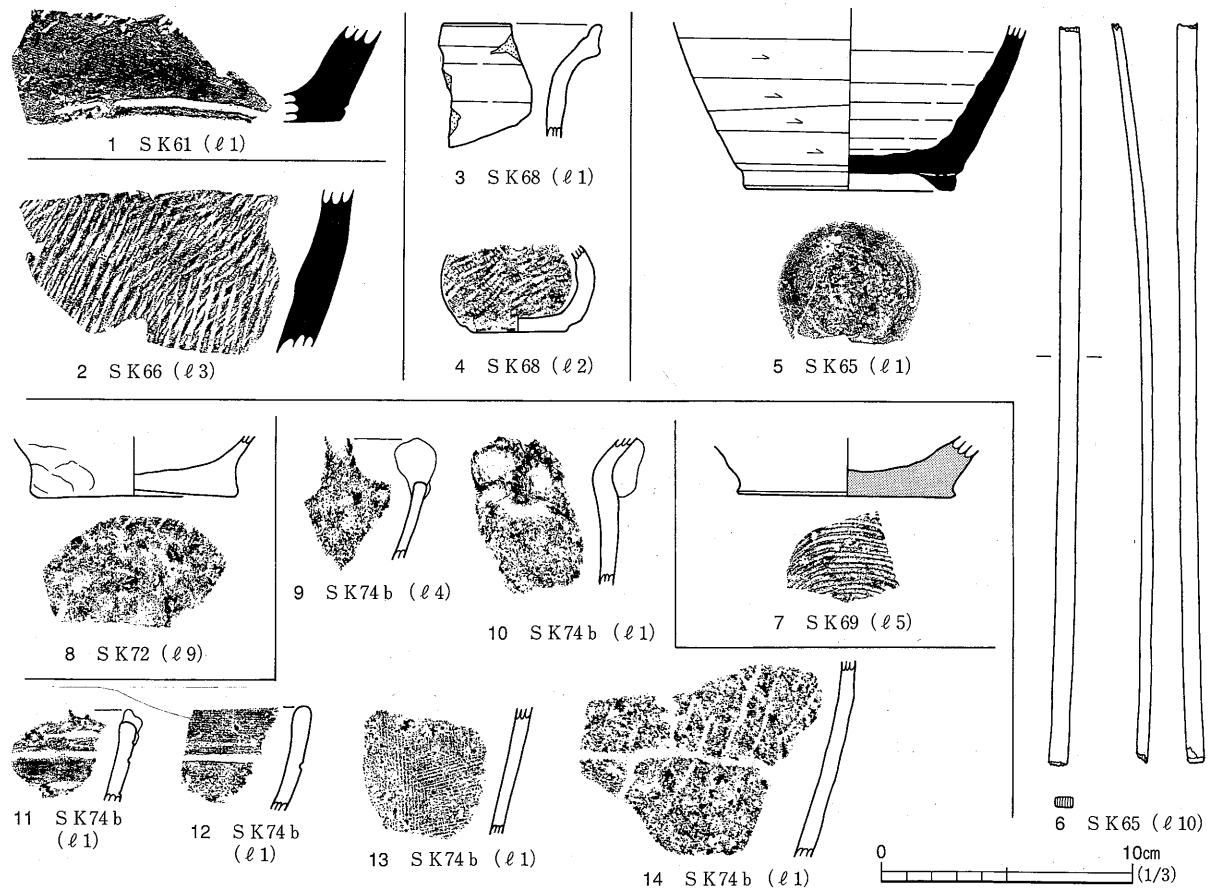
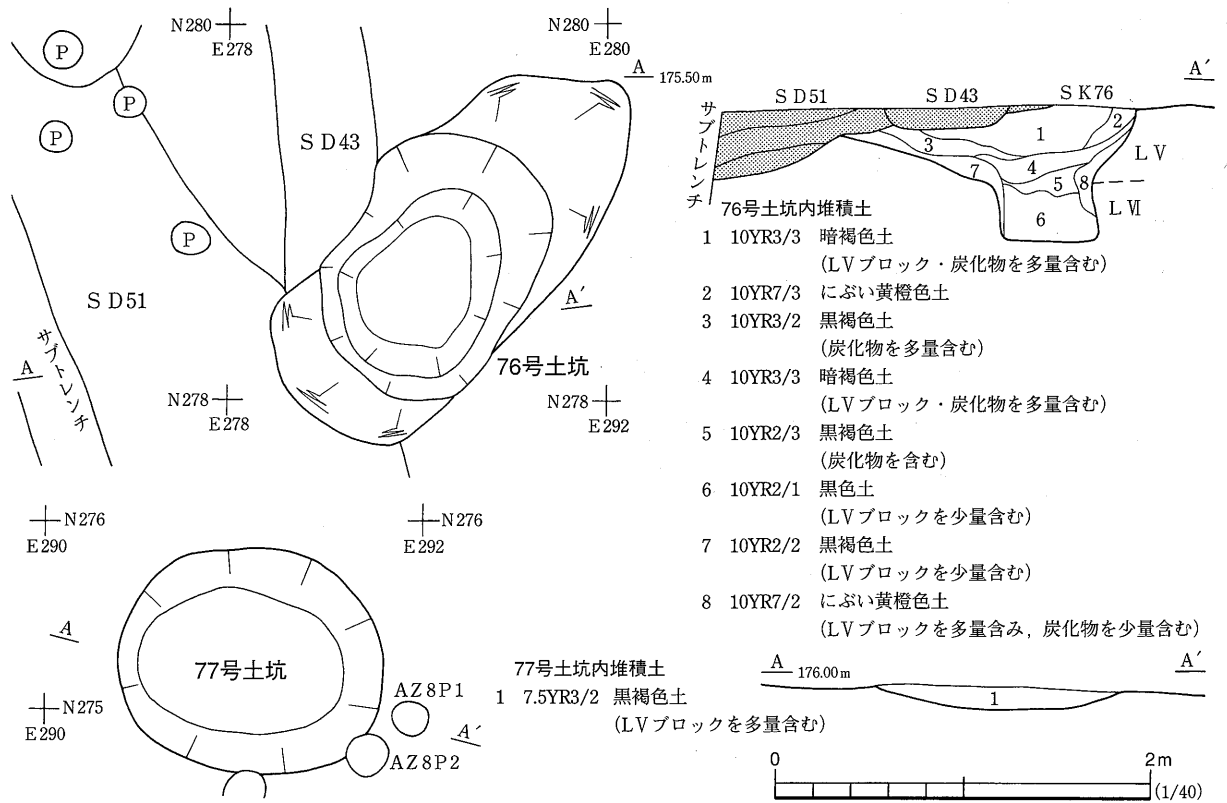


図25 76・77号土坑，土坑出土遺物

本遺構の所属時期は、古代末～中世頃の所産と考えられる43号溝跡に壊されていることから、少なくとも中世以前の所産であろう。(笠井)

77号土坑 SK77 (図25, 写真24)

本土坑は調査区南側のAZ-8・9グリッドに位置する。本遺構は標高175.90mの平坦地に位置し、LV上面で検出した。付近には小穴群が多く認められ、AZ8P2・4に切られている。遺構内堆積土はLVブロックを多く含む単層で、人為的に埋め戻された可能性が高い。

平面形はほぼ楕円形を呈し、規模は長軸1.43mである。周壁は底面から緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦で、検出面からの深さは14cmほどである。

本土坑内からは17点ほど遺物が出土したが、細片で摩滅が著しいため、詳細は不明である。従って、本遺構の明確な所属時期・性格等は判断し得ない。(井)

第5節 溝 跡

今回の調査で検出された溝跡は計24条である。1次調査分の35条と塩川町(1・2次)調査部分の18条を含めると総計77条となる。これらの溝跡は、1次調査報告(『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告2』)や前章・本章第1節で述べたように、連続する同一の遺構でありながら別番号を付したもののや、削平の影響や調査区外に延びるものなど、全体の形状や規模が明確に把握できないものも多かった。そのため、本来は57条ほどの検出数と考えられるが、遺物を多く含む自然流跡もしくは旧河川跡として取り扱ったものを除くと、人工的な区画溝等とする遺構は、35条ほどと考えられる。なお、今回の調査では、隣接して調査が実施された1次調査および塩川町検出遺構(大型排水路跡)と連続する可能性が高い溝跡については、従来の遺構番号右上に「´」を付けて対応した。

報告にあたっては、隣接する溝跡や規模・堆積土等が類似するものなど、関連性のある溝跡はまとめて報告した。また、遺構の性格上、平面図と土層断面図は異なる縮尺で便宜的に掲載し、溝跡の分布状況や位置関係等については図6～8、遺物の内訳は表7を参照願いたい。

4´号溝跡 SD04´ (図26・27, 写真25・26・49・61)

本遺構は塩川町第4号溝跡と連続する溝跡で、調査区北側のS～U-22グリッドに位置する。遺構が構築された周辺は標高175.90m前後の平坦地であり、ほぼ東西方向に直線的に検出された。遺構の正確な全体規模は調査区西側へ更に延伸するため不明である。検出面はLIおよび盛土直下のLV上面であるが、南側では9´・12´号溝跡覆土上位である。調査当初、9´・12´号溝跡と本遺構を同一遺構と誤認したため、南側プランを一部掘り過ぎてしまった部分もある。重複関係は6´・7´・9´・12´・40・45号溝跡と新旧関係にあり、本遺構が最も新しい。遺構内堆積土は大きく3層に分層され、いずれも炭化物・小礫を含む褐色系の堆積土で、自然流入土と判断される。

調査区内で検出できた規模は東西約5.2mである。溝幅は西側調査区境で約0.65m、中央付近で約1m、東側調査区境で1.2mを測り、東側ほど広い。周壁は上端付近でやや緩やかに広がるが、下位は垂直気味に急に立ち上がる。底面は西側から東側へ向かって緩く傾斜し、断面形は鍋底状を呈する。検出面からの深さは東ほどやや深く20~30cm前後を測り、高低差は最大で20cmほどである。底面は部分的に片側が窪んでおり、溝幅内で流水経路が変化していたと判断される。

遺物はかわらけ・陶磁器類など計75点が出土した。うち、比較的遺存状態が良いかわらけ4点、貿易陶磁器4点、須恵器3点、中世陶器2点、石製品1点、木製品1点について図27に掲載した。

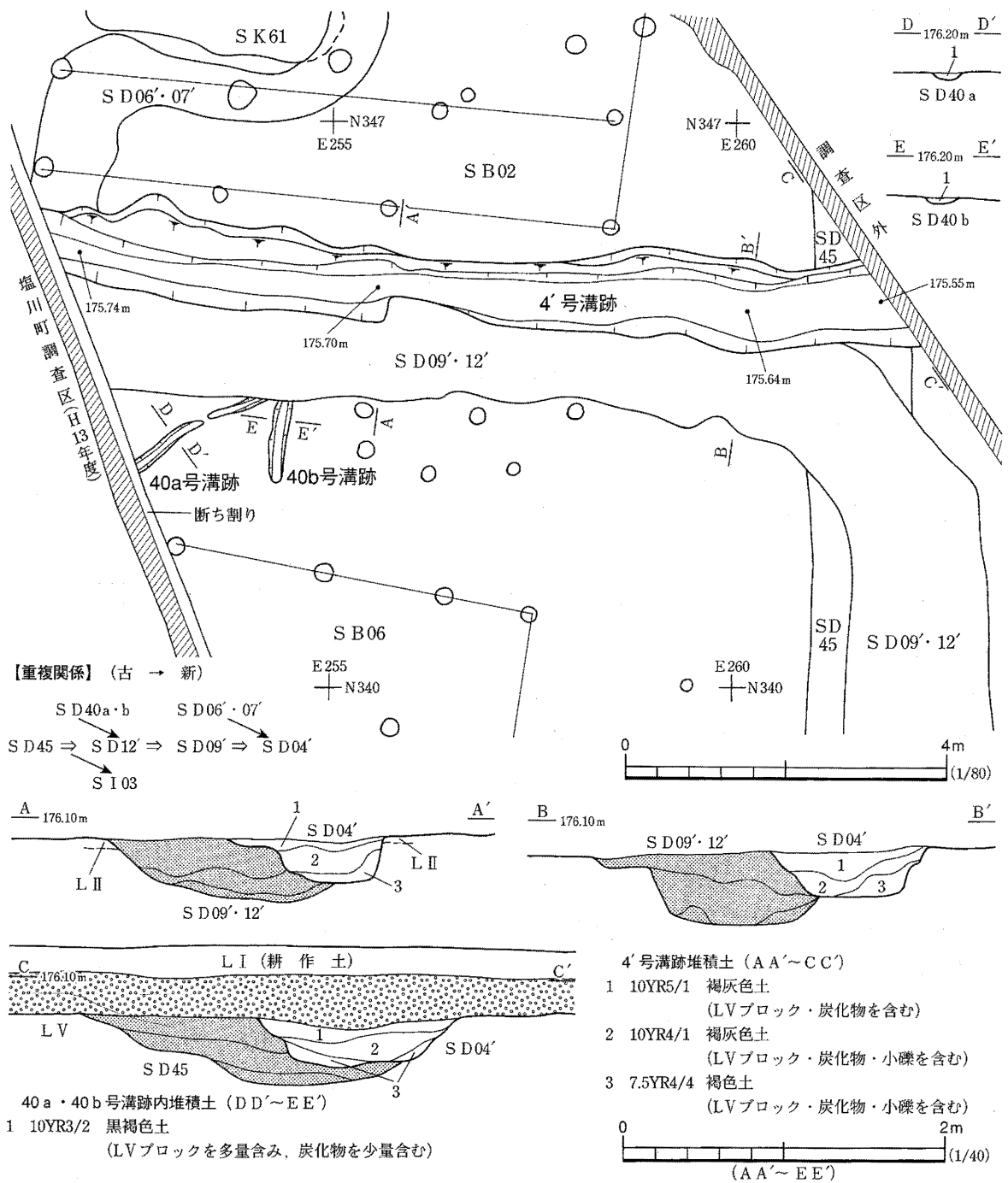


図26 4'・40a・40b号溝跡

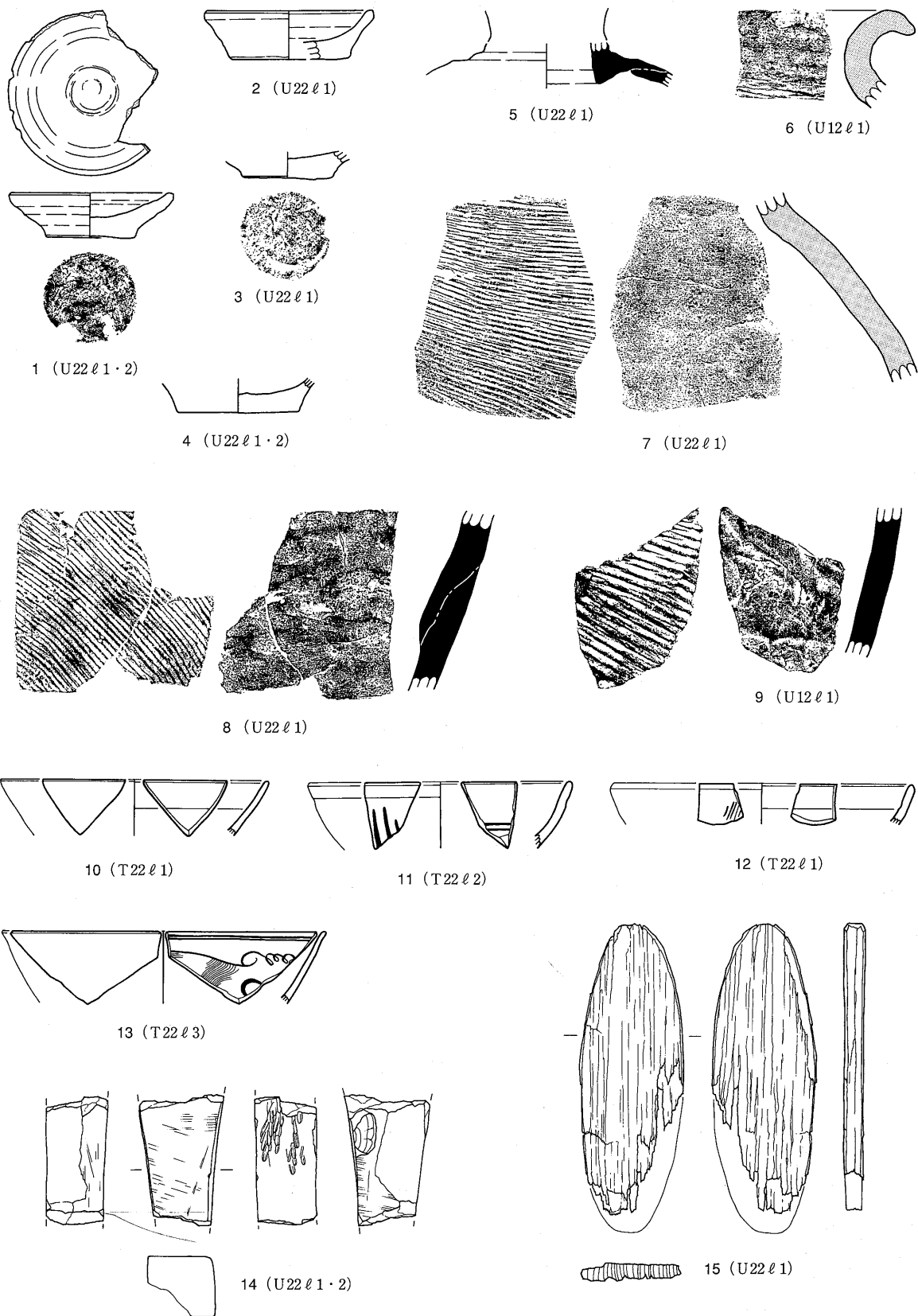


图27 4'号沟迹出土遗物

第2章 遺構と遺物

また、塩川町調査第4号溝跡内からは、ロクロ土師器や須恵器、かわらけ・中世陶器・貿易陶磁器等60点ほどが流れ込みにより出土している。

1～4はロクロ成形による底部回転糸切り・無調整のかわらけ小皿である。いずれも底部付近の器厚が比較的厚く、器高が2cm前後と低い器形である。1・2の口径は共に8.4cmほどであるが、底径は1が4.5cm、2が6cmを測る。器形的に1は杯形に近く、見込み中央部分は凸状となる。

5・8・9は須恵器片で、5は長頸瓶の頸部片、8・9は甕の胴部片である。5の頸部下端にはリング状凸帯と頸部と体部の一段接合が認められる。6・7は珠洲系中世陶器甕で、外面に右斜め方向へのタタキ痕、内面に指頭状のナデ調整と布目圧痕が認められる。

10～13は貿易陶磁器で、10は白磁、11～13は青磁である。10は内外面白色系の釉が施釉された白磁碗の口縁部片である。11・12は同安系青磁碗の口縁部片と思われる。12の内面体部上半には一条の沈線が巡り、外面には櫛描文が施されている。11の内面体部中央には二条の沈線、外面口縁部には一条の沈線が巡り、その下位に櫛描文が施されている。13の内面には劃花文が施文されている。胎土はいずれも灰白色を呈し緻密であり、緑色釉が施釉されているが、11は釉調が悪い。

14は台形状を呈する砥石の欠損品である。器表面には使用時の擦痕が認められ、石質は流紋岩である。15は楕円形状を呈する用途不明の木製品で、木取りは柾目、材質はスギである。

本遺構は塩川町調査第4号溝跡（SD04>SD09・10・12・16）と連続する溝跡で、東西にほぼ直線的に検出された。全体の規模は不明であるが、所属時期は重複関係や出土遺物から判断して、12世紀後半～13世紀頃と考えられ、性格的には屋敷地等を区画する溝跡の可能性が高い。（井）

6'・7'号溝跡 SD06'・07'（図28、写真27・28）

本遺構は調査区北西側のS・T-23・24グリッドに位置している。周辺は平坦な地形をしており、検出面は中世以降の基盤層であるLⅡ上面である。2号建物跡、61号土坑と重複し、切り合い関係から、61号土坑より新しく、2号建物跡よりも古い。遺構内堆積土は遺構の北東側（B-B'）、中央（C-C'）、南西側（D-D'）の3箇所を観察した。北東側で2層、南西側で5層、最も層の厚い中央では6層に分層できた。下層（ℓ4～6）は黒褐色を基調とし、上層（ℓ1～3）は褐灰色等の若干明るい色調の粘質土が堆積していた。各層には炭化物粒・LVブロック・焼土粒等が混入している。堆積状況から自然流入土と判断した。

溝跡は東西南北を意識しつつ、クランク状に2箇所ではほぼ直角に折れ曲がって延びている。検出部分での規模は北東側で約5m、中央で約3m、南西側で1.6mを測り、計9.6mである。また、北東側の屈曲部から1.5mほど北に行った部分で0.5mほど途切れている。溝幅はこの途切れた部分を境に北側が28～32cmと狭く、南側および中央以西では50～110cmと広い。周壁は南西側から中央にかけて、断面V字状であり、北東側は緩やかな播鉢状を呈している。底面は凹凸が顕著で、概ね北東から南西へ傾斜している。底面中央には小穴が並んでおり、特に屈曲部分の小穴は規模が大きい。溝跡底面の比高差は20cmほどである。

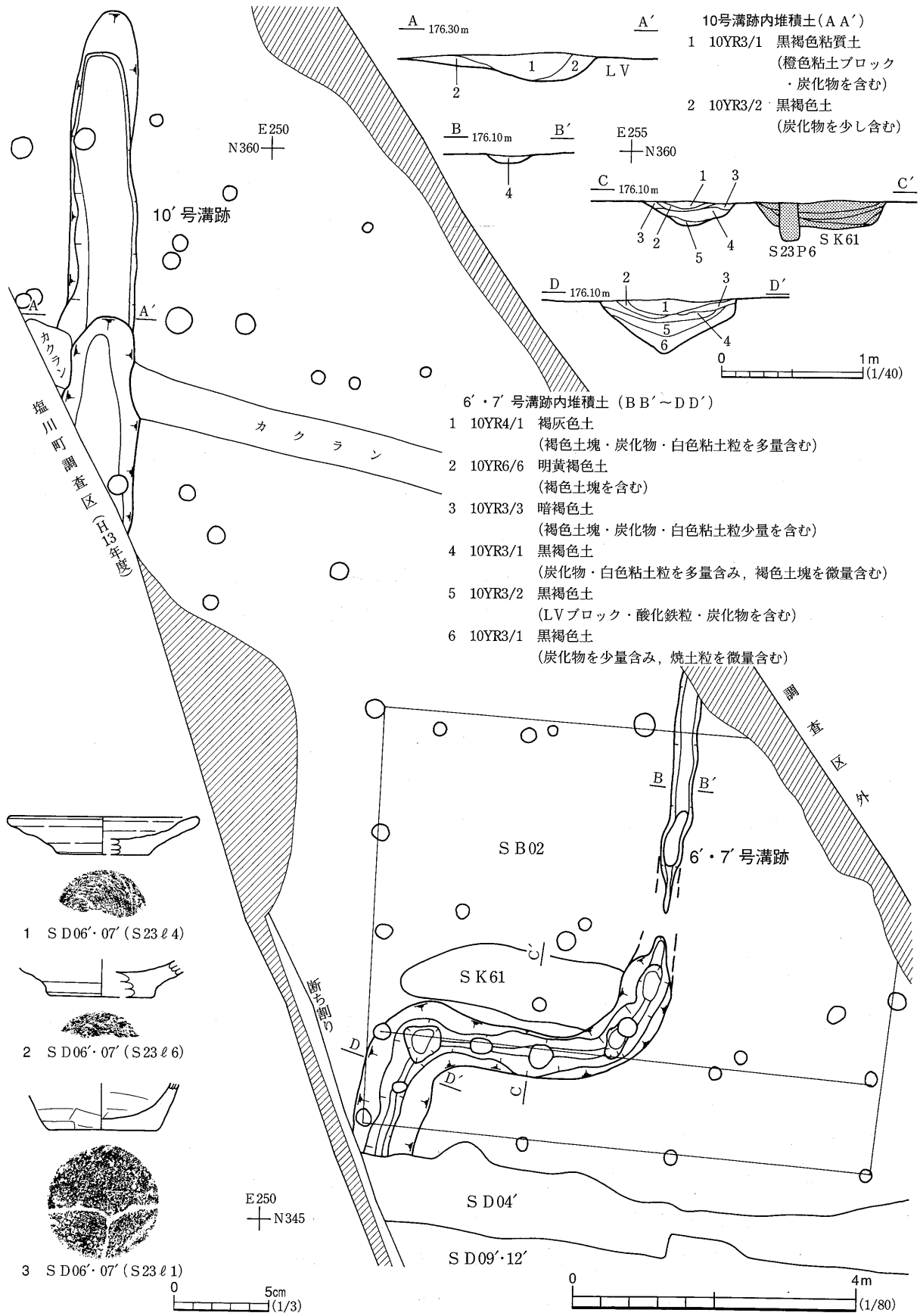


図28 6'・7'・10号溝跡, 出土遺物

第2章 遺構と遺物

本遺構から出土した遺物はかわらけ・土師器類が40点程で、その他に焼石や被熱粘土塊が出土している。大半が細片で摩滅が著しいため、図示・掲載できたのは3点である。図28-1・2はロクロ成形による底部回転糸切り・無調整のかわらけであり、1は小皿、2は杯あるいは碗の底部片である。3は器形的には小鉢状を呈し、体部から底部にかけてヘラケズリ調整が施されている。

本溝跡は遺構配置や規模、堆積土状況から、塩川町調査区（大型排水路）で検出された第6・7号溝跡と連続するものと判断した。本遺構の明確な所属時期・性格は不明であるが、出土遺物および重複する遺構から判断して、12世紀～13世紀頃の所産と考えている。（笠井）

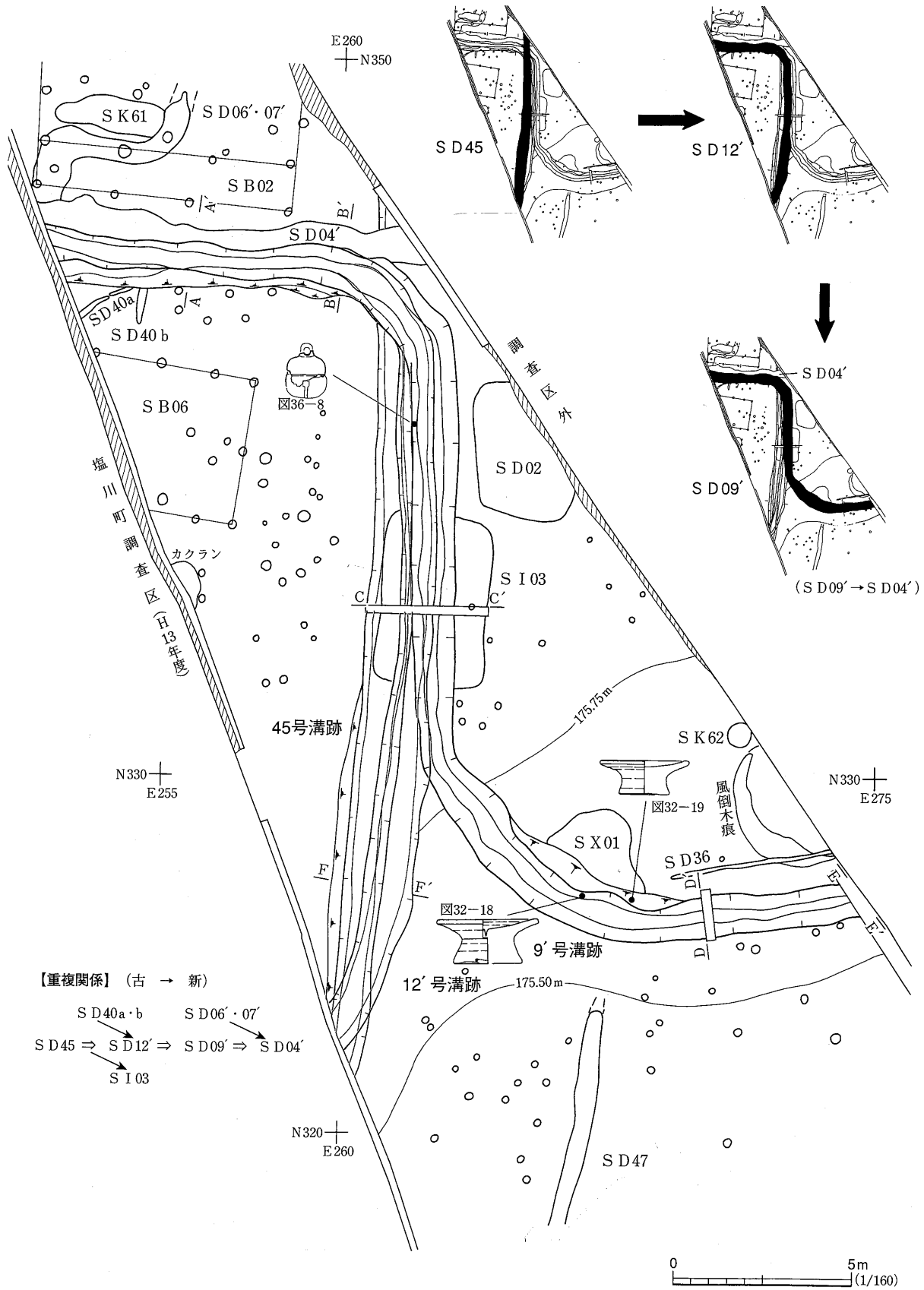
9'・12'・45号溝跡 S D09'・12'・45（図29～30、写真26・29～33）

本遺構群は、調査区北側のS～W-18～22グリッド範囲内のほぼ同一箇所を確認された溝跡である。塩川町第9・12号溝跡と連続する同一遺構と判断した溝跡を各々9'・12'号溝跡とし、これと重複する新規の溝跡を45号溝跡と呼称した。溝跡群は標高175.90m前後の南側に向かって緩やかに傾斜する平坦地に位置し、調査区内では9'号溝跡はクランク状、12'号溝跡はL字状、45号溝跡は直線的に検出された。いずれも調査区外に延びる溝跡のため、正確な全体規模は不明である。検出面はL Iおよび盛土直下のL II上面である。重複関係は図29に示したが、大きくS D45⇒S D12'⇒S D09'⇒S D04'の順で新しくなる。また、3号堅穴状遺構が45号溝跡より新しく、9'・12'号溝跡より古い新旧関係にある。以下、各溝跡の特徴を記す。

9'号溝跡 本溝跡はクランク状に検出されており、南北・東西軸が緯度・経度にほぼ沿って構築されている。遺構内堆積土は大きく3層に分層され、いずれも炭化物・小礫・鉄分を多く含む褐色系の堆積土で、壁際からの流れ込みによる自然流入と判断される。北側（S～U-22）および中央付近（U-20～22）では同一地点で重複する12'号溝跡と類似する堆積状況であったため、出土遺物の一部は9'・12'号溝跡として取り上げている。検出できた規模は、北側東西で約9m、南北約15m、南側東西が約10mを測る。溝幅は北側（A A'・B B'）で1.1～1.5m、中央付近（C C'）で約1.4m、南東調査区境（E E'）で約1.1mを測る。周壁は上端付近でやや緩やかに広がるが、下位は垂直気味に急に立ち上がる。底面は西側から東側へ向かって緩く傾斜し、断面形は鍋底状を呈する。検出面からの深さは22～35cmを測り、高低差は最大で20cmほどである。底面は部分的に中央が窪んでいるが、ほぼ平坦である。

12'号溝跡 本溝跡はL字状に検出され、南北・東西軸ともに緯度・経度にほぼ沿うように構築されている。遺構内堆積土は3層に分層され、炭化物・小礫・鉄分を多く含む褐色系の堆積土で、9'号溝跡と酷似している。いずれも壁際からの流れ込みによる自然流入と判断した。

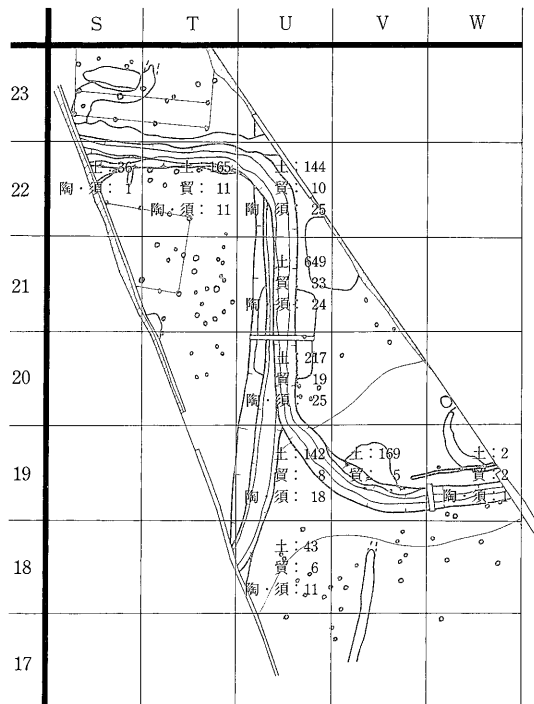
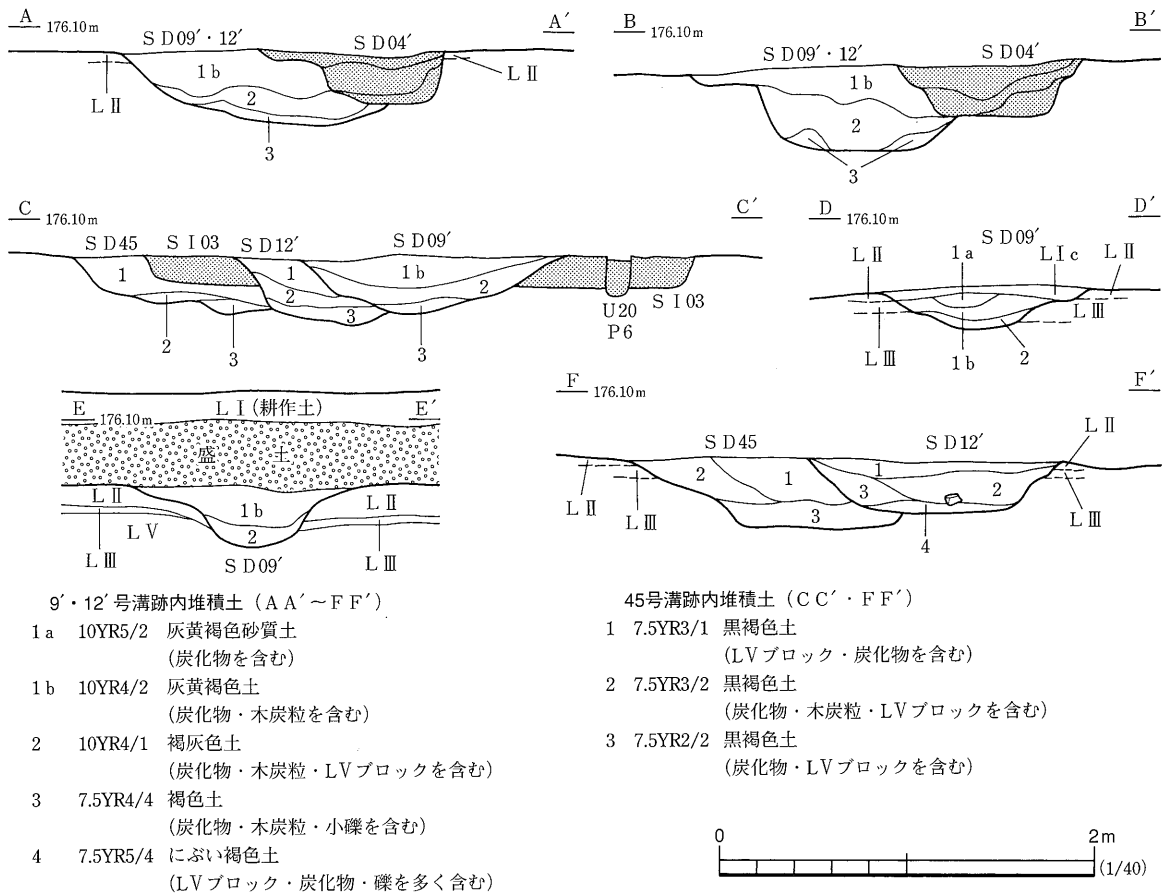
検出できた規模は、北側東西で約9m、南北約21mを測り、溝幅は1.1～1.5mである。周壁は緩やかに広がる播鉢状を呈し、底面はやや凹凸はあるが平坦で、北側から南側へ向かって緩く傾斜する。検出面からの深さは北東コーナーおよび中央付近では9'号溝跡より深く、平均して30～40cm前後を測る。溝跡底面における北側と南側の高低差は最大で30cmほどである。



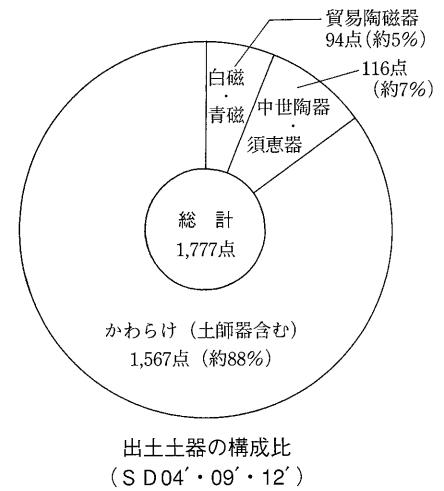
【重複関係】 (古 → 新)
 SD40a・b SD06'・07'
 SD45 ⇒ SD12' ⇒ SD09' ⇒ SD04'
 ↓
 SI03

図29 9'・12'・45号溝跡 (1)

第2章 遺構と遺物



グリッド別出土遺物点数 (S D 04'・09'・12')



【凡 例】

- 土：かわらけ (土師器) 等
- 質：貿易陶磁器 (白磁・青磁)
- 陶・須：中世陶器 (須恵器系・瓷器系) および須恵器

図30 9'・12'・45号溝跡 (2)

45号溝跡 本溝跡は南北にほぼ直線的に検出された。遺構内堆積土は3層に分層され、いずれも炭化物・L Vブロックを含む黒褐色系の堆積土で、流れ込みによる自然流入と判断した。

検出できた規模は南北約23m、溝幅1～1.5mほどである。周壁は上端付近で緩やかに広がるが、下位は垂直気味に立ち上がる。底面は北側から南側へ向かって緩く傾斜し、断面形は鍋底状を呈する。検出面からの深さは30～40cm前後を測り、高低差は25cmほどである。底面は部分的に窪んでいるが、ほぼ平坦である。

遺 物 遺物は9'・12'号溝跡から1,755点、45号溝跡から225点の総数約1,980点が出土している。内訳はかわらけ・土師器類約1,700点、須恵器約100点、中世陶器44点、貿易陶磁器約80点、石器類23点、木質遺物6点のほか、銅製鈴1点、種子類5点、羽口片3点等となる(表7)。このうち、遺存状態が良好であった9'・12'号溝跡出土遺物を中心に図31～36に掲載した。また、本溝跡と重複し、ほぼ同時期である4'号溝跡も含めたグリッド別出土点数と構成比を図30下段に掲載した。以下、9'・12'号溝跡と45号溝跡出土遺物について明記する。

9'・12'号溝跡出土遺物(図31～36、写真50～53・60・61、表7)

9'・12'号溝跡からは、かわらけ約1,500点、陶磁器類約120点など古代末～中世の遺物が多く出土した。これらの遺物の大半は、底面近くに堆積する3からの出土であったが、意図的な廃棄・投棄等は認められず、流れ込みにより散在して出土している。

かわらけ 図31・32はロクロ成形による回転糸切り・無調整のかわらけで、図31-27のみ非ロクロ成形である。器種構成は、椀・杯(図31-28～36)・小皿(図31-1～22)・柱状高台皿(図32-18～23)等がある。細片資料が大半であったが、器種選別できたものは椀・杯が112点、小皿が103点、柱状高台皿が27点で、椀・杯が多い傾向がある。概ね4.1:3.8:1の構成比を示し、他の遺構内出土のかわらけ器種構成とほぼ同様な傾向が窺える。

図31-1～22の小皿は、いずれも底部付近の器厚が厚く、器高が2.0cm前後～2.5cmと低い器形である。形態的には、口径に対し底径がやや大きく断面長方形の箱型を呈するもの(底径/口径比:0.7～0.8前後)と、底径が比較的小さい小型杯を呈するもの(21・22;底径/口径比:0.48前後)がある。前者には体部が短く外反するもの(1～6・9・17)、やや内湾状となるもの(7・14)、器厚がやや厚いもの(14・17・18)などがある。4・6～8・11～13の口縁端部はやや上方へ摘み上げられており、比較的右回転成形が多い。2・12・13・17・23・25・26の見込み部分には渦巻き状のケズリ・指頭圧痕状のナデ調整が施され、13・17の中央は凸状となる。底面の板状圧痕・見込みのナデ調整が明瞭に残るものは殆ど認められていない。図31-27は底部欠損のかわらけで、1次・2次調査を含めて非ロクロ成形の資料は本例のみである。体部上位の屈曲が強く、下位は内湾し皿状を呈する。外面はナデ・ケズリ調整が施されており、器厚は厚い。

図31-28～36は椀あるいは杯状を呈し、器厚が比較的厚い。全体の形状が把握できたのは28のみで、口径14.8cm、底径6.8cm、器高5.1cmを測る。内外面の調整は摩滅が著しく判然としないが、28の内面見込み部分には回転状のナデ調整、28～30の体部外面には1段あるいは2段のケズリ調整、

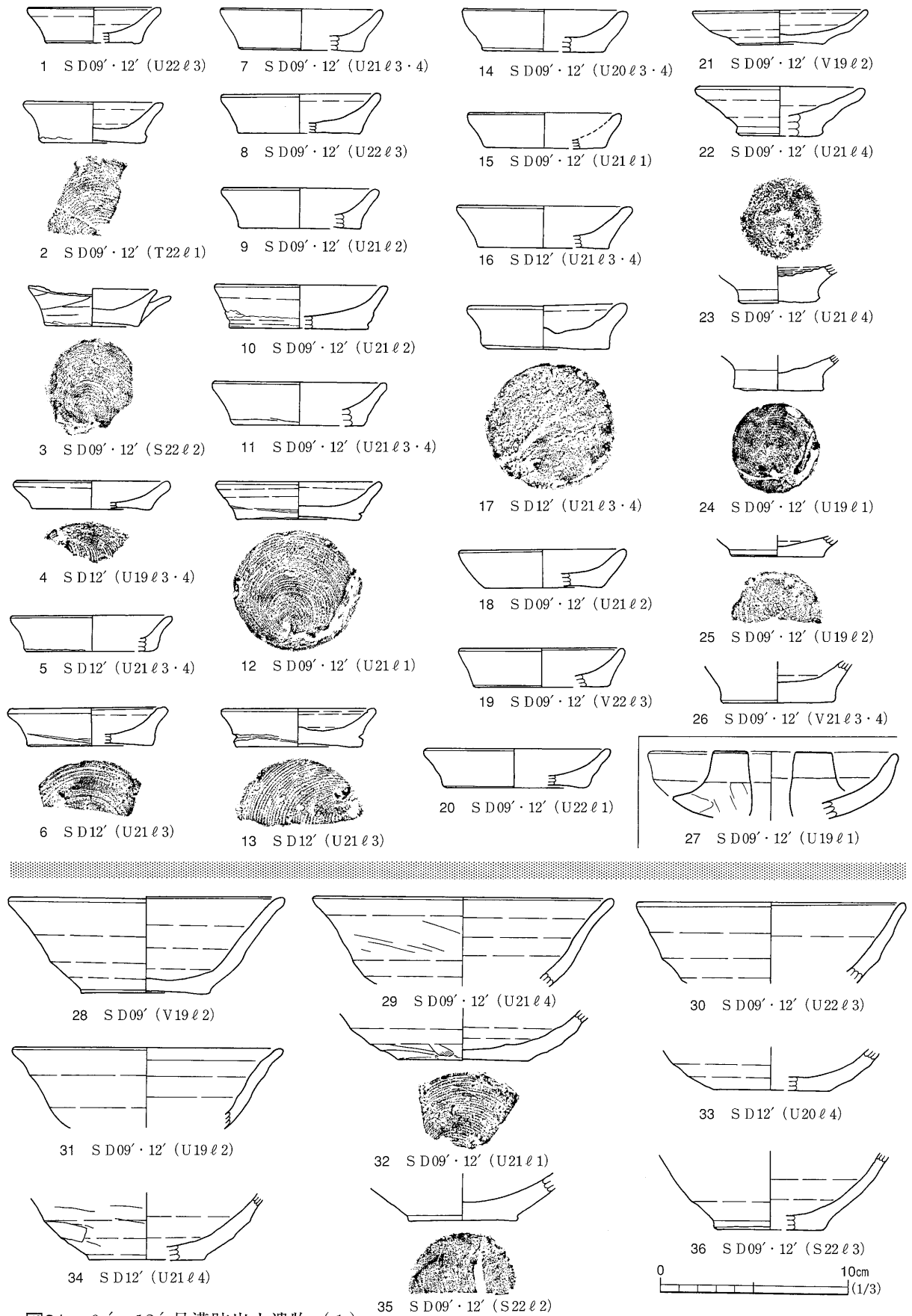


図31 9'・12'号溝跡出土遺物(1)

33・34には段のナデ消しによる外面平滑が僅かに認められる。

図31-23~26は小型杯あるいは皿，図32-1~14・16は椀・杯，15・17は器壁が厚く器形的にやや大型の底部資料と思われる。図32-2・5の内面見込み部分には渦巻き状のケズリ・指頭圧痕状のナデ調整が施され，中央は凸状となる。

図32-18~22は柱状高台皿，23は高杯あるいは支脚資料と思われる。18~20は口径10.6cm前後，底径5.7~6.6cm，器高4.1~4.7cmを測り，法量・器形がほぼ類似する。18の上皿身中央には先端2mm程の角頭状の工具によって，深さ約6mmの盲穴が穿たれている。また，中央孔から上皿・側面には油煙状の煤跡が認められ，灯明皿として使用された可能性が高い。

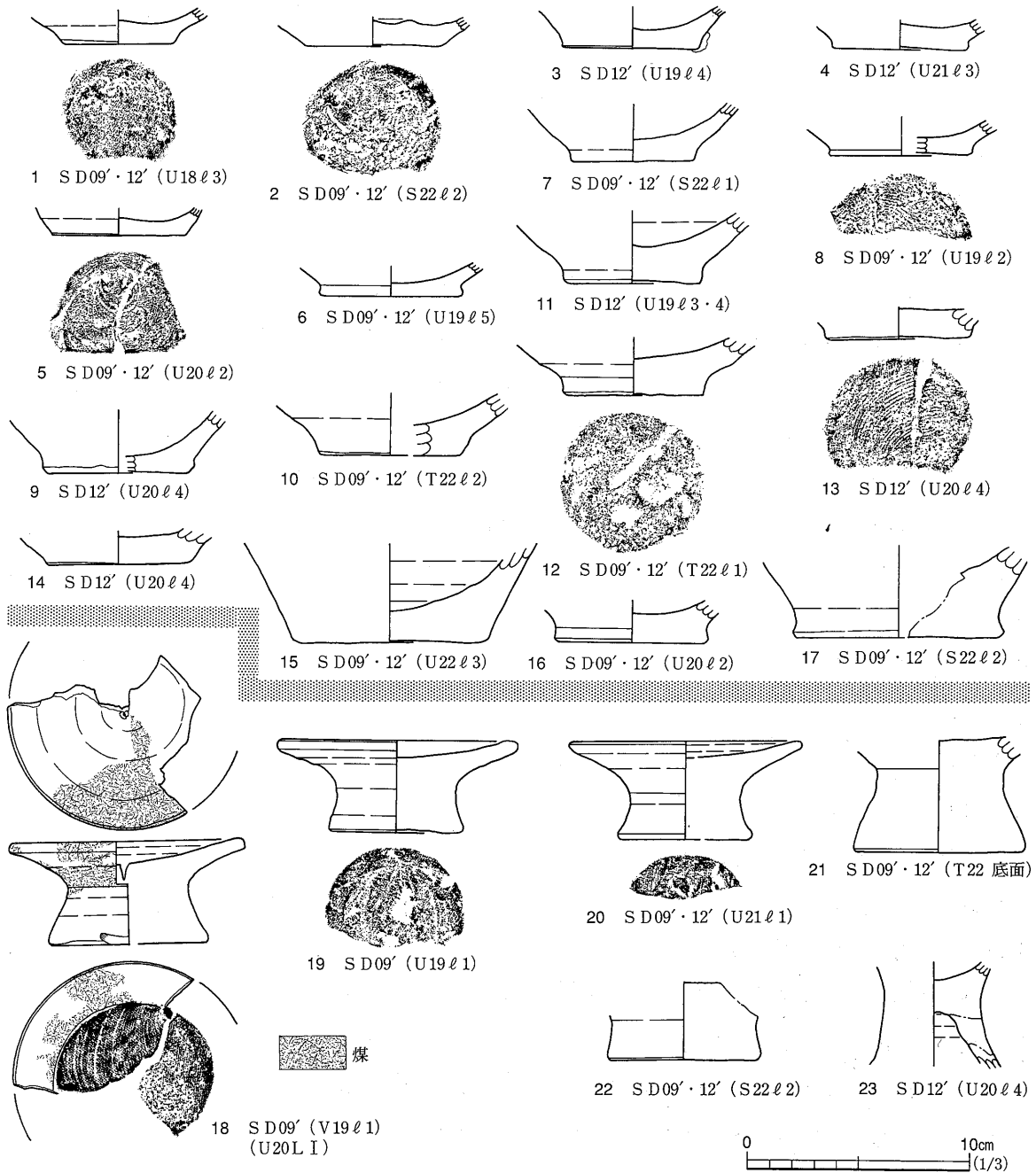


図32 9'・12'号溝跡出土遺物(2)

貿易陶磁器 貿易陶磁器は白磁58点、青磁20点ほど出土しており、白磁優勢である。全て破片資料のため、全体の器形を把握できたものはないが、比較的遺存状態の良好なものや希少な資料を図33に掲載した。器種構成は碗・皿類が主体となるが、希少な黄釉四耳壺や合子も出土している。

図33-1～20は白磁碗・皿の資料で、内面が無文（釉薬のみ）のものが多い傾向がある。胎土は緻密で灰白色を呈し、釉調は比較的良好で内外面に白色・黄白色系の釉が施釉されているが、二次被熱を受けて剥落しているもの（16）も僅かにある。1～6は玉縁状の口縁を有する白磁碗で、推定口径15cm前後の器形を呈する。2の外面部下位は露胎となる。7・8は口縁端部が短く外反する端反口縁、9～18は体部がやや内湾状となる器形を呈する。12・13の内面部中央には一条、10には二条、9の内面部上位と見込み近くには一条の沈線が巡る。18の内面には櫛描文、17の外面には3本沈線が認められる。19は高台から底部が露胎となる白磁碗の底部資料で、内面部下位に一条の沈線が巡り、見込み部分は釉が輪状に掻き取られている。20は内面見込み部分に段があり、底部露胎となる皿であろう。

21・22は青磁碗の破片資料で、21は同安窯系、22は龍線窯系の資料と思われる。内外面には褐色・緑色系の釉が施釉され、21の内面口縁部近くには一条の沈線、22の内面には蓮華状の劃花文が施文されている。

23・24は黄釉四耳壺の破片資料で、他に同一個体と思われる胴部資料が3点出土している。上胴肩部に貼付けられたブリッジ状の耳部には、二条の型押沈線が施されている。同一個体と思われる24の底径は11.8cmを測る。25は内外面に青白色釉が施釉された合子で、外面面部下位は露胎となる。外面には片彫調の鏤連弁文が施され、推定口径5.2cm、遺存高3.4cmを測る。

土師器・須恵器 図34-1は土師器高台付の底部資料、2～16は須恵器である。2は底部回転ヘラ切りの須恵器杯、3・4は長頸瓶の肩部片、5は甕の口縁部片である。6～8は瓶類の底部資料と思われ、6の高台部はやや潰れた台形状、8はヘラケズリが施された平底である。9～16は甕の胴部片である。外面には平行タタキ痕、内面には13が同心円状のアテ具痕、14はアテ具痕をナデ消している。

中世陶器 図35・図36-1～3は胎土・製作技法等から珠洲系中世陶器と判断され、44点出土した。胎土は青灰色を基調とし、比較的緻密で白色鉱物細粒を含むものが多い。器種構成はすべて破片資料のため明確に器形を把握できたものはないが、甕が主体となり、僅かに鉢がある。

図35-1・2は甕形土器の口頸部片、3は小型鉢形土器の底部資料、他は甕形土器の胴部資料と思われる。1の口縁部は舌端状に垂下する口縁形態を呈し、タタキ締め成形を施している。図35-4～14、図36-1～3の外面には条溝を刻んだ打圧具による右下がりのタタキ、内面は押圧具のアテ具痕をナデ消しているものが大半である。

その他 図36-4・5は砥石の欠損品である。共に長形状を呈し、器表面には整形痕と使用時の擦痕が認められる。石質は共に流紋岩である。8は銅製鈴で、鈴本体下位を欠損する。表面には金銅装・彫刻は認められず、鈴本体上下と鈕の接合方法は判然としない。タタキ絞り上げによる1

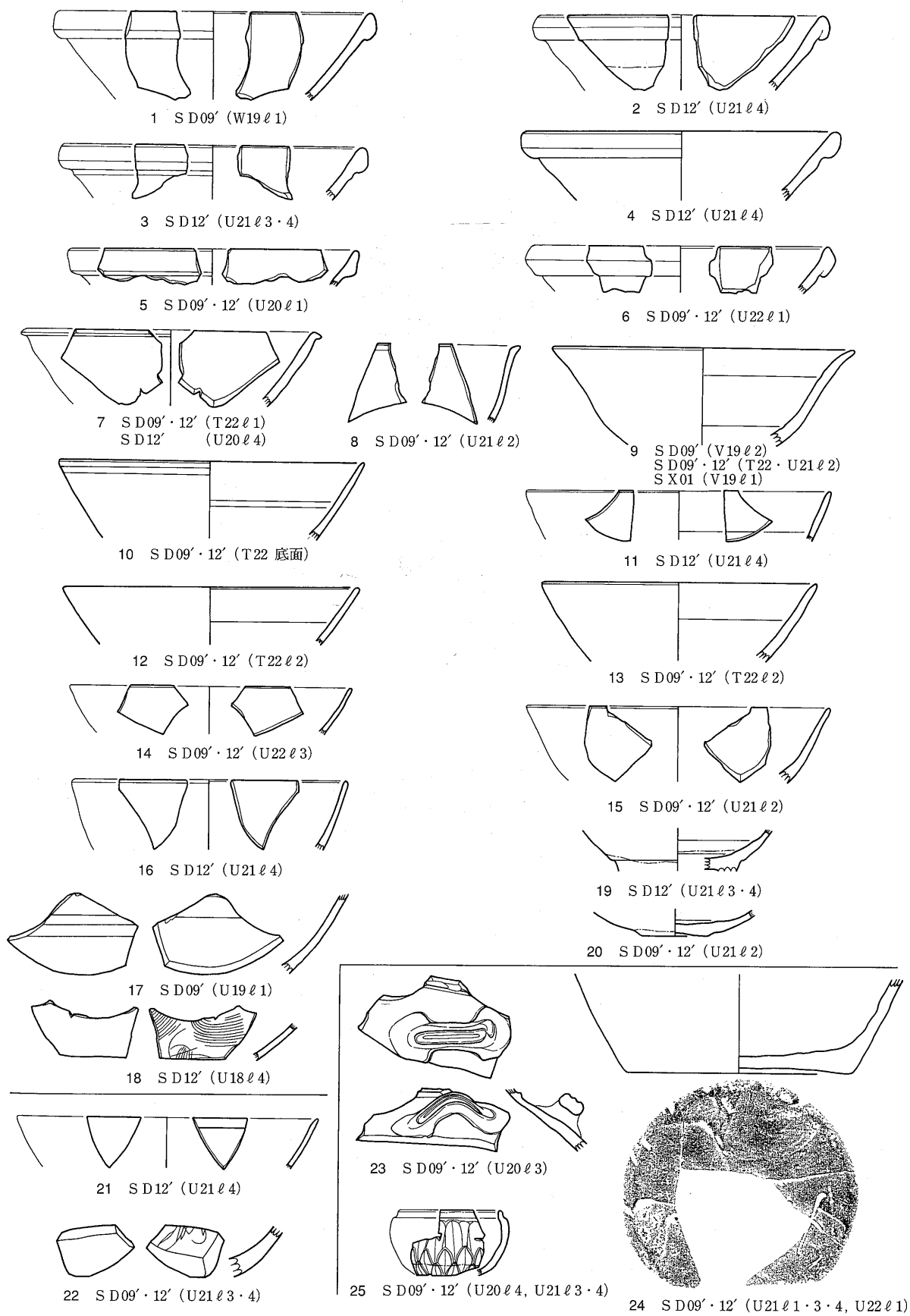


图33 9'·12'号沟迹出土遗物(3)

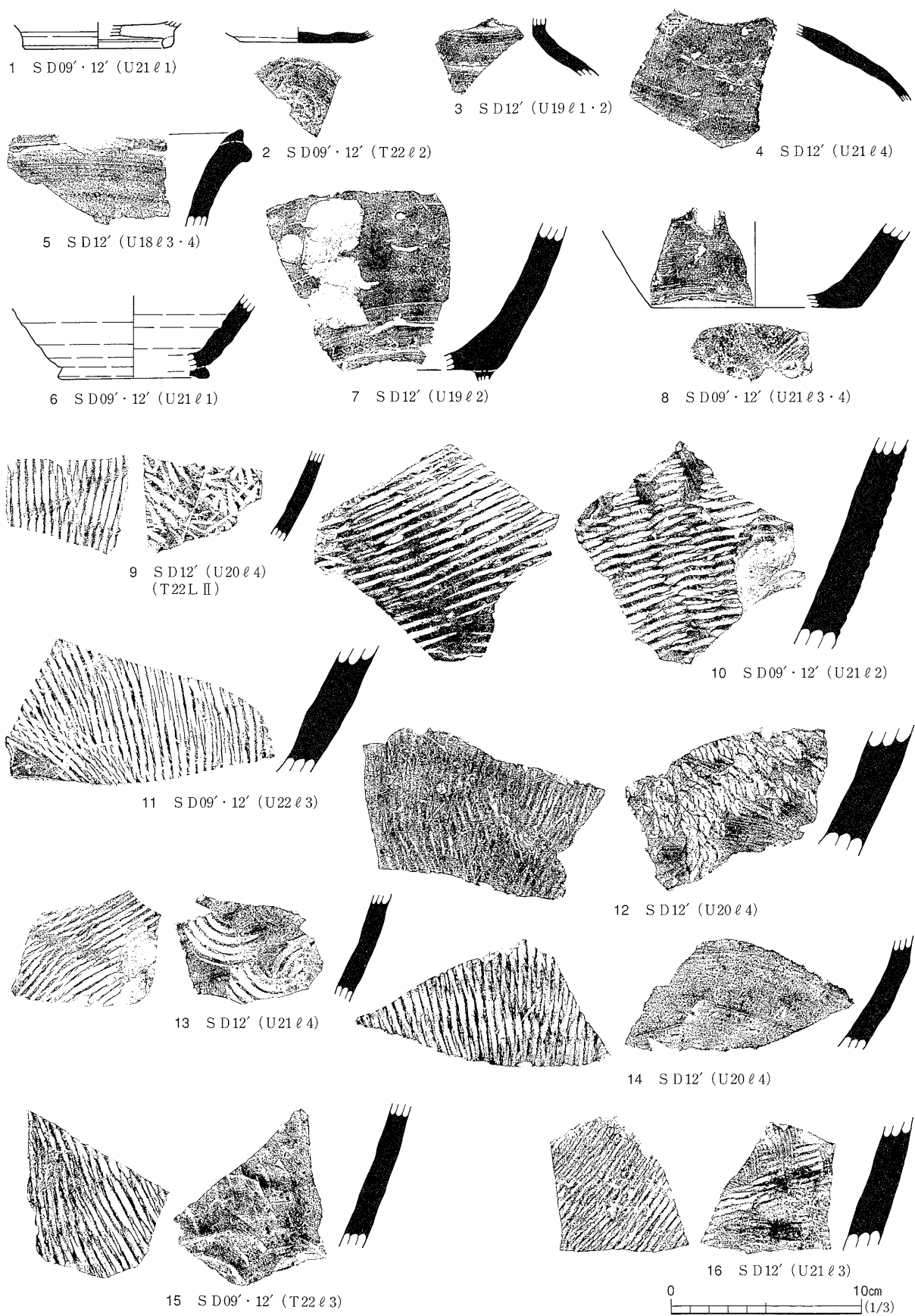


図34 9'・12'号溝跡出土遺物 (4)

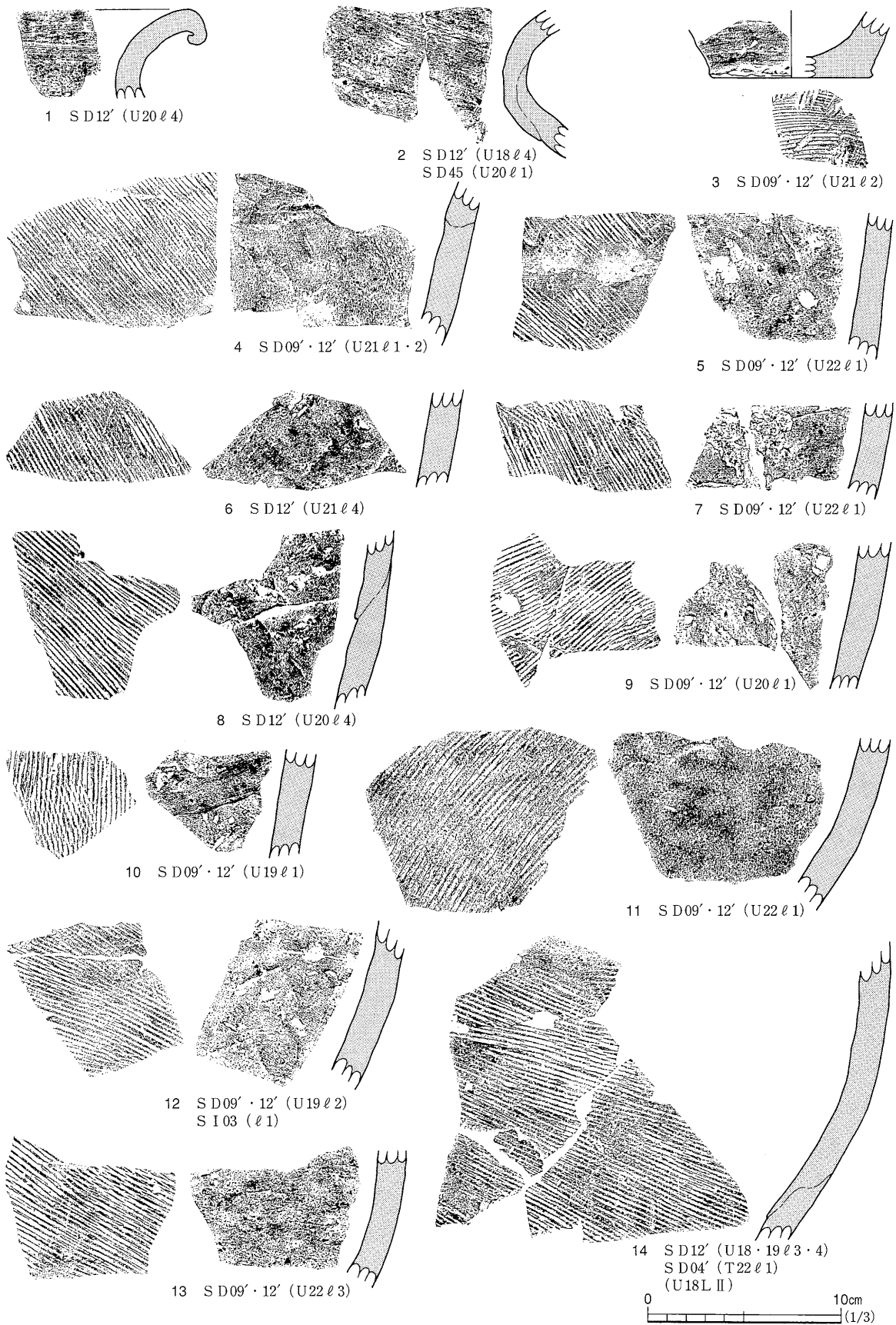


图35 9'·12'号沟迹出土遗物(5)

枚板作りの可能性があるが、上半部に合わせ目と思われるスジが認められることから上下2つ合わせの可能性が高い。遺存幅2.3cmを測る。

図36-6・7は木質遺物で、7は棒状、6は板状製品の欠損品である。6は遺存長14.3cm、厚さ1.6cmを測り、木取りは柾目、材質はスギである。

45号溝跡出土遺物（図43、写真54・61、表7）

45号溝跡からは、かわらけ・土師器類約180点、須恵器23点のほか、貿易陶磁器や砥石、羽口等が僅かに出土している。遺物は流れ込みによるものが大半を占め、土師器片が多く散在して出土しているが、摩滅が著しく図示できたものは7点である。

図43-11・12は貿易陶磁器の破片資料である。11は玉縁状の口縁を有する白磁碗である。12は青磁碗の口縁部資料で、内面体部中央には沈線が一条巡る。

13~15は須恵器で、14・15は瓶類の底部資料、13は甕の胴部片である。15の貼付け高台部は台形状を呈し、14の底部はヘラケズリが施され比較的底径が大きい。

16は長方形の砥石の欠損品である。器表面には、使用時の擦痕や顕著な線状痕が認められる。石質は流紋岩である。17は片側欠損の篋状の木質遺物である。先端には漆状の付着物が認められる。

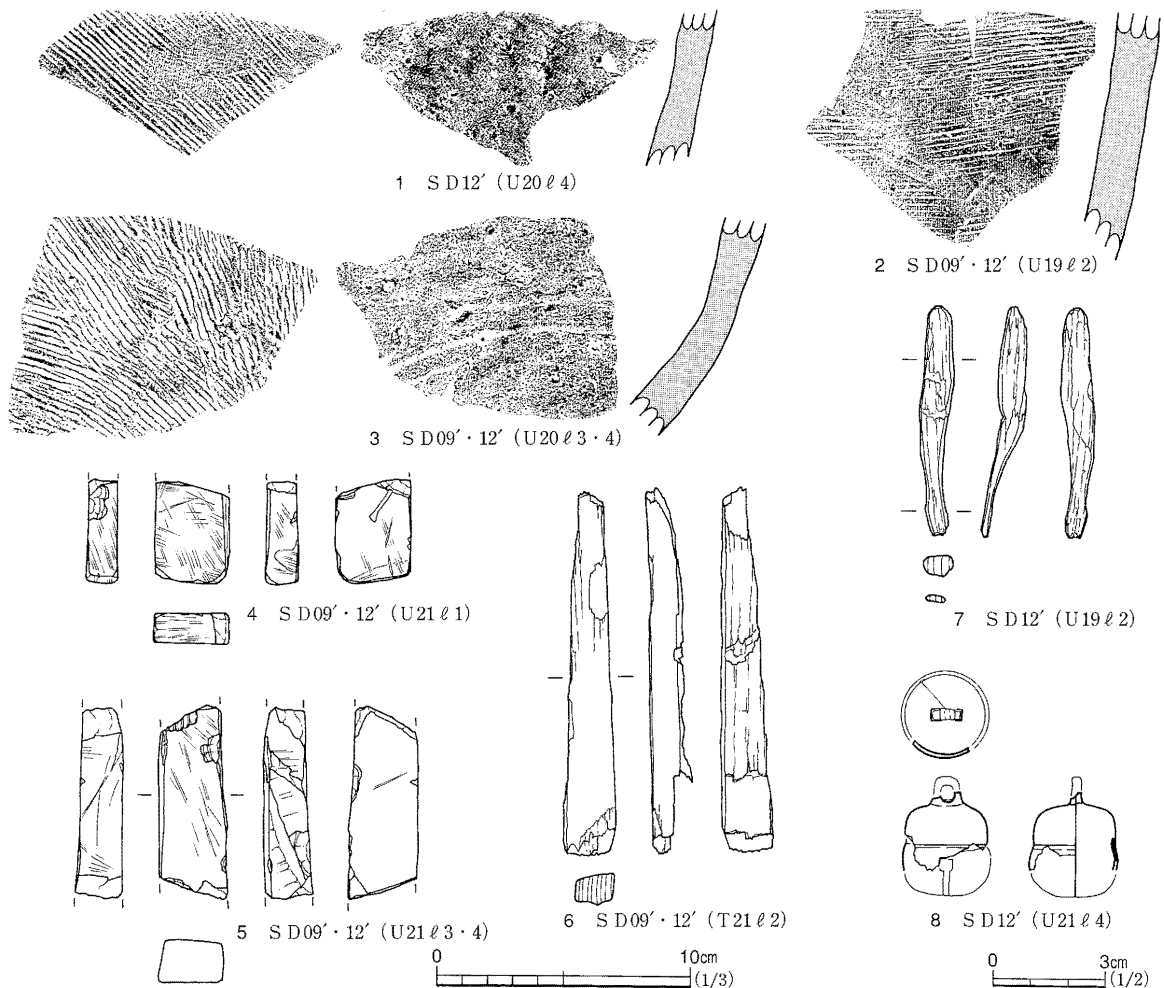


図36 9'・12'号溝跡出土遺物（6）

コクソ筥であろうか。遺存長7.0cm, 厚さ0.8cmを測り, 木取りは柾目, 材質はスギである。

本溝跡群は, 調査区北側のほぼ同一地区で検出された遺構である。性格的には9'・12'号溝跡から4'号溝跡までほぼ近似した時間幅内で構築された一連の区画溝と考えられる。所属時期は重複関係や出土遺物の組成・特徴等から判断して, 9'・12'号溝跡が12世紀～13世紀, 45号溝跡が平安時代頃の所産と考えている。(井)

10'号溝跡 S D 10' (図28)

本遺構は塩川町第10号溝跡と連続する溝跡で, 調査区北側のR-24～26グリッドでほぼ南北方向に直線的に検出された。遺構が構築された周辺は, 調査区内では最も標高が高い176.10m前後を呈し, 南西へ緩やかに傾斜している。検出面はL Iおよび盛土直下のL II上面で, 重複関係は小穴群より古い。遺構内堆積土は2層に分層され, いずれも壁側からの自然流入土と判断される。

調査区内で検出できた規模は南北約7mで, 溝幅は0.8～1mほどである。周壁は緩やかに立ち上がり, 断面形は底面が窪んだ搗鉢状を呈する。底面は北側から南側へ向かって緩く傾斜し, 高低差は最大で25cmほどである。検出面からの深さは10～25cmを測り, 南ほど深い。

遺物は, かわらけ・須恵器片が3点ほど出土したが, 細片・摩滅が著しく図示できなかった。

本溝跡は出土遺物に乏しく, 所属時期・性格等については不明であるが, 隣接する遺構群等から判断して中世頃の所産と考えられる。(井)

25'号溝跡 S D 25' (図37・38・43, 写真34・35・54・61)

本遺構は1次調査の25号溝跡に連続する溝跡で, 調査区南側のY～AZ-8～14グリッドに位置する。本溝跡が検出された周辺は, 北西に向かって緩やかに傾斜する地形を呈し, 標高が高くなる南東側には土坑群や建物群が構築されている。検出面はL V上面で, 43・44号溝跡や48～50号溝跡と重複している。新旧関係は43・44号溝跡より新しく, 48～50号溝跡より古い。

遺構内堆積土は北側調査区境(A A')と中央(B B'), 南側(C C')の3地点で確認し, 大きく5層, 各々対応する堆積土も含めると10層に分層できた。基本的にはいずれも壁側からの流れ込みが観察され, 中央がレンズ状に窪む自然流入と考えられる。ℓ 2 a・ℓ 3 aは黒褐色粘質土(グライ化)を呈し, 流水による水位変化が認められる。

溝跡は北側で緩く東に屈曲し, 調査区内で検出できた規模は全長33mである。溝幅は3.2～3.6mを測り比較的一定幅で構築されているが, 検出面からの深さは50～95cmほどで不規則である。底面標高は北側調査区境で174.70m前後, 南西調査区境で174.90m前後を測り, 北側コーナー付近が174.35mほどで最も低くなる。底面の高低差は最大で約50cmである。断面形は深い北側付近は搗鉢状を呈し, 浅い南側は底面が平坦となり, 鍋底状を呈する。底面は凹凸があり, 特に南側では礫(L VIII)の露呈が顕著である。

本遺構からは縄文土器7点, 土師器・かわらけ28点, 須恵器4点, 中世陶器1点, 石器類1点な

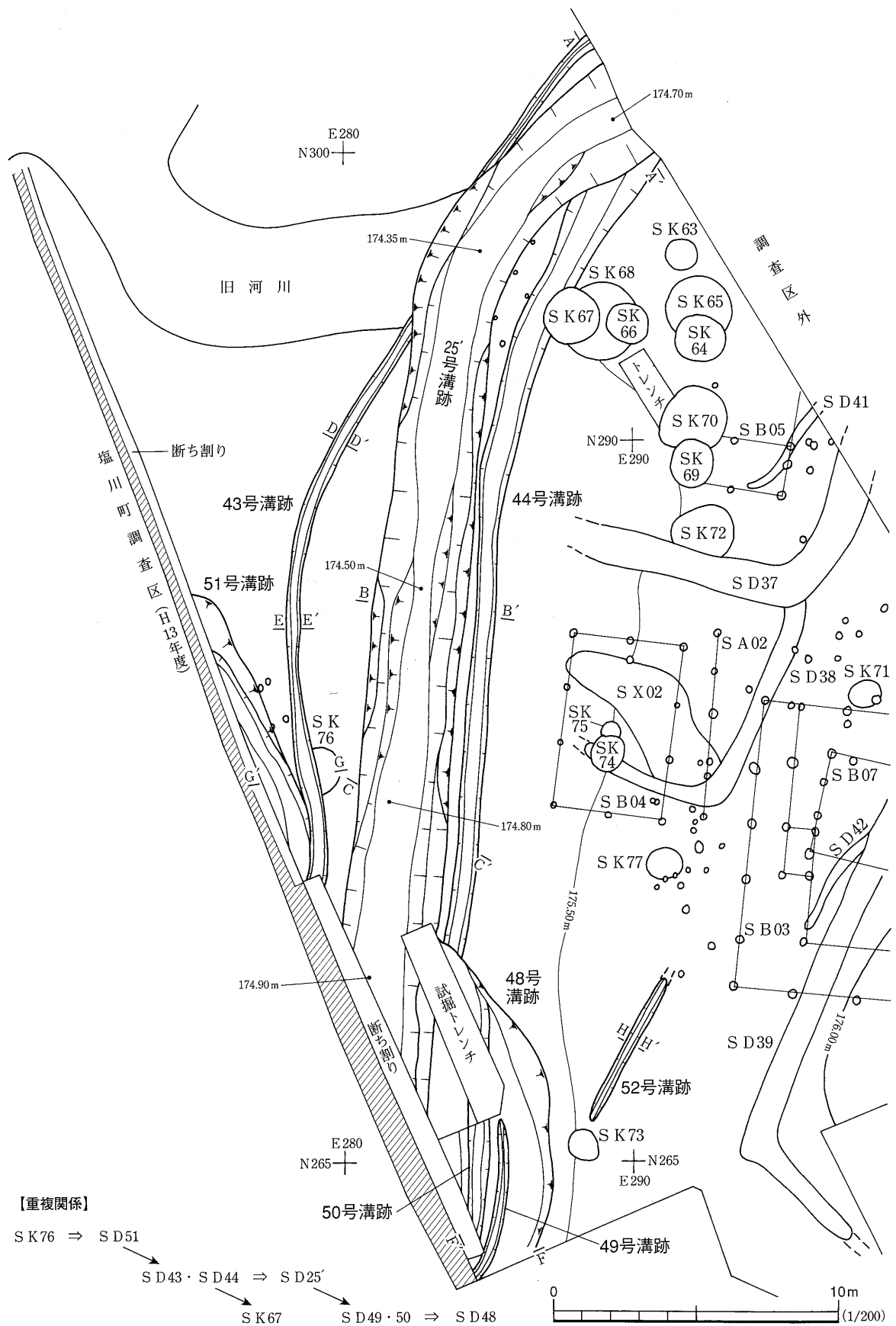


図37 25'・43・44・48～52号溝跡 (1)

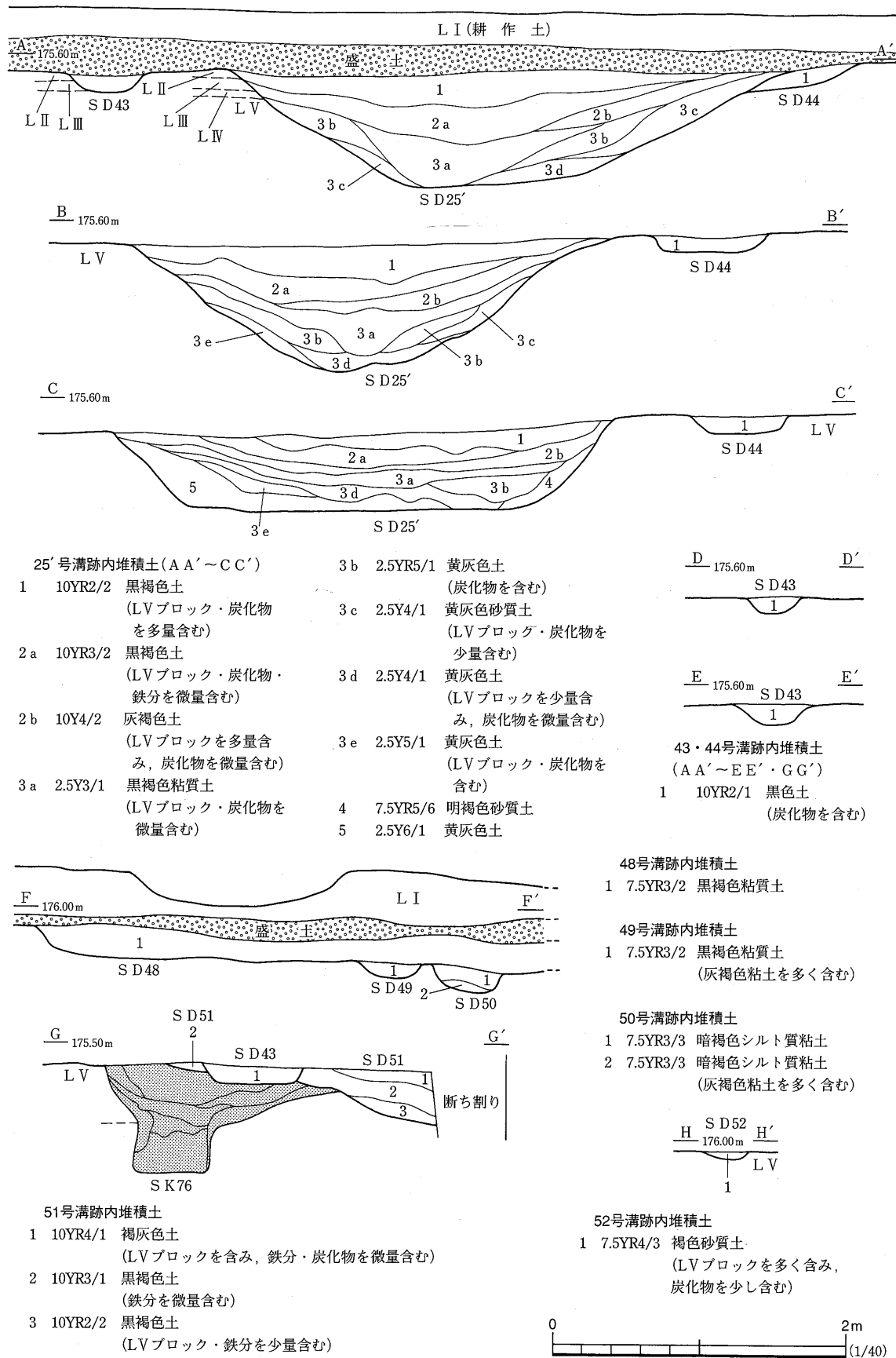


図38 25'・43・44・48~52号溝跡 (2)

ど計60点出土している。すべて破片資料で摩滅が著しいため、図示できたのは4点である。

図43-1は内面黒色処理が施された土師器杯の底部片で、体部下端から底部には手持ちヘラケズリ再調整が施されている。2はロクロ成形の土師器甕の口縁部片で、口端部は上方へ摘み上げられている。3は長頸瓶の頸部片で、リング状の凸帯が一条巡る。4は基部欠損の磨製石斧である。両刃は比較的丁寧に研磨され、両側面は面取りされている。石質は輝石安山岩である。

本溝跡は1次調査の25号溝跡と連続する溝跡である。性格的には南側に集中する3・4号建物跡や北側の土坑群等の遺構群と関連するものと考えられ、生活空間を区画する大溝と判断される。明確な所属時期は出土遺物に乏しく判然としないが、これらの遺構群との関連性を考慮すれば、古代～中世頃の所産の可能性が高い。(井)

36号溝跡 S D 36 (図39)

本遺構は調査区北西境のV・W-19グリッドに位置する。遺構周辺はやや南西に向かって傾斜する地形を呈し、ほぼ東西に直線的に検出された。検出面はLⅢ上面で、重複する遺構はない。遺構内堆積土は炭化物を混入する黒褐色土の単一層で、自然流入と考えられる。

調査区内で検出できた規模は、全長4.7m、溝幅30cm前後である。検出面からの深さは10cmほどで、断面形はU字状を呈する。底面は西側へ緩く傾斜しており、高低差は最大で約14cmを測る。

本遺構からは出土遺物がないため、所属時期・性格等は不明である。(井)

37号溝跡 S D 37 (図40・43, 写真36・37・54)

本遺構は調査区南側東境のZ～B Z-10・11グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は、標高175.90m前後の平坦地で、付近には土坑群や建物跡など遺構が多く検出された地区である。本溝跡は北東側が調査区外へ伸びるため、全体の形状・規模は不明であるが、配置的にも隣接する5号建物跡との関連性が考えられる。

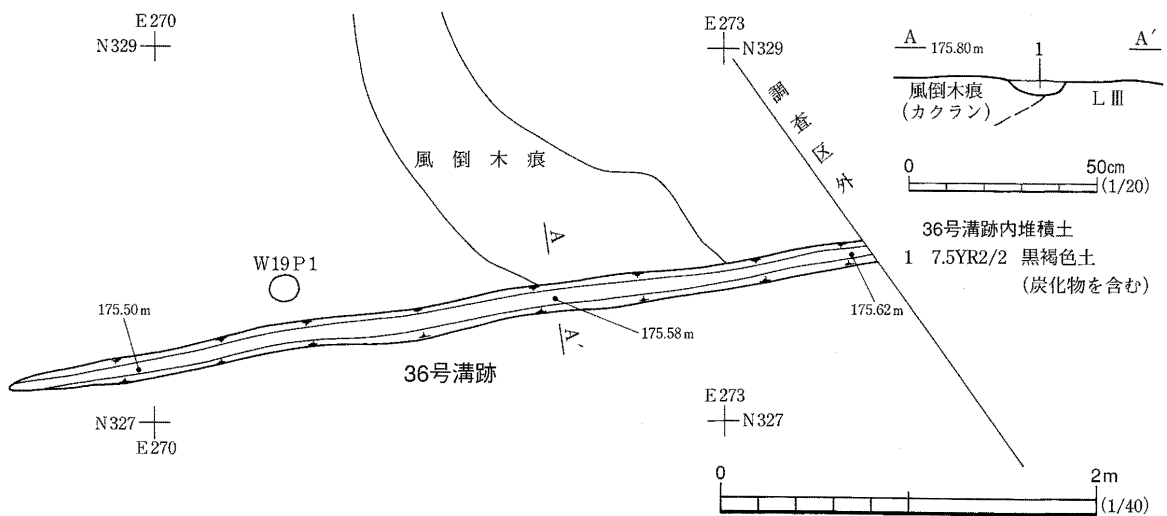


図39 36号溝跡

本遺構は直線的にL字状に屈曲する溝跡で、L I および盛土直下のL V 上面で検出した。重複関係は規模・形状が類似する38号溝跡や72号土坑と重複し、本遺構がいずれの遺構よりも新しい。また、土層断面や完掘状況から2小期が認められ、新しい方を37a号、古い方を37b号と呼称した。遺構内堆積土は37a号が単一層、37b号が3層に分層できた。37a号ℓ1および37b号ℓ2・3はいずれも近似した層相を呈し、壁側からの自然流入土と判断されるが、37b号ℓ1はL V ブロック・炭化物を含み人為的堆積の可能性が高いと判断している。

調査区内で検出できた規模は南北約5m、東西約7.5mで、37a号溝跡の方がやや規模が大きい。溝幅は37a号が40～60cm、37b号が70～95cmほどである。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形はいずれも底面が窪んだU字状を呈する。底面は北東側から西側へ向かって緩やかに傾斜し、底面標高の高低差は最大で15cmほどである。検出面からの深さは37a号が浅く10～15cm、37b号が18～25cmを測り、東側ほど深い。

遺物は土師器・かわらけ29点、須恵器5点、白磁片1点など、総計約80点出土した。細片・摩滅が著しく図示できたのは1点である。図43-5は須恵器小型鉢の底部資料であろうか。

本遺構はL字状に屈曲する溝跡で、堆積土状況等から造り替えによる2小期が認められた。性格的には規模・形状が類似する38号溝跡と同様な性格が窺え、やや軸線はずれるが5号建物跡に付随する区画溝の可能性が高い。所属時期については、出土遺物に乏しく判然としないが、古代～中世頃の所産と考えられる。

(井)

38号溝跡 S D 38 (図40・43, 写真36・37・54・61)

本遺構は調査区南東側のZ～B Z - 10・11グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は、標高175.90m前後の平坦地で、付近には土坑群や建物跡など多くの遺構が所在する。本溝跡は北東側で規模・形状が類似する37号溝跡に壊されているため全体の形状・規模は不明であるが、本来はコ字状を呈していたものと考えられる。検出面はL I および盛土直下のL V 上面で、37号溝跡・3号建物跡・74号土坑・2号性格不明遺構と重複関係にある(S X 02< S D 38< S D 37・S B 03・S K 74)。また、ほぼ同一地点に4号建物跡・2号柱列跡が所在し、新旧関係にある。遺構内堆積土は3層に分層できた。ℓ3は壁側からの自然流入土と判断されるが、上層のℓ1・2はL V ブロック・炭化物を含み人為的堆積の可能性が高いと判断している。

規模は南北約7.6m、東西約5mで、溝幅は65cm前後でほぼ一定である。周壁は緩やかに立ち上がり、断面形は底面が窪んだU字状を呈する。底面は北東側から西側へ向かって緩やかに傾斜し、底面標高の高低差は最大で15cmほどである。検出面からの深さは15～25cmを測り、東側ほど深い。

遺物は縄文土器11点、土師器・かわらけ88点、須恵器片1点のほか石器類2点など総計130点が出土した。細片・摩滅が著しく3点のみ図43に掲載した。

図43-6は内面黒色処理が施されたロクロ土師器杯で、底部にはヘラケズリ調整が施されている。7はロクロ土師器甕の口縁部片で、頸部が強く屈曲し、口端部が上方へ摘み上げられている。8は

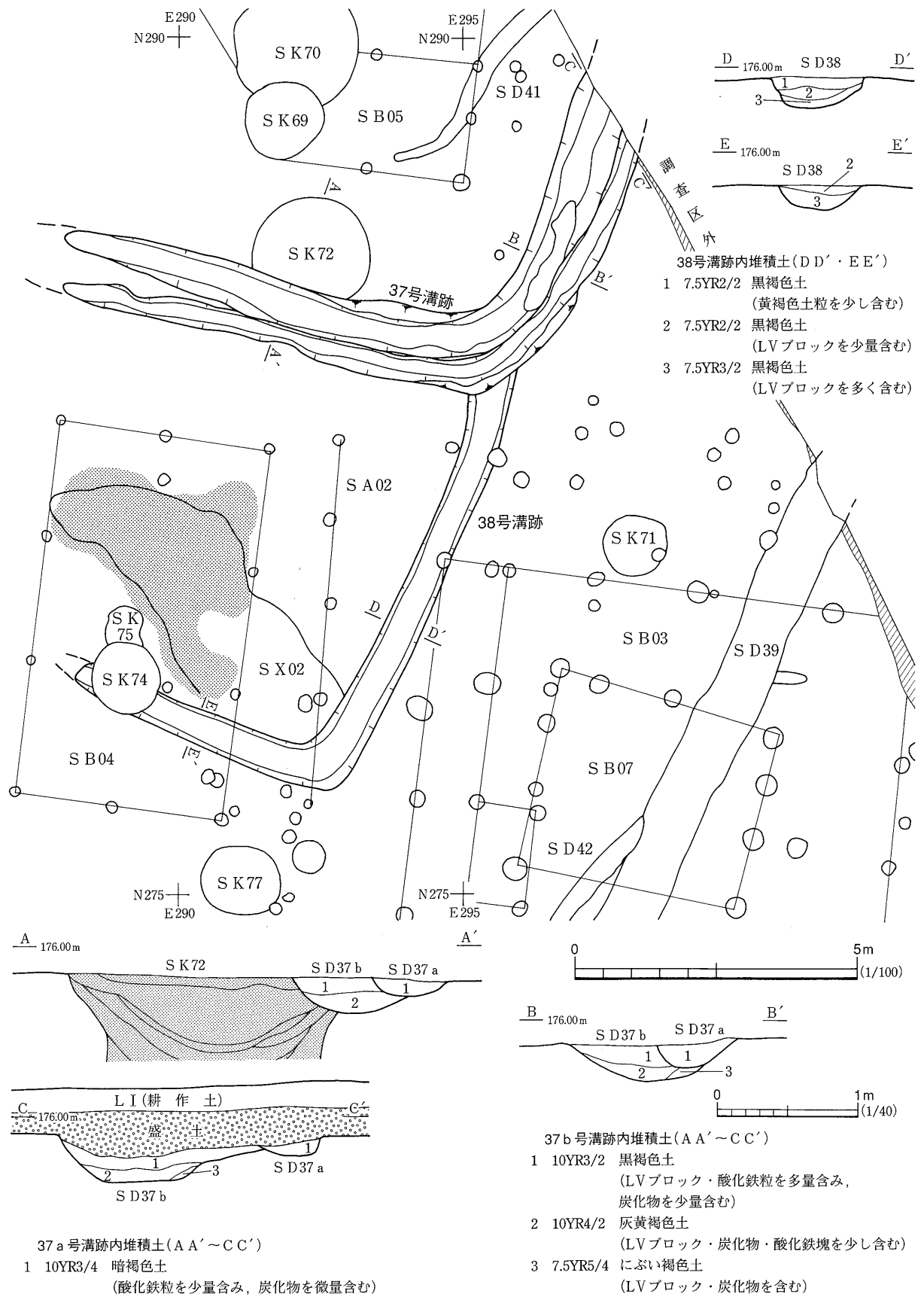


図40 37・38号溝跡

横型の石匙で、両面縁辺部に細かい連続した調整剥離を加えている。背面・腹面ともに素材剥離面を残し、横断面形は台形状を呈する。摘み部分は丁寧な剥離調整が両面から施され、器体ほぼ中央部に付く。石質は頁岩である。

本溝跡は出土遺物に乏しく、所属時期については明確には判断し得ないが、性格的には隣接し形状・規模が類似する37号溝跡と同様な区画溝の可能性が考えられる。(井)

39号溝跡 S D 39 (図41, 写真38・39)

本遺構は調査区南西境のA Z～C Z - 6～10グリッドに位置する。遺構周辺には建物跡や小穴群など多く検出されており、標高175.90mの平坦地に所在する。本溝跡は北東側が調査区外に延びるため、全体の形状・規模は不明である。検出面はL Iおよび盛土直下のL V上面で、42号溝跡を切っている。また、同一地点には3号建物跡が所在し、新旧関係にある。遺構内堆積土は大きく4層に分層できた。基本的にはℓ 2～4は壁側からの自然流入土と判断されるが、厚く堆積する上層のℓ 1はL Vブロック・炭化物を含み人為的堆積の可能性が高い。

調査区内で検出できた規模は南北軸17.5m、南西屈曲部分で5mを測り、L字状に屈曲する形状を呈する。溝幅は1m前後でほぼ均一ある。検出面からの深さは南西屈曲部分(D D')で20cm程と浅く、北東側(A A'～C C')は50cm前後と深い。周壁は比較的急に立ち上がり、断面形U字状を呈する。底面はやや北東側へ緩傾斜しており、高低差は最大で15cm前後である。

本溝跡からは土師器片63点、須恵器片8点など出土しているが、すべて細片で摩滅が著しいため図示できなかった。遺構の性格等は不明であるが、所属時期は出土遺物等から判断して平安時代頃の所産と考えられる。(井)

40 a・40 b号溝跡 S D 40 a・40 b (図26, 写真40)

本溝跡は調査区北西側のS - 22グリッドで検出した。検出面は中世以降の基盤層であるL II上面である。9'・12'号溝跡と重複し、これに壊されていることから本遺構の方が古い。遺構内堆積土は単層で、炭化物・焼土粒・L V塊を含む黒褐色土が自然流入している。

溝跡は逆L字型を呈し、同一の覆土を有するが、屈曲部分が9'・12'号溝跡により失われていることから、同一の溝跡である確証を得られない。このため、便宜的に西側の部分を40 a号溝跡、東側の部分を40 b号溝跡とする。

40 a号溝跡は北東-南西方向に北西側に張り出すように弱く弧を描いて延びている。検出長は1.35mを測り、幅は8～17cm程である。周壁は緩く立ち上がり、断面は播鉢状を呈する。底面は中央付近が一番高く、部分的に途切れている。底面の比高差は2.8cmである。

40 b号溝跡は南北に直線的に延びている。検出長は1.0mを測り、幅は20cmである。周壁は緩く立ち上がり、断面は播鉢状を呈する。底面はほぼ平坦である。本溝跡からは遺物が出土しなかった。

遺構の所属時期については、12世紀後半～13世紀の所産と考えられる9'・12'号溝跡に壊され

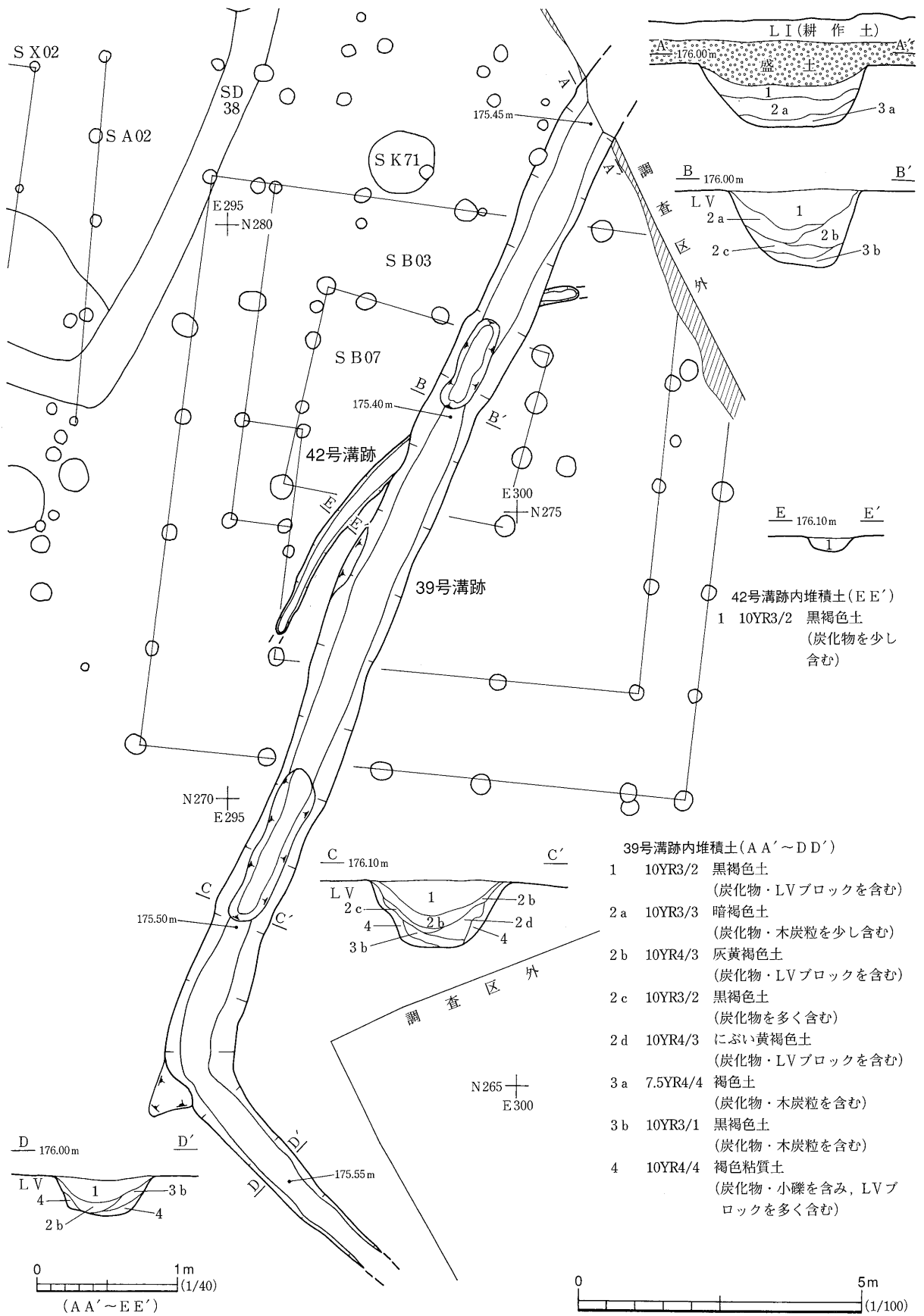


図41 39・42号溝跡

ていることから、少なくともそれ以前の所産と考えられる。(笠 井)

41号溝跡 S D 41 (図42, 写真40)

本遺構は調査区南側の東境であるA Z・B Z-11・12グリッドに位置する。本遺構が構築された周辺は、標高175.90mの平坦地で、付近には土坑群や建物跡、小穴群など多くの遺構が所在する。北東側は調査区外に延びるため、全体の規模・形状は不明である。検出面はL Iおよび盛土直下のL V上面である。5号建物跡と重複し、本溝跡の方が新しい。遺構内堆積土は2層に分層でき、いずれも壁側からの自然流入土と判断される。

調査区内で検出できた規模は全長4mで、西側端が屈曲する。溝幅は20~30cm前後で南西側はやや狭い。検出面からの深さは平均して15cmほどで、断面形はU字状を呈する。底面は西側へ緩傾斜しており、高低差は10cmである。本遺構内からは土師器・かわらけ片が7点ほど出土しているが、細片で摩滅が著しいため図示できなかった。

本溝跡の所属時期・性格等については、出土遺物に乏しいため明確には判断し得ない。しかし、重複する5号建物跡より新しいことや、土坑群に隣接する配置構成を勘案すると、64~70号土坑群を区画する施設であった可能性が考えられる。(井)

42号溝跡 S D 42 (図41, 写真40)

本遺構は調査区南西側のB Z-8・9グリッドに位置する。遺構周辺には建物跡や小穴群などが所在しており、標高175.90mほどの平坦地で検出された。検出面はL Iおよび盛土直下のL V上面で、39号溝跡に壊されているため全体の形状・規模は不明である。遺構内堆積土は黒褐色土の単一層で、自然流入土と判断される。

検出できた規模は全長約8mを測り、緩やかな弧状を呈する。溝幅は25cm前後で、検出面からの深さは平均して10cm前後と浅い。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央がやや窪む。

本溝跡からは遺物が出土していないため、所属時期・性格等は不明である。(井)

43・44号溝跡 S D 43・44 (図37・38・43, 写真40・54)

本遺構群は調査区南側のX~A Z-7~14グリッドに位置し、25'号溝跡の両側で挟みこむように検出された。遺構周辺は標高175.30~175.45mの南側から北西へ向かって緩やかな傾斜となる。検出面はL V上面で、25'・51・48~50号溝跡、67号土坑等と重複関係にある(図37左下)。遺構内堆積土は共に炭化物を混入する黒色土の単一層で、自然流入と考えられる。

43号溝跡 本遺構は地形に合わせるようにやや蛇行しながら検出された。東西は調査区外に延びるため、全体の形状・規模は不明である。調査区内で検出できた規模は、全長約32m、溝幅35~50cm前後である。検出面からの深さは10cmで、断面形はU字状を呈する。底面はやや凹凸はあるがほぼ平坦である。底面標高は中央付近(D D')が低く、高低差は10cmほどである。

44号溝跡 本遺構は北東側でやや緩やかに屈曲する形状であり、25'号溝跡と並列するように検出された。北東側は調査区外に延びるため、全体の形状・規模は不明である。調査区内で検出できた規模は、全長約30m、溝幅60~80cm前後である。検出面からの深さは10cmほどで、断面形は鍋底状を呈する。底面はやや凹凸はあるがほぼ平坦である。底面標高は若干南側が低い、ほぼ同一の175.40mである。

遺物 遺物は43号溝跡から土師器・かわらけ片が28点など計50点、44号溝跡から縄文土器8点、土師器・かわらけ片が115点、須恵器3点等総計約150点が出土している。すべて流れ込みによる資料であり、細片や摩滅が著しいため44号溝跡から出土した2点のみ図示した。図43-9は土師器甕の底部片、10は須恵器甕の胴部片で、外面にはタタキ痕と沈線が認められる。

本遺構群の所属時期・性格等については、明確に伴う出土遺物がないため判断し得ないが、重複する遺構や隣接する遺構群から判断して、古代頃の区画溝の可能性が推察される。(井)

46号溝跡 S D 46 (図42・43, 写真41・42・54)

本遺構は調査区北側のW・X-16・17グリッドに位置する。遺構周辺はやや南西に向かって緩傾斜する地形を呈し、東側は調査区外へ伸びるため全体の規模は不明である。検出面はLⅡ上面で、重複する遺構はない。遺構内堆積土は3層に分層される。すべて炭化物・LVブロックを混入する黒褐色系の堆積土で、l2には小礫が混入されていた。壁際からの流れ込みが認められることから、自然堆積と考えられる。

調査区内で検出できた規模は全長10mで、東西に直線的に検出された。溝幅は60~75cm前後である。検出面からの深さは15cm前後を測り、断面形は中央がやや窪む鍋底状を呈する。底面は東に向かって緩傾斜しており、底面標高の高低差は最大で約38cmを測る。

本遺構内からは土師器・かわらけ片9点、須恵器1点、白磁6点等が出土している。いずれも流れ込みによる資料であり、須恵器2点、白磁4点について図示した。図43-18~21は白磁碗で、いずれも内外面に白色系の釉が施釉されている。18は玉縁状の口縁を有する口縁部片である。19は丸味のある器形を呈し、内面体部上位には沈線が一条巡る。20の内面体部下位には一条の沈線と櫛目文が認められ、底部は露胎である。21は高台が低い底部資料で、底部は露胎となる。内面見込み部分は輪状の掻き取り痕と沈線が認められる。22・23は須恵器甕の胴部片である。

本遺構の性格については、全体の形状や規模が不明なため、明確には判断し得ないが、所属時期は貿易陶磁器等の年代観から、12世紀後半頃の所産と考えられる。(井)

47号溝跡 S D 47 (図42, 写真43)

本遺構は調査区北側のV-17・18グリッドに位置する。遺構周辺はやや南西に向かって傾斜する地形を呈し、ほぼ南北方向に直線的に検出された。検出面はLⅡ上面で、重複する遺構はない。遺構内堆積土は炭化物を混入する黒褐色土を呈し、いずれも自然流入と考えられる。

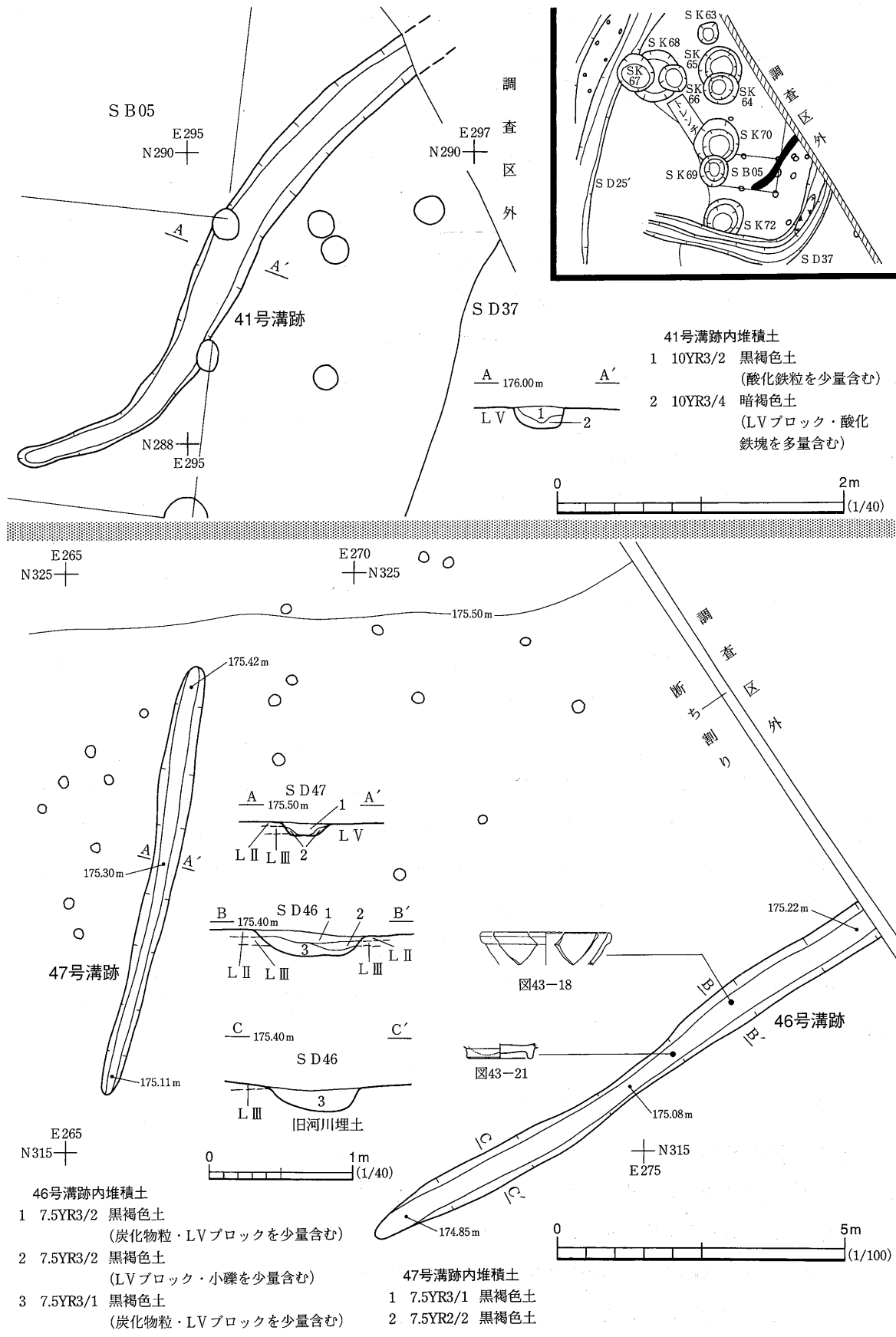


図42 41・46・47号溝跡

規模は全長7.5m、溝幅30cm前後である。検出面からの深さは10cmほどで、断面形はU字状を呈する。底面は南側へ緩傾斜しており、底面の高低差は最大で約30cmを測る。

本遺構からは出土遺物がないため、所属時期・性格等は不明である。(井)

48～50号溝跡 S D48～50 (図37・38, 写真43)

本溝跡群は調査区南西境のY・Z-6～8グリッドに位置する。遺構周辺はやや北西に向かって緩傾斜する地形を呈し、南西部は調査区外へと延びるため全体の形状・規模は不明である。検出面はL Iおよび盛土直下のL V上面で、重複関係は49・50号溝跡よりも48号溝跡が新しい。遺構内堆積土はいずれも炭化物を混入する黒褐色系の近似層である。48・49号溝跡は単一層、50号溝跡は2層に分層され、共に自然流入と考えられる。

調査区内で検出できた規模は全長10mである。溝幅は49号溝跡が30～40cm、50号溝跡が45cm前後、48号溝跡が約1.8mを測り幅が広い。検出面からの深さはいずれも浅く、10～20cmほどである。断面形は中央部が若干窪むU字状を呈し、底面は北側へ緩傾斜している。高低差は約10cmを測る。

本溝跡群からは出土遺物がないため、所属時期・性格等は不明である。(井)

51号溝跡 S D51 (図37・38)

本溝跡は調査区南部、X-9・10グリッドに位置する。検出面はL II上面である。76号土坑・43号溝跡と重複しており、切り合い関係から76号土坑よりも新しく、43号溝跡よりも古い。遺構内堆積土は3層に分層できた。褐色系を基調とした粘質土で、堆積状況から自然流入土と判断した。

溝跡は東半が検出されたのみで、全貌を掴むことができなかった。検出部分の所見では、北西-南東方向に延びており、検出長10.75mを測る。溝幅は西側の立ち上がり調査区外となるため不明であるが、検出部分で0.8～1.5m程を測る。周壁は緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

遺物は縄文土器10点、かわらけ・土師器24点、須恵器2点など総計45点ほど出土している。すべてφ1・2から出土したもので堆積土と共に流れ込んだものである。

本遺構の所属時期については、土器の年代観および他遺構との重複状況から判断して、古代頃の所産と考えられる。(笠井)

52号溝跡 S D52 (図37・38, 写真43)

本遺構は調査区南端のZ・AZ-7・8グリッドに位置する。遺構周辺は比較的標高が高い平坦地で、ほぼ南北に直線的に検出された。検出面はL I直下のL V上面で、重複する遺構はない。遺構内堆積土は炭化物を混入する単一層で、自然流入と考えられる。

規模は全長6m、溝幅20～30cm前後である。周壁は緩やかに立ち上がり、検出面からの深さは10cmほどである。底面はほぼ平坦で、高低差はほとんどない。

本遺構からは出土遺物がないため、所属時期・性格等は不明である。(井)

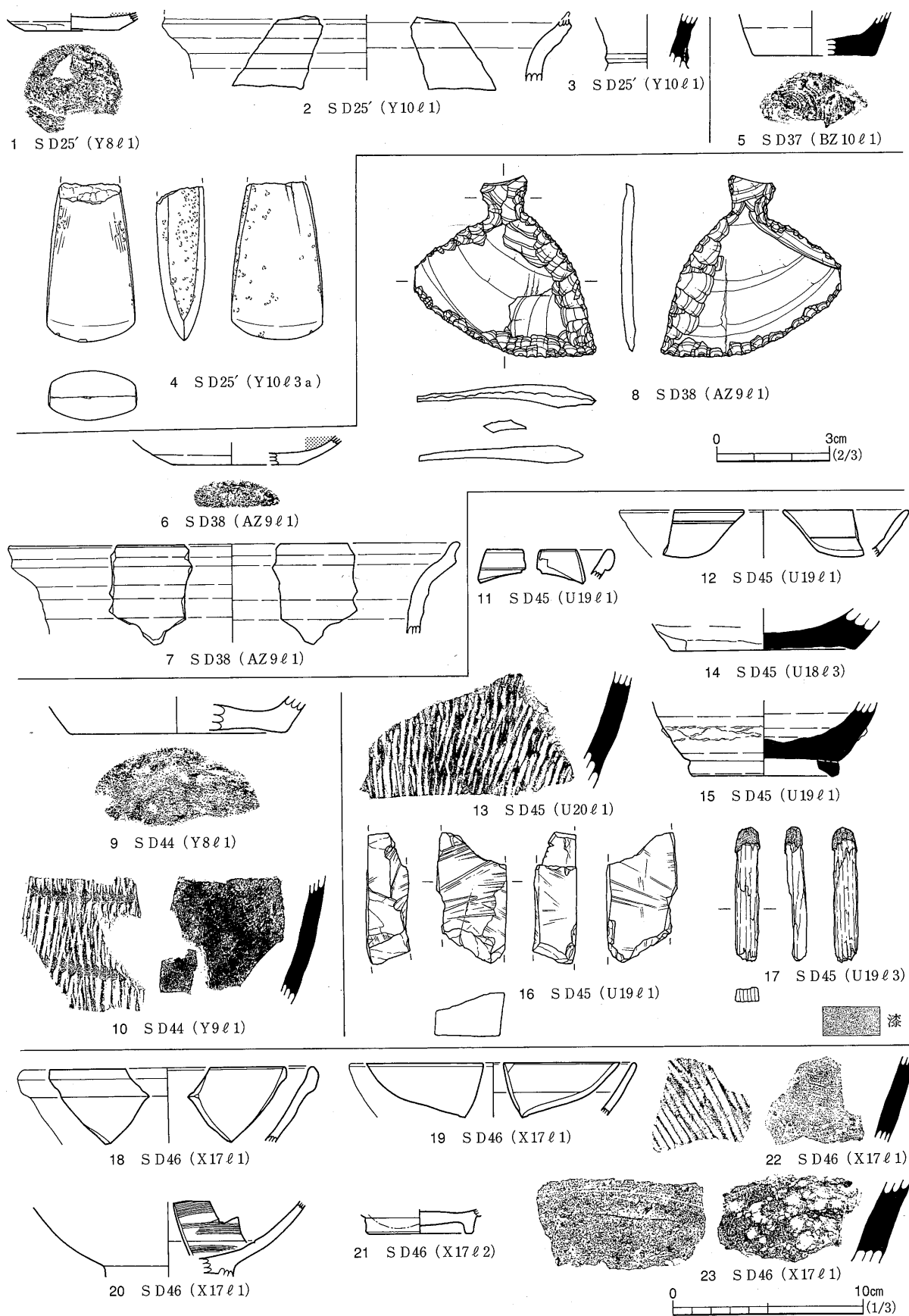


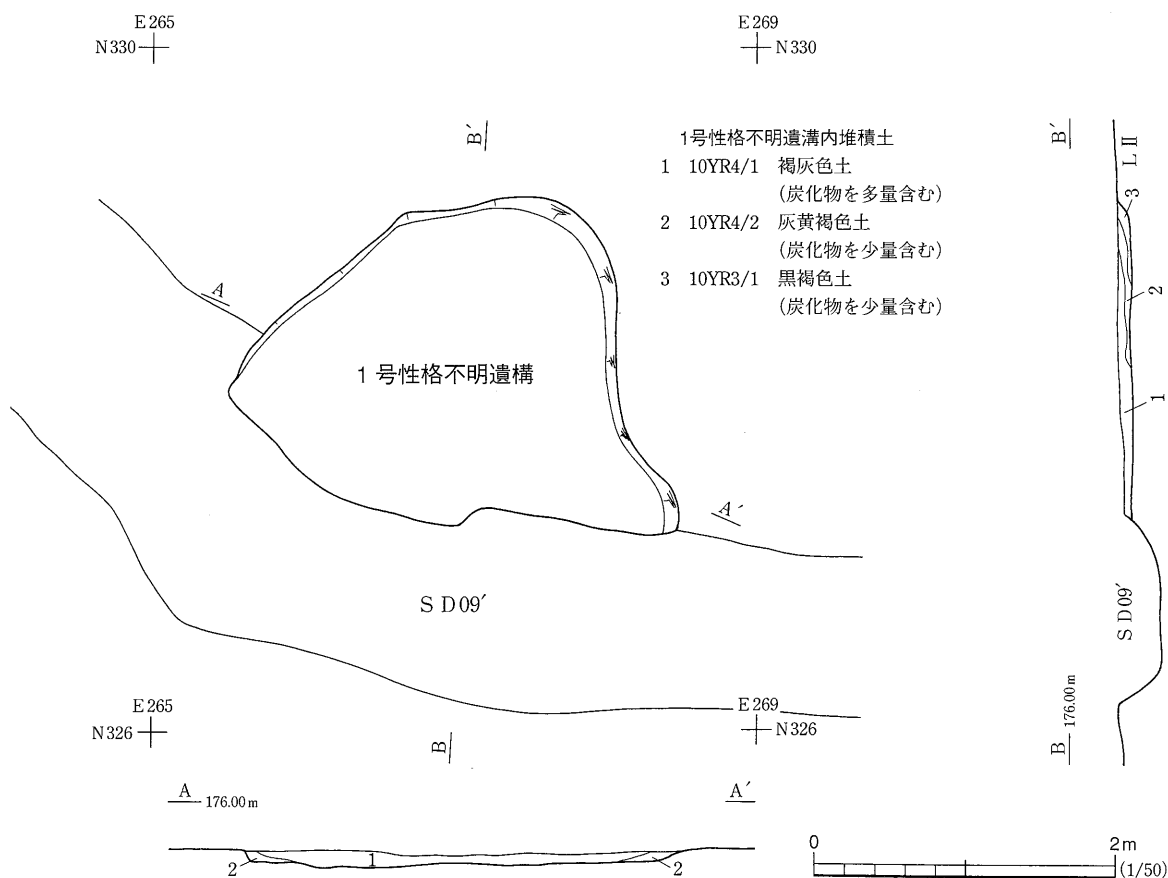
图43 25'·37·38·44~46号沟迹出土遗物

第6節 その他の遺構

今回の調査では前節までの遺構の他に、性格が掴めなかった遺構と建物跡や柱列跡と認識できなかった小穴群がある。ここでは、前者を性格不明遺構、後者をグリッドピット群として報告する。なお、各グリッド検出のピット群については、調査区北側からA～Dの4地点に区分し、柱痕や根石、出土遺物等が認められたピットは表5に掲載している。

1号性格不明遺構 SX01 (図44, 写真45)

本遺構は調査区中央やや北側、V-19グリッドに位置している。周囲は南方向へ緩やかに下る地形を呈しており、検出面はL II上面である。重複関係は9'号溝跡に壊されていることから、本遺構の方が古い。遺構内堆積土は3層に分層できた。ℓ2・3は包含物が希薄で、均質な土質をしており、上位からの流れ込み状況が確認できた。このことから、自然流入土と考えられる。ℓ1については炭化物・L V塊・土器片等を含む、褐灰色土であるが、包含物の混在する状況から人為的に埋め戻されたものと判断した。



本遺構は南側の半分ほどを9'号溝跡に壊されていることから全形が掴めないが、遺存部分から類推すると、不整円形か不整隅丸方形を呈するものと思われる。規模は遺存部分で南北2.24m、東西2.99m、検出面からの深さ8～14cmほどを測る。周壁は北西側で急角度に立ち上がるのに対し、北東側はなだらかである。底面は部分的に凹凸が認められるが、概ね平坦である。

遺物は、須恵器2点、かわらけ・土師質土器29点、白磁片1点(図33-9)が出土している。すべて本遺構に明確に伴う遺物ではなく、摩滅が著しい細片であるため図示できなかった。

本遺構の性格については不明であるが、所属時期は重複する9'号溝跡より古く、出土土器の年代観を勘案すると古代末期～中世初頭頃と判断される。(笠井)

2号性格不明遺構 SX02(図45, 写真45)

本遺構は調査区南側の比較的遺構が集中するZ～BZ-9・10グリッドに位置している。遺構が構築された周囲は標高175.70～175.90mの西側へ緩やかに傾斜する地形を呈する。調査当初、集中した遺物の散布範囲が確認され、土師窯(土器焼成窯)の可能性も想定したが、焼土粒や焼石、粘土ブロック・焼け面等が認められなかったため、性格不明遺構として取り扱った。検出面はLIおよび盛土直下のLV上面である。重複関係は4号建物跡・2号柱列跡および38号溝跡と重複し、本遺構が最も古い。遺構内堆積土は3層に分層できたが、いずれもLVブロック・炭化物・土器を多く含む黄褐色粘質土で、人為的堆積と判断される。

本遺構はやや東西に蛇行する溝状を呈しており、全体の規模は南東側で38号溝跡に壊されているため不明である。遺存する規模は長さ約6m、幅1.5～2mほどである。検出面からの深さは8～14cmほどと浅く、周壁は緩やかに立ち上がる。底面は中央付近がやや窪むが、ほぼ平坦である。

遺物は本遺構内および周辺から多く出土している。検出段階では西側で3×3.8mの遺物散布範囲が認められ、破片資料で総数約4,180点の土器が出土した。すべて細片で摩滅が著しく、土器の表面が剥落しているため文様の特徴や器種が不明であり、時期比定できたものは極僅かであった。唯一判断し得た資料は縄文土器が大半を占め、後期と晩期の資料が多く、底部資料は約60点ほど認められた。このうち、遺存状態の比較的良い土器7点、石器類2点を掲載した。

図45-1は粗製土器、2～4は精製あるいは半精製土器である。1・2は緩やかな波状口縁を呈し、2には中央が窪む鉤状(ブタ鼻状)の貼瘤が認められる。3・4は弧線文と小瘤が組み合わされた文様構成で、3は器形的に異系統の可能性もある。いずれの資料も縄文後期末葉の新地式期頃の所産であろう。5～7は底部資料で、5・7はやや上げ底状となる。8は篋状の小型石器で、縁辺部に部分的に剥離調整が施されている。9は一部欠損する凸基有茎石鏃である。三角形を呈し、両側縁部には細かい連続的な剥離調整が施されている。石質は8が粘板岩、9が流紋岩である。

本遺構の所属時期・性格等は明確には判断し得ないが、堆積状況や遺物の出土状況、および重複・隣接する遺構群等から判断して、他遺構掘り込みの際に、土と共に多量の土器が旧河川跡(小谷地)に埋められたものと考えられる。(井)

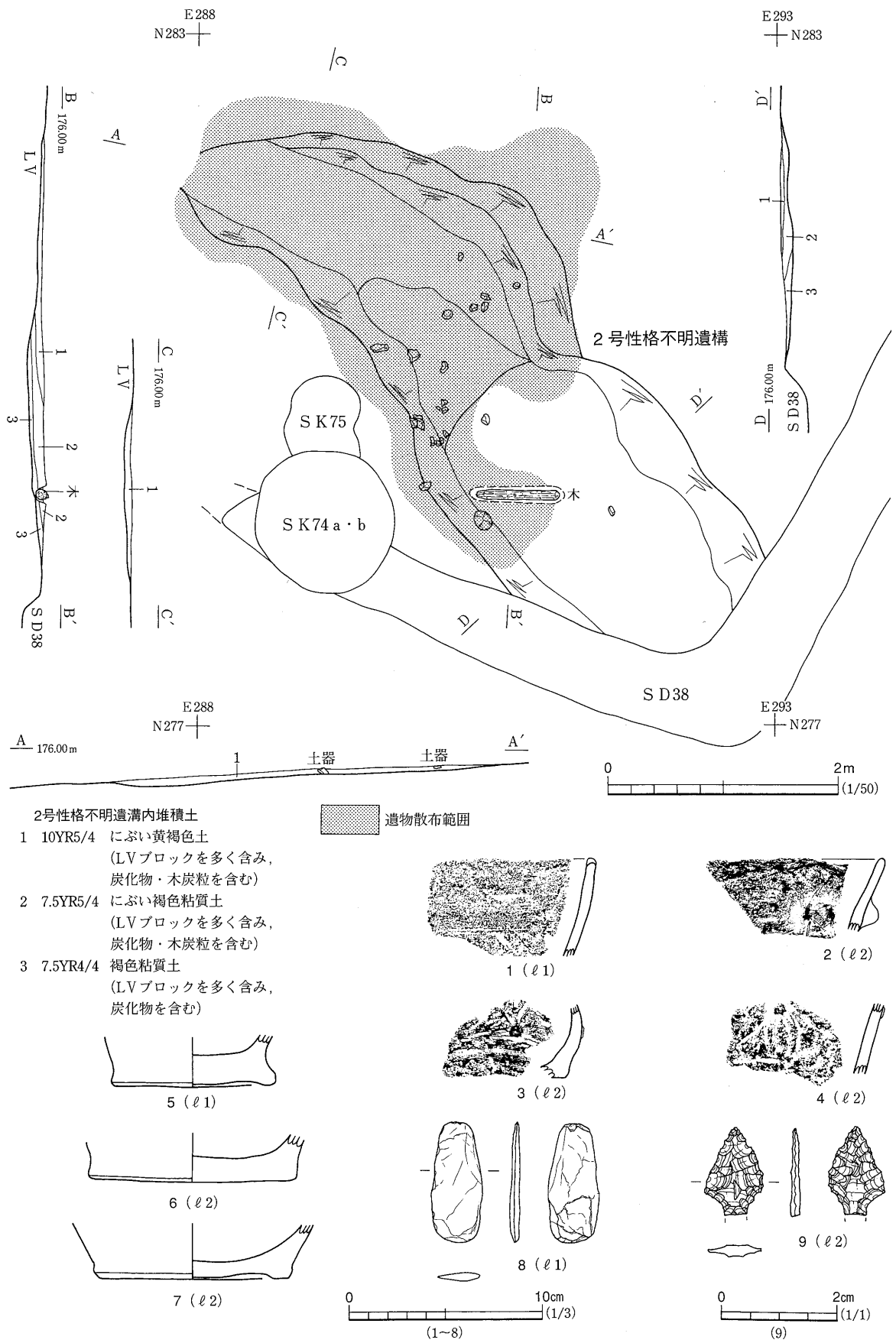


図45 2号性格不明遺構，出土遺物

ピット群 (図46～49, 写真46, 表5)

ピット群は調査区北側と南側の比較的標高が高く、遺構が集中する平坦地から多く確認されている。これらのピット群の中には溝跡等と関連する建物跡や柵列跡等を構成するものもあると考えられるが、配列等を明らかにすることができなかつたものである。また、調査区中央付近では削平が著しく、すでに消失してしまったものもあると考えられるが、これらの地点では殆ど検出されておらず、1次調査と同様な状況を示している。

今回の調査で検出されたピット群は前述したように便宜的にA～Dの4地点に区分し、図46～49に掲載した。基本的には規模や堆積土が類似するものが多く、各グリッドピットの脇には検出面からの深さと堆積土(a～e)を記載した。また、これとは別に遺物が出土したピットや柱痕が確認されたものについては表5に掲載している。なお、報告にあたっては調査区北側(A～C)と南側ピット群(D)に大きく分けて報告する。

①調査区北側(A～C)

調査区北側のR～W-17～26グリッドの範囲で検出されたピット群である。ピット群は散在しているため、溝跡等を境に比較的まとまって認められた地点によってA～Cに区分けした。A区では北側の10'号溝跡と06'・07'号溝跡周辺、B区では04'・09'・12'・45号溝跡東側、C区では09'・12'・45号溝跡の南側緩斜面の47号溝跡近辺に集中して確認されている。R～T-23～26グリッド範囲(A)からは39個、T～V-20～22グリッド範囲(B)から46個、U～W-17～19グリッド範囲(C)からは32個の総計117個のピット群を検出した。いずれのピット群も標高175.50m～176.00m前後のほぼ平坦地から確認されており、検出面はL Iおよび盛土直下のL II上面である。重複するものは殆どないが、R26P8・R25P10が10'号溝跡、S23P1・5およびT23P1が06'・07'号溝跡、S23P6が61号土坑と新旧関係にあり、いずれもピットの方が新しい。また、R26P1・2やR25P6・7でピット同士の重複が認められている。

ピット内堆積土は柱痕と掘形埋土とに大別され、L IIを基調とする埋土のものが多し。各ピットの平面形は円形または楕円形のもので大半であり、規模は長径10～30cm前後とやや幅があるが、15～20cm程のものが多し。また、柱痕や根石(石製礎盤)が認められた柱穴の平面規模は相対的に大きい傾向がある。検出面からの深さは概ね10cm前後～40cmの幅に収まるが、5cm前後と浅いもの(R26P6, S23P2・4, U18P3, V18P5等)と40cm以上の深いもの(T23P1, T22P4, U20P2・4, V20P1等)が認められる。柱穴の規模・深浅についての位置的な関連性は看取できない。柱痕は8個程認められ(表5)、幅14～18cm程を測る。また、T21P1・T20P2の掘形内底面からは根石(石製礎盤)と考えられる扁平礫が出土している。

遺物はR26P8, S23P5, T21P1・2・10・13・20, U20P3・5, V21P1等から18点程出土している(表5)。細片で摩滅が著しいため、図示できたのはT21P1出土の根石(石製礎盤)と黄釉四耳壺胴部片である。1は遺存長13cm、厚さ5cm程を呈し、表面には被熱痕が認められる。

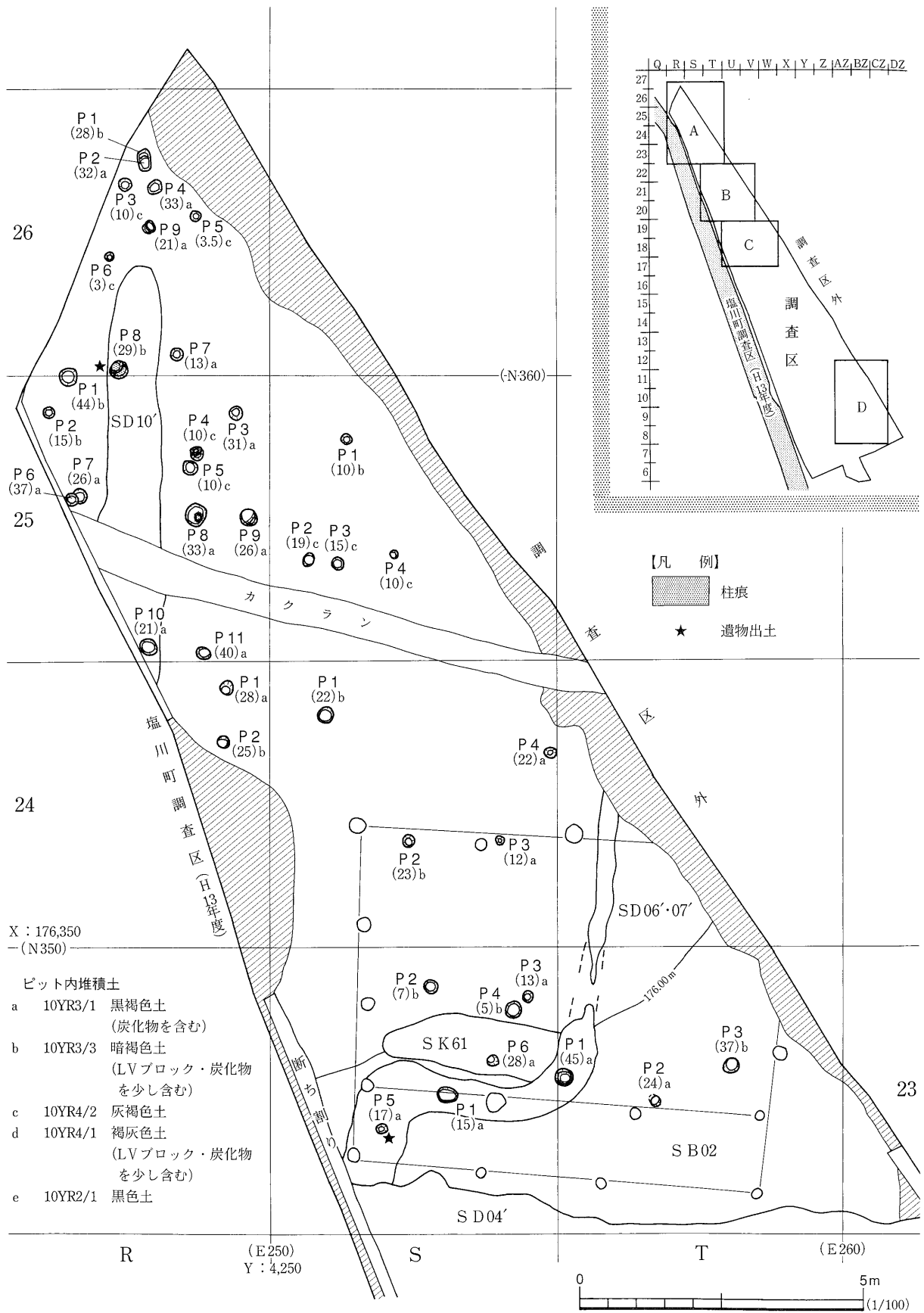


図46 ピット群 (1) A

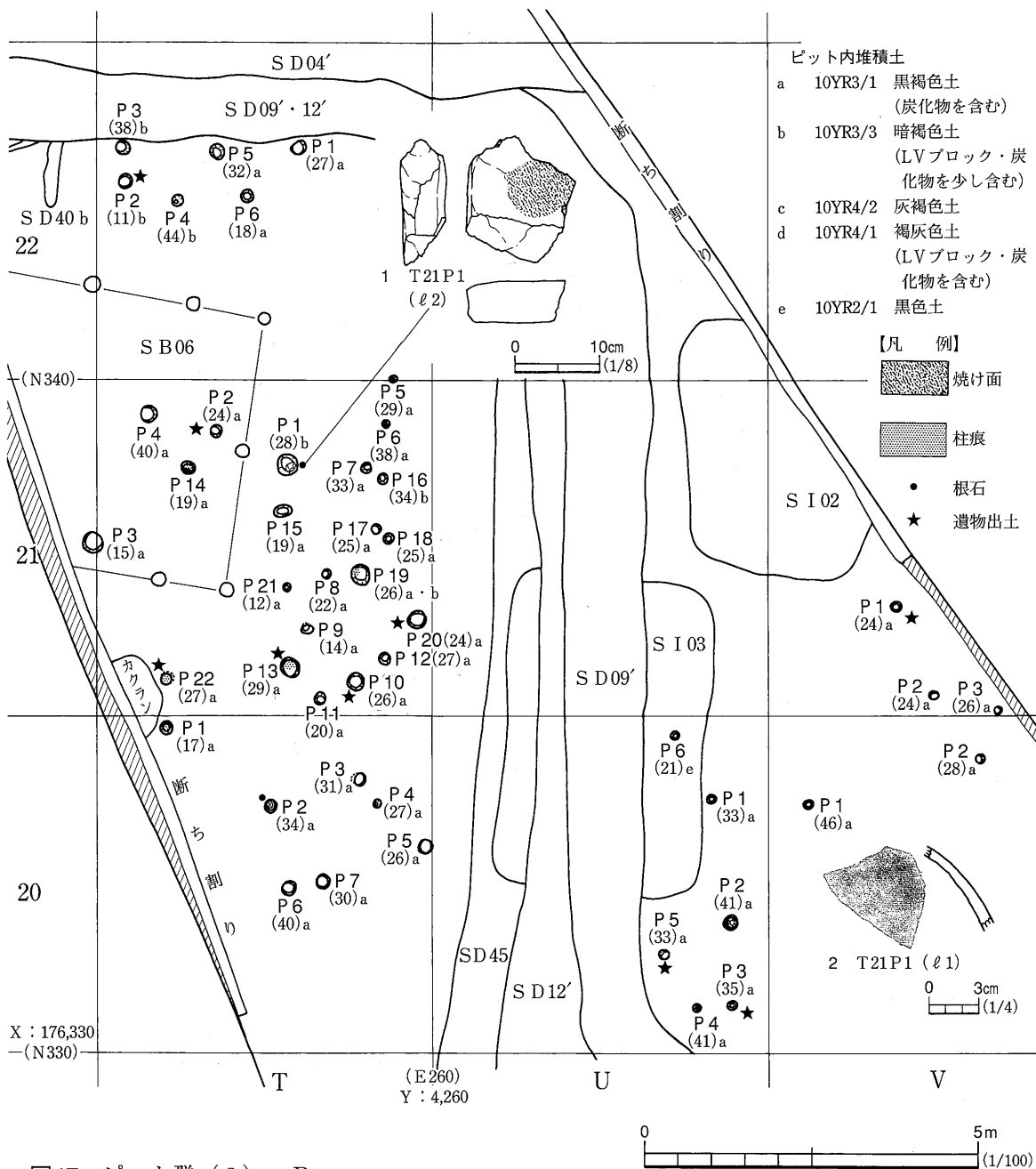


図47 ピット群 (2) B

調査区北側で検出できた多くのピット群の所属時期は、ピット同士の重複や規模・形態等から2小期以上にわたる変遷が想定され、溝跡等との重複関係や出土遺物等から判断して、大きくは平安時代から中世頃の所産と考えられる。(井)

②調査区南側 (D)

本ピット群は調査区南側のZ~CZ-7~11グリッドの範囲で検出された。総計45個程検出され、多くは遺構群が集中して認められた標高175.50m~176.00m前後の平坦地に所在する。検出面はLIおよび盛土直下のLV上面である。重複するものは殆どないが、Z9P1・2が75号土坑、BZ10P6が71号土坑、CZ7P1が3号建物跡(P5)と新旧関係にある。また、AZ9P6・7でピット

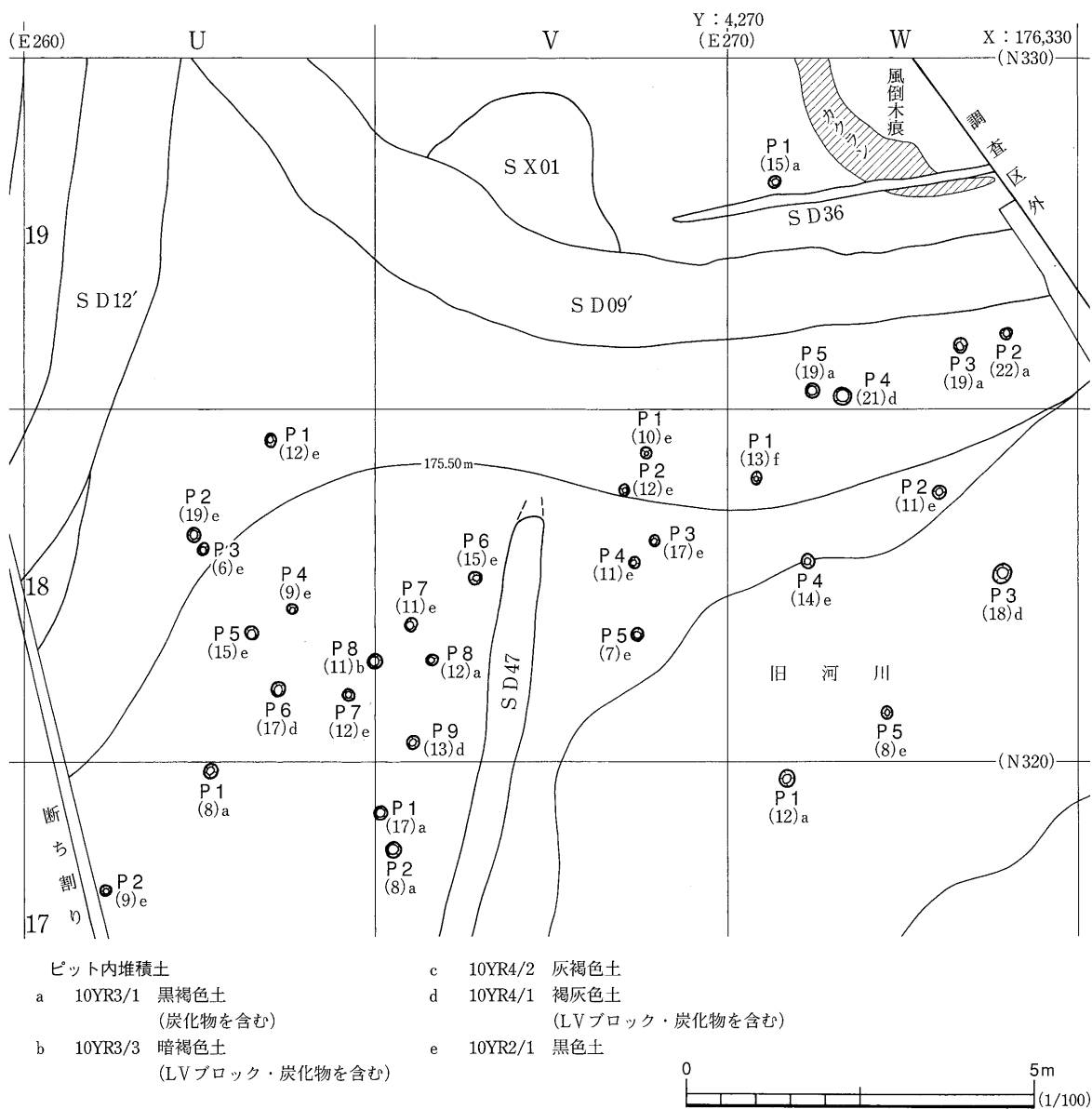


図48 ピット群 (3) C

同士の重複が認められている。

ピット内堆積土は柱痕と掘形埋土とに大別され、概ねLVブロックを含む暗褐色系を基調とする埋土のものが多い。各ピットの平面形は円形または楕円形を基調とし、規模は長径10~25cm前後を測る。柱痕や根石(石製礎盤)が認められた柱穴の平面規模は相対的に大きい傾向がある。検出面からの深さは概ね10cm前後~30cmの幅に収まり、15~20cm程のものが多い。柱痕は7個認められ、柱痕幅14~18cm程を測る。

遺物はAZ8P2およびCZ10P3内から土師器片が各1点出土した。細片で摩滅が著しいため図示できなかったが、BZ11P7, BZ10P1・6の底面からは根石(石製礎盤)と考えられる20cm前後の扁平礫が出土している(表5)。ピット群の明確な所属時期を判断することはできなかったが、重複状況や規模・形態等から2小期以上にわたる変遷が想定される。(井)

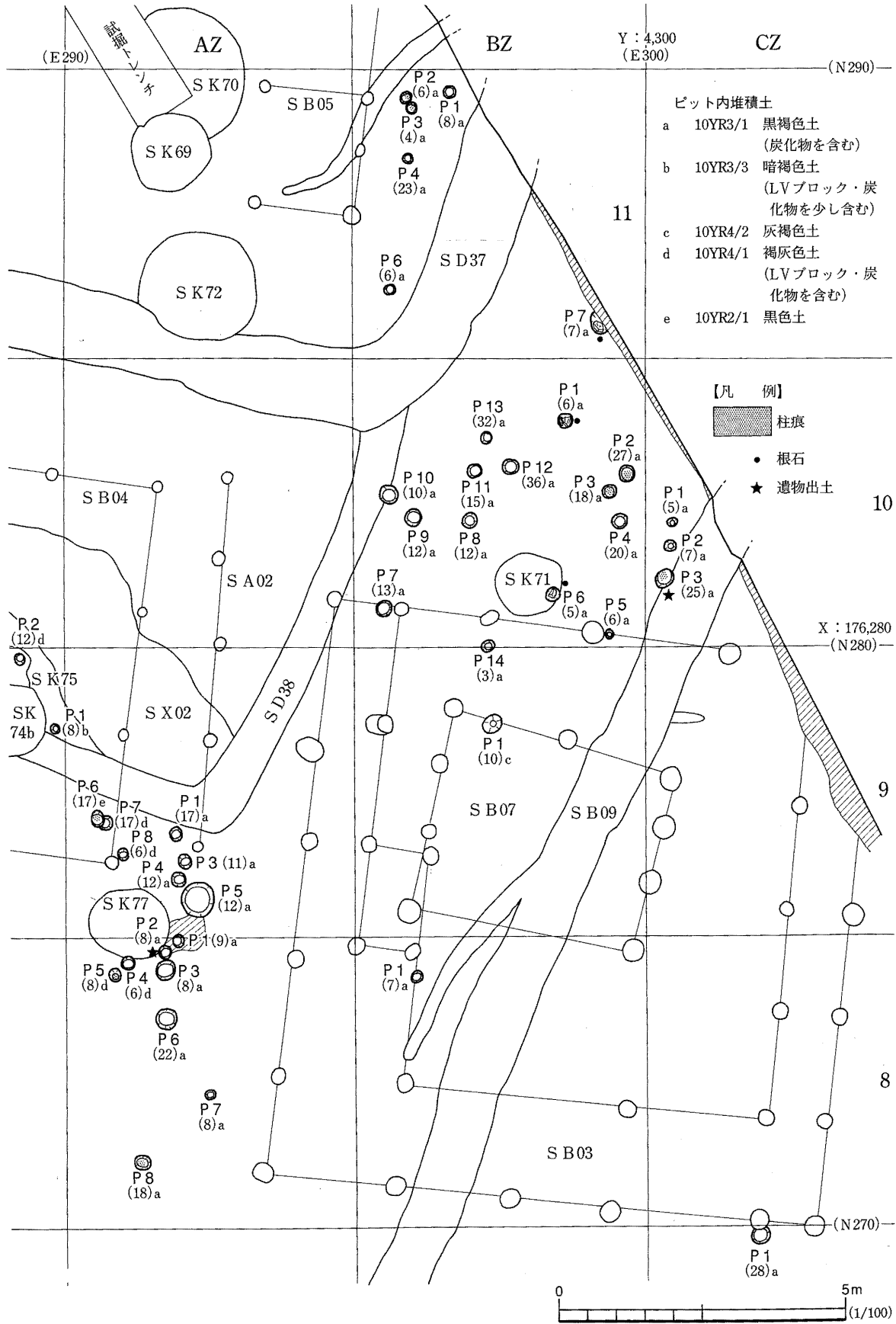


図49 ピット群 D

第7節 遺構外出土遺物

今回の調査では遺構外から総数1,439点（約15%）の遺物が出土した。内訳は土師器・かわらけ類が最も多く約1,000点（約75%）、次いで陶磁器類が約200点（約14%）出土している（図9・表7）。これらの遺構外から出土した遺物のうち、遺存状態の良い須恵器類16点、かわらけ8点、中世陶器2点、貿易陶磁器20点、石器類5点を図50～52に掲載した。出土した遺物の大部分はL IおよびL IIからの出土であり、相対的に調査区北側からかわらけ・貿易陶磁器類など古代末～中世前半の遺物が多く出土している。これは図9のグリッド別出土点数を見ても分かるように、調査区北側の溝跡等の遺構密度が高い区域の周辺で遺物が多く認められてはいるが、調査区南側では希薄な傾向が窺え、遺構内出土遺物と同様な傾向を示している。以下、順次遺物の特徴について概説する。

須恵器 図50-1～16が該当する。須恵器類は平安時代の資料が多く、調査区北半部で出土したものが大半である。器種的には杯・高台付杯（椀）・長頸瓶（瓶類）・甕類などが認められ、甕が主体を占めている。図50-1・2は須恵器杯の破片資料である。1は推定口径12.2cm、回転ヘラ切りである2の底径は6.3cmを測る。5は高台付杯あるいは椀の底部資料で、底径10.2cmを測る。4は長頸瓶の口縁部、6は逆台形状の高台を有する瓶類の底部資料である。7～11・13・14・16は甕類の頸部から底部付近にかけての破片資料である。外面には平行タタキが施され、10には螺状の沈線文が施されている。内面には菊花状あるいは同心円状のアテ具痕が認められるものが多いが、9・16には外面と同様な平行タタキ具が使用されている。15の胴部資料は鉢類、12の平底は推定底径14cmを測り、大甕であろうか。土器の特徴や胎土等から概ね大戸古窯編年（石田：1994）のMH19号～KA107号窯式期頃（9世紀後半頃）に位置付けられる資料であろう。

かわらけ 図50-17～24はロクロ成形による底部回転糸切り・無調整のかわらけである。大半は底部や器壁が厚く、器形的に17～19は小皿、20・23は椀・杯（大皿）、24は柱状高台皿の脚部資料と思われる。小皿は形態的に口径に対し底径がやや小さい小型杯状を呈するもの（17：底径／口径比0.49程）と比較的大きいもの（18・19：底径／口径比0.63前後）がある。18の口端はやや上方に摘み上げられており、19は内湾気味に立ち上がり器高がやや高い。法量は17が推定口径8.2cm、底径4cm、高さ2cm、18が推定口径8.5cm、底径5.2cm、高さ1.6cm、19が推定口径9cm、底径5.8cm、高さ3.2cmを測る。20・23は底径が7cm前後を測り、やや器壁が薄い前者は杯状、後者は椀状の器形を呈するものと思われる。20の身込み部分には、指頭圧痕状の渦状の調整が認められ、中央部はやや凸状となる。21・22は皿類の底部資料、24は皿身部分を欠損する柱状高台の脚部資料である。これらの資料の多くは4'・9'・12'号溝跡出土土器等と器形・特徴が類似するものであり、概ね12世紀頃に位置付けられる資料であろう。

中世陶器 中世陶器は組成的には甕の破片資料が多く、口頸部資料である2点を図示した。図50-25・26は須恵器系中世陶器の口頸部片で、25は推定口径30.6cmを測り、やや大型の甕である。

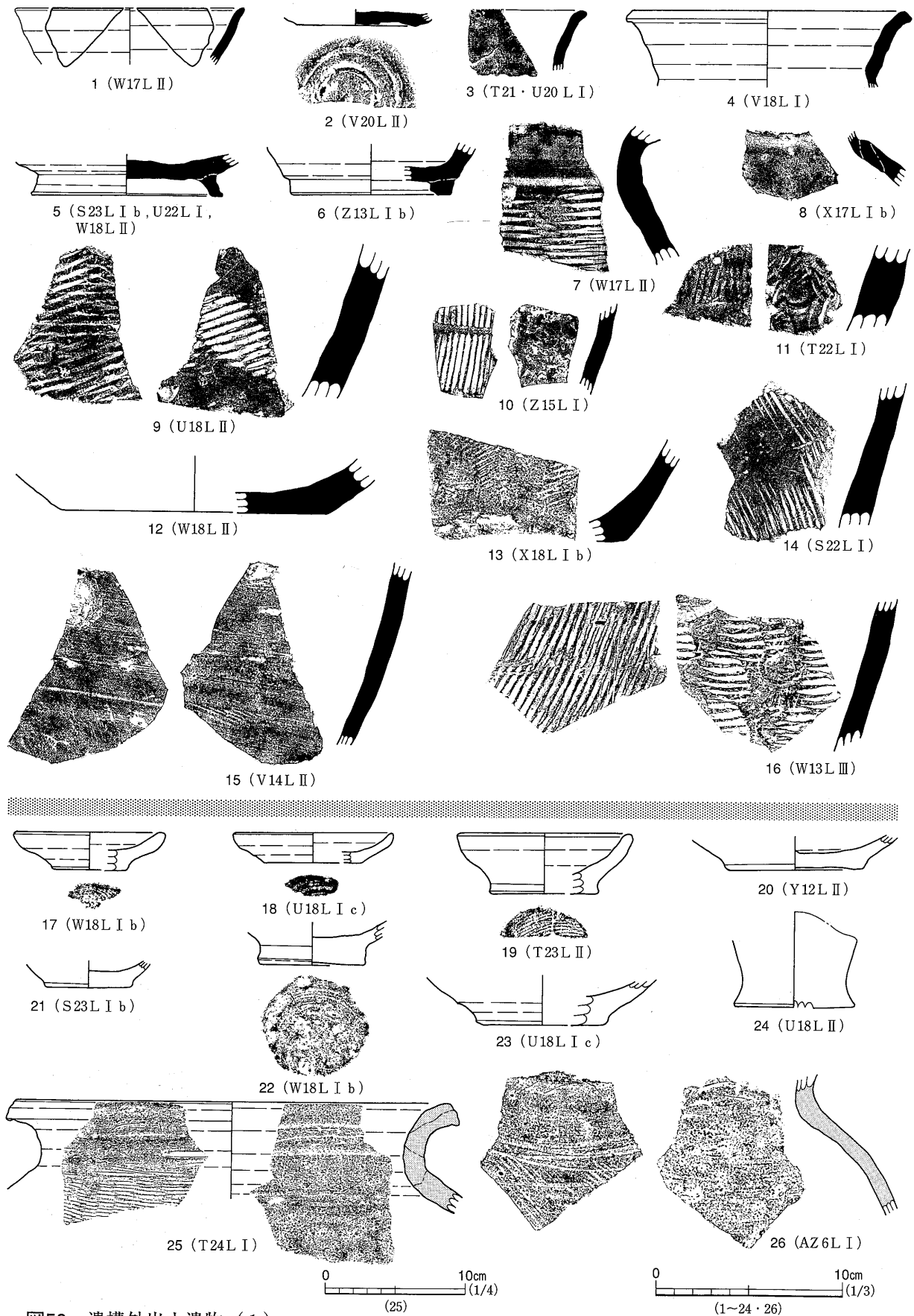


图50 遺構外出土遺物 (1)

共に胎土は緻密・青灰色を呈し、白色鈹物細粒を含む。外面には密なタタキが施され、内面は押圧具のアテ具痕がナデ消されている。いずれも珠洲系中世陶器と判断される。

貿易陶磁器 貿易陶磁器は白磁65点、青磁19点が出土しており、遺存状態の比較的良好な20点について図51-1~20に掲載した。全て破片資料のため全体を把握できた資料はないが、器種構成では白磁・青磁共に碗・皿類が主体となる。白磁優越であり、遺構内出土陶磁器と同様な傾向を示す。

図51-1~13は白磁碗・皿類で、いずれも内外面には半透明な白色系を呈する釉が施釉されている。胎土は、灰白色を呈し緻密である。1~7は玉縁状の口縁、8は口縁端部が強く外反する端反り口縁を有するものである。1・3は2・4~7と比して口縁部の玉縁が小さく、3は被熱を受け釉葉が剥落している。玉縁口縁が小さいものは、1次・2次調査を含めて本資料の2例のみである。2・4~7の推定口径は15.4~16.8cmを測り、6の外面体部下半は露胎となる。内面は無文のものが多く、8の体部上位には一条の沈線とその下位に櫛描文が、9の体部下位には一条の沈線、10

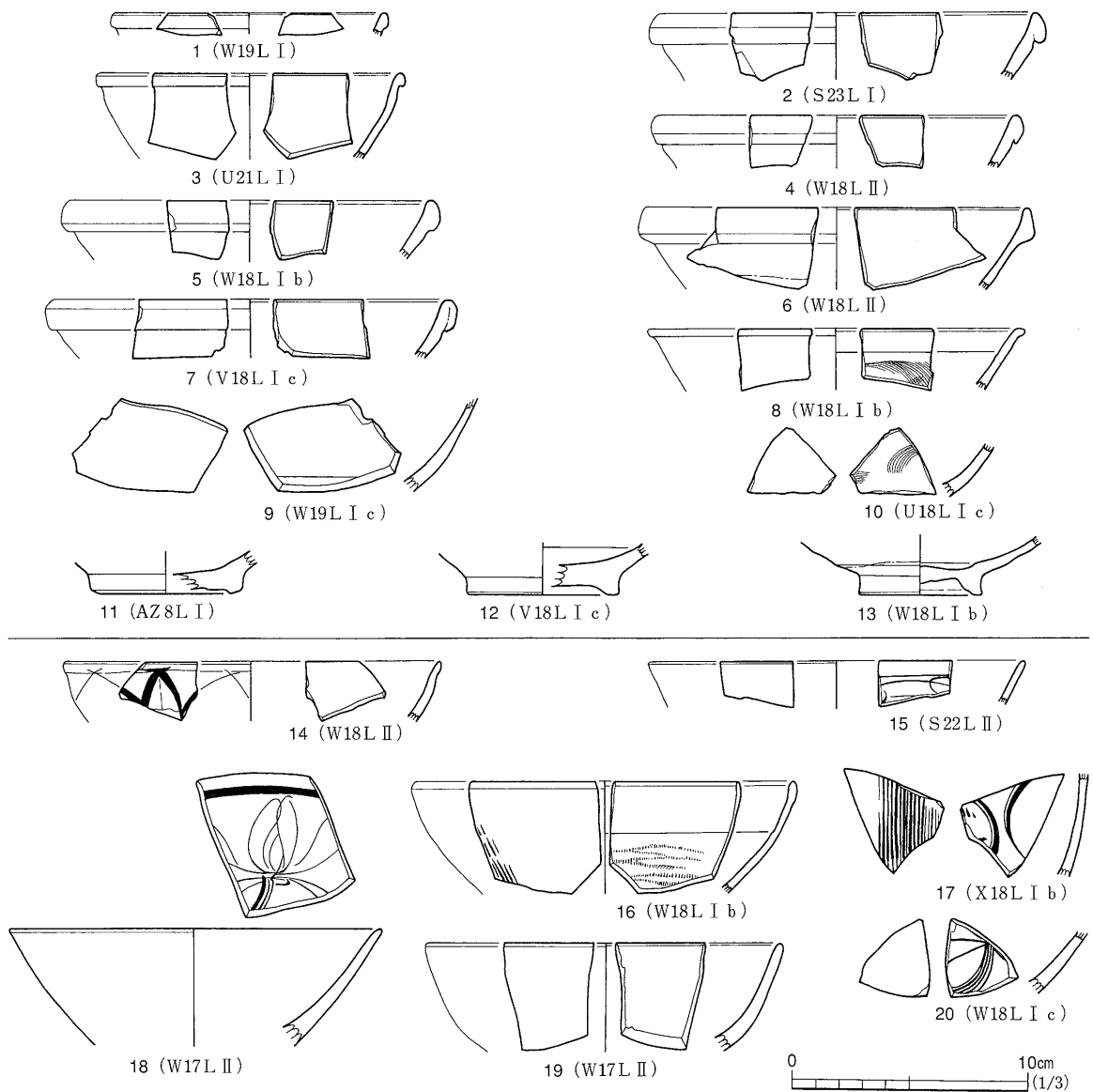


図51 遺構外出土遺物 (2)

には櫛描文が施されている。11～13は底部資料で、11・12は碗、13は皿と思われる。11・12は外面体部下半から底部が露胎、13の内外面は共に釉が剥落しているが、高台部と底部が露胎となる。13の見込み部分には段が認められる。高台部はいずれも逆台形状を呈し、11の脚部は低く、13はやや高い。12の畳付けは丁寧な面取りによる削り調整が施され、断面角頭状となっている。

14～20は青磁碗の破片資料で、内外面には緑色あるいは褐色系の釉が施釉されているが、19は変色して判然としない。いずれも推定口径15～16cm前後を測る。14・15・20は龍泉窯系の青磁碗で、15・20の内面には劃花文、14の外面には片彫調の連弁文が施されている。16・17は同安窯系の青磁碗で、16の外面は櫛描文、内面は猫描文、17の外面は櫛描文、内面は劃花文が施されている。18の内面体部には丁寧な蓮華状(劃花文)の文様が施されている。これらの貿易陶磁器は、大宰府編年(横田・森田：1978・1995) および山本編年(1995)から、概ね12世紀～13世紀に比定される資料である。

砥石 図52-1～3は砥石の欠損品である。1は長形状、2・3は撥状の器形を呈する。1・2の縁辺部には剥離調整が加えられ、面取りが施された部分には使用痕が認められる。3には顕著な面取りと研磨痕が認められ、器表面には被熱を受けた痕跡が認められる。石質は1がホルンフェルス、2・3が流紋岩である。

その他 図52-4は用途不明の扁平な薄片で、縁辺部に部分的な刃部剥離調整が加えられている。5は楕円礫の稜の部分に面取り状の磨耗面が形成されており、擦り面と部分的な被熱を受けた範囲が認められる。6は鉄製品の欠損品で侵蝕による錆が著しい。鉄鍋の破片資料であろうか。(井)

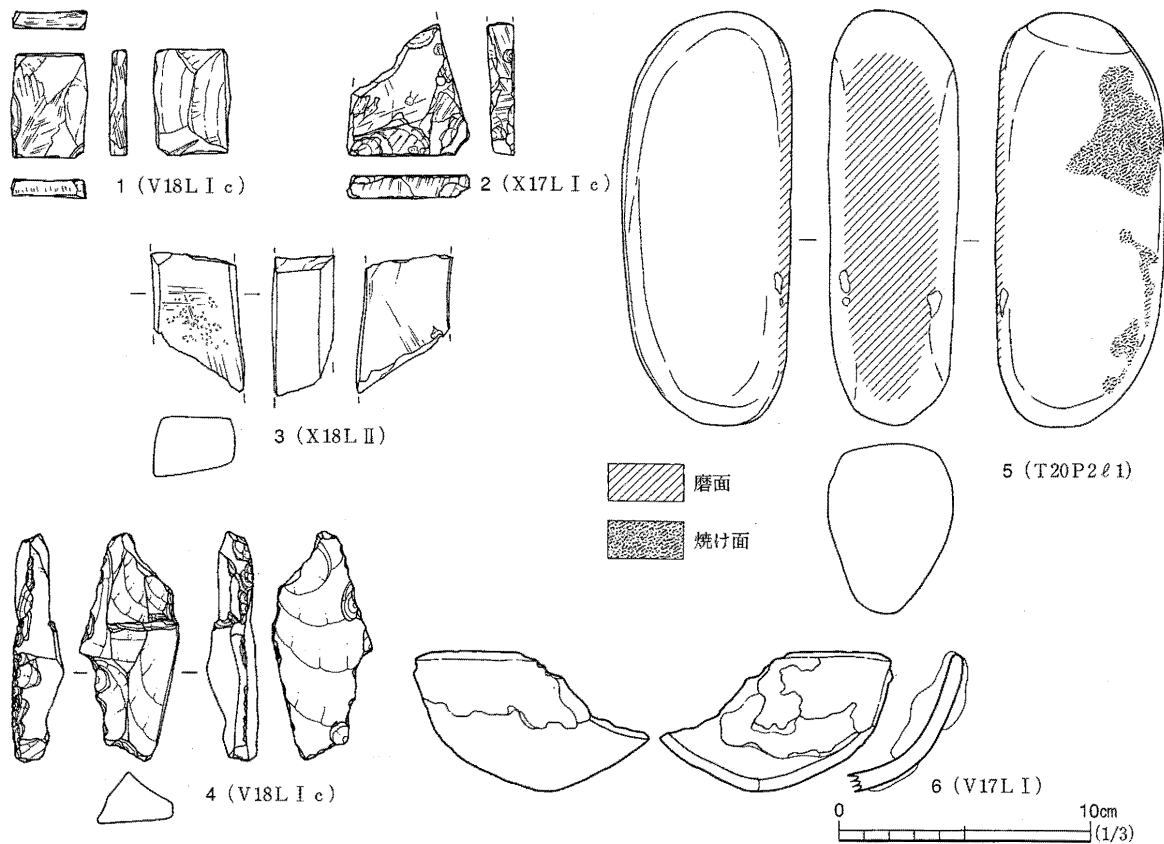


図52 遺構外出土遺物 (3)

表3 掘立柱建物跡一覧(1)

2号建物跡

単位：規模・深さ；cm，底面標高・柱間距離；m

P-No	形状	規模	深さ	底面標高	柱痕	柱間距離	備考
P 1	楕円形	37×32	29	175.70		P 1—P 3 : <3.80>	東側未調査
P 2	円形	20	19	175.90		P1-P2 : 2.18 P2-P3 : 1.25	
P 3	円形	27	29	175.80		P 3—P 7 : 5.73	
P 4	円形	23	17	175.92		P3-P4 : 1.72 P4-P5 : 1.38	
P 5	円形	20	28	175.80		P5-P6 : 1.38	
P 6	隅丸方形	22×20	26	175.82		P6-P7 : 1.30	P6>SD06'・07'
P 7	楕円形	24×18	43	175.52		P 7—P 10 : 7.06	P7>SD06'・07'
P 8	円形	18	26	175.75		P7-P8 : 2.23 P8-P9 : 2.11	
P 9	円形	20	32	175.65		P9-P10 : 2.75	
P 10	円形	18	14	175.73		P 10—P 12 : <2.47>	北側未調査
P 11	円形	18	24	175.73		P10-P11 : 1.35 P11-P12 : 1.13	
P 12	円形	25	25	175.68		P 6—P 11 : 6.87	
P 13	不整形	35×34	19	175.76		P6-P13 : 2.25 P13-P14 : 2.46	P13>SD06'・07'
P 14	円形	17	26	175.73	有	P9-P10 : 2.75	

3号建物跡

P-No	形状	規模	深さ	底面標高	柱痕	柱間距離	備考
P 1	円形	38	15	175.80		P 1—P 4 : <5.40>	北東隅未調査
P 2	円形	23	24	175.64		P1-P2 : 1.80 P2-P3 : 1.80	土器1
P 3	円形	22	28	175.60		P3-P4 : 1.80	かわらけ1
P 4	円形	30	27	175.68	有	P 4—P 9 : 9.60	
P 5	円形	31	21	175.76	有	P4-P5 : 1.00	P5>CZ7P1
P 6	円形	32	24	175.63	有	P5-P6 : 2.54	縄文1
P 7	円形	32	20	175.76	有	P6-P7 : 1.85	
P 8	円形	30	14	175.78		P7-P8 : 1.90 P8-P9 : 2.30	
P 9	楕円形	36×30	19	175.75		P 9—P 14 : 9.90	かわらけ・土師器3
P 10	円形	24	22	175.72		P9-P10 : 1.80	
P 11	円形	28	8	175.88		P10-P11 : 2.05	
P 12	円形	26	16	175.76		P11-P12 : 2.05	
P 13	楕円形	42×33	26	175.62		P12-P13 : 1.50 P13-P14 : 2.60	
P 14	円形	24	24	175.65	有	P 14—P 18 : <7.00>	P 14>SD38
P 15	円形	21	14	175.74		P14-P15 : 1.20	
P 16	楕円形	30×18	10	175.80	有	P15-P16 : 1.50	
P 17	円形	36	6	175.80	根石	P16-P17 : 1.80	
P 18	円形	38	10	175.77	有	P17-P18 : 2.40	
P 19	円形	22	9	175.78		P 19—P 22 : 5.40	
P 20	円形	23	10	175.78		P19-P20 : 1.80	
P 21	円形	26	24	175.62	有	P20-P21 : 1.80 P21-P22 : 1.80	かわらけ・土師器2
P 22	円形	24	6	175.82	有	P 22—P 24 : 6.20	
P 23	円形	28	8	175.80	有	P22-P23 : 2.40 P23-P24 : 3.80	
P 24	円形	25	5	175.83		P 24—P 26 : 4.00	
P 25	円形	22	15	175.75		P24-P25 : 2.30	
P 26	円形	27	18	175.72		P25-P26 : 1.70	
P 27	円形	25	13	175.76		P 27—P 15 : 5.90	
P 28	円形	24	14	175.79		P27-P28 : 1.80	
P 29	楕円形	46×32	15	175.78		P28-P29 : 2.10 P29-P15 : 2.0	土器6

※柱間距離は柱痕があるものは芯々間，他は掘形中心間の値

表4 掘立柱建物跡一覧(2)

4号建物跡

単位：規模・深さ；cm，底面標高・柱間距離；m

P-No.	形状	規模	深さ	底面標高	柱痕	柱間距離	備考
P1	円形	18	31	175.50		P1—P4：6.50	
P2	円形	17	24	175.60		P1—P2：2.15 P2—P3：2.15	
P3	円形	20	21	175.65		P3—P4：2.20	P3 > SX02
P4	円形	23	28	175.58	有	P4—P6：3.65	
P5	円形	19	14	175.65		P4—P5：1.90 P5—P6：1.75	
P6	円形	17	26	175.38		P6—P9：6.50	
P7	円形	16	15	175.50		P6—P7：2.25 P7—P8：2.20	
P8	円形	16	17	175.48		P8—P9：2.05	
P9	円形	15	12	175.56		P9—P1：3.70	
P10	円形	18	25	175.50		P9—P10：1.85 P10—P1：1.85	

5号建物跡

P-No.	形状	規模	深さ	底面標高	柱痕	柱間距離	備考
P1	円形	22	25	175.58		P1—P3：2.05	P1 < SD41
P2	円形	20	12	175.55		P1—P2：0.95	P2 < SD41
P3	円形	28	7	175.70	根石	P2—P3：1.10	
P4	円形	22	31	175.43	有	P3—P4：1.06	
P5	円形	18	26	175.54		P4—P5：2.00 P5—P1：1.75	

6号建物跡

P-No.	形状	規模	深さ	底面標高	柱痕	柱間距離	備考
P1	円形	21	17	175.73		P1—P4：<4.28>	西側延伸
P2	円形	24	37	175.55		P1—P2：1.70 P2—P3：1.52	
P3	円形	21	26	175.67		P3—P4：1.06	
P4	円形	20	21	175.71		P4—P6：4.08	
P5	円形	20	35	175.58		P4—P5：2.00 P5—P6：2.10	P5 > CZ7P1
P6	円形	24	35	175.55		P6—P7：<1.05>	
P7	楕円形	18×14	21	175.69			

7号建物跡

P-No.	形状	規模	深さ	底面標高	柱痕	柱間距離	備考
P1	円形	30	24	175.68	有	P1—P3：3.90	
P2	円形	31	10	175.80		P1—P2：2.00 P2—P3：1.90	不明4
P3	円形	36	12	175.77	有	P3—P6：3.20	
P4	円形	40	14	175.76	有	P3—P4：0.90	
P5	円形	38	12	175.77	有	P4—P5：1.00 P5—P6：1.30	
P6	円形	37	10	175.60	有	P6—P7：3.90	
P7	円形	42	14	175.82	有	P7—P1：3.45	土師器3
P8	円形	22	5	175.88		P7—P8：1.40	
P9	円形	30	24	175.70	有	P8—P9：1.10 P9—P1：0.95	

2号柱列跡

P-No.	形状	規模	深さ	底面標高	柱痕	柱間距離	備考
P1	円形	18	32	175.50		P1—P5：6.50	
P2	円形	22	20	175.68		P1—P2：1.40 P2—P3：1.50	
P3	円形	20	13	175.76		P3—P4：1.70	
P4	円形	21	10	175.80	有	P4—P5：1.90	P4 > SX02
P5	円形	16	15	175.77			

※柱間距離は柱痕があるものは芯々間，他は掘形中心間の値

第2章 遺構と遺物

表5 グリッドピット一覧表

位置 (図番号)	グリッド			柱 痕	出土遺物		重複関係 (新>古)	備 考
	東西	南北	P-No		根石等	土器類		
A (図46)	R	25	4	○				
			8	○				
		26	8	○		縄文：1		
	S	23	5			かわらけ：1		
B (図47)	T	22	2			不明：1		
			1		○	黄釉四耳壺：1		
		2			土師器：1			
		10			不明：1			
		13	○		かわらけ：6			
		14	○					
		19	○					
		20			かわらけ：2			
	20	1	○		柱 材			
		2		○				
	U	20	3			不明：2		
			5			かわらけ：1		
	V	21	1			須恵器：1		
	D (図49)	AZ	9	6	○			P6>P7
8				2		土師器：1		
5			○					
BZ		11	2	○				
			3	○				
			7		○			
		10	1		○			
2			○					
3			○					
6			○		P6>SK71			
CZ	10	3	○		土師器：1			

表6 石製品観察表

単位：cm・g， []：遺存値

挿図 No.	種 別	出土位置 層 位	計 測 値				石 質	備 考
			長 さ	幅	厚 さ	重 さ		
図27-14	砥 石	SD04 ^{U22} ℓ 1・2	[6.5]	[4.2]	[3.1]	101	流紋岩	
図36-4	砥 石	SD09 ^{U21} ℓ 1	[4.0]	[3.0]	[1.3]	29	流紋岩	
図36-5	砥 石	SD09 ^{U21} ℓ 3・4	[7.6]	[2.7]	[1.9]	59	流紋岩	
図43-4	磨製石斧	SD25 ^{Y10} ℓ 3 a	[8.2]	4.7	2.6	156	輝石安山岩	
図43-8	石 匙	AZ9 ^{SD38} ℓ 1	4.7	4.8	0.6	9	頁 岩	
図43-16	砥 石	SD45 ^{U19} ℓ 1	[6.8]	[3.7]	[2.3]	63	流紋岩	
図45-8		SX02 ^{b区} ℓ 1	6.3	2.7	0.5	11	頁 岩	
図45-9	石 鏃	SX02 ^{a・b区} ℓ 2	[1.55]	1.0	0.2	0.3	流紋岩	
図47-1	板石〔根石〕	P1 ^{T21} ℓ 2	[15.0]	[13.0]	5.4	1,240	デイサイト	
図52-1	砥 石	V18 ^{L I c}	4.2	[3.0]	0.7	14	ホルンフェルス	
図52-2	砥 石	X17 ^{L I c}	[5.1]	[4.8]	[1.1]	30	流紋岩	
図52-3	砥 石	X18 ^{L II}	[5.3]	[3.8]	[2.4]	58	流紋岩	
図52-4		V18 ^{L I c}	9.0	4.0	2.0	51	珪質頁岩	
図52-5	擦 石	P2 ^{T20} ℓ 1	16.3	6.7	5.1	900	デイサイト	

第3章 まとめ

今回の調査で検出された遺構と遺物は、前章で述べたとおり平安時代から中世を主体としている。遺物は12世紀～13世紀にかけての在地系かわらけの他、貿易陶磁器・中世陶器類など、溝跡内等から比較的まとまって出土した。遺構群の構成は建物跡や土坑を始めとして、これらを区画する溝跡などからなるが、一部調査区外に延びるものもあり、詳細に言及できなかった部分もある。そのため、ここでは本遺跡の主体を占める古代末～中世の遺物を中心にまとめて行くこととする。

第1節 遺物について

今回の調査で得られた中世の遺物としては、在地系土器（かわらけ）を中心に貿易陶磁器・中世陶器・木質遺物・植物遺体・種子・銅製鈴などがある。かわらけ類が約2,000点（約90%）で最も多くを占め、貿易陶磁器が約180点（約7%）、中世陶器は約80点（約3%）を呈し、概ね9：0.7：0.3の構成比率を示している。これらの土器類は、調査区ほぼ全域に散在していたが、かわらけ・陶磁器類は調査区北側からの出土量が多い傾向にあり、4'・9'・12'号溝跡等からは一括性の高い良好な資料が得られた。また、図53～56には1次調査資料も含めた主な土器組成を示し、図53下・図55下および表7に土器の法量と構成比・組成状況を掲載したが、大枠では1次調査とほぼ類似した傾向を示している。

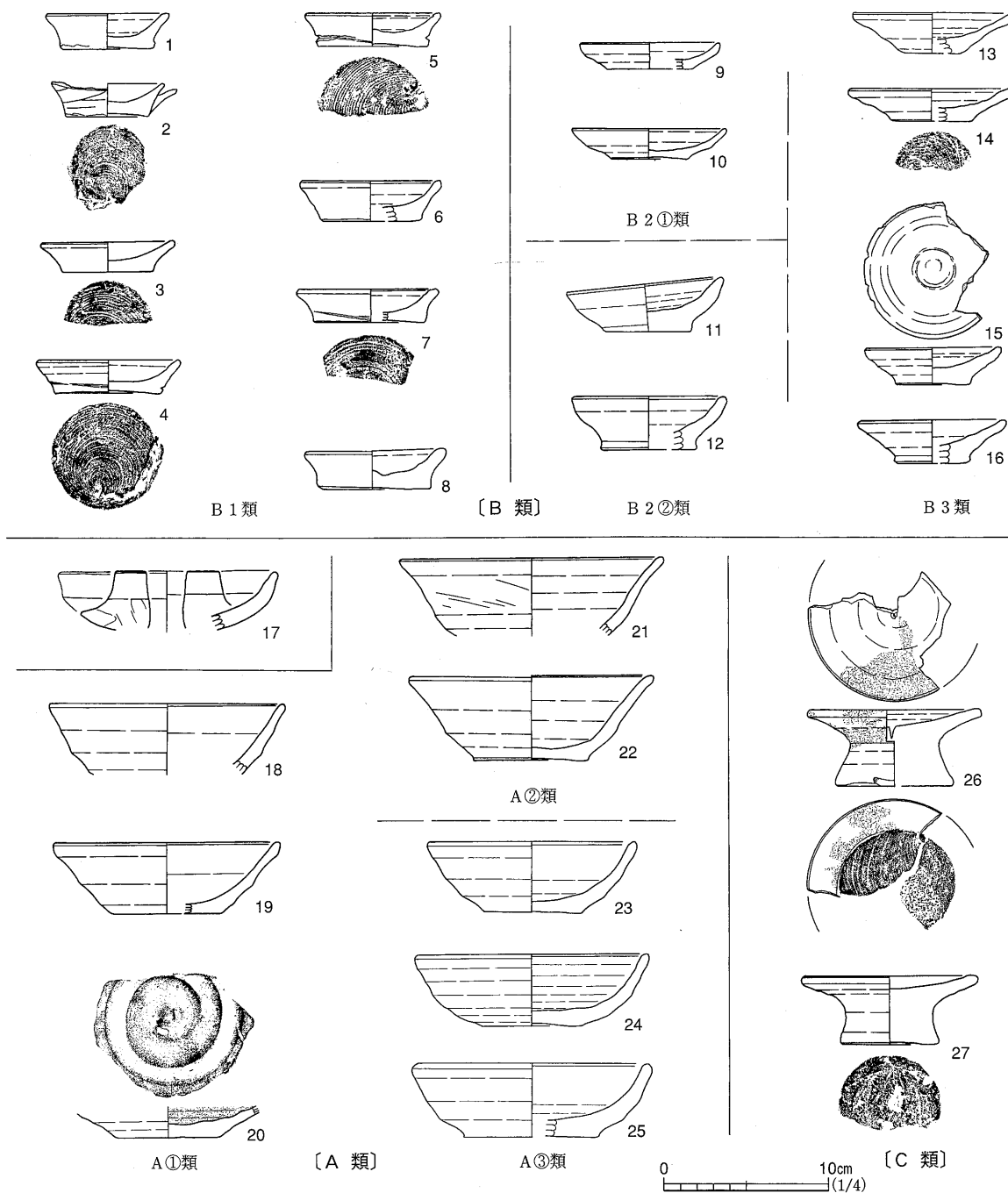
遺物の分類については、基本的には1次調査の分類基準に準拠したが、多彩な共伴関係が認められた在地系かわらけについては必要に応じて分類項目を設けて細別・修正を行った。また、貿易陶磁器類については、混乱を避けるため新たに分類基準は設けず、大宰府編年（横田・森田：1978・1995）および山本編年（山本：1990・1994）分類に準拠した。以下、本遺跡において画期を迎える古代末から中世前半期の遺物の特徴および土器組成を中心にみて行く。

1. 土器組成・器種構成

〔かわらけ〕（図53）

かわらけは手づくね土器が僅かに1点程認められたが、他は全てロクロ成形・回転糸切り・無調整のものであり、総数約3,000点出土している。明確に器形を把握できたものは少ないが、底部器壁が厚いものが多く、器形的に椀・杯類、小皿、柱状高台皿など大きく3器種が認められている（図53）。器種構成比は概ね4：4：1を呈し、椀・杯類と小皿がほぼ同数の傾向にある。破片数からみた個体数は概ね椀・杯類、小皿類が各120個体以上、柱状高台皿が30個体程度と思われる。今回の調査では4'・9'・12'号溝跡等で一括性の高い良好な資料が認められている。

A類 椀・杯状（大皿）のやや大型の器形を呈するもので、手づくね（図53-17）とロクロ成形



出土土器の内訳

項目	かわらけ / 土師器	総点数	土器の遺存部位			器種別 (かわらけ)			備考
			口~底	口縁	底部	碗・杯	小皿	柱状皿	
S I	02	18 / 27		9	9	8	4	1	
	03	109 / 117	1	8	5	6	8		
S D	04'	42 / 75	2	6	12	5	11	3	
	06'・07'	41 / 42		3	7	5	3	2	
	09'・12'	1,525 / 1,761	33	95	123	112	103	27	
遺構内	2,737 / 8,031	42	169	193	147	138	35		
遺構外	1,072 / 1,439	4	26	28	5	6	3		
合計	3,809 / 9,470	46	95	221	152	144	38		

※点数 (全て破片) には未報告分も含まれる。

図53 荒屋敷遺跡出土遺物 (1) かわらけ組成

(図53-18~25)の二者がある。後者が圧倒的に多く、前者は僅かに1点のみ認められた。後者(図53-18~25)の場合、器形的には①体部がやや直線的に外傾するもの(18~20)、②体部上位でやや外反するもの(21・22)、③体部がやや丸味を持って立ち上がるもの(23~25)の大きく3タイプがある。法量的には、口径14cm~16cm前後程、底径/口径比が0.45前後、器高/口径比が0.3~0.35程である(図55下)。器面調整は判然としないが、①・③の体部外面にヘラ状工具による2段あるいは1段のケズリを施すものが僅かに認められ、右回転成形によるものが比較的多い。また、見込み中央部がマウンド状(凸)に形成されるものもあるが、内面底部の横ナデ(身込みのナデ)調整とそれに伴う外面底部の板状圧痕が明瞭に認められたものは殆どない。器壁は比較的①の底部や体部は薄く、③が厚い傾向にあり、①・②が杯状、③が碗形に相当するものと思われる。

B類 小型の皿あるいは杯状の器形を呈するもので、図53-1~16が該当する。A類とほぼ同数の出土量が認められ、比較的遺存状態の良いものが多い。底部の器壁が厚く、器形・法量・調整技法等から大きく下記の3タイプに分類した。

1. 小型の皿状を呈し、器高が2cm前後の浅い器形となるもので、口径7~9cm程、底径/口径比が0.75前後~0.85程のもの(図53-1~8)。
2. 小型の杯状の器形を呈し、体部がやや内湾状となるもので、①比較的体部の器壁が薄手のもの(図53-9・10)と、②厚手の高台状の底部を呈し、器高がやや高くなるもの(図53-11・12)に2細分できる。口径は7~9cm前後程、底径/口径比は0.5~0.6前後である。
3. 体部が直線的に外傾する器形を呈するもので、図53-13~16が該当する。B2②類同様、やや厚手の高台状の底部を持ち、器高がやや高くなるもの(15・16)と2cm前後と低いもの(14)の2種類がある。また、本類には13・14のように、口縁付近が窄まり外反するものがある。口径9cm前後、底径/口径比は0.45~0.55程である。

B類ではB1類の出土量が圧倒的に多く、比率は概ね $B1 : B2 + B3 = 8 : 2$ 程である。調整技法では口縁端部を上方へ摘み上げるものはB1類にやや多い傾向があり、見込み中央のマウンド状(凸)形成は出土量が少ないもののB1・B3類で認められる。また、A類同様に内面底部の横ナデ(身込みのナデ)調整と外面底部における板状圧痕が明瞭に認められたものはない。

C類 浅い皿身にやや高い台形あるいは円筒状の高台部を伴う柱状高台皿である。全体の器形が把握できた資料としては4点程認められている(図53-26・27)。調査区内での出土量はA類・B類と比して少なく、構成比率は1/4程度である(図53下)。9'・12'号溝跡から出土しており、器面調整は比較的丁寧である。法量は口径10.5cm前後、底径5.7~7cm前後、器高4.5cm前後を呈し、器形的には大型のものはなく、やや小型のものが多い。また、26のように用途的に灯明皿として使用された希少な例もある。

〔貿易陶磁器〕(図54・55)

今回の調査で出土した貿易陶磁器は白磁138点、青磁43点など約200点である。その大半は調査区北半からの出土であり、遺構内では4'・9'・12'号溝跡でかわらけや中世陶器類と共に一括性の

高い資料が得られた。1次調査出土資料も含めると約220点を数え、その内訳は白磁約160点、青磁約50点、他10点程で、白磁優越（白磁：青磁＝7：3）の傾向を示す。また、器種構成は碗・皿類が90%以上と主体を占めるが、白磁四耳壺（2点）や 褐釉壺底部片（塩川町：1点）のほか、今回の調査では黄釉褐彩四耳壺（8点：同一個体）や青白磁合子などの希少な資料も僅かに認められた。以下、大宰府分類（横田・森田：1978・1995）・山本編年（山本：1990・1994）に準拠し、土器の特徴・組成を概観する。

①白磁（図54）

白磁は総数約160点程出土しているが、全て破片資料であり、全体の形状を把握できたものはない。器種構成では碗皿類が主体となり、四耳壺など「袋物」は少ない傾向となる。大宰府分類の白磁碗Ⅱ類・Ⅳ類・Ⅴ類のほか、白磁皿Ⅲ類・Ⅳ類、四耳壺Ⅲ類などが僅かに認められている。

白磁碗・皿 白磁碗皿類は総数約140点出土し、貿易陶磁器の主体を占めている。比率的には碗

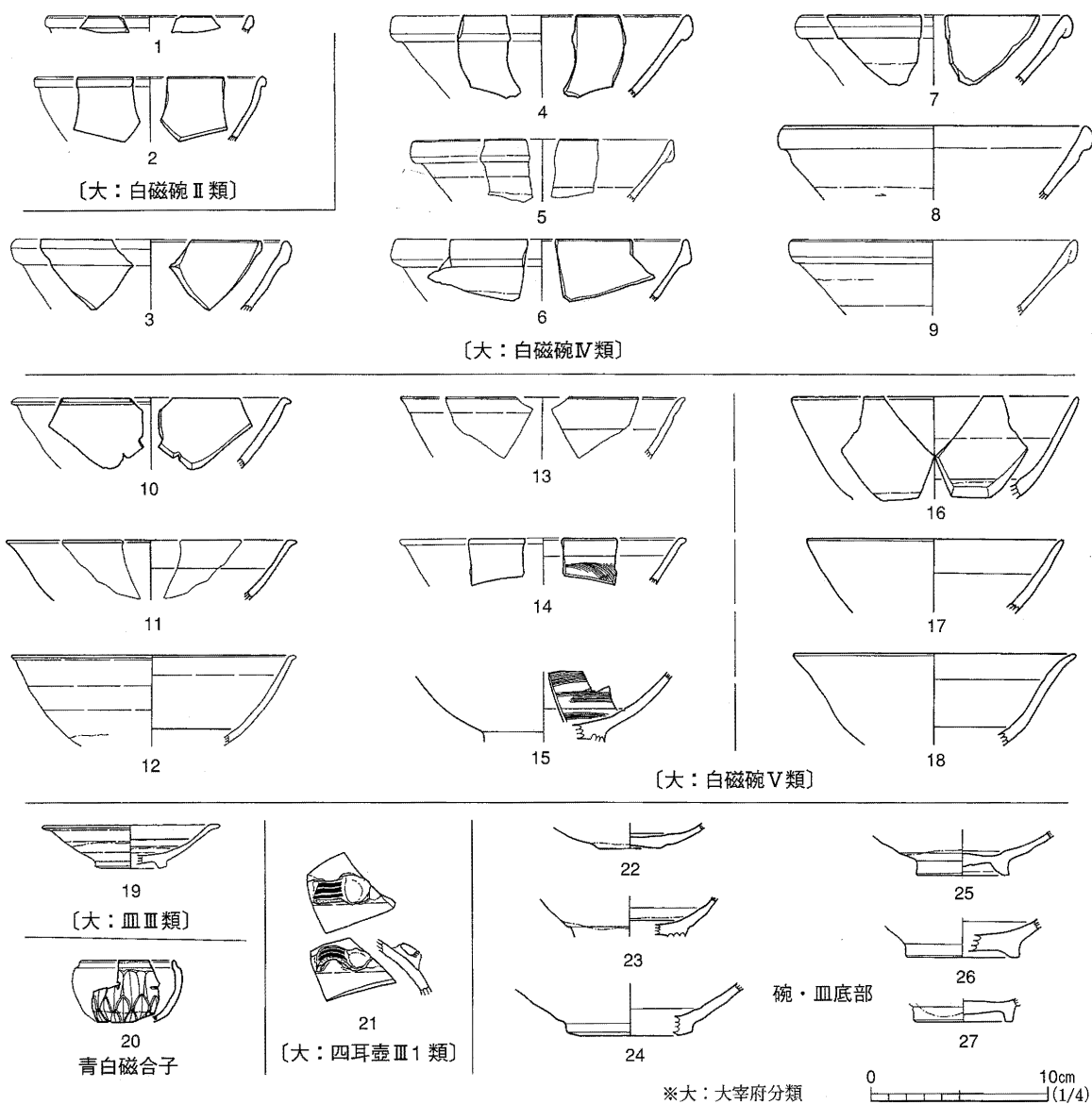


図54 荒屋敷遺跡出土遺物（2） 白磁組成

第3章 まとめ

類が約8割、皿類が2割程度を占めている。器種構成では玉縁口縁の白磁碗Ⅳ類（3～9）や端反口縁（10～14）・体部が直線的に外反する（16～18）白磁碗Ⅴ類が多く、Ⅴ類がⅣ類よりもやや多い傾向がある（碗Ⅳ類：碗Ⅴ類：碗Ⅱ類+皿Ⅲ類他＝4：5：1）。また、白磁碗Ⅳ類ではⅣ2類、碗Ⅴ類ではⅤ4類が比較的多く、小玉縁口縁の白磁碗Ⅱ類が2点程認められたことは特筆される。これら白磁碗の法量は、口径16cm前後～17cm程であり、全て器内外面には白色釉が施釉されているが、外面体部下半および底部は露胎（無釉）となるものが大半である。胎土は緻密で灰白色を呈し、釉調は比較的良好であるが、図54-2のように二次的な被熱を受け釉が剥落しているものも僅かにある。器内面の施文技法では、碗Ⅳ類の体部下位や碗Ⅴ類の体部上位～中位および見込みに沈線が巡る場合が多く、内面見込みの輪状の搔き取り痕が認められたものは少ない傾向にある（5点程）。内面に施される文様は、櫛描文（8点程）などが僅かに認められるが、無文（釉薬のみ）のものが大半を占めている。

白磁皿は碗に比べ出土量は少ないが、口径10cm程の低い高台を有して口縁部が外反する皿Ⅲ類（19：塩川町調査区S D04）が認められており、他に底部片ではあるが皿Ⅳ1b類と思われる資料（22）も出土している。

四耳壺 碗皿類に比べ非常に出土量が少なく、1次調査12号溝跡などで2点程認められている。図54-21は倒卵形の小型四耳壺の耳部で、上胴肩部に横位のブリッジ状の耳が貼り付き、3条の型押沈線が施されている。耳下位と内面には段が認められ、大宰府分類の四耳壺Ⅲ1類と思われる。

②青磁（図55）

青磁は約50点程出土しているが、全て破片資料であり、全体の形状を把握できたものはない。器内外面には緑色あるいは褐色系の釉が施釉され、推定口径は15～16cm前後を測る。器種構成は白磁同様に碗皿類が主体であり、大宰府分類の青磁碗Ⅰ類が大半を占めている。龍泉窯系と同安窯系が認められ、ほぼ同数の出土量である。16・24号土坑、4'・9'・12'号溝跡などから比較的多く出土している。

青磁碗・皿 大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ1類（1・2）、Ⅰ2類（a：3～5，b：13）、Ⅰ4類、Ⅰ5類（6・7）、同安窯系青磁碗Ⅰ類・Ⅲ類（8～11）などが認められており、龍泉窯系青磁碗Ⅰ2類および同安窯系青磁碗Ⅰ類が主体となる。龍泉窯系碗あるいは皿の内面には、劃花文・櫛描文・草花文等が施文されたもの（3～5・12・13）が多く、丁寧な蓮華状の文様が施された希少な例（5）や後出的な外面片彫調連弁文あるいは鎬連弁文（6・7：2点）は僅かな出土量である。また、同安窯系青磁碗（8～11）の外面には、縦位の櫛描文が施されるものが多く、内面に猫描文（10）・劃花文が施文された資料もある。青磁碗類では口縁が外反する碗0類は認められず、皿類では碁笥底状を呈する皿Ⅰ1b類（12：1次調査S K24）が僅かに出土している。

③その他（図54-20，図55-14・15）

白磁・青磁以外の貿易陶磁器としては、9'・12'号溝跡から青白磁合子や黄釉四耳壺のほか、褐釉壺底部（和田：2002）など希少な資料が出土している。いずれも少量の破片出土であり、個体

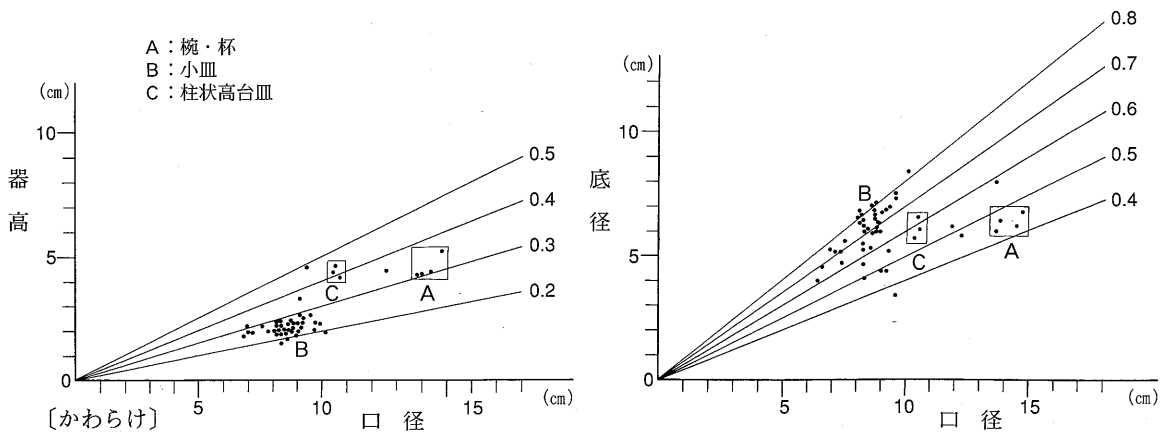
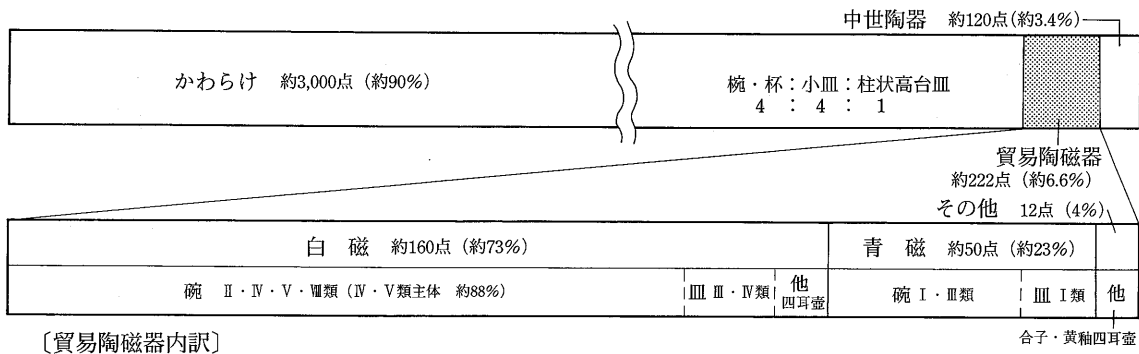
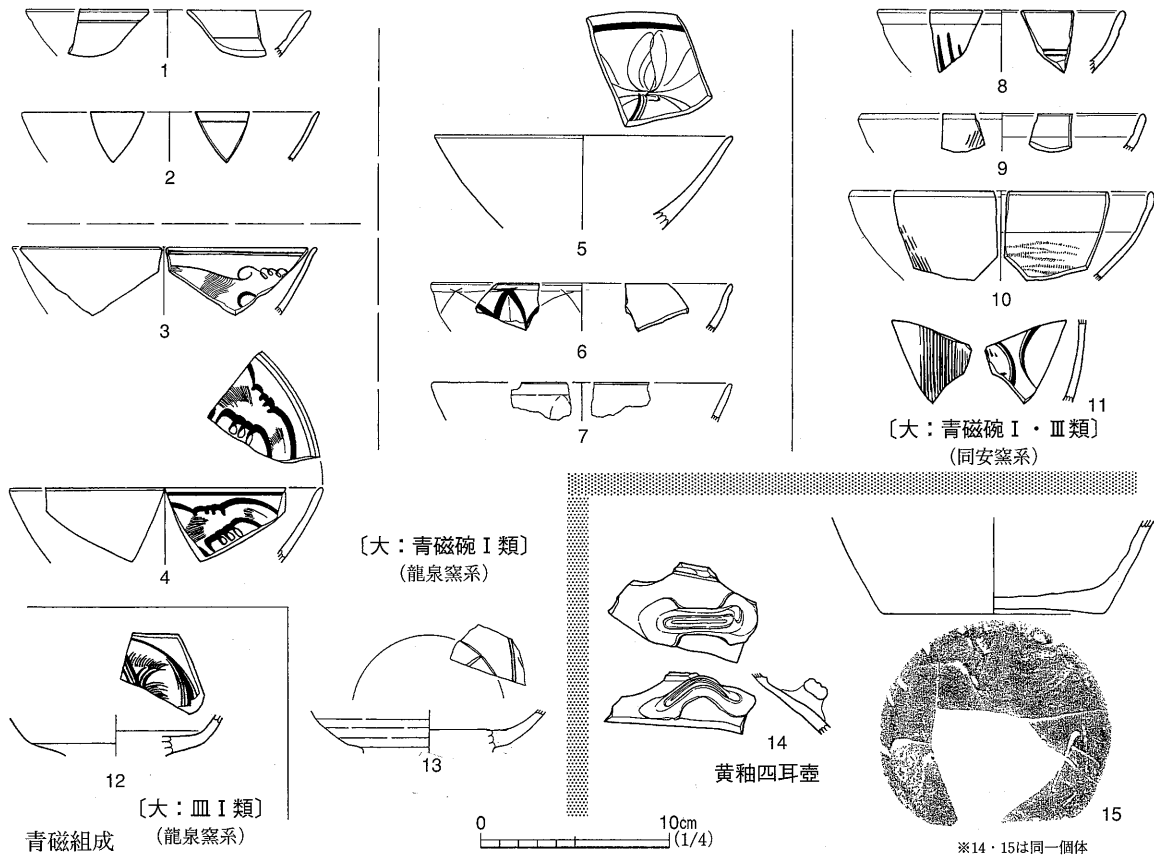


図55 荒屋敷遺跡出土遺物 (3)

数としては1ないし2個体程と思われる。

青白磁合子 図54-20は小型の青白磁合子の身部分で、推定口径5.2cmを測る。外面体部には片彫調鑄連弁文が施され、全面施釉後に口縁部の小範囲に釉削り、体部下位から底部は無釉となる。県内の出土例としては、郡山市馬場中路遺跡で青白磁合子蓋（吉田他：1983）や、本報告や町史では掲載されていないが『福島考古』の中で「山都町御前清水遺跡出土の青白磁合子」として飯村氏の報告例（飯村：1997）が知られる。

黄釉四耳壺 同一個体と考えられる倒卵形の四耳壺の耳部および胴部・底部片が出土している（14・15）。上胴肩部に横位のブリッジ状の耳が貼り付くもの（14）で、耳には2条の型押し沈線が認められる。底径11.8cmを測り、器形的に中型の容器と思われる。黄釉褐彩四耳壺は平泉で唯一類例（完形に復元）が認められ、東日本では希少な資料といえる。

〔中世陶器〕（図56）

今回の調査で出土した中世陶器は、全て破片資料のため器形を把握できたものはないが、遺構内外から約80点出土している。1次調査分・塩川町調査部分も合わせると約120点に上る。器種構成

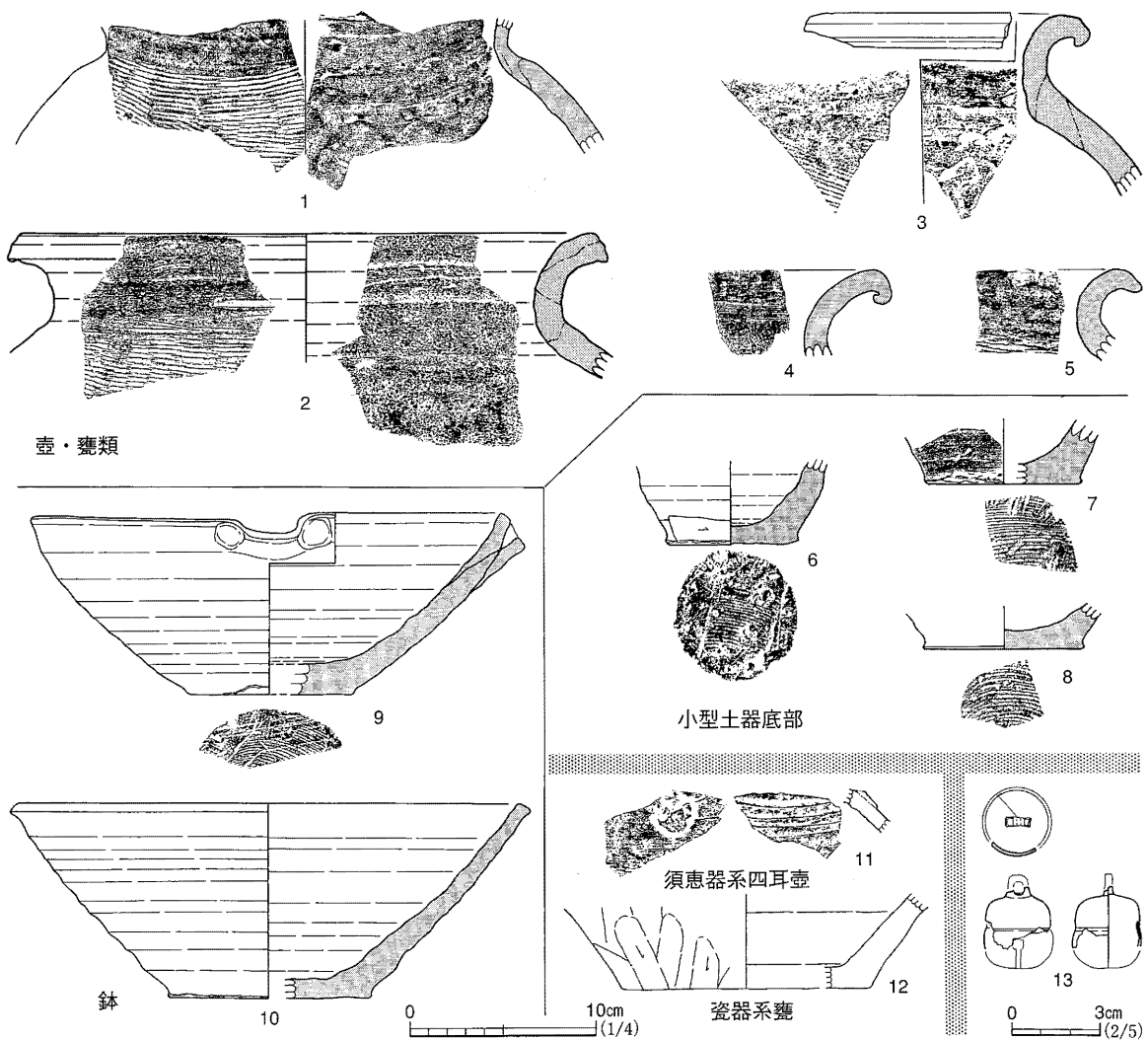


図56 荒屋敷遺跡出土遺物（4） 中世陶器組成他

は壺（中・小壺・四耳壺）・甕（大甕）・鉢が認められ、壺・甕が主体となる。大半が4'・9'・12'号溝跡からの出土であり、1次調査時の16・23・26・54号土坑や1・2号溝跡から僅かに出土している。須恵器系と瓷器系が認められ、前者が圧倒的に多い。

壺・甕類 壺・甕類は出土した中世陶器の約80%を占め、塩川町調査区で出土した図56-12（S D17）の瓷器系中世陶器以外は須恵器系である珠洲系中世陶器となる。須恵器系中世陶器の口縁形態は、明確に把握できるものは少ないが、図56-3（1次調査：S K54+塩川町：S D04）など舌端状に垂下するものが多く、吉岡編年の口縁型式変遷図I3～II2期のa類に属する。胎土は青灰色を基調とし、比較的緻密で白色鉱物細粒を含むものが多い。基本的に甕などは粘土紐巻き上げとタタキ締め成形を施しているものが多く、外面に条溝を刻んだ打圧具による右下がりのタタキ、内面は押圧具のアテ具痕をナデ消すものが大半である。また、底部切り離し技法では静止糸切りのものが多い傾向にあるが、回転糸切りも少なからず存在する。

鉢 今回の2次調査では認められなかったが、これまで16号土坑（10）・23号土坑（9）・2号溝跡から素文で卸し目がない所謂「こね鉢」が3個体程出土している。注口が付く片口鉢は2個体程認められ、9の注口幅は約3cm（指2本分）を測り、吉岡編年の口縁型式変遷図では9がI2～II2期のb2類、10はa3類に相当する。法量は9の底径/口径比は0.35、器高/口径比が0.38、10の底径/口径比は0.40、器高/口径比は0.39である。片口鉢である9が10よりも器形が小さく、底部切り離し技法は9が静止糸切り、10は回転糸切りである。

2. 編年的検討

以上、1次調査出土資料も含めた古代末から中世前半期の遺物について、器種構成やその特徴を概観し、分類・傾向を示してきた。以下では、該期の年代的指標となる在地系土器のかわらけを中心に、遺構内における共伴・伴出状況等も含めた編年的位置付けを考えてみる。

かわらけ かわらけは本遺跡で圧倒的に出土量が多く、約90%と主体を占めている。器種構成は図53に示した通り、A類の厚手の椀・杯とB類の小皿類の大小セット、それにC類とした柱状高台皿となる。A類およびB1類が多く、B2・3類やC類は僅かな出土量となる。個体数はA・B類が各120個体以上、C類が30個体程と思われる、構成比は概ね4：4：1を示す。

本遺跡出土のかわらけの特徴は前述した通り、椀・杯のA類では内面底部の横ナデ（身込みのナデ）とそれに伴う底面の板状圧痕の調整が殆ど認められず、外面体部にヘラ状工具による2段あるいは1段のナデ調整が少数存在する。A③類の中には底部が厚く、やや高台状となり図53-24（S K01）よりも後出的な図53-25（S K06）などの資料もある。また、小皿であるB類ではB1類が圧倒的に多く、口縁端部を上方へ摘み上げる資料や口縁付近が窄まり外反する資料（B3類：図53-13・14）、内湾する薄手の小皿（B2①類：図53-9・10）などが僅かに認められる。A類の一部やB2・3類、C類の柱状高台皿は山都町御前清水遺跡や（西）木流遺跡、桜木遺跡等で類似資料があり、白水阿弥陀堂境域（創建期：1160年）に先行する土器組成内容を孕んでいる。

かわらけの編年についての研究は中近世部会に詳しく、1期は古代末期のおおよそ11世紀代、2

期（12世紀中葉～後葉）を常滑・渥美窯の製品が出土しはじめる12世紀代，3期以降は主に瀬戸の陶器編年を画期として利用し，古瀬戸前期様式が開始される12世紀末から3期（12世紀末～13世紀後葉）とされ，古代と中世とを区分する一つの要素でもある手づくねかわらけの生産開始は県内では概ね2期末頃とされている（1985・1988・1995～1997・2003：中山・飯村・石田・平田）。会津地方では2期に他の地方では見られなかった柱状高台皿が出土（山都町御前清水遺跡）し，会津若松市大戸窯跡（上雨屋64号窯：12世紀末）で2期末あるいは3期初めにあたる手づくね成形の小皿が出土していること，さらに3期になると右回転と手づくね土器が半数ずつ認められ，それ以降（3期～6期）内面底部の身込みナデ調整と底面の板状圧痕の割合が増加傾向にあることなどが指摘されている。また，中山氏は会津地方では第Ⅰ期（12世紀代）でも前葉～中葉には厚手の杯形の椀，小皿，柱状高台の器種構成となり，該期における手づくね土器の存在を予察している（中山：1988）。このことから，中近世部会の2期頃，中山氏の第Ⅰ期に位置付けられ，山都町御前清水遺跡類似の小型の柱状高台皿（図53-26・27）や手づくねかわらけ（図53-17）の出現期を勘案すると，少なくとも13世紀までは下らない資料と判断され，概ね12世紀代に比定される土器群といえよう。

「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」まとめた羽柴氏の論考によれば，柳之御所遺跡52次調査52S E 10（1期）⇒金剛院下層・伽羅御所5次井戸（2期）⇒柳之御所遺跡52次調査52S E 7（3期）に至る変遷過程の中で，1期（1101～1115年頃）・2期（1116～1130年頃）とそれ以降ではかわらけの器種構成の変化があり，手づくねかわらけの出現は4期（1146～1160年頃），12世紀中頃以降とされ，小皿から大型かわらけへの量的変化や法量変化が指摘されている（羽柴：2001）。さらに，小型の柱状高台は基本的には12世紀前半に捉えられており，本遺跡出土のかわらけ類は12世紀でも中頃を主体とする土器群と判断して大過ないと思われる。ただ，土器の器形や成形技法，法量，遺構の重複関係等から少なくとも3小期に時期区分できるものと考えられる。

また，かわらけの用途・機能問題について羽柴氏は「信貴山縁起」や「伴大納言絵巻」等から「小皿のかわらけは菜を盛る容器で，完飯を盛った大型かわらけの周りに放射状に7～8個置かれた」とし，さらに小型の柱状高台は白色土器の下皿を模倣し，大型かわらけの器台と言及している（羽柴：2001・2003）。かわらけは後に酒杯から灯火具や宗教用具など多様な用途拡大へ変貌を遂げるものと推察されるが，C類の小型柱状高台皿の中には灯明皿と考えられる資料もあり（図53-26），用途・生活様式変化を伺わせる先駆的な資料として特筆される。

貿易陶磁器 本遺跡出土の貿易陶磁器は白磁優越（白磁：青磁＝7：3）であり，器種では碗皿類が主体を占め，壺類など「袋物」が少ない傾向にある。白磁は大宰府分類の碗Ⅳ・Ⅴ類を中心に，Ⅱ類が僅かに認められ，青磁は龍泉窯系・同安窯系の碗Ⅰ類が主体となる。本遺跡における器種構成やその特徴を山本編年から窺えば，C期（11世紀後半～12世紀前半）～E期（13世紀前後～前半）の範疇に収まる資料といえる。E期に代表される龍泉窯系青磁碗Ⅰ5類など，一部13世紀まで下る資料もあるが，本遺跡で主体を占める白磁碗Ⅳ2・Ⅴ4類がD期に標識的な存在であることや白磁碗Ⅱ類からⅣ類への変遷過程，およびC期からD期への白磁優勢から青磁優勢への組成変化を勘案

すると、概ねD期（12世紀中～後半）を主体とする年代観と理解される。

白磁・青磁の碗・皿以外である白磁四耳壺（1次調査：図54-21）や黄釉褐彩四耳壺（図55-14・15）、青白磁合子（図54-20）などの資料は、平泉柳之御所遺跡における四耳壺や水注・瓶子など所謂「袋物」の壺類の出土量（42個体以上）と比して出土量は僅かではあるが、身分差を表象し遺跡の性格付けを考える上で一つのメルクマールとして捉えられる資料といえる。

中世陶器 中世陶器は全体の出土総数からみれば約4%弱と少ないが、壺・甕類を中心に、鉢類が僅かに認められている。いずれの資料も胎土や制作技法等から大半が珠洲系中世陶器と判断され、吉岡編年のI新时期～II期の範疇で捉えられる。壺・甕類では図56-3などは新潟県五頭古窯跡群（北越窯跡群）の所産と推察され、同図11の須恵器系四耳壺も同様に珠洲I新时期（12世紀後半）段階に捉えている（和田：2002）。また、図56-12（塩川町報告）は大戸窯産で瓷器系とされる下丸A群段階（13世紀前葉頃）に位置付けられている（和田：2002）。鉢類では素文で卸し目がない所謂「こね鉢」が3個体程認められているが（1次調査：図56-9・10）、片口鉢である9より若干大型の10は後出的な資料といえる。生産地別でみた場合、須恵器系である珠洲窯産系が多く、瓷器系である大戸窯産が僅かに認められているが、底部切り離し技法等の差異から珠洲窯産以外の中世須恵器系窯跡（飯坂毘沙門平窯など）の存在も考えられる。飯村氏が指摘するように、会津盆地周縁における中世地方窯の存在の可能性や瓷器系の大戸古窯跡と須恵器系窯跡の存在競合ないし分業関係が示唆される（飯村：1988）。これらの土器の特徴や法量、調整技法などを勘案すると、数小期に時期区分できるものと考えられるが、概ね吉岡編年の珠洲I新时期（12世紀後半）を中心に、下限は瓷器系の大戸窯下丸A群段階、13世紀前葉頃に位置付けられよう。

小 結 以上、ここまでかわらけを中心とする在地系土器と陶磁器類の個々の遺物について概観してきた。これらの土器組成・器形的特徴を総合的に見た場合、12世紀を中心としてその前後期まで連続している点で年代観は大きく矛盾しないが、概ね12世紀代でも中頃から後半を主体とする土器群と判断される。共伴する遺物相互の編年的位置付けについてなお検討課題を要するが、少なくとも2～4小期に時期区分できるものと思われる。会津地域における該期の遺跡としては、坂下町陣が峯城跡や薬王寺遺跡、貿易陶磁器類の出土は皆無であるが祭祀遺跡の性格が強い山都町御前清水遺跡などが挙げられ、県外では山形県三条遺跡・高瀬遺跡（水戸：1997）や文治5年（1189年）を下限とする岩手県柳之御所跡等とほぼ同時期であると考えられる。ただ、本遺跡ではかわらけ碗・杯と小皿の比率がほぼ同数であることや、鎌倉期に代表される龍泉窯系青磁碗（I 5類）および13世紀前葉頃に位置付けられる瓷器系中世陶器が出土している点を考慮すれば、下限は御前清水遺跡や柳之御所跡よりやや後出的な遺跡と判断される。

なお、上述した遺物以外にも木質遺物や砥石、鈴、植物遺体などが出土している。木質遺物は漆器椀（1次調査：S K22）や羽子板状木製品（塩川町：S K06）のほか、箸・串状製品、篋状製品、井戸杵の材、先端が焦げた棒状の木質遺物などが僅かにある。土坑や溝跡内からの出土が多く、比較的良好的な製品類は汁物としての漆器椀（1点）と井戸跡廃棄に伴う祭祀・呪術的な形代類の羽子

第3章 まとめ

板状木製品（和田：2002）のみで、他は欠損・破損品である。先端がやや尖った筥状・棒状の資料は、用途的に「篝火」の可能性もあるが、45号溝跡等で出土した木質遺物（図43-17）の先端には漆状の付着物が認められており、漆器類の指物木地の窪みや合わせ目に細かい木屑と漆を混ぜたコクソを押し込むための所謂「コクソ筥」（四柳：1995）と考えられる。また、先端が焦げた棒状の木質遺物は松明としての用途が指摘され、箸・串状製品は生活具ばかりでなく挿串・斎串など、青銅製鈴（図56-13）も含めた祭祀・呪術的な可能性が考えられる。この他、生活様式に密着する遺物として、これまで13点程の砥石が出土している。全て欠損・破損品であるが、幅4cm前後の長方形・撥状を呈し、石質は喜多方西部あるいは新潟産と思われる流紋岩が圧倒的に多い。工具としての砥石の存在は、同時に鉄製品の普及を物語るが、精錬・鍛冶関連遺構が示唆される椀型滓や羽口の出土はそれらを裏付ける資料といえる。また、種子類は栽培植物であるモモ(核)・スモモ・ウメのほか、トチノキ・オニグルミなど食用となる有用植物が総数60点が出土している。大半は土坑内からの出土であり、モモ(核)が圧倒的に多い。今回の調査では、70号土坑から食用あるいは薬用と考えられる瓜科植物がほぼ完形に近い状態で2個体程出土したことは特筆される。

今後、漆器類を中心とする食器類や木製品のほか、遺跡からの出土例が殆どない鍋・釜（石製・鉄製）類を含め、該期における遺跡の性格や生活様式の変容、および流通や広域交易を踏まえた歴史的・社会的背景など、改めて検討して行きたいと考える。

3. 遺構内における遺物の共伴関係

本遺跡において、該期の遺構の重複が認められ、遺物が遺構内からまとまって出土したものは4'・9'・12'号溝跡等が挙げられる。そのため、一括性の高い良好な資料が得られた上記資料を中心に、遺構内における遺物の伴出状況を概観してみる（表7）。

これまで検出された遺構内出土遺物の伴出状況をみると、1次調査分としてはSK01・06からかわらけ椀・杯（A③類）と小皿（B1類）、SK16で龍泉窯系青磁碗I類と珠洲系甕・須恵器系鉢（こね鉢）、SK26から白磁碗V類・かわらけ小皿（B1類）・小型の珠洲系中世陶器、SD12からかわらけ小皿（B1類）と白磁碗IV類・四耳壺Ⅲ1類、SD20で白磁碗V類と龍泉窯系青磁碗I類が出土している。この他、SK23から珠洲系片口鉢、SK32で白磁碗IV類、SK43で白磁碗IV類、SK54から珠洲系甕、SD04から白磁皿Ⅲ類（塩川町）が認められている。今回の調査では、SI02・03から白磁碗類と珠洲系中世陶器、それにかかわけ椀・杯と小皿、SK69からかわらけ類と珠洲系中世陶器、SD4'でかわらけ小皿（B1類）・白磁碗V類・龍泉窯系青磁碗I類・同安窯系青磁碗I類・珠洲系壺・甕、SD9'・12'からはかわらけ椀・杯（A類）・小皿（B類）・柱状高台皿（C類）・白磁碗IV・V類・龍泉窯系青磁碗I類・青白磁合子・黄釉四耳壺・珠洲系壺・甕など、SD46からかわらけ類・白磁碗IV・V類が出土している。

遺構の重複関係では、SI03⇒SD9'・12'⇒SD6'・7'⇒SD4'の順で新しくなることが確認されているため、12世紀後半から13世紀の限られた時間幅の中で4～6小期に時期区分できる可能性はある。貿易陶磁器ではSD9'・12'期は白磁優越であり、SD4'期になると青磁優

越になる傾向が認められ、かわらけ類は多彩な器種構成をみせる。かわらけ小皿、特に出土量は少ないもののB2・B3類が顕著であり、B2①類(図53-10:SD9'・12')⇒B3類(図53-14:SD6'・7'⇒図53-15:SD4')の形態変化が窺われる。

これらの遺構の時期比定については、土層堆積状況も考慮しなければならないが、上述の遺物変遷観に準拠すれば概ね下記のようなになる。

		12世紀			13世紀
		前半	中頃	後半	
1 次		SK01 ⇒ SK06	SK23 ⇒ SK16	SK24	
		SK05	SK26・32・43・54		
		SD01・02・12			
2 次			SI03 SI02		
			SD9'・12' ⇒ SD6'・7' ⇒ SD4'		
			SD46 SK69		

第2節 遺構について

今回の調査で検出された遺構は第2章で述べたとおり、竪穴状遺構2軒、建物跡6棟、柱列跡1基、土坑18基、溝跡24条、性格不明遺構2基、それにピット群等である。前回の1次調査分を合わせると、竪穴状遺構3軒、建物跡7棟、柱列跡2基、土坑96基、溝跡75条、性格不明遺構2基、それにピット群等となる。このうち、溝跡については1次調査や塩川町と連続するものや自然流路跡(旧河川跡)もあるため、本来は40条ほどと考えられる。検出された遺構の大半は、重複関係や伴出遺物が希薄であり、調査区外へ延伸する可能性が高い遺構群も多いため、厳密な所属時期・規模・性格・配置など、全体像について不明な部分も多い。特に、1次調査区南半部分や今回の中央付近では、後世の削平・整地等による改変が顕著であり、日常的生活痕跡は極めて希薄である。ここでは、南西側よりも標高が高く、狭い範囲ながら遺跡本来の原形を比較的止めていた調査区東側の遺構群(古代から中世頃)を中心に概観しておく。

1. 遺構群の構成

〔掘立柱建物跡〕

掘立柱建物跡は7棟と少ないながら認められている。比較的旧地形を残す日橋川堤防沿いの南側および東側で多く認められている。南西側の自然堤防上で検出された5間×5間の3面庇のSB3は、他の建物跡と比較して規模や柱配置の規格性など、構造的内容が際立っており、中心的な施設であったと考えられる。ただ、SB3は全体の平面形が方形に近い形状を示すことや複雑な柱穴配置および間取りの多様性が窺われるため、住家とする建物跡とはやや異なる。性格的には寺院跡の存在など宗教的な施設の可能性も推察されるが、明確な共伴遺物がないため、ここでの言及は避け

第3章 まとめ

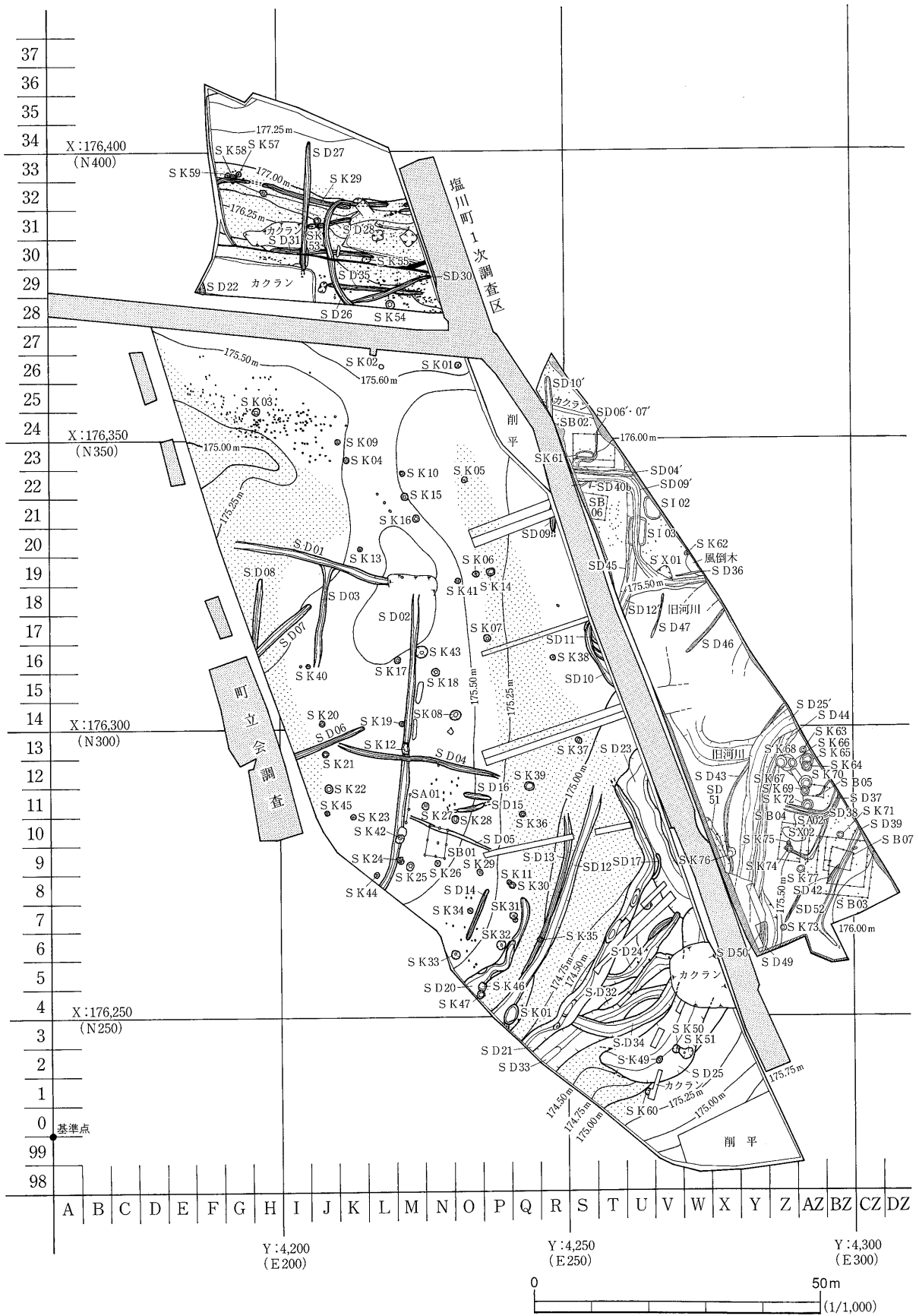


図57 荒屋敷遺跡遺構配置図 (1次・2次)

る。2間×3間の側柱建物跡であるSB4は、大型のSB3と主軸線が一致し、配置的にも付属屋的な施設と考えられ、SA2は2棟の建物跡を区画する柵列と推察される。また、SB5および北東側で確認できたSB6の全体像は不明であるが、3間×4間で南側に庇を持つSB2は、身舎の床面積がSB3に次いで広い。最も小規模な2間×2間の側柱建物跡のSB1は、規模・形状等から簡易的な倉庫としての性格が考えられる。建物跡を構成する柱穴は、四隅や比較的標高が高い東側が深く掘り込まれている場合が多く、僅かではあるが柱の抜き取り痕（SB3）や根石（SB3 P17, SB5 P3）を確認できた柱穴もある。

所属時期については、建物跡を構成する個々の柱穴からの伴出遺物が極めて少ないため、厳密な時期比定には至らないが、重複関係や他の遺構群との関連性から、概ね古代末から中世の範疇で捉えている。ただ、SB3・4と他の建物群については、規模や構造内容、関連遺構の様相などから、性格的にやや異なる可能性が指摘され、所属時期についても前後する可能性を孕んでいる。

〔土坑〕

土坑はこれまで96基確認されている。旧河川との境付近や溝跡に隣接して構築されている場合が多く、1次報文では形態・規模・土層の堆積状況から分類し、属性をまとめた。この分類に準拠すると、平面形ではA類（円形・楕円形基調）が63基（1次：48, 2次：15）、B類（方形基調）が7基（1次）、C類（長方形・不整形）が7基（1次：5, 2次：2）となり、形態分類ではA類が大半を占めている。また、最も多いA類の規模は、径0.8m未満（a）が18基、径0.8～1.1m（b）が21基、径1.2～1.4m（c）が12基、径1.5m以上（d）のものが12基である。検出面からの深さをみると、規模が大きいものほど深くなる傾向があり、最も多いb類では0.8～1.3m、d類で最も深いものはSK31の2.2mを測る。本遺跡で主体を占め、規格性が強いのはAb類であるが、今回の2次調査では南側自然堤防上で比較的にAd類のものが多く確認されたことは特徴的である。

重複関係では12例ほど確認され、今回の調査では大型で深いSK65・68・70から小型のSK64・66・69への造り替えが認められている。2小期あるいは3小期に分類でき、配置的にも隣接する上記土坑群はほぼ同一時期に機能した可能性が高いと考えられる。また、埋土状況では①自然堆積（45基）、②人為的堆積（7基）、③自然堆積＋人為的堆積（25基）が認められ、A類に②・③が多い傾向がある。②・③が示す堆積状況は、遺構配置的に隣接地に同様な土坑の造り替えや他の遺構構築に携わる整地等を行っていた可能性を示唆し、ほぼ限られた時間幅内で継続的に機能していたことを物語る。

本遺跡で主体を占めるA類の大半は、柳之御所跡（三浦・松本：1995）にみる「井戸状遺構」（松本：1995）の範疇に入るものである。性格的には、土壌分析結果からはトイレ遺構である蓋然性は低いと判断されており、木質遺物が多く出土したSK14などはゴミ捨て穴としての機能が推察される。木質遺物のほか、種子類・植物遺体などを多く出土したSK01・05・08・14・32・43・70などは、基本的には同様な性格が推察されるが、Ab類の大半は「貯蔵用トイレ」としての可能性も完全には否定できない。所属時期については、出土遺物が希薄であるため、全ての土坑について

の時期比定は困難であるが、僅かな伴出遺物や上述した土坑の形態・規模・埋土状況等の類似性から判断して、土坑群の大半は本遺跡の主体となる古代末から中世と捉えて置きたい。

〔竪穴状遺構〕

これまで1～3号住居跡として3軒検出されている。いずれも炉跡や柱穴等の付属施設は認められておらず、所謂「竪穴状遺構」や「方形竪穴建物」と呼ばれるものに近似する。形態的には隅丸長方形を基調とし、規模的には最も大きいS I 3が4.8×3m、小規模なS I 1が3.38×2.1mとなるが、検出面からの深さは逆に小規模なS I 1が約40cmと深く、S I 2・3は20cm前後と浅い。出土遺物が希薄であり、明確な所属時期を比定し得ないが、重複関係（S I 1 < S D 12, S D 45 ⇒ S I 3 ⇒ S D 9'・12'）や他遺構の配置なども考慮すると、概ね12世紀～13世紀頃の範疇と捉えて大過ないと思われる。性格的には炉跡や柱穴、入口等の付属施設の欠落が多いが、床面の踏み締まりが僅かに認められることや小規模的な造りであることなどから、一時的な仮小屋や貯蔵庫（場）と考えられる。

飯村氏は会津坂下町古館遺跡等の調査例から、陸奥南部では13世紀後半には竪穴建物跡を主体とする集落が成立し、14世紀前半には終焉を迎えるという（飯村：1996）。また、その集落は街道や川などの交通の要衝に位置し、宗教施設や墓地が混在する傾向があるとし、竪穴建物跡は都市・鎌倉の方形竪穴建築址と同一系譜上にあり、一時的な居住施設、貯蔵施設と推察している。古代の竪穴住居跡とは系譜を異にする中世の竪穴建物跡の発生が、本例頃より窺われる。

〔溝 跡〕

溝跡はこれまでの調査で75条ほど確認されている。前述した通り、この中には連続する溝跡や自然流路（旧河川）等も含まれているため、区画溝などの人工的な遺構としては本来40条ほどと考えられる。また、調査区外にさらに延伸するものもあるため、遺構全体を把握できたものも少なかった。遺構の規模・形態的特徴・土層堆積・他遺構等との関連性を考慮し、遺構の性格を可能な限り分類すると、概ね下記のようなになる。

- ①区画溝・排水溝：S D 1～5・4'・(6'・7')・8・(9'・12')・10'・15・16・26～30
S D 36～39・41～43・45～47
- ②堀 跡 : S D 25'
- ③道跡状遺構 : S D 14・44・52
- ④旧河川・不明 : S D 10～13・17・20～24・32～34・40・48～51

①の区画溝については、幅0.6m～1m前後、深さ15～30cm程の小規模なものが多い。建物跡や土坑などと共に構成されるが、それらの遺構との相互関係が明確に把握できたものは希薄である。一部区画溝と排水機能を兼用するものもあり、S D 15・16（1次）やS D 46・47は排水的な機能を担っていたものと考えられる。

②の堀跡としたS D 25'は、断面形が逆台形の「箱掘り」を呈し、幅3.5m前後、深さ50～95cmを測る大型のものである。自然堤防上となる調査区南側を半弧状に巡るように配置している。やや

屈曲するY・Z-12・13グリッド付近の底面標高が最も低くなり、その南側には数本の杭跡が認められる。日橋川からの引き込み溝とも考えられ、隣接する土坑群等との関連性からも「船着場」としての可能性が指摘される。

③の道跡状遺構としては、SD14・44・52の3条を推定したが、SD44は②のSD25'と関連する可能性が高い。また、SD52は検出面からの深さが浅く、井戸跡と考えられるSK73と建物跡(SB3・4)をほぼ直線的に繋ぐかたちで確認されている。

④の旧河川跡については、南側の自然堤防境付近の荒廃湿地からの検出が多く、連続する溝跡で全体の形状が把握できない不明のものも含めた。平安時代の祭祀関連遺構としての可能性があるSD21(1次)からは、多くの土師器(杯類主体)類と共に内面「蓮華状」、外面底部に「岡本」の線刻が描かれた仏教関連の性格が強い資料も出土し、南端のSD24・25・32~34(1次)からは古墳時代・弥生時代の遺物を多く混入する旧河川跡が検出されている。

溝跡は、遺跡を構成する主要な建物跡や土坑、住居跡などと直接的な重複関係が認められたものは少ないが、SD45⇒SD9'・12'⇒SD6'・7'⇒SD4'の順で新しくなることが確認されている。SD45は平安時代(9世紀頃)の所産と考えられるため、SD9'・12'~SD4'の古代末~中世前半期(12世紀後半~13世紀)の限られた時間幅内で3小期~5小期に時期区分できる可能性はある。①~④における所属時期は、僅かに伴出する遺物が流れ込みによるものが多く、明確な時期比定には至らないが、概ね①~③が古代~中世、④が縄文時代~近世までを包括している。

2. 遺構群の性格

本遺跡の中央東側から南側付近にかけては、遺構の密度が極端に希薄であり、土層の堆積状況等から、旧河川(日橋川)の氾濫による荒廃湿地が当時存在していたものと思われる。今回の調査ではSD25'によって掘り巡らされた自然堤防上の南側部分からは、SB3を中心とする付属施設のSB4やSA2、大型から小型への造り替えが確認されたSK64~70、および円形素掘りの井戸跡と考えられるSK73などが関連遺構として確認されている。明らかな掘り底施設や柵列、土塁、橋跡などや外郭施設は確認できなかった。

これらの遺構群の性格としては、SD25'の堀跡には船が出入りできる機能があったと推察され、「船着場」の存在が指摘される。最も底面標高が低くなるY・Z-12・13グリッド付近には数本の杭跡が検出でき、その南側に隣接して3基1セットとなるSK64~70(大型⇒小型:2小期)が確認できる。湊迎寺としての性格付けには乏しいが、日本海との交易船の象徴的な建物跡としてSB3等が聳え建ち、船着場脇には荷を下ろした際の仮保管庫と推察されるSK64~70が存在していたものと考えられる。ただ、北側とは遺物散布状態や遺構群の性格及び立地的にも様相が異なるため、時期的には前後する可能性はある。

今後、総合的な遺構群の構成や変遷を行い、遺跡の性格付けと評価について再検討を行う必要がある。本遺跡の主体である中世の町割りや地割り、道跡、庭園跡などの存在も推察され、未調査区部分である北西側調査区の成果が待たれる。

第3節 調査の成果

1. 遺跡の性格と歴史的景観

本遺跡の主体となる12世紀から13世紀の歴史は、源平争乱を契機とした激動・変革の時代であり、遺跡を取り巻く会津地域の社会的背景においても大きな影響を及ぼしたものと推察される。本遺跡の最盛期を迎える12世紀後半、保元・平治の乱（1156・1159）後、平氏政権となり、奥州平泉では藤原秀衡の盛期となる。福島県史や「富田家年譜」を基幹とした「会津芦名一族」（林：1979）等によれば、源平合戦が勃発すると、慧日寺・越後国城氏（城四郎長茂）等連合軍は横田河原の合戦（1181年）において、源氏方の木曾義仲に敗れ、会津における勢力は衰退していく。文治五年（1189年）には、源頼朝の側近であった佐原十郎左衛門尉義連（三浦大介義明の子）が会津の地を拝領し、二代盛連の時、6人の嫡子（長男から三男は第一妻、四男から六男は三代執権北条泰時の前妻である矢部禅尼との子）に会津の領地を分領したとされている（長男経連は猪苗代氏：猪苗代町、次男広盛は北田氏：湯川村、三男盛義は藤倉氏：河東町、四男光盛は芦名氏：会津若松市、五男盛時は加納氏：熱塩加納村、六男時連は新宮氏：喜多方市）。ただ、佐原義連および二代盛連を含めたその嫡子の時代においても鎌倉との往来が「吾妻鏡」等から読みとられ、会津地域における佐原氏の領域支配が推進されたのは、三浦氏が北条執権家（時頼）の挑発と謀略によって滅亡する宝治合戦（1247年）や、北条時頼の出家（1256年：佐原三兄弟（光盛・盛時・時連）・信濃三兄弟・結城三兄弟も出家）に伴い権力者との血縁関係が薄くなる13世紀中頃以降と推察される。

1次報文では荒屋敷遺跡周辺の遺跡群を概観し、陣が峯城跡などを「核」とする阿賀川（大川）沿いやその支流にはほぼ等間隔で貿易陶磁器類を出土する遺跡群が配置されている（鏡ノ町遺跡A・B、古屋敷遺跡、男壇遺跡、吉原遺跡、古館遺跡、高畑遺跡など）ことを指摘した。また、本遺跡は大塩川・姥堂川^{おやぶら}・瀬川が集水する日橋川沿いの自然堤防上に立地し、盆地北東部における阿賀川合流地の主要な位置にあることから、地域において歴史的・地理的拠点であった可能性が高く、遺跡の性格としては「津」（川湊）の存在を推察した。本遺跡の主体となる12世紀は、貿易陶磁器の生産・輸入量が全国的に増え、珠洲系中世陶器など日本海を中心とする遠隔地への交易が盛んに行われた時代である。森田氏は貿易陶磁器が一定地域で集中的に出土する状況から、官的・公的交易のみに限らず私交易や荘園内密貿易の存在を指摘し、陶磁器類を掌中に納めたのは在地有力層に限られたという。会津地域では、既に11世紀後半には摂関（近衛）家領で寄進地系とされる蜷川（稲川）荘（河沼郡坂下町周辺）の存在が指摘されており（大石：1969, 中村：2000）、その基盤は充分に整っていたものと考えられる。折しも佐原氏独自の支配体制が窺われはじめる13世紀、在地有力層の管理下の基で津（川湊）としての機能を担った本遺跡は廃絶され、代わって近接する古館遺跡（13世紀後半～）等が最盛期を迎え、北田城・新宮城との関連性が窺える。後の会津における北条得宗領による地頭代等、北条氏との親密な関係が窺えるが、このころ湊の移転・移築がなされ、完

全に掌握されたことが知られる（八重樫：2003）。時の権力者である源氏・北条氏を頂点とした主従制組織に伴う武士層の社会進出など、新たな政治・支配体制への移行が本遺跡から読みとれる。

2. 今後の課題と問題点

荒屋敷遺跡の調査では、これまで縄文・弥生時代、古墳時代などの遺物も僅かに出土しているが、該期の遺構は殆ど認められず、本遺跡の画期は平安時代から中世となる。本遺跡では10世紀後半～11世紀代は空白期となるが、9世紀～10世紀前半と12世紀～13世紀に本遺跡の画期を見出すことができ、今回の調査では12世紀～13世紀の良好な資料を得ることができた。しかし、該期の主要な構成となる住居跡や建物跡、それに関連する溝跡や土坑などについての個々の性格や時期比定に至らなかったものも多く、詳細に言及することができなかつた部分も多い。紙面上の制約もあるが、継続調査の成果を踏まえ、総合的な遺構群の構成や変遷、性格等を明らかにすることが最優先とされる。また、既に1次報文や前節で述べた通り、在地土器群の体系的な編年確立の問題や陶磁器類の生産・流通から廃棄に至る使用頻度（期間・器種構成等）の問題など、中世地方窯の存在や受給関係の実体解明も考慮し、遺物の相互関係を把握することが重要課題の一つと思われる。今後、阿賀川や旧街道筋（越後街道）を起点とする盆地周縁を含めた小地域圏としての空間的問題や、歴史的背景等についてもさらに検討し、遺跡の再評価を行いたい。（井）

引用・参考文献

- | | | |
|--------------|------|-------------------------------------------------------------------|
| 会津藩 編 | 1809 | 『新編会津風土記 巻54』 歴史春秋出版本（第3冊 2001） |
| 会津坂下町教育委員会社会 | 2002 | 「会津坂下町薬王寺遺跡の概要」会津坂下町教育委員会社会文化課 |
| 会津坂下町教育委員会社会 | 2003 | 「会津坂下町陣が峯城跡」 福島県考古学会大会資料 |
| 飯村 均 | 1988 | 「福島県における中世陶器生産の様相」『東国土器研究第1号』
東国土器研究会 |
| 飯村 均 | 1996 | 「中世の「宿」「市」「津」－陸奥南部における中世前期の方形竪穴建物－」
『中世都市研究 3』 中世都市研究会編 新人物往来社 |
| 飯村 均 | 1995 | 「各地の土器様相（東北）」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 |
| 飯村 均 | 1997 | 「中世食器の地域性 東北南部」『国立歴史民俗博物館研究報告第71集』 |
| 飯村 均 | 1997 | 「山都町御前清水遺跡の青白磁合子」『福島考古第38号』 福島県考古学会 |
| 石井 進 | 2002 | 「中世のかたち」『日本の中世1』 中央公論新社 |
| 石田 明夫 | 1994 | 「会津大戸窯（遺物編）」『会津若松市文化財調査報告書第37号』
会津若松市教育委員会 |
| 井 憲治 他 | 2003 | 「荒屋敷遺跡」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告2』 福島県教育委員会 |
| 及川 司 | 1994 | 『特別史跡中尊寺境内 金剛院発掘調査報告書』 平泉教育委員会 |
| 大石直正・小林清治 | 1969 | 「第三編 中世」『福島県史 第一巻 通史編一』 福島県 |
| 大越 忠士 | 1982 | 「一般集落内における掘立柱建物跡について」『福島考古第23号』
福島県考古学会 |
| 小野正敏・飯村均 他 | 2001 | 『図解・日本の中世遺跡』 東京大学出版会 |
| 喜多方市史編纂委員会 | 1995 | 「第二編古代・中世」『喜多方市史4 資料編I』 |
| 佐々木 修 他 | 1988 | 「下遠田館跡」『福島県の中世城館跡』 福島県教育委員会 |

第3章 まとめ

- 史跡白水阿弥陀堂境域復元 1976 『史跡白水阿弥陀堂境域復元整備 1～7次調査報告書』
調査団 ～1983 いわき市教育委員会
- 東北中世考古学会 1997 『東北地方の在出土器・陶磁器Ⅰ－11世紀から19世紀－』第3回研究大会
東北中世考古学会 1998 『東北地方の在出土器・陶磁器Ⅱ－11世紀から19世紀－』第4回研究大会
東北中世考古学会 2003 『中世奥羽の土器・陶磁器』東北中世考古学会編 高志書院
- 中村 五郎 2000 「藍津之城」考－蛭河荘と城氏－『福島史学研究第71号』
中山 雅弘 1985 「福島県における中世土器の覚書」『東洋文化研究第4号』東洋文化研究会
中山 雅弘 1988 「福島県における中世土器の様相」『東国土器研究第1号』東国土器研究会
向井 吉重 1672 『会津旧事雑考』（『会津資料叢書4・7・8』会津資料保存会 1917）
羽柴 直人 2001 「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古学会第13号』
岩手考古学会
- 羽柴 直人 2001 「柱間寸法が語るもの」『掘立と竪穴 中世遺構論の課題』
東北中世考古学会
- 羽柴 直人 2003 「平泉におけるかわらけ用途と機能」『中世奥羽の土器・陶磁器』
東北中世考古学会編 高志書院
- 林 哲 1979 『会津芦名一族』歴史春秋出版株式会社
- 福島県考古学会 1996 「かわらけ編年の再検討－11世紀から19世紀－（その1）」『福島考古第37号』
中近世部会 1997 「かわらけ編年の再検討－11世紀から19世紀－（その2）」『福島考古第38号』
- 古川 利意 1985 「御前清水遺跡」『御前清水遺跡・金山遺跡第7集』山都町教育委員会
古川利意・和田聡 他 1992 「古館遺跡」『阿賀川第Ⅱ期地区遺跡発掘調査報告書』坂下町教育委員会
三浦謙一・松本建速 1995 「柳之御所跡」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集』
（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 水戸 弘美 1997 「三条遺跡・高瀬山遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究集会資料集』
森田勉氏遺稿集 1995 『大宰府陶磁器研究』追悼集刊行会
八重樫 忠郎 1994 「柳之御所跡発掘調査報告書」平泉教育委員会
八重樫 忠郎 2003 「奥羽における輸入陶磁器の受容」『中世奥羽の土器・陶磁器』
東北中世考古学会編 高志書院
- 山本 信夫 他 1990 『貿易陶磁研究 No.10』日本貿易陶磁研究会
山本 信夫 1995 「11. 貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社
湯川村教育委員会 1994 「第3章古代、第4章中世」『湯川村史 第三卷通史』湯川村
横須賀 倫達 2002 「麻生館遺跡」『会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告1』福島県教育委員会
（財）福島県文化振興事業団
- 横田賢次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』
九州歴史資料館
- 四柳 嘉章 1995 「14. 漆器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社
吉岡 康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
吉田 幸一 他 1983 「馬場中路遺跡」『郡山東部Ⅲ』郡山市教育委員会
吉田 生哉 1990 「岸遺跡」『いわき市埋蔵文化財発掘調査報告 第二十七冊』
和田聡・植村泰徳 他 2001 「鏡ノ町遺跡B」『塩川西部地区遺跡発掘調査報告書5』塩川町教育委員会
和田 聡 他 2002 「荒屋敷遺跡－会津縦貫北道路整備に伴う付属施設建設並び同道路関連工事遺跡発掘調査
報告書－」『塩川町文化財調査報告第10集』

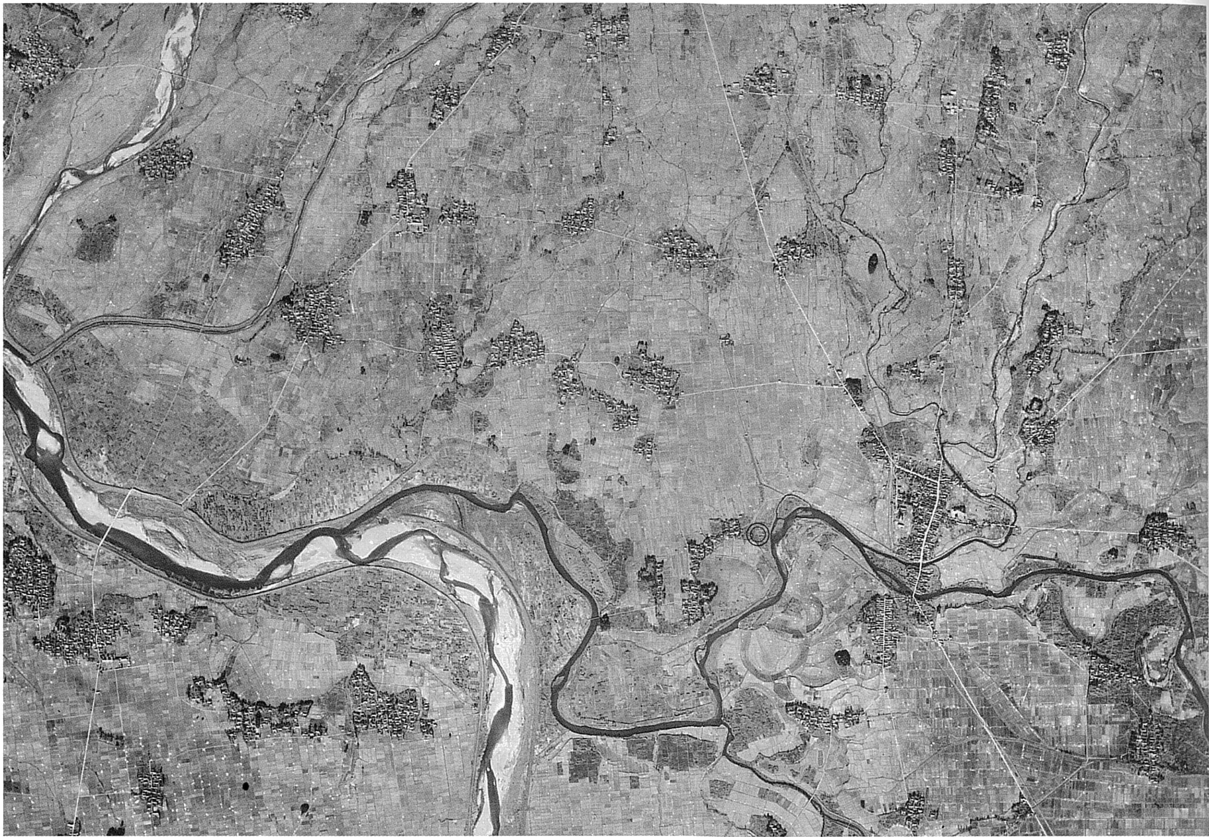
写 真 图 版



1 調査区全景（1次・2次調査区合成：空撮）



2 調査区全景（南西から：空撮）



3 航空写真1 (1947年)



4 航空写真2 (1963年)

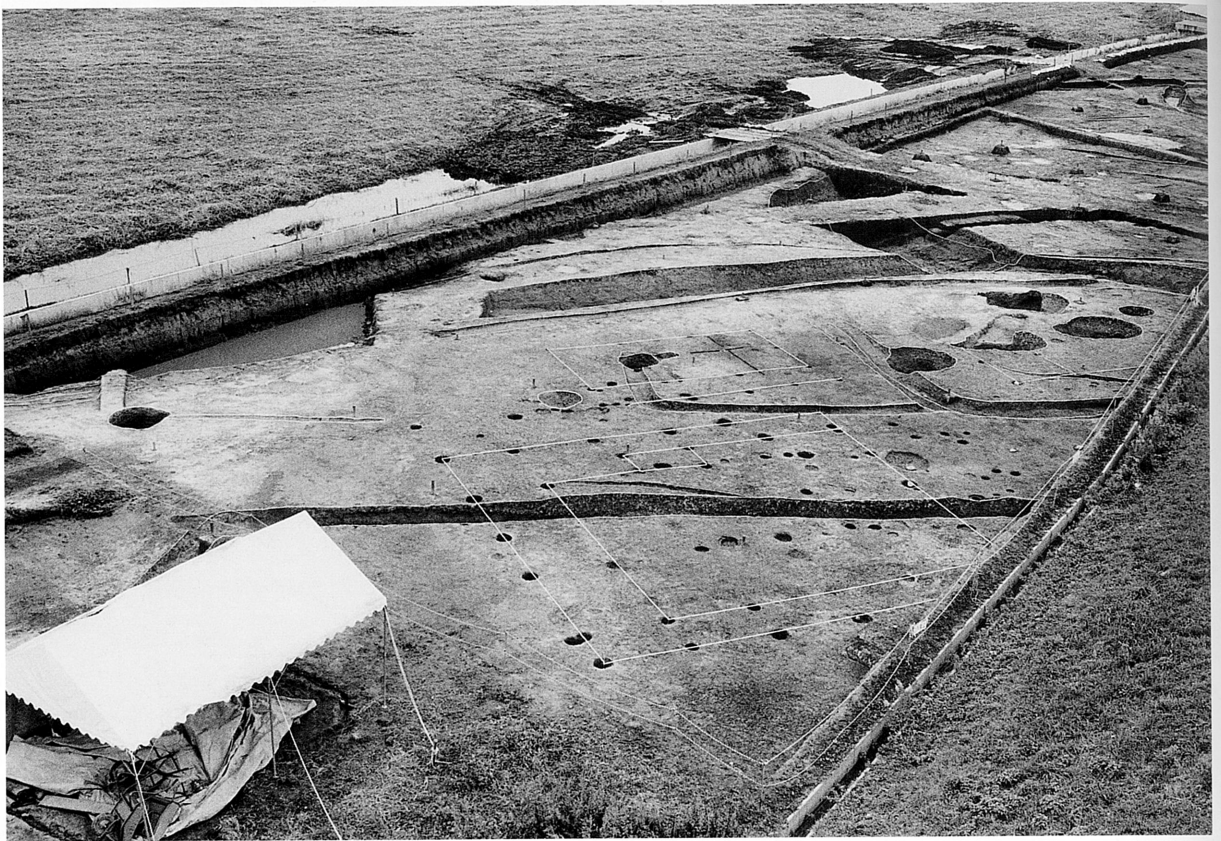
◎：荒屋敷遺跡



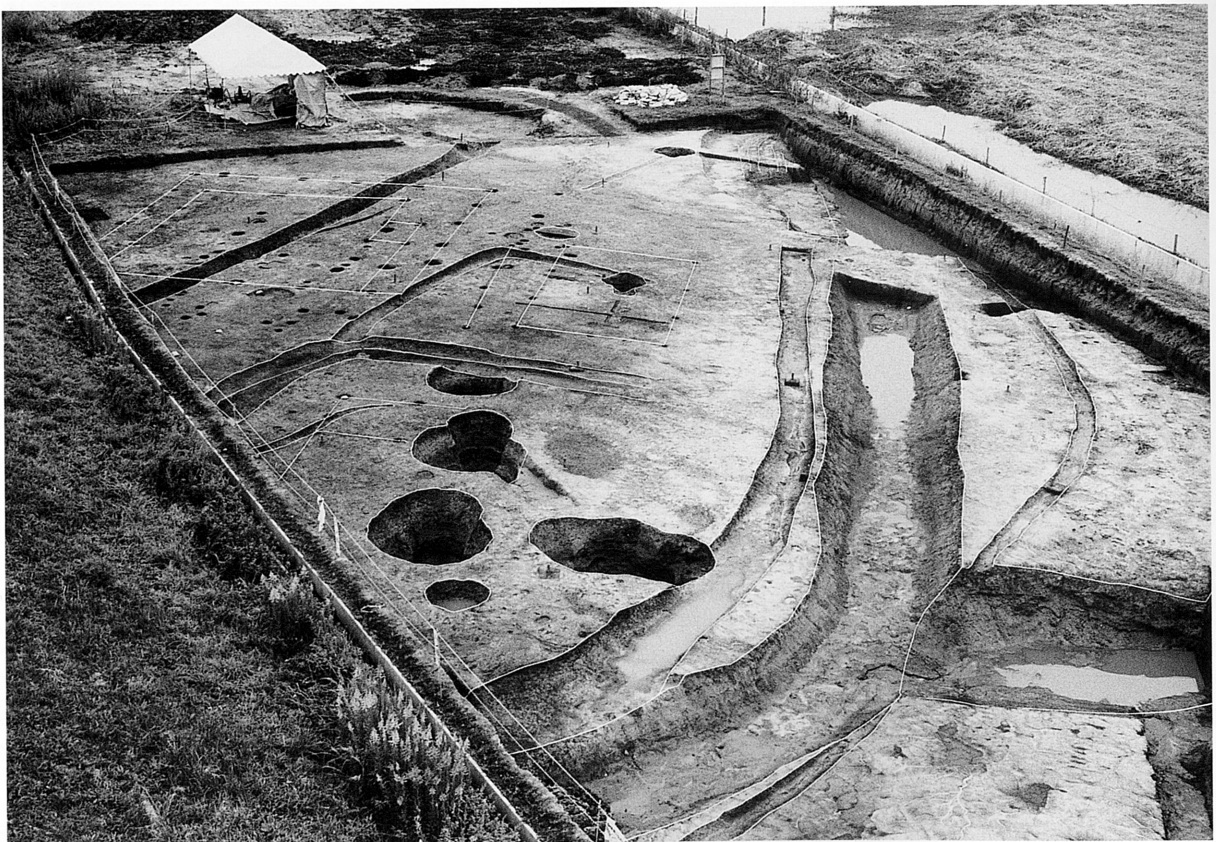
5 調査区北半部1 (南東から)



6 調査区北半部2 (北西から)



7 調査区南半部1 (南東から)



8 調査区南半部2 (北から)



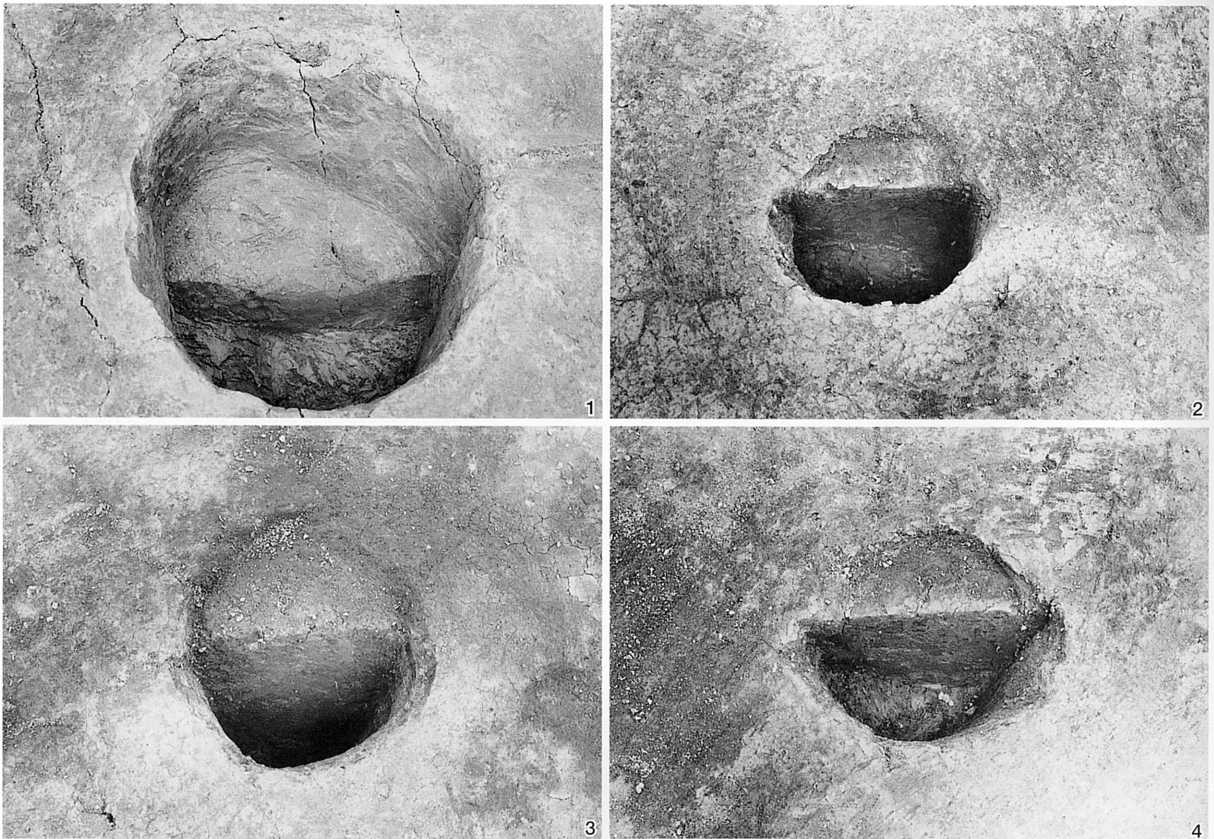
9 2号竖穴状遺構全景（南から）



10 3号竖穴状遺構全景（南から）

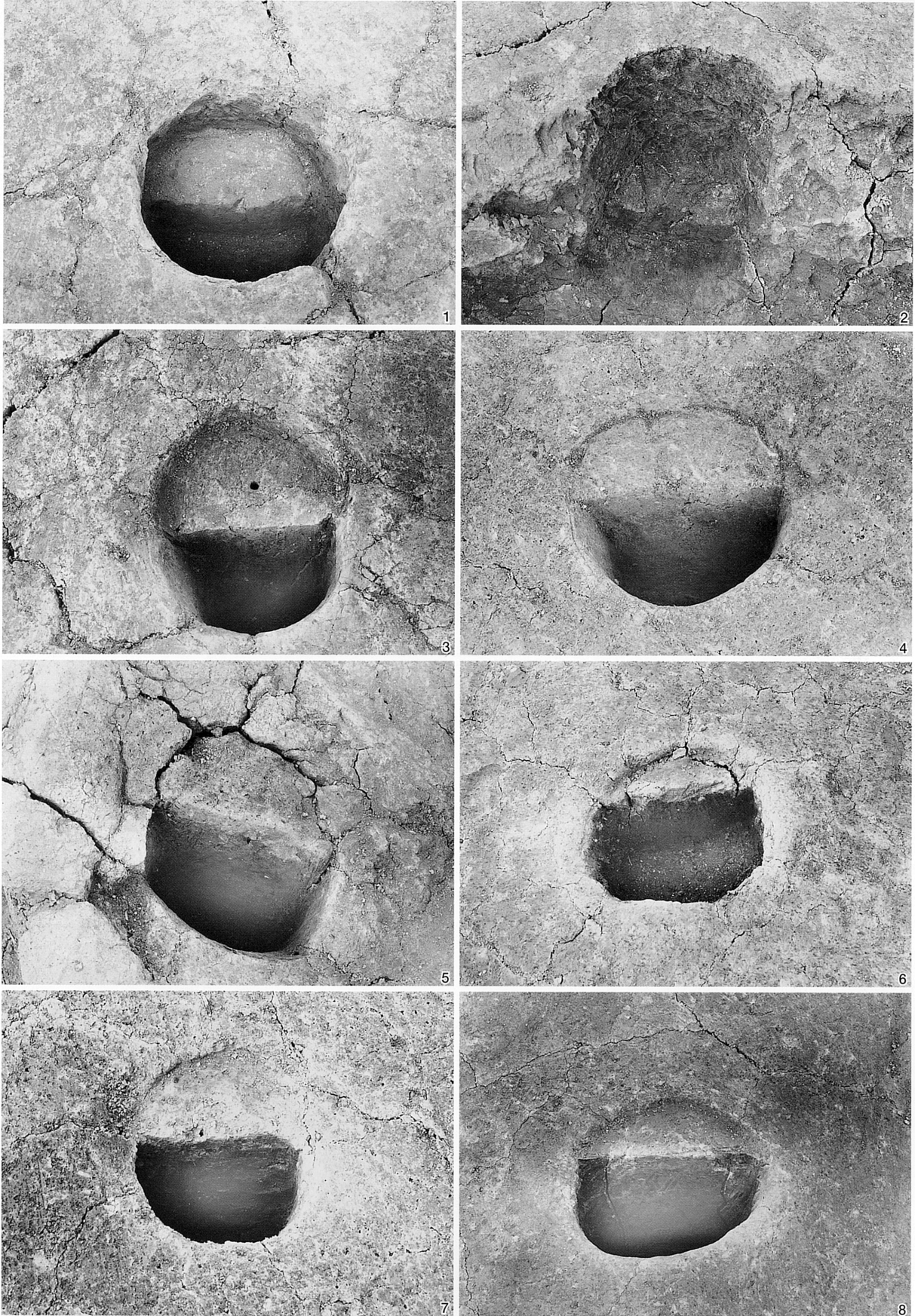


11 2号掘立柱建物跡全景（南から）



12 2号掘立柱建物跡（1）

1 P 1断面（南から） 2 P 2断面（南から）
3 P 3断面（南から） 4 P 4断面（南から）

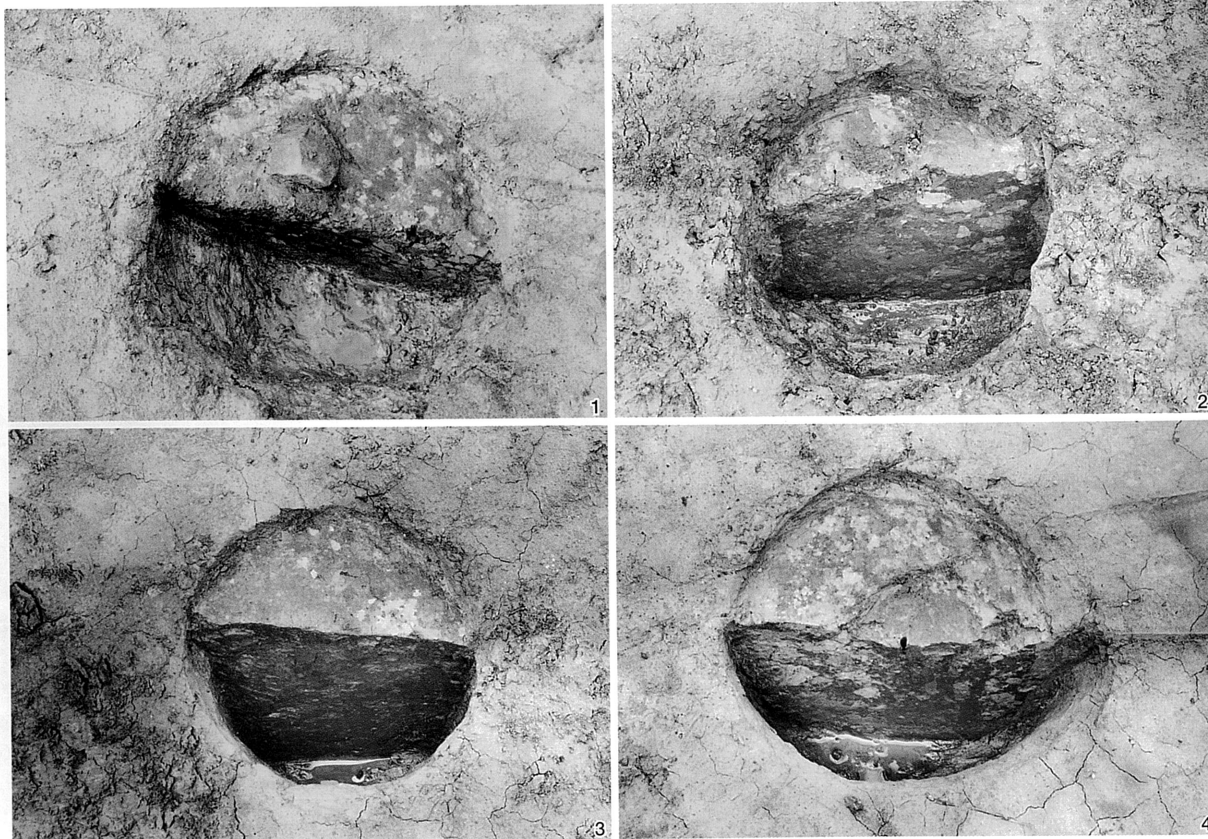


13 2号掘立柱建物跡(2)

- | | | |
|----------------|----------------|----------------|
| 1 P 5断面 (南から) | 2 P 6断面 (南東から) | 3 P 7断面 (南から) |
| 4 P 8断面 (南から) | 5 P 9断面 (南東から) | 6 P 10断面 (南から) |
| 7 P 11断面 (南から) | 8 P 14断面 (南から) | |

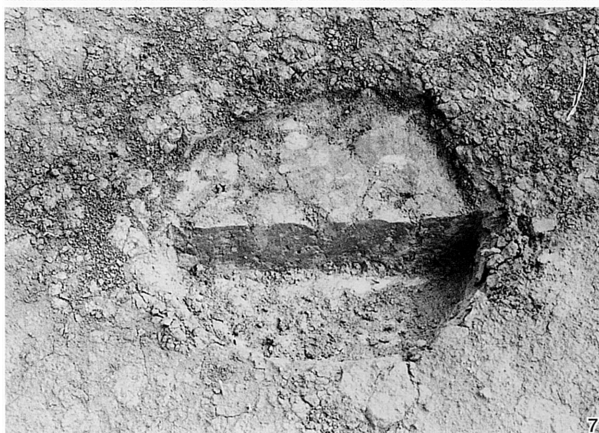
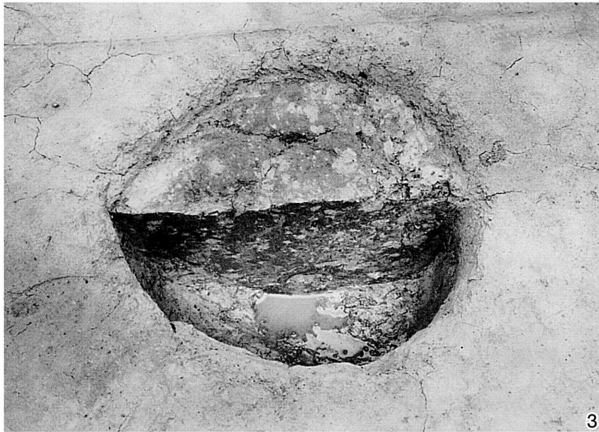
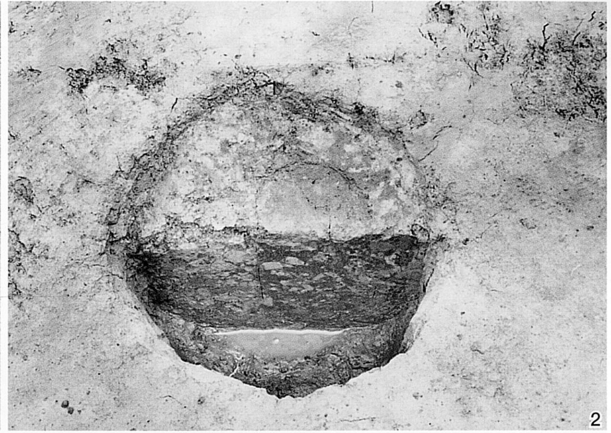
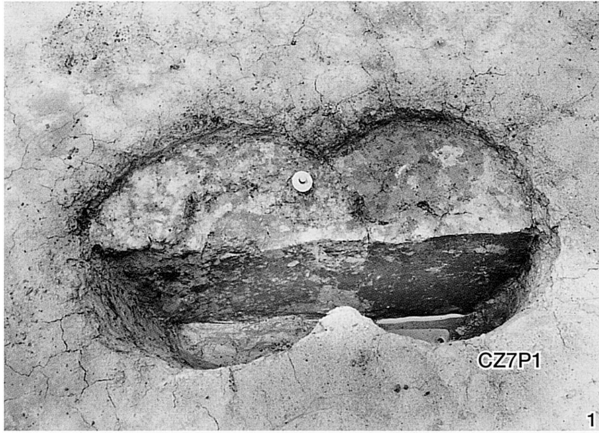


14 3号掘立柱建物跡全景（南東から）



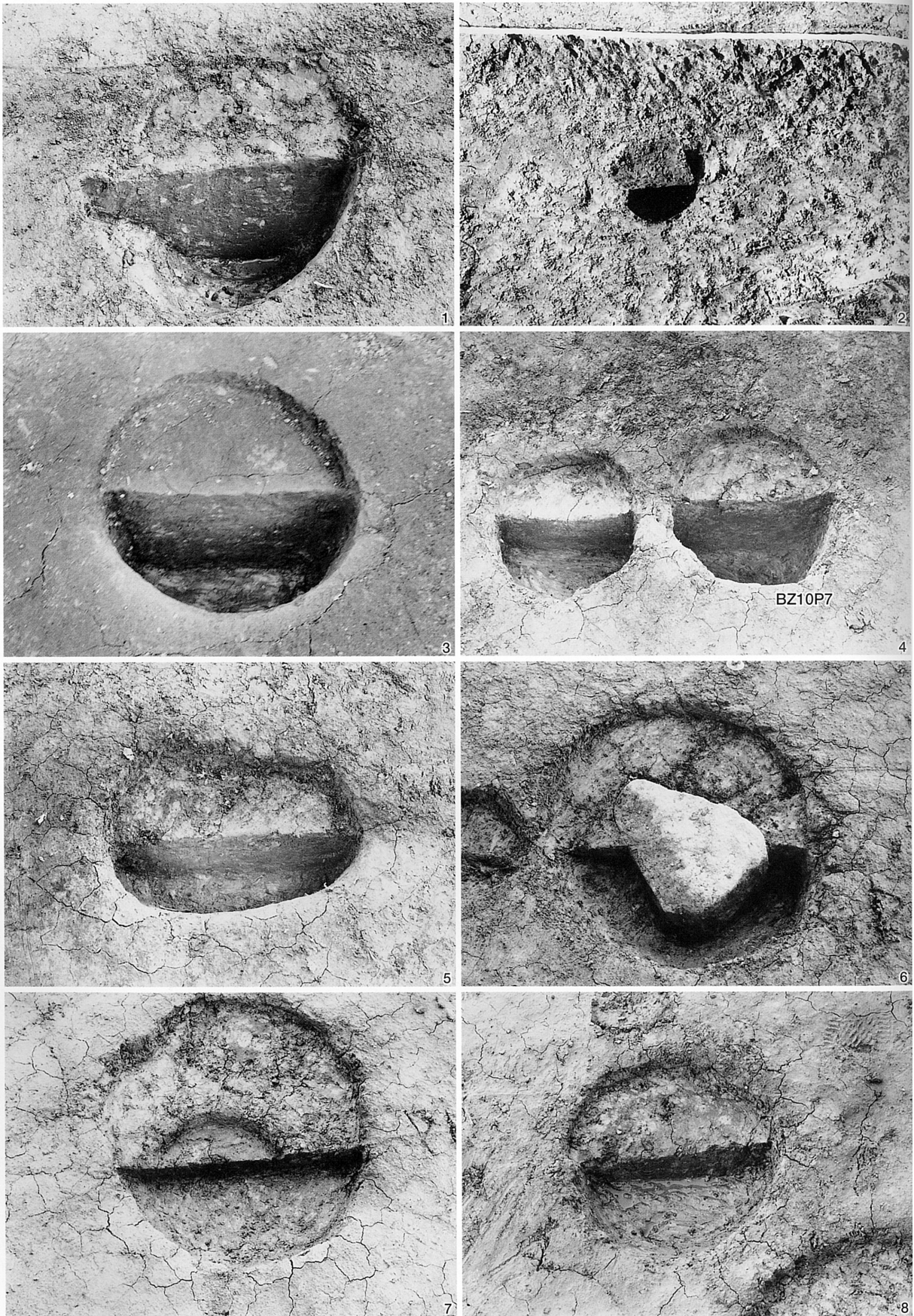
15 3号掘立柱建物跡（1）

1 P1断面（東から） 2 P2断面（東から）
3 P3断面（東から） 4 P4断面（東から）



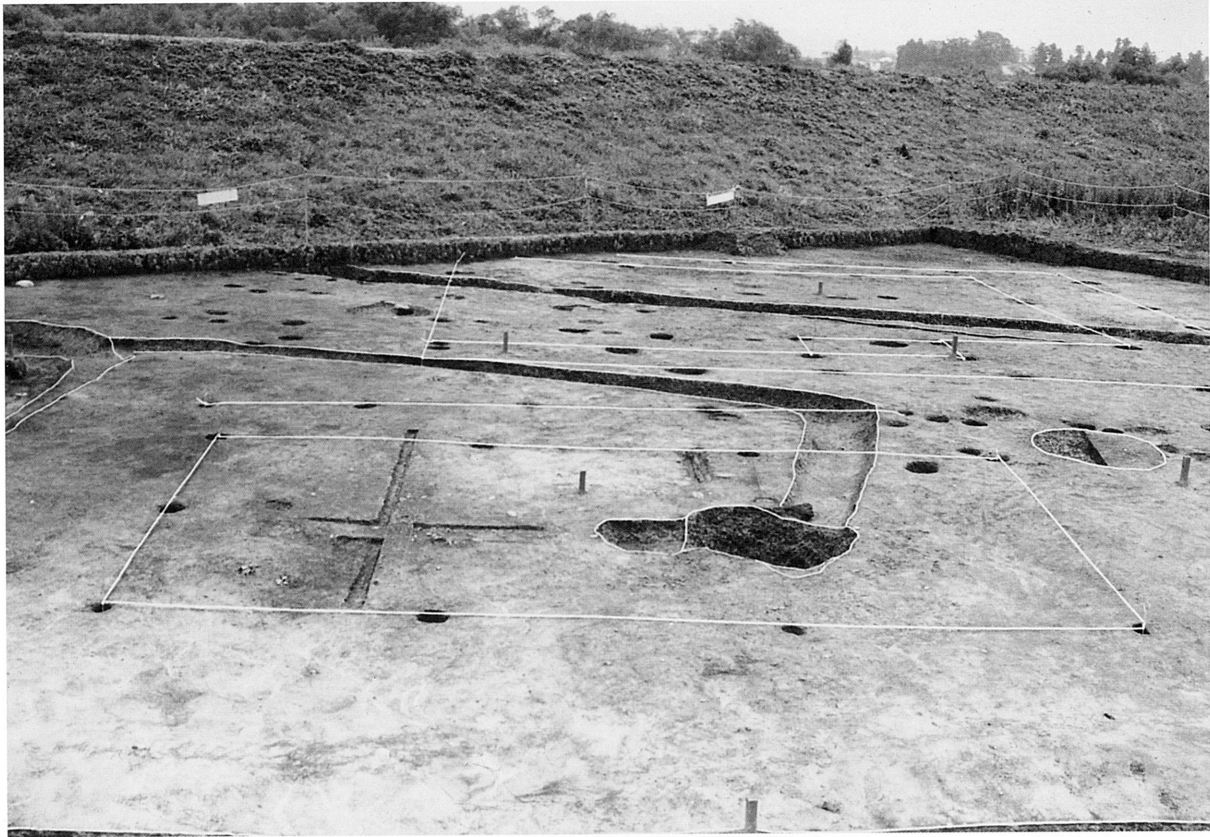
16 3号掘立柱建物跡 (2)

- 1 P 5・CZ7 P 1断面 (西から)
- 2 P 6断面 (南から)
- 3 P 7断面 (南から)
- 4 P 8断面 (南から)
- 5 P 9断面 (南から)
- 6 P 10断面 (西から)
- 7 P 11断面 (西から)
- 8 P 12断面 (西から)

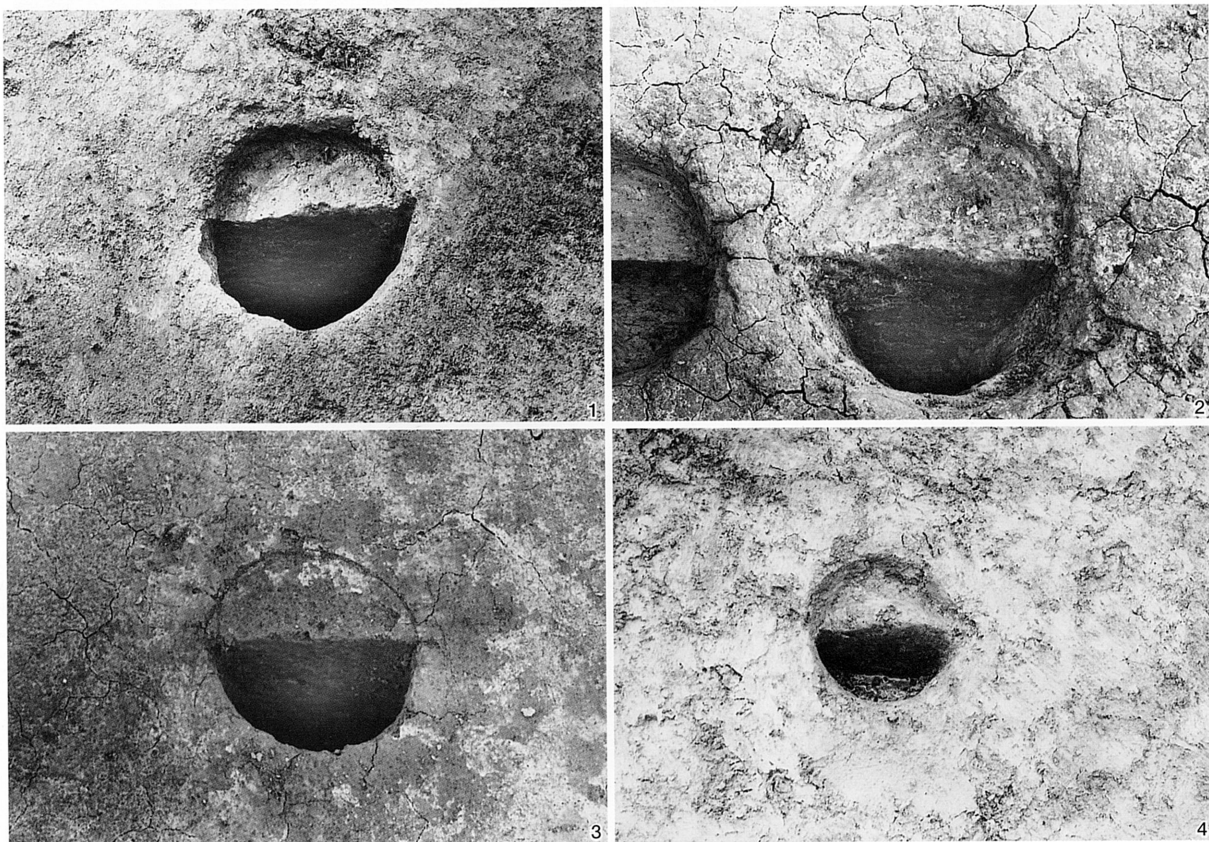


17 3号掘立柱建物跡 (3)

- | | | |
|----------------------|---------------|---------------|
| 1 P13断面 (西から) | 2 P14柱痕 (西から) | 3 P14断面 (西から) |
| 4 P15・BZ10P7断面 (北から) | 5 P16断面 (北から) | 6 P17断面 (北から) |
| 7 P18断面 (北から) | 8 P19断面 (東から) | |

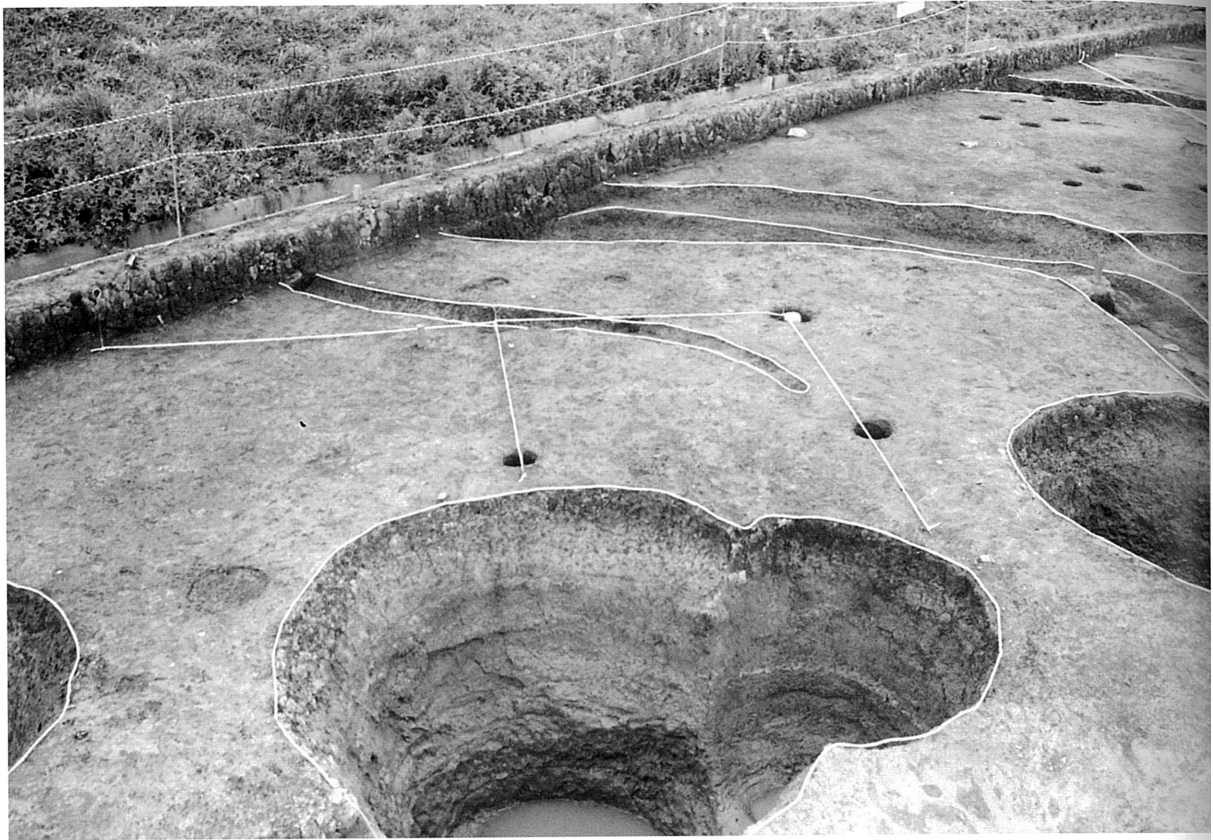


18 4号掘立柱建物跡, 2号柱列跡全景 (西から)



19 4号掘立柱建物跡

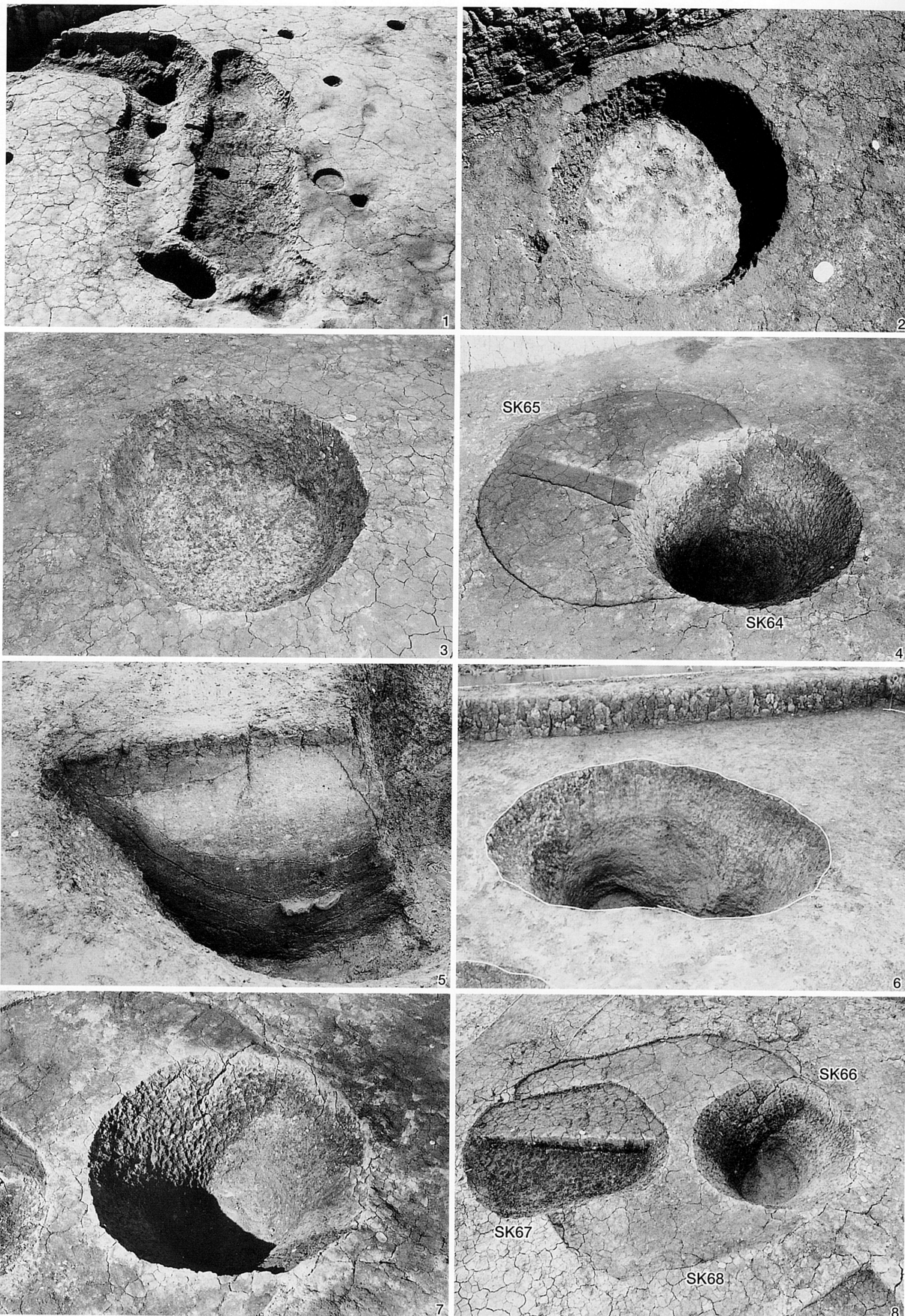
1 P 1断面 (北から) 2 P 4断面 (北西から)
3 P 6断面 (北から) 4 P 9断面 (北から)



20 5号掘立柱建物跡全景（西から）

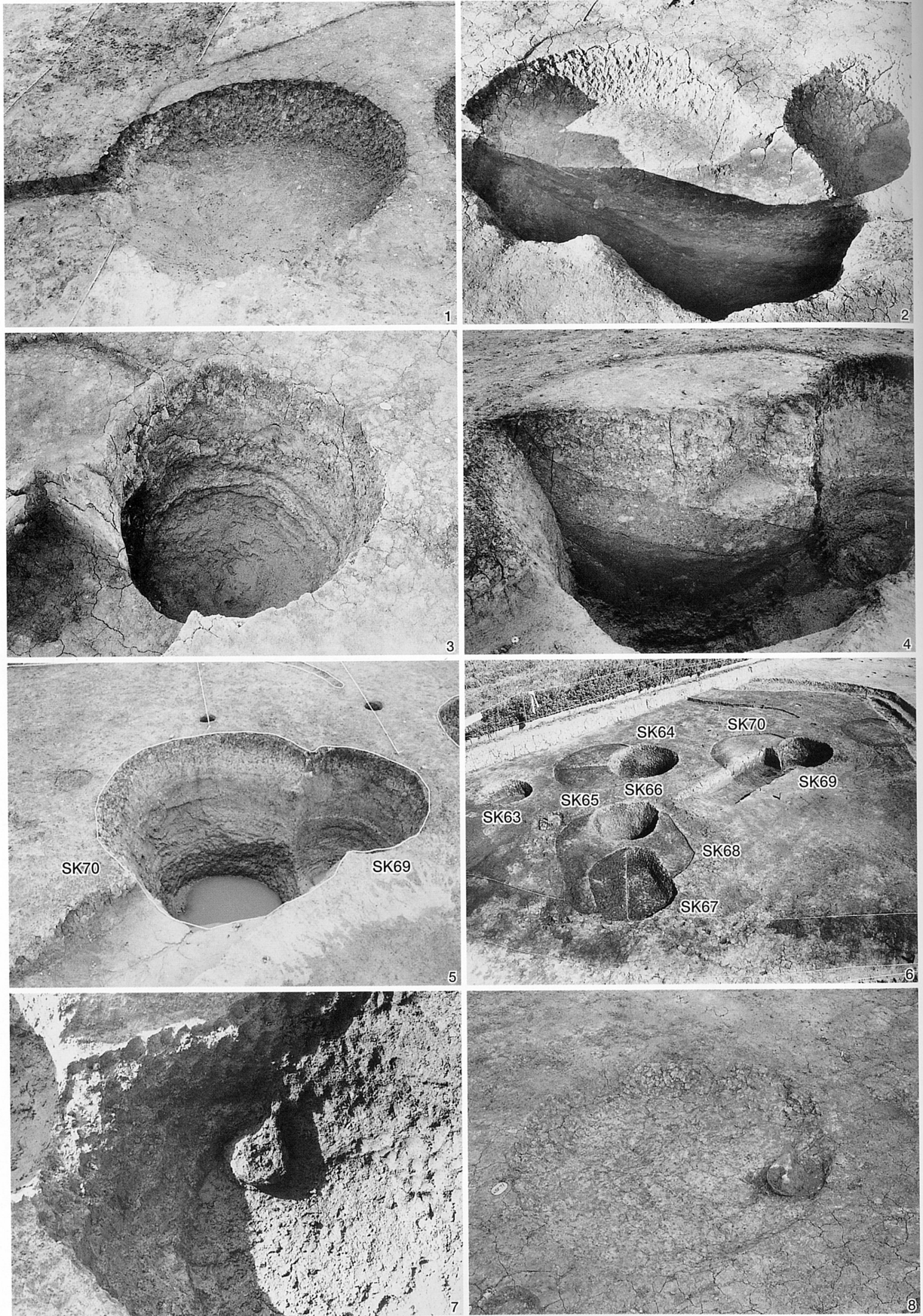


21 6号掘立柱建物跡全景（東から）



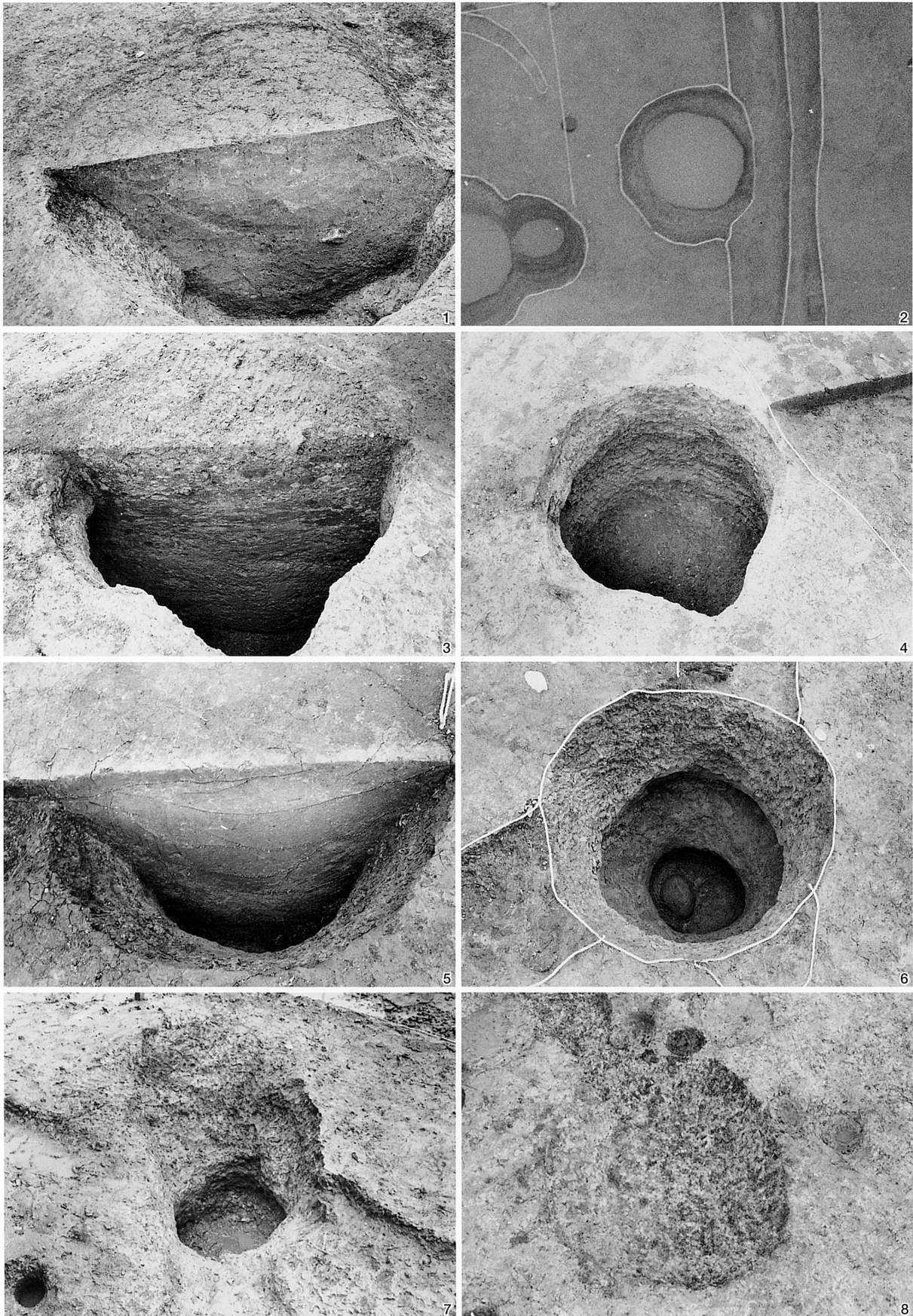
22 土坑 (1)

- 1 61号土坑全景 (東から)
- 2 62号土坑全景 (西から)
- 3 63号土坑全景 (西から)
- 4 64・65号土坑全景 (西から)
- 5 65号土坑断面 (北西から)
- 6 64・65号土坑全景 (南西から)
- 7 66号土坑全景 (南から)
- 8 66~68号土坑全景 (南東から)



23 土坑 (2)

- | | | | | | |
|---|-------------------|---|------------------|---|--------------------|
| 1 | 67号土坑全景 (西から) | 2 | 68号土坑断面 (南から) | 3 | 69号土坑全景 (北西から) |
| 4 | 70号土坑断面 (北西から) | 5 | 69・70号土坑全景 (西から) | 6 | 63~70号土坑付近全景 (西から) |
| 7 | 70号土坑遺物出土状況 (東から) | 8 | 71号土坑全景 (南から) | | |

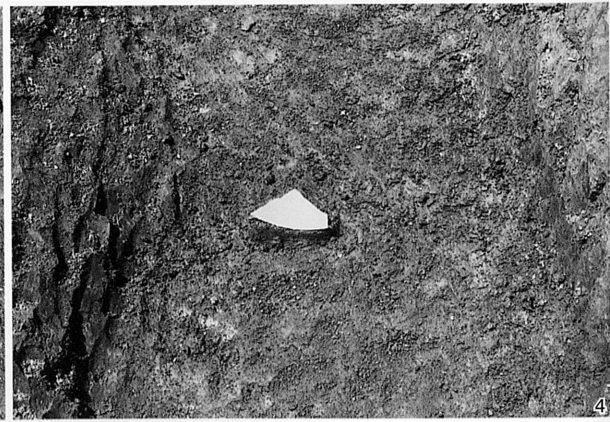
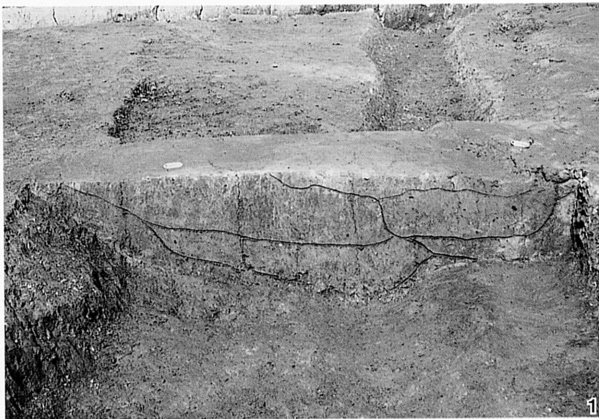


24 土坑 (3)

- | | | | | | | | |
|---|---------------|---|-------------------|---|---------------|---|---------------|
| 1 | 72号土坑断面 (西から) | 2 | 72号土坑全景 (西から) | 3 | 73号土坑断面 (北から) | 4 | 73号土坑全景 (北から) |
| 5 | 74号土坑断面 (西から) | 6 | 74 a・b号土坑全景 (西から) | 7 | 76号土坑断面 (西から) | 8 | 77号土坑全景 (西から) |



25 4'号溝跡全景（北東から）



26 4'号溝跡

1 4'・9'・12'号溝跡断面 (AA')(東から)

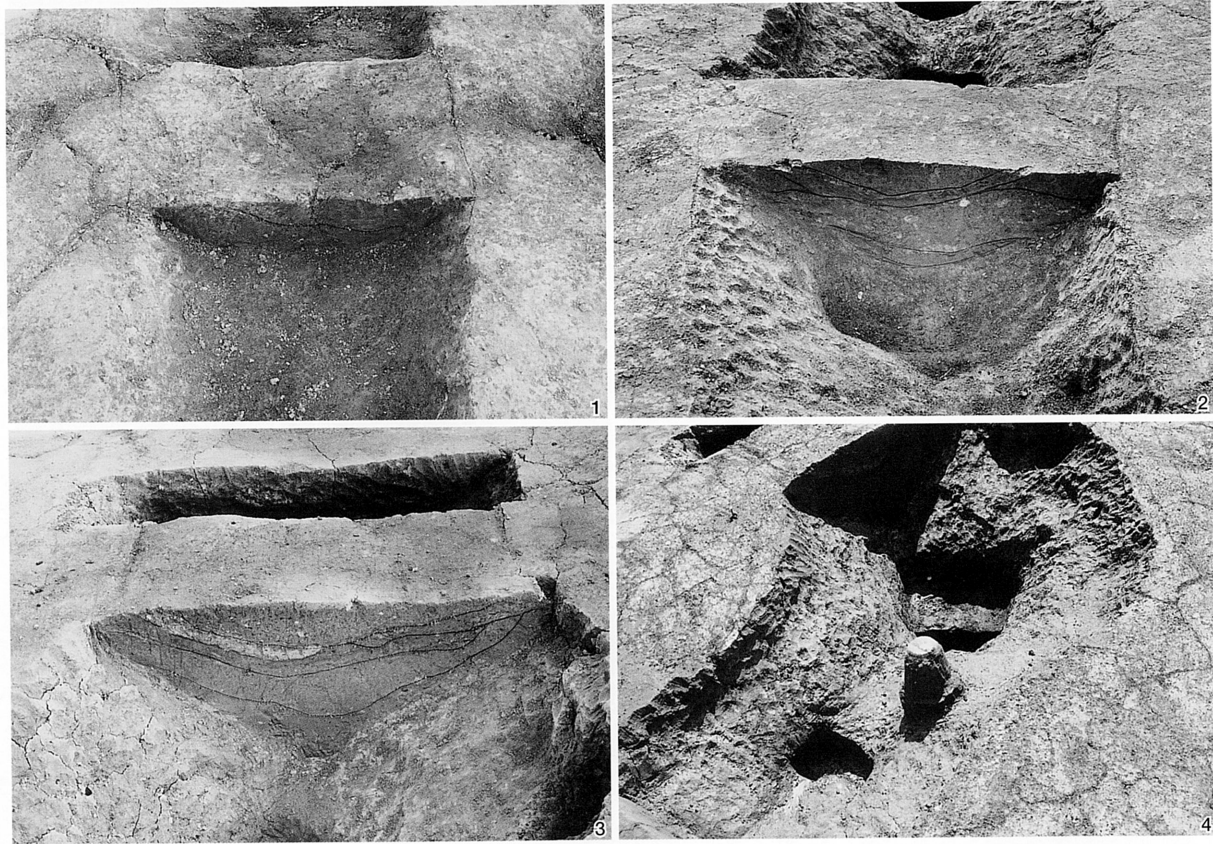
2 断面 (BB')(東から)

3 遺物出土状況 (東から)

4 遺物出土状況 (東から)



27 6'・7'号溝跡全景 (南から)



28 6'・7'号溝跡

1 断面 (BB') (北から) 2 断面 (CC') (東から)
3 断面 (DD') (北から) 4 遺物出土状況 (南東から)



29 9'·12'号溝跡, 2号掘立柱建物跡全景 (北西から)



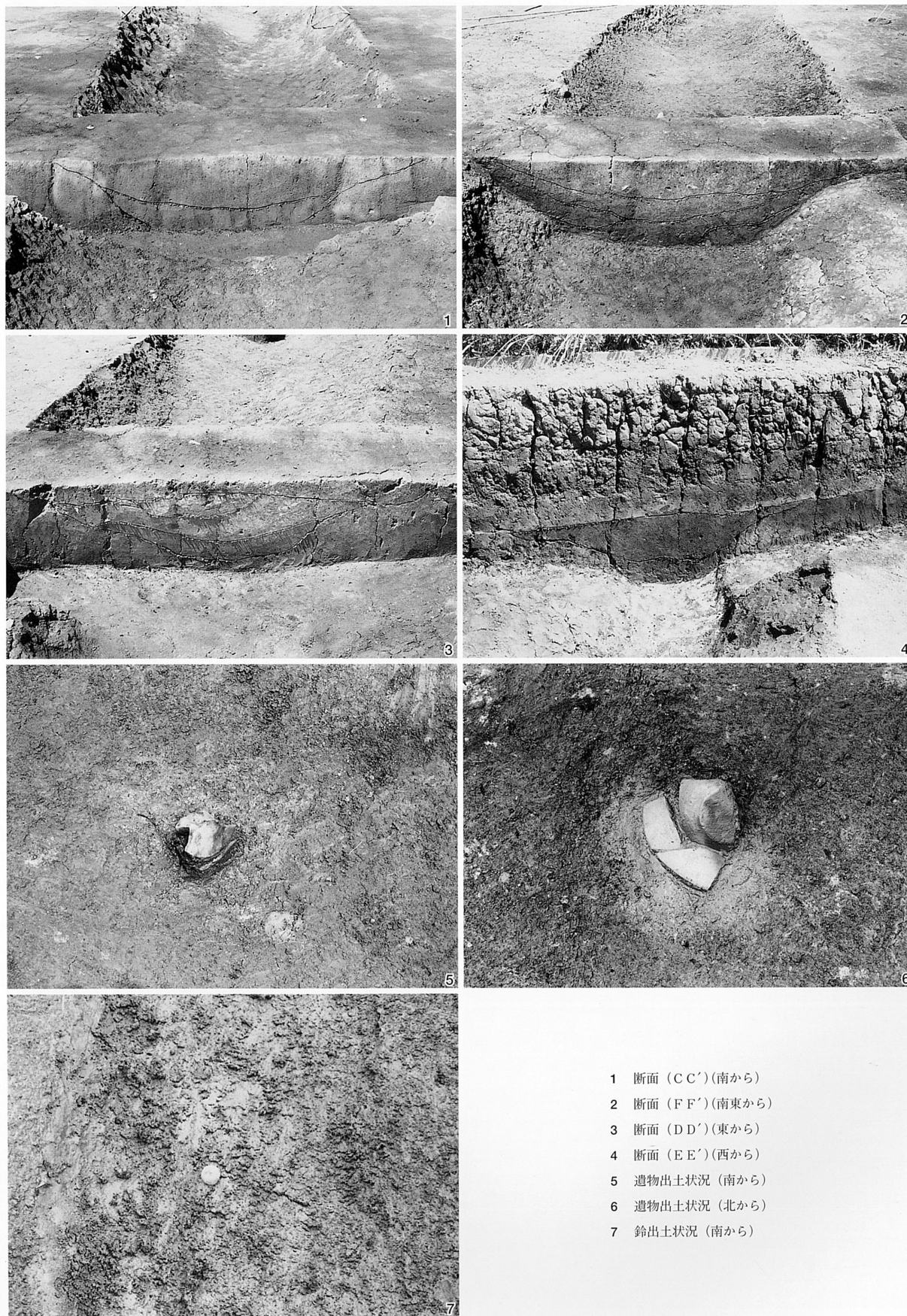
30 9'·12'号溝跡 (1)

1 9'号溝跡全景 (南東から)

2 9'·12'号溝跡細部 (北から)

3 9'·12'号溝跡断面 (AA')(東から)

4 9'·12'号溝跡断面 (BB')(東から)



- 1 断面 (C C') (南から)
- 2 断面 (F F') (南東から)
- 3 断面 (D D') (東から)
- 4 断面 (E E') (西から)
- 5 遺物出土状況 (南から)
- 6 遺物出土状況 (北から)
- 7 鈴出土状況 (南から)

31 9'・12'号溝跡 (2)

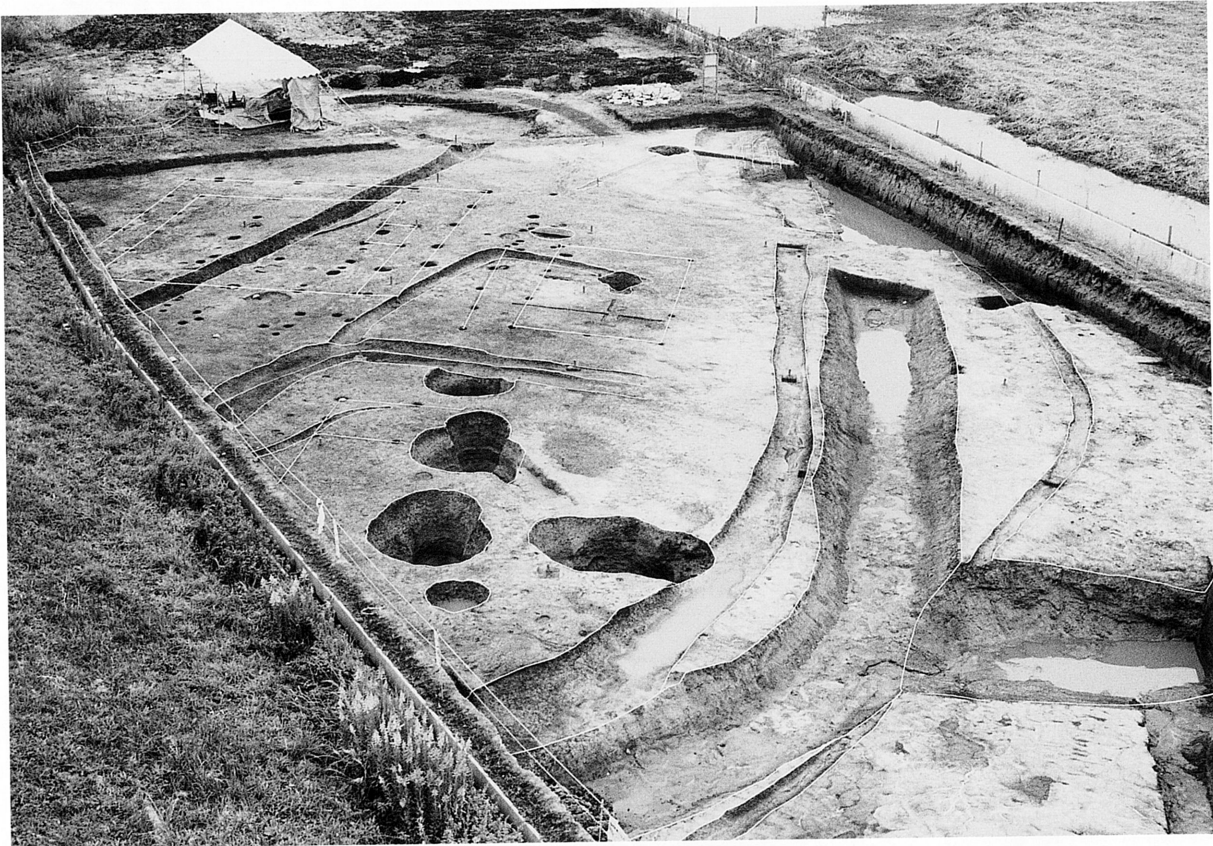


32 9'・12'・45号溝跡全景 (南から)

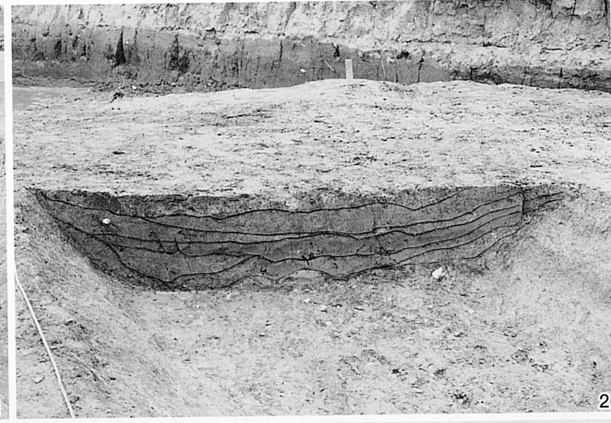


33 9'・12'・45号溝跡

- 1 9'・12'・45号溝跡断面 (C C') (南から) 2 9'・12'・45号溝跡断面 (南から)
 3 12'・45号溝跡断面 (F F') (南から) 4 9'号溝跡遺物出土状況 (東から)



34 25'号溝跡全景（北から）

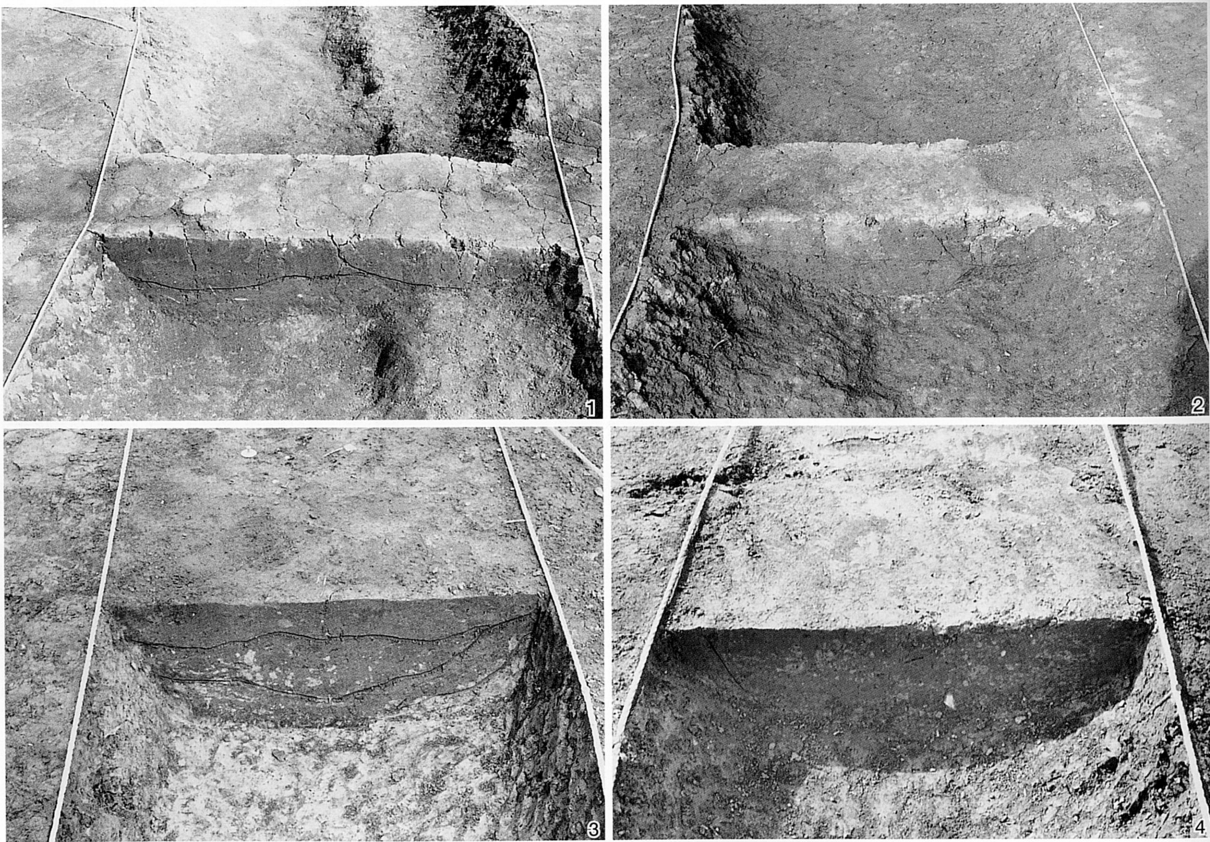


35 25'号溝跡

- 1 25'号溝跡断面 (BB') (南から)
- 2 25'号溝跡断面 (CC') (北から)
- 3 基本土層 X・Y-6~8G (北から)
- 4 調査区南側全景 (南西から)

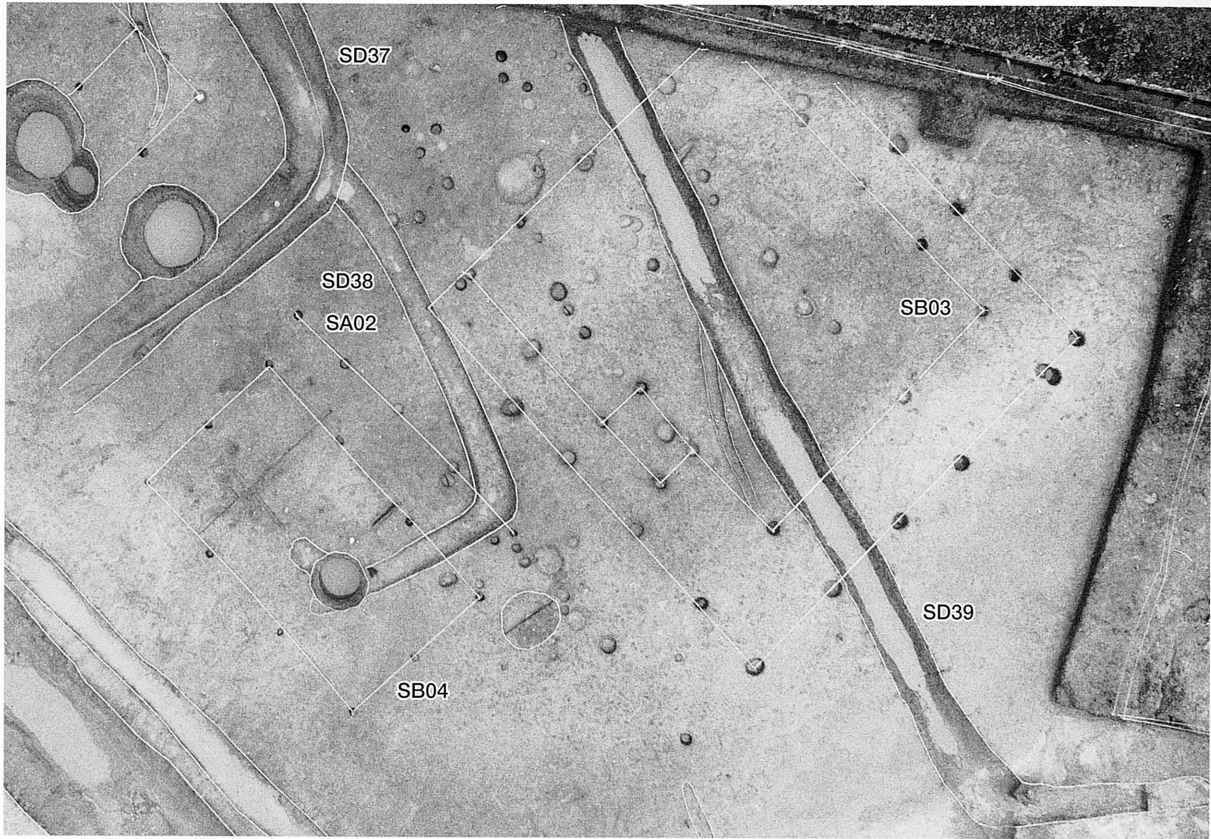


36 37・38号溝跡全景 (南から：空撮)

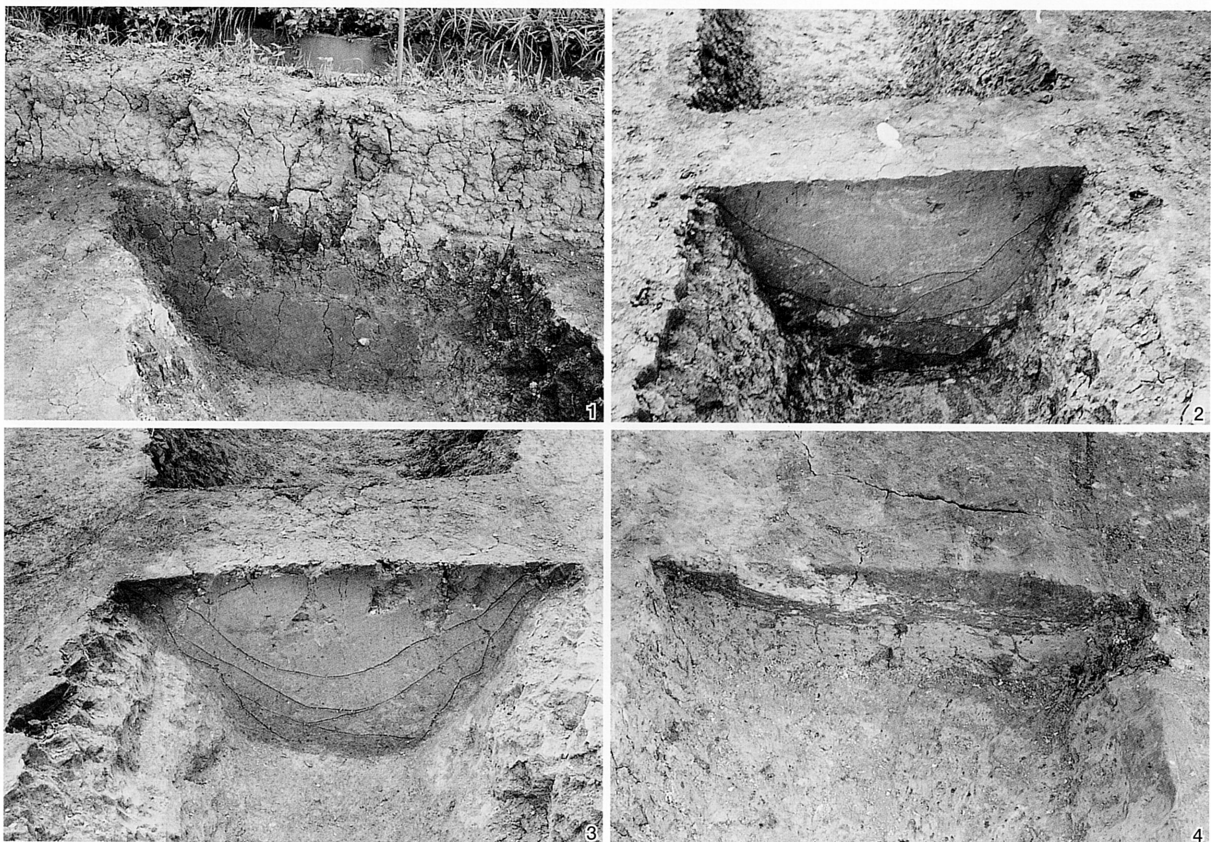


37 37・38号溝跡

1 37号溝跡断面 (A A') (東から) 2 37号溝跡断面 (B B') (南西から)
3 38号溝跡断面 (D D') (南から) 4 38号溝跡断面 (E E') (東から)

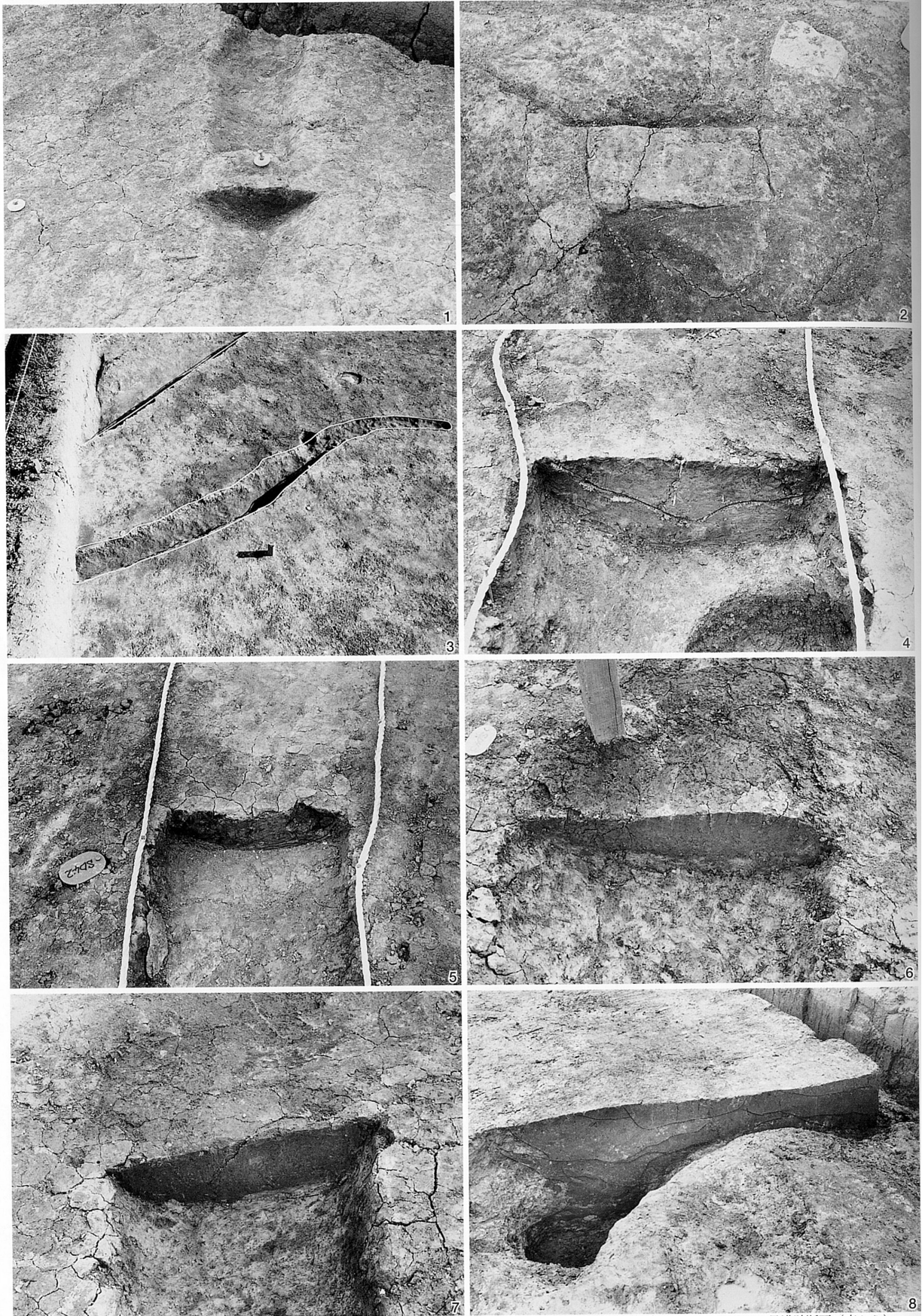


38 39号溝跡全景 (南西から：空撮)



39 39号溝跡

- 1 断面 (AA') (南から) 2 断面 (BB') (北から)
3 断面 (CC') (北から) 4 断面 (DD') (北西から)

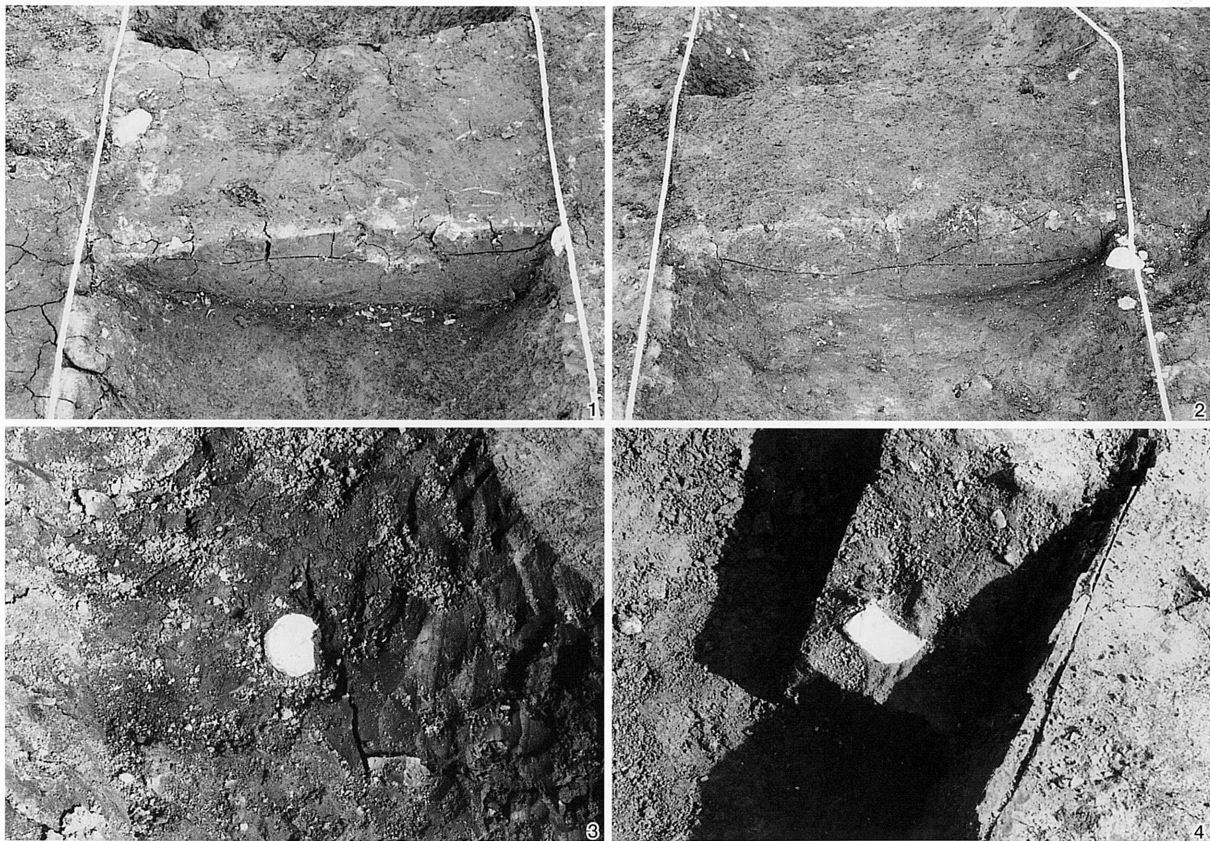


40 40~43号溝跡

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| 1 40 a 号溝跡断面 (北東から) | 2 40 b 号溝跡断面 (南から) |
| 3 41号溝跡全景 (北西から) | 4 41号溝跡断面 (北東から) |
| 5 42号溝跡断面 (E E') (南西から) | 6 43号溝跡断面 (D D') (北から) |
| 7 43号溝跡断面 (E E') (北から) | 8 43号溝跡断面 (G G') (北から) |

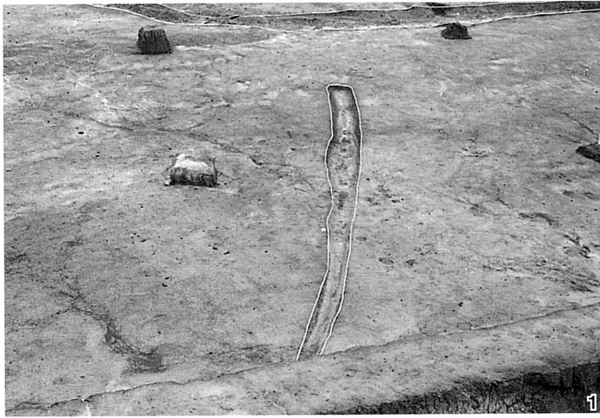


41 46号溝跡全景（西から）



42 46号溝跡

1 断面 (BB') (南西から) 2 断面 (CC') (南西から)
3 遺物 (白磁) 出土状況 (西から) 4 遺物 (白磁) 出土状況 (北から)



43 47~50・52号溝跡

1 47号溝跡全景 (南西から) 2 47号溝跡断面 (AA')(南から)
3 48~50号溝跡断面 (FF')(北から) 4 52号溝跡断面 (HH')(南西から)



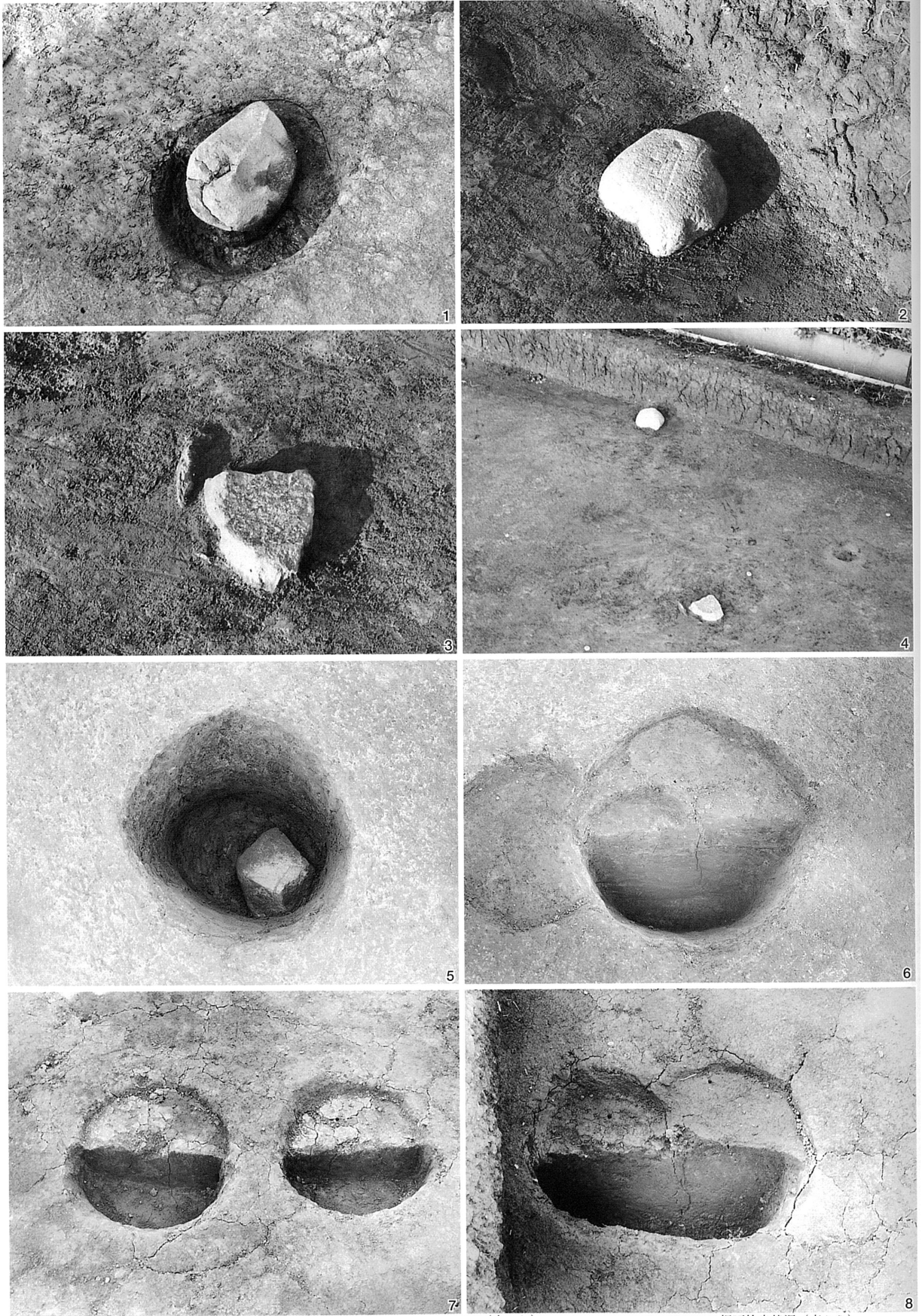
44 旧河川, 作業風景

1 旧河川断面 X12・13G (東から) 2 旧河川断面 W~Y13G (南から)
3 作業風景 4 作業風景



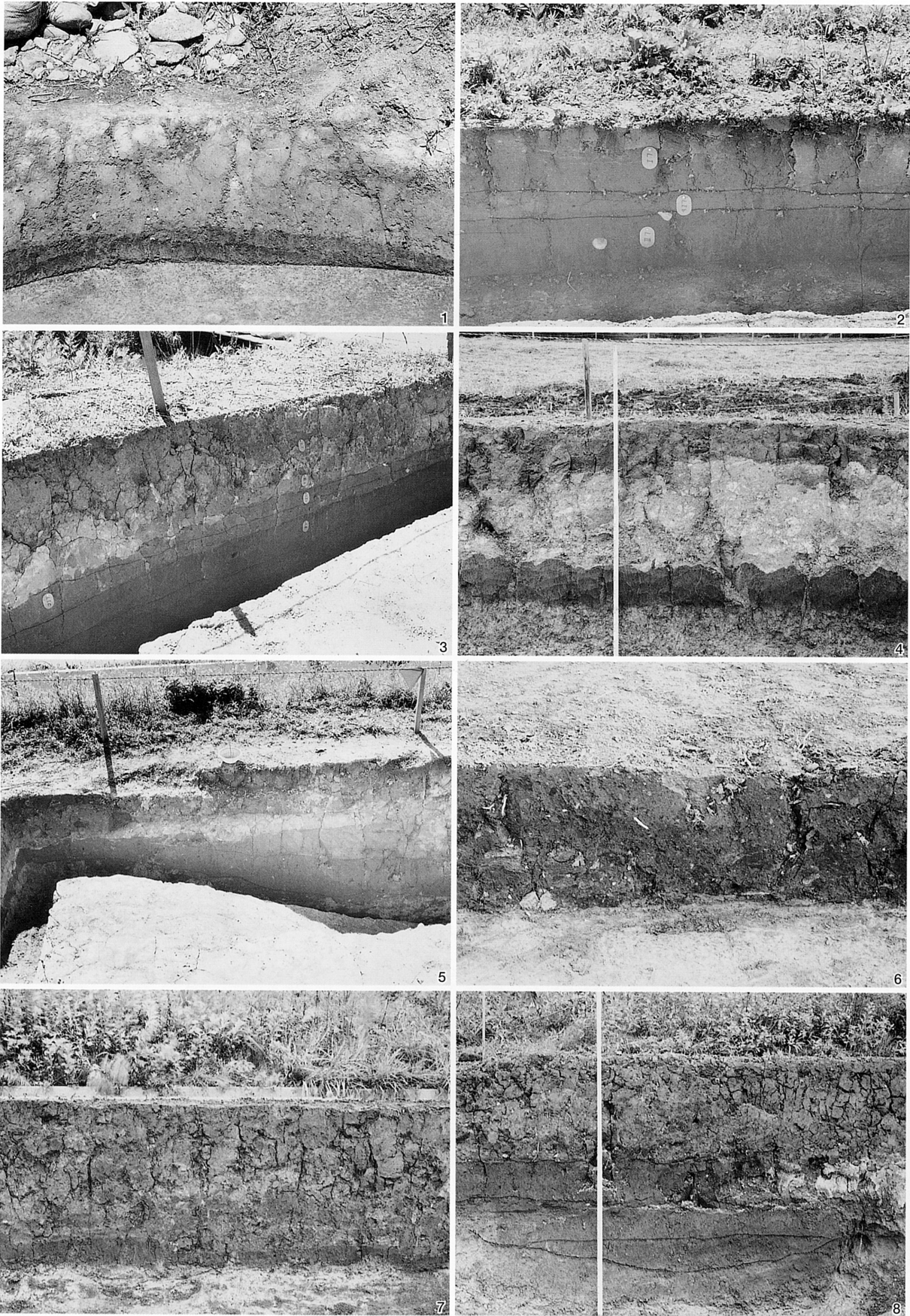
45 1・2号性格不明遺構

- | | | | |
|---|-------------------|---|----------------------|
| 1 | 1号性格不明遺構断面 (東から) | 2 | 1号性格不明遺構断面 (南西から) |
| 3 | 1号性格不明遺構全景 (南から) | 4 | 2号性格不明遺構近景 (西から) |
| 5 | 2号性格不明遺構全景 (西から) | 6 | 2号性格不明遺構断面 (南西から) |
| 7 | 2号性格不明遺構全景 (北西から) | 8 | 2号性格不明遺構遺物出土状況 (西から) |



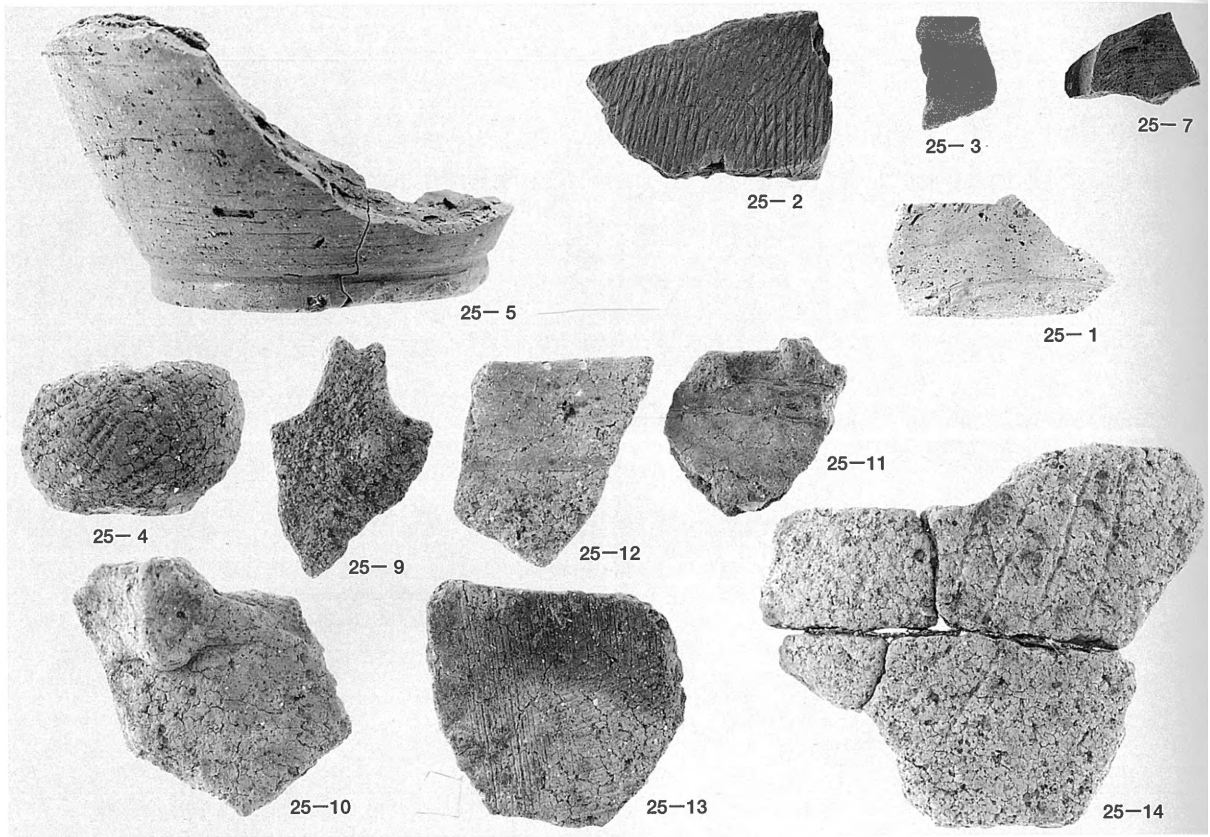
46 ピット群 (根石・重複ピット等)

- 1 BZ10P 6 (南から)
- 2 BZ11P 7 根石検出状況 (南から)
- 3 BZ10P 1 根石検出状況 (南から)
- 4 BZ11P 7・BZ10P 1 根石出土状況 (南から)
- 5 T21P 1 根石検出状況 (南から)
- 6 T21P19断面 (南西から)
- 7 R25P 4・P 5断面 (南東から)
- 8 R25P 6・P 7断面 (南から)

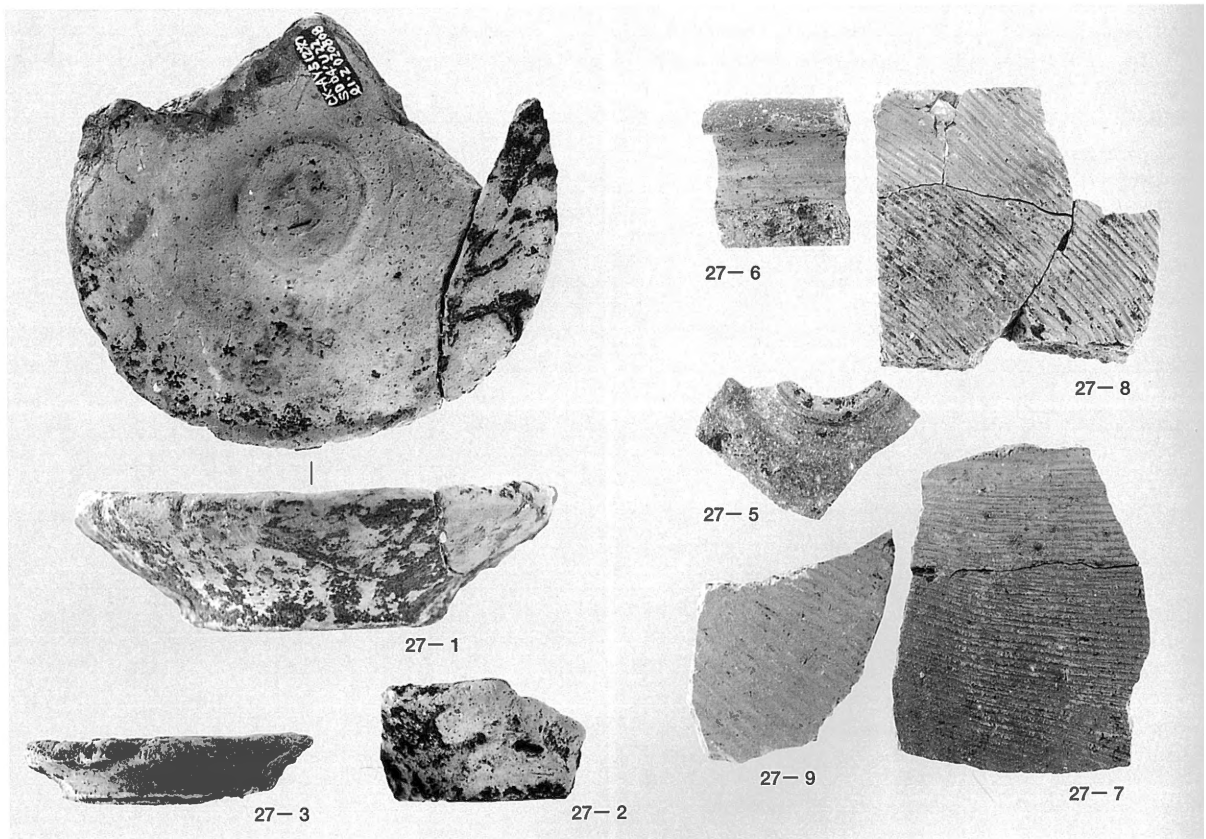


47 基本土層

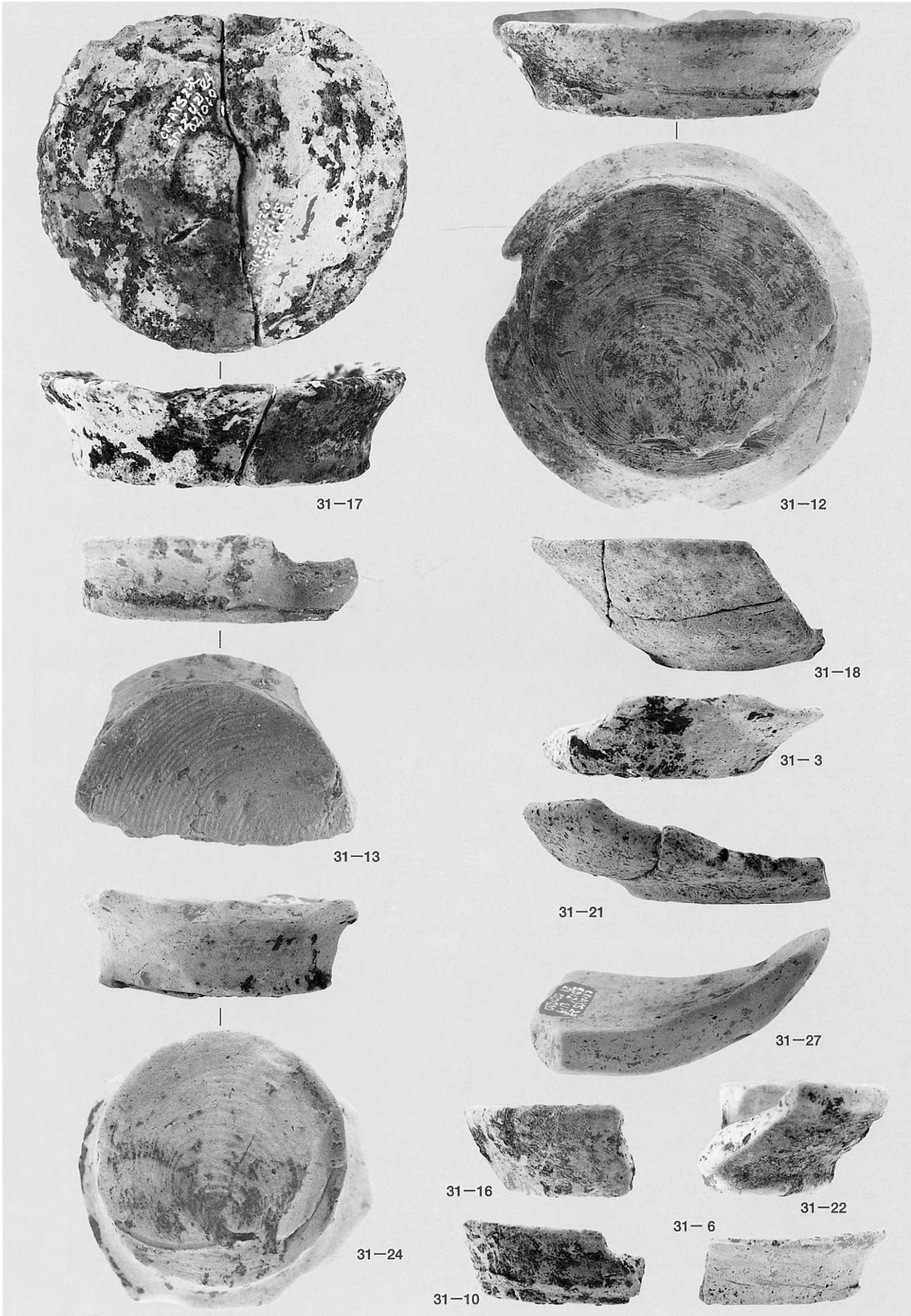
- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 R25G (南東から) | 2 S22G (東から) |
| 3 T18・19G (東から) | 4 W12G付近 (北東から) |
| 5 Y6G (北東から) | 6 BZ7G (西から) |
| 7 Z15G (西から) | 8 Y12G (西から) |



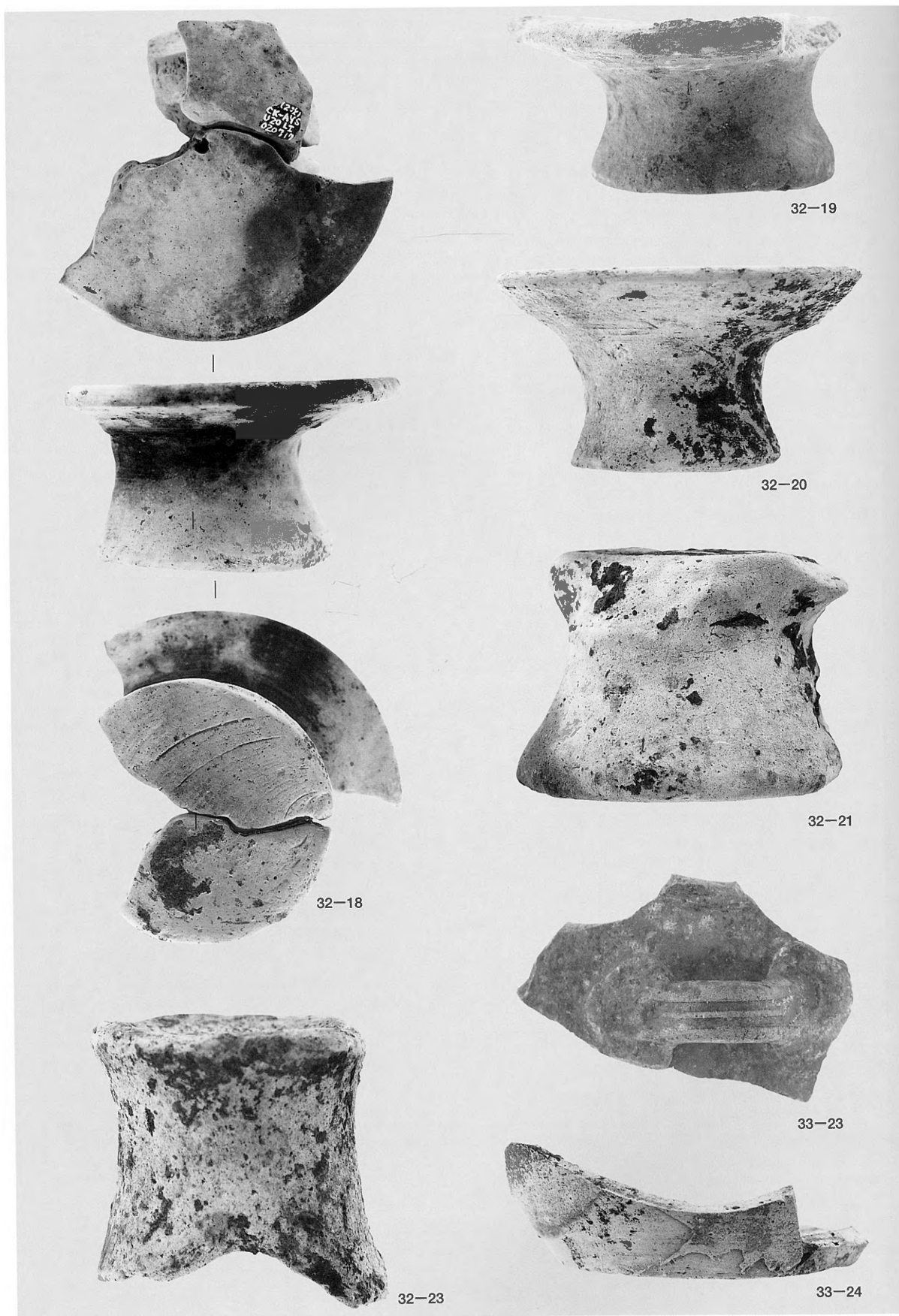
48 土坑出土遺物



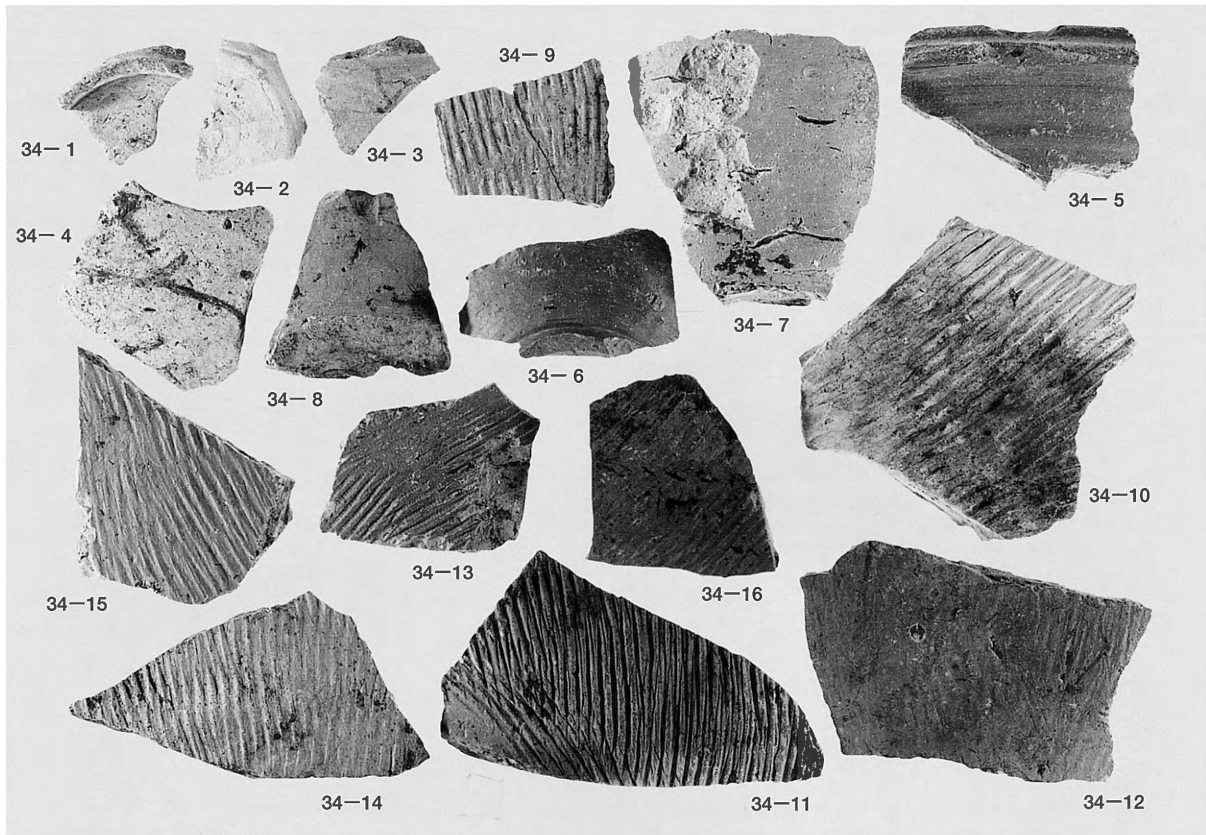
49 4'号溝跡出土遺物



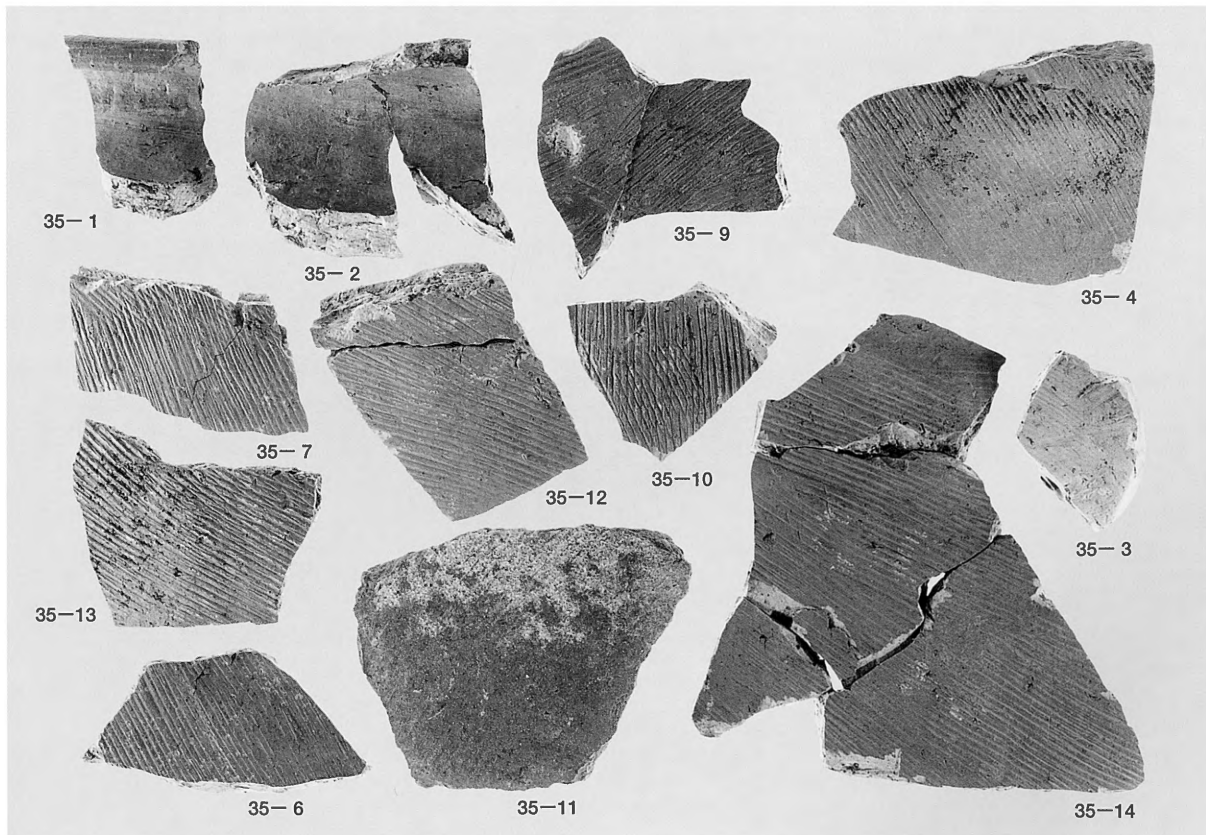
50 9'·12'号溝跡出土遺物(1)



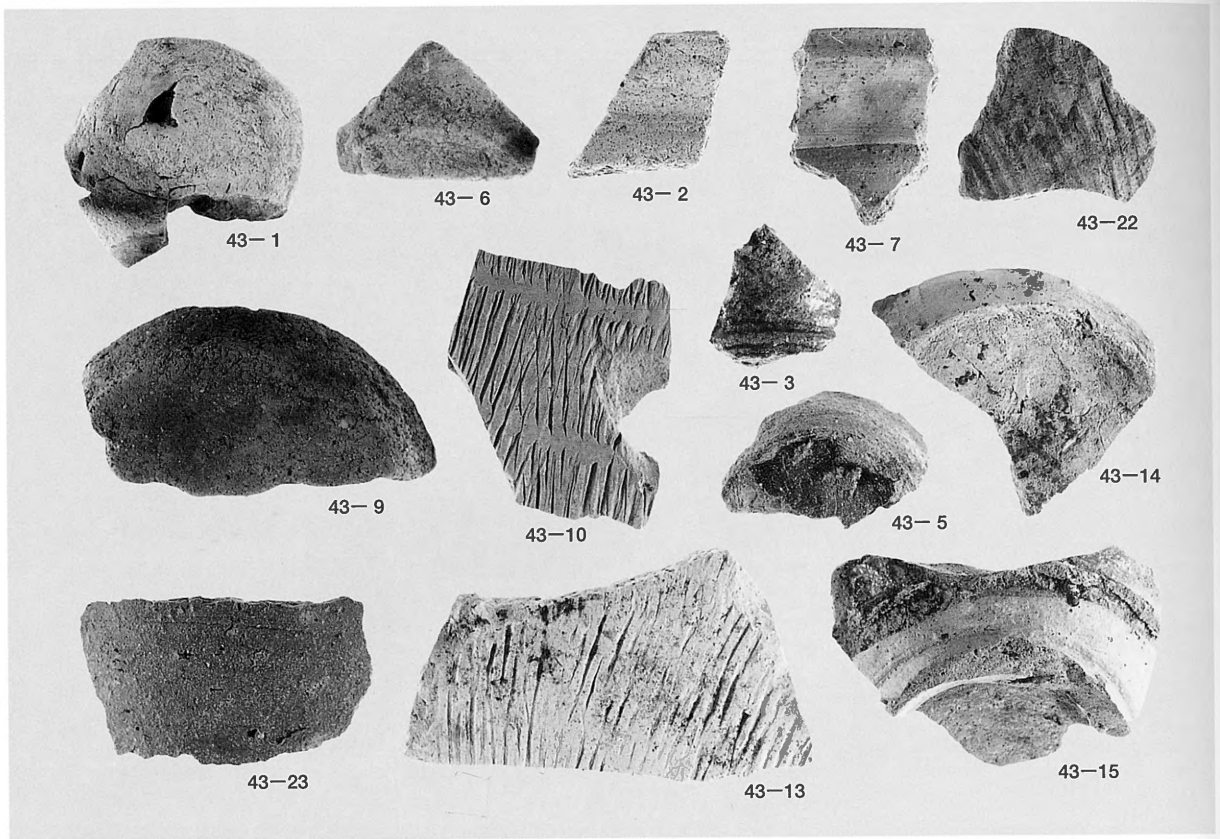
51 9'·12'号溝跡出土遺物(2)



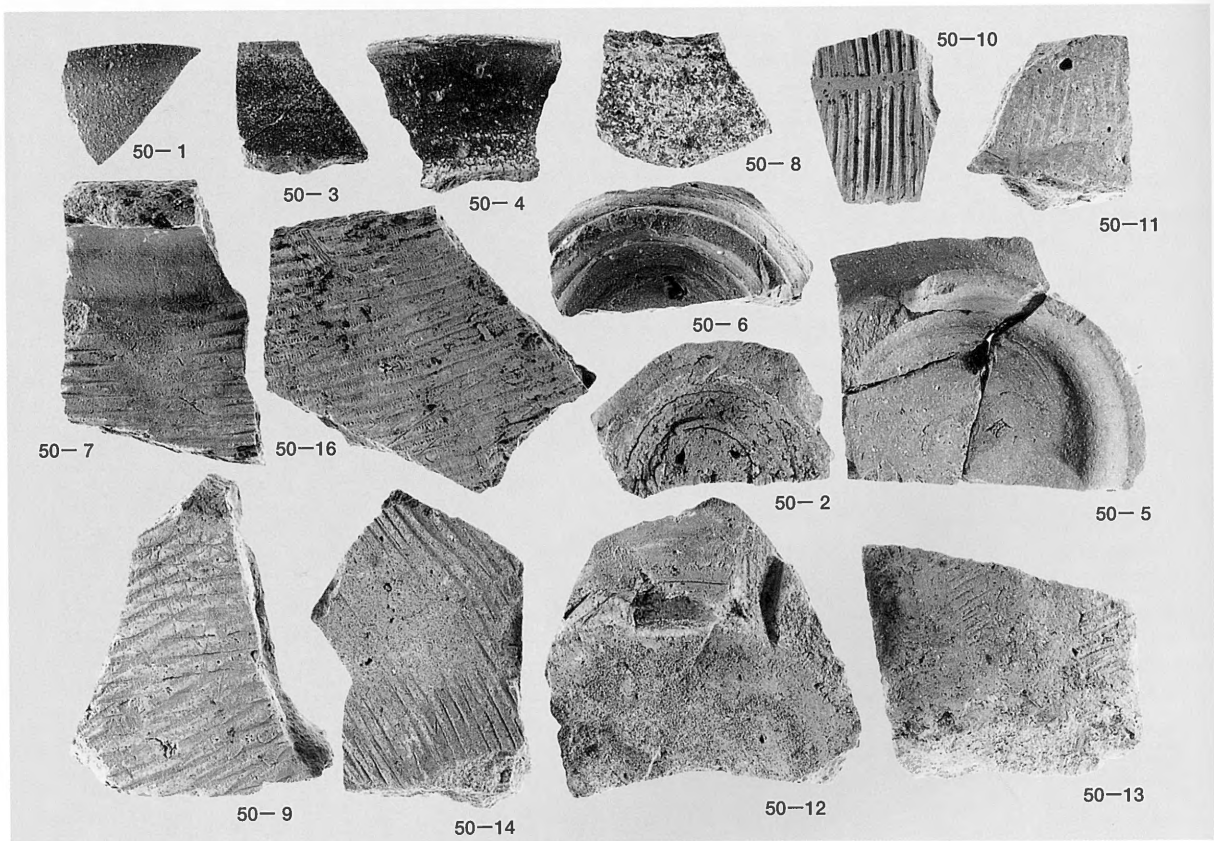
52 9'·12'号溝跡出土遺物(3) 須恵器



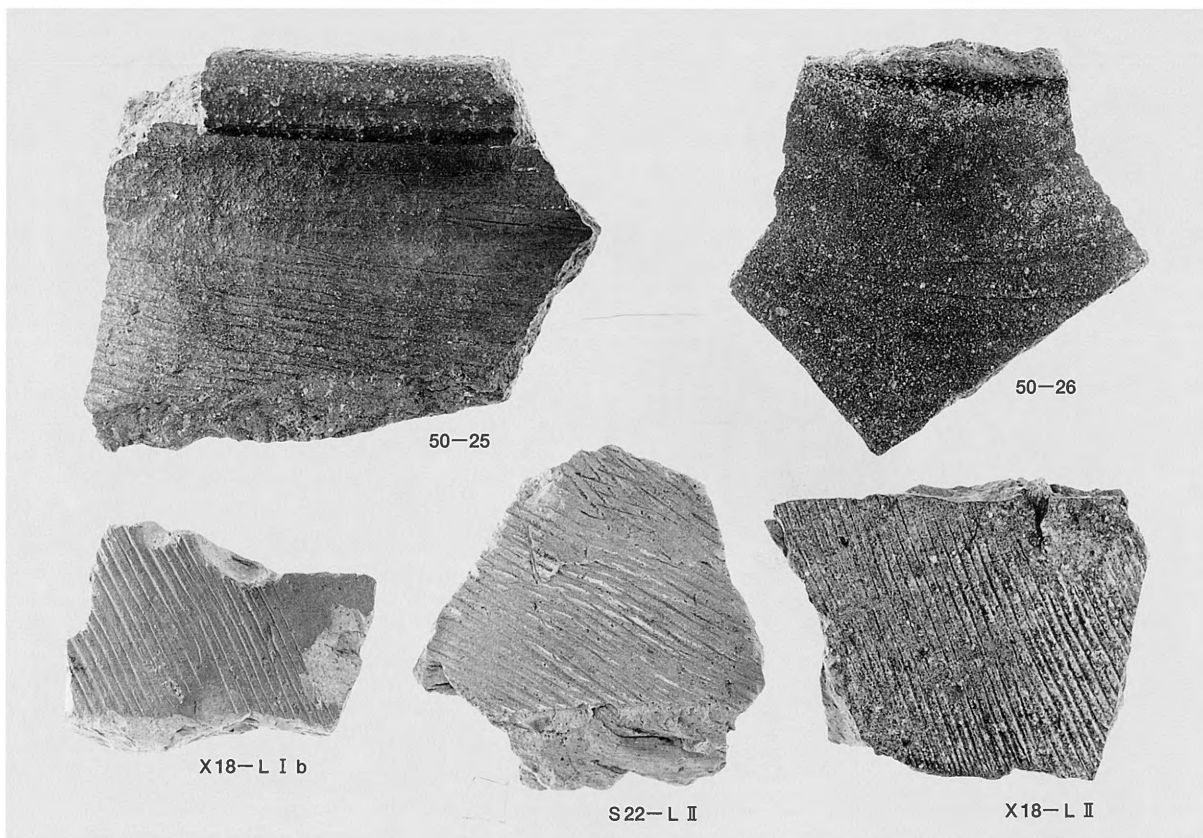
53 9'·12'号溝跡出土遺物(4) 中世陶器



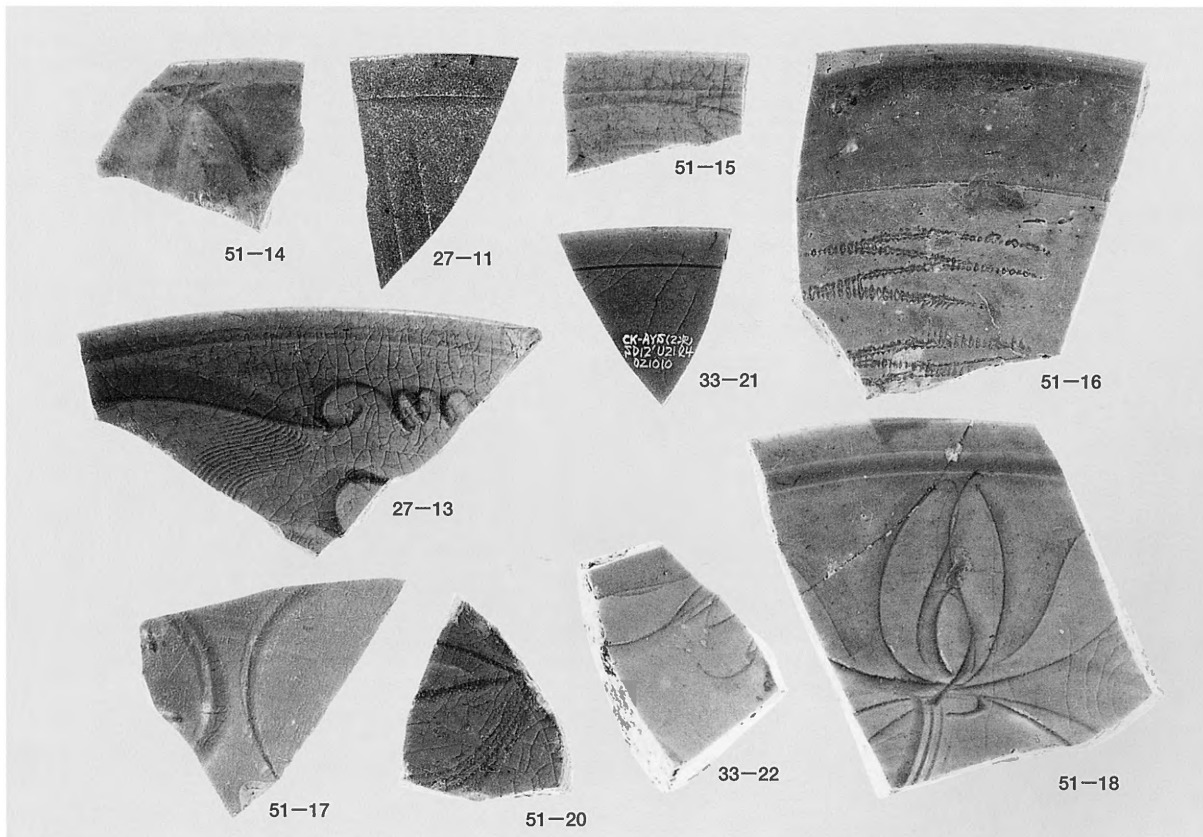
54 25・37・38・44~46号溝跡出土遺物



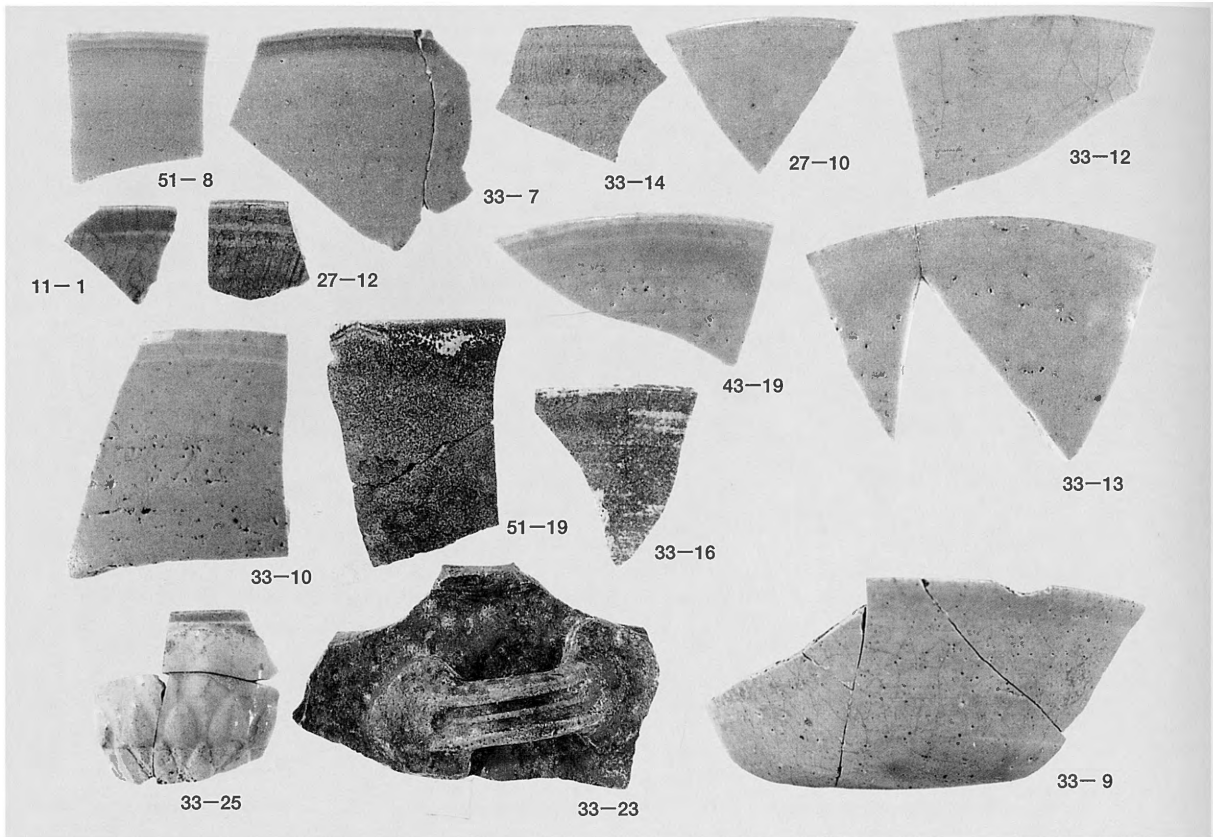
55 遺構外出土遺物 (1) 須恵器



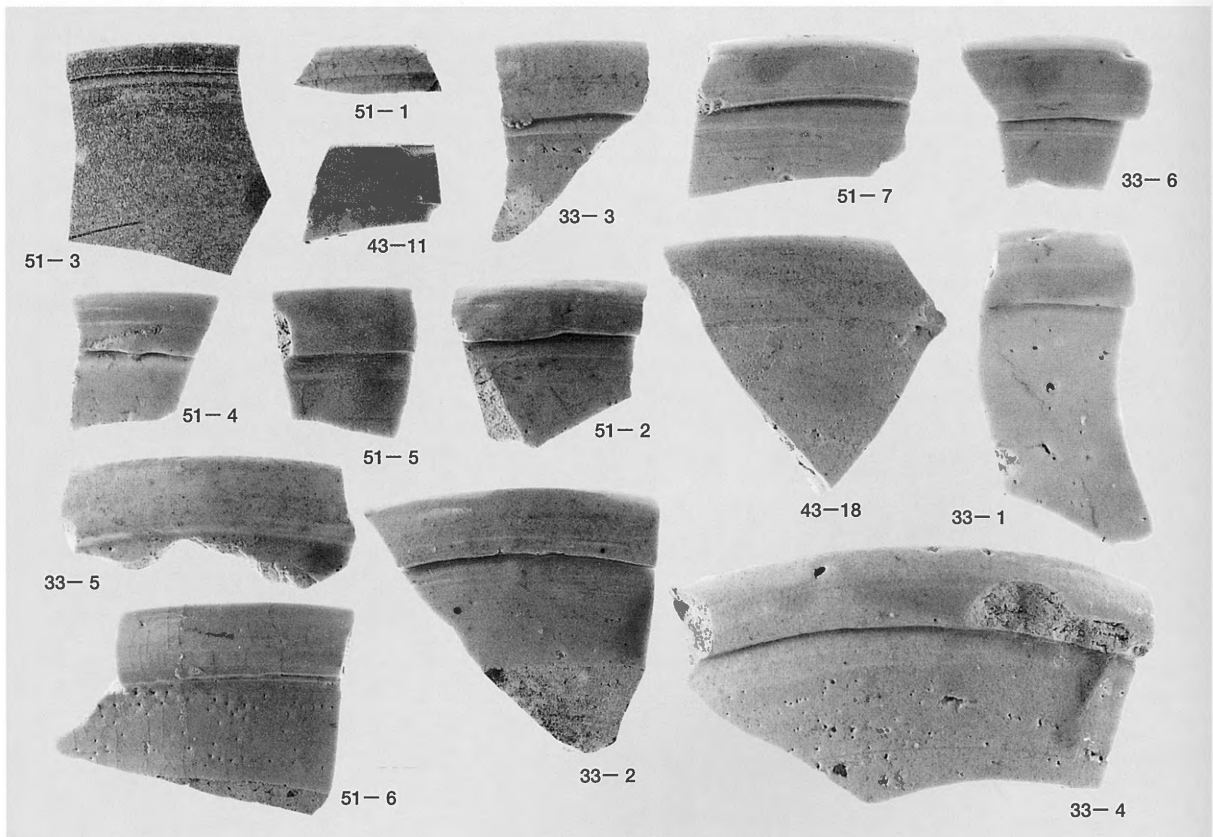
56 遺構外出土遺物 (2) 中世陶器



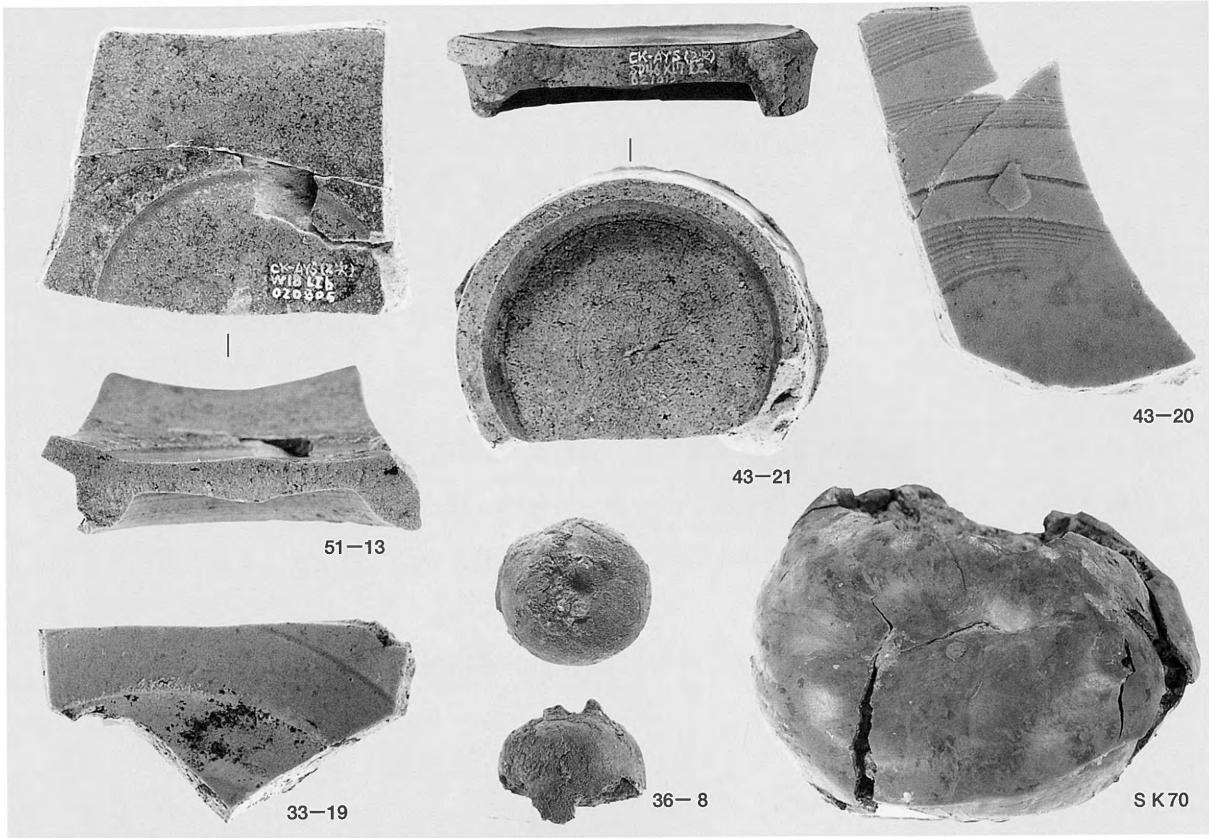
57 出土貿易陶磁器 (1) 青磁



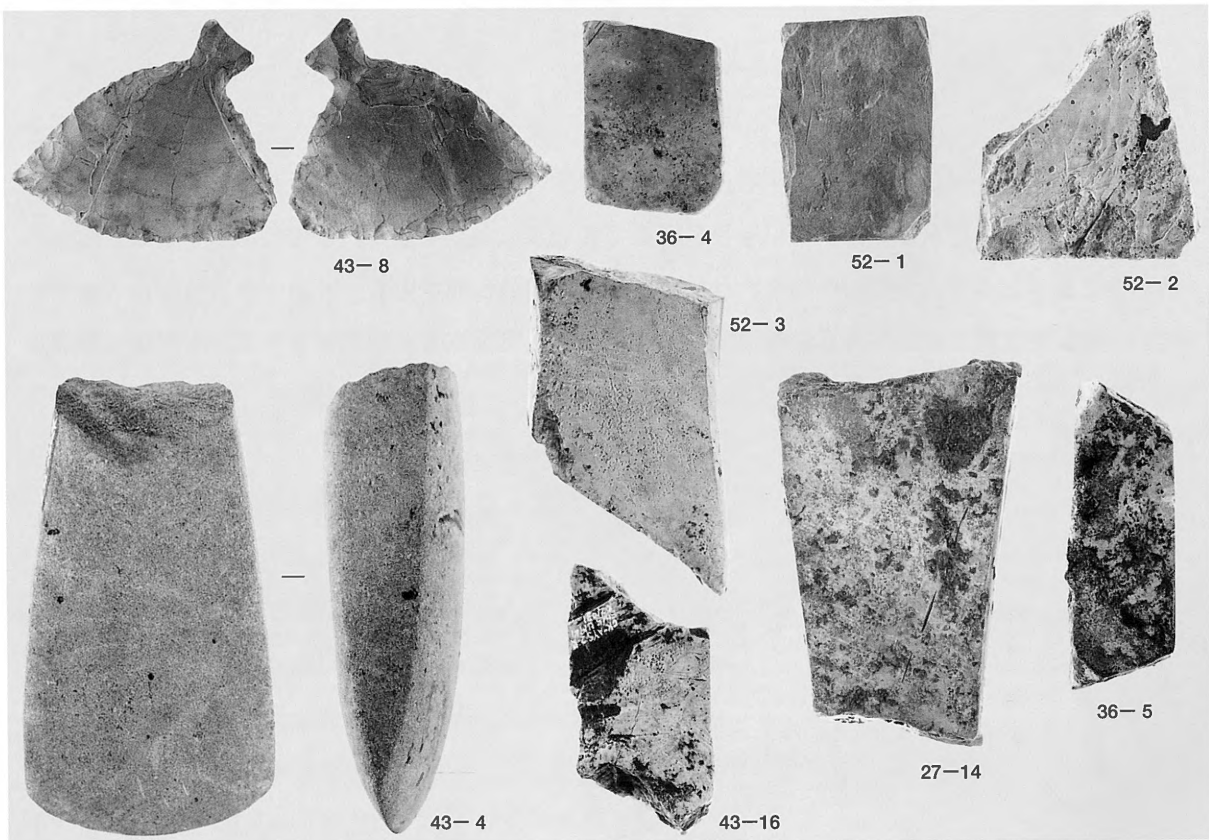
58 出土貿易陶磁器 (2) 白磁他



59 出土貿易陶磁器 (3) 白磁



60 出土貿易陶磁器 (4) 白磁, 銅製鈴・木質遺物



61 出土石器・砥石

付 章 自然科学分析

付章1 土 壤 分 析

(株) 古環境研究所

I. 荒屋敷遺跡におけるトイレ遺構分析

1. はじめに

糞便の堆積物は、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種実群集組成に特異性を示すため、他の堆積物とは様相が異なる。したがって、これらの分析を総合的に行うことによって、トイレ遺構を識別することが可能である。さらに、その遺体群集から今まで以上に食べた食物を直接的に探ることができる。

ここでは、荒屋敷遺跡において検出された土坑について、土坑内堆積土壌の分析からトイレ遺構の可能性を検討する。

2. 試料

試料は、SK64の5層（試料No.1）、SK65の10層（試料No.2）、SK69の6層（試料No.3）、SK70の5層（試料No.4）の堆積物計4点である。

3. 寄生虫卵分析

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており、人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。寄生虫卵分析を用いてトイレ遺構の確認や人糞施肥の有無の確認が可能であり、寄生虫卵の種類から、摂取された食物の種類や、そこに生息していた動物種を推定することも可能である。なお、本研究は近年に始められたことから研究歴は浅く、分析例はまだ少ないのが現状である。

(1) 方法

微化石分析法を基本に以下のように行った。

- 1) サンプルを採量する。
- 2) 脱イオン水を加え攪拌する。
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置。(2・3度混和)
- 5) 水洗後サンプルを2分する。
- 6) 2分したサンプルの一方にアセトリシス処理を施す。
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。

8) 検鏡はプレパラート作製後直ちに、生物顕微鏡によって300~1000倍で行う。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、1500rpm、2分間の遠心分離を行った後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

(2) 結果

いずれの試料からも寄生虫卵は検出されなかった。

4. 花粉分析

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。なお、乾燥的な環境下の堆積物では、花粉などの植物遺体が分解されて残存していない場合もある。

(1) 方法

花粉粒の分離抽出は、基本的には中村（1973）を参考にして、試料に以下の物理化学処理を施して行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加え15分間湯煎する。
- 2) 水洗した後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法を用いて砂粒の除去を行う。
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置する。
- 4) 水洗した後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す。
- 5) 再び氷酢酸を加えた後、水洗を行う。
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色を行い、グリセリンゼリーで封入しプレパラートを作製する。

以上の物理・化学の各処理間の水洗は、遠心分離（1500rpm、2分間）の後、上澄みを捨てるという操作を3回繰り返して行った。

検鏡はプレパラート作製後直ちに生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類した。複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示した。なお、科・亜科や属の階級の分類群で一部が属や節に細分できる場合はそれらを別の分類群とした。イネ属に関しては、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して分類しているが、個体変化や類似種があることからイネ属型とした。

(2) 結果

出現した分類群は、樹木花粉9、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉13、シダ植物胞子2形態の計25である。これらの学名と和名および粒数を表1に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを図1に示す。なお、200個未満であっても100

個以上の試料については傾向をみるため参考に図示し、主要な分類群は写真に示した。

以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マツ属複維管束亜属、スギ、サワグルミ、ハンノキ属、クリ、シイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科

〔草本花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、タデ属サナエタデ節、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、アブラナ科、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

1) SK64 (試料No.1)

花粉密度は低い。草本花粉の占める割合が高い。ヨモギ属が優占し、クワ科-イラクサ科などが伴われる。

2) SK65 (試料No.2)

花粉密度は低い。草本花粉の占める割合が高い。ヨモギ属が優占し、イネ科、アカザ科-ヒユ科などが伴われる。

3) SK69 (試料No.3)

草本花粉の占める割合が高い。イネ科、ヨモギ属が高率で出現し、これにアブラナ科、アカザ科-ヒユ科、樹木花粉のスギが伴われる。

4) SK70 (試料No.4)

花粉密度が極めて低い。

5. 種実同定

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

(1) 方法

試料(堆積物)に以下の物理処理を施して、抽出および同定を行った。

- 1) 試料20cmに水を加え放置し、泥化を行う。
- 2) 攪拌した後、沈んだ砂礫を除去しつつ、0.25mmの篩で水洗選別を行う。
- 3) 残渣を双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級

で示した。

(2) 結果

樹木 1, 草本 4 の計 5 が同定された。学名, 和名および粒数を表 2 に示し, 主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

[樹木]

ブドウ属 *Vitis* 種子 ブドウ科

茶褐色で卵形を呈し, 先端がとがる。腹面には二つの孔があり, 背面には先端が楕円形のへそがある。

[草本]

イネ *Oryza sativa* L. 穎

穎は茶褐色で扁平楕円形を呈し, 下端に枝梗が残る。表面には微細な顆粒状突起がある。完形のものは無かった。

カヤツリグサ科 Cyperaceae 果実

茶褐色でやや狭い倒卵形を呈す。断面は三角形である。

アカザ属 *Chenopodium* 種子 アカザ科

黒色で光沢がある。円形を呈し, 片面の中央から周縁まで浅い溝が走る。

ヒユ属 *Amaranthus* 種子 ヒユ科

黒色で光沢がある。円形を呈し, 一ヶ所が切れ込み, へそがある。断面は両凸レンズ形である。

各遺構での検出状況は, 次のとおりである。

1) SK64 (試料No.1)

アカザ属が検出された。

2) SK65 (試料No.2)

カヤツリグサ科, アカザ属, ヒユ属が検出された。

3) SK69 (試料No.3)

ブドウ属, イネ (炭化果実), アカザ属が検出された。

4) SK70 (試料No.4)

アカザ属が検出された。

6. 考察

(1) トイレ遺構の可能性について

SK64, SK65, SK69, SK70のいずれからも寄生虫卵は検出されなかった。花粉群集組成はヨモギ属やイネ科が優占し, 種実類ではアカザ属が主であることから, これらは周囲の植生を反映しているものとみなされる。

以上のことから, SK64, SK65, SK69, SK70の堆積物には糞便は含まれていないと判断される。

よって、これらの遺構がトイレ跡である蓋然性は認められない。

(2) 周囲の植生と環境

花粉群集組成ないし検出された種実からみて、SK64, SK65, SK69, SK70の遺構の周囲は、ヨモギ属、イネ科、アカザ属、アブラナ科などの草本が生育する乾燥した環境が示唆される。これらの草本はいずれも人里植物ないし耕地雑草の性格をもつものであり、周囲には人為地が分布していたとみなされる。また、SK64, SK69の周囲にはクワ科-イラクサ科が、SK65の周囲にはニレ属-ケヤキが生育していた。周辺地域の森林としてはスギ林の分布が示唆され、ハンノキの湿地林ないし河辺林の分布が推定される。

7. まとめ

荒屋敷遺跡で検出されたSK64, SK65, SK69, SK70の各土坑についてトイレ遺構の可能性を検討した。分析の結果、これらの遺構内堆積物からは寄生虫卵は検出されず、花粉群集組成および種実類は周囲の植生を反映するものであった。こうしたことから、これらの遺構の堆積物には糞便は含まれていなかったと判断された。各遺構の周囲は、ヨモギ属を主にイネ科、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科の人里植物ないし耕地雑草が生育し、やや乾燥した環境であったと推定された。

参考文献

Peter J.Warnock and Karl J.Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils.Journal of Archaeological Science, 19, p.231-245.

金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫. 藤原京跡の便所遺構-藤原京7条1坊-, 奈良国立文化財研究所, p.14-15.

金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扁形動物. 医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55.

金原正明 (1999) 寄生虫. 考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151-158.

中村 純 (1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.

島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.

中村 純 (1980) 日本産花粉の標徴. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

中村 純 (1974) イネ科花粉について, とくにイネ (*Oryza sativa*) を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.

中村 純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.

笠原安夫 (1985) 日本雑草図説, 養賢堂, 494p.

表1 荒屋敷遺跡における寄生虫卵分析および花粉分析結果

分類群		SK64	SK65	SK69	SK70
学名	和名	1	2	3	4
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉				
<i>Pinus subgen.Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属		1	4	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ	5	5	20	2
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ			1	
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	3	4	2	
<i>Castanea crenata</i>	クリ			1	
<i>Castanopsis</i>	シイ属		1	3	
<i>Fagus</i>	ブナ属			1	
<i>Quercus subgen.Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	1	2	5	
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレ属-ケヤキ		10		
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉				
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	19	1	22	1
Nonarboreal pollen	草本花粉				
Gramineae	イネ科	5	17	90	6
<i>Oryza type</i>	イネ属型			1	2
Cyperaceae	カヤツリグサ科	4	3	5	
<i>Polygonum sect.Persicaria</i>	タデ属サナエタデ節			1	
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科	3	9	22	3
Caryophyllaceae	ナデシコ科		4	3	
Cruciferae	アブラナ科	7	5	43	1
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科			1	
Apiioideae	セリ亜科	2	1		
Lactuoidaeae	タンポポ亜科			2	1
Asteroidaeae	キク亜科			2	1
<i>Xanthium</i>	オナモミ属		1	5	
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	73	37	102	12
Fern spore	シダ植物胞子				
Monolate type spore	単条溝胞子	7	17	4	6
Trilate type spore	三条溝胞子		1	4	
Arboreal pollen	樹木花粉	9	23	37	2
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	19	1	22	1
Nonarboreal pollen	草本花粉	94	77	277	26
Total pollen	花粉総数	122	101	336	29
	試料1cm ² 中の花粉密度	3.8	6.0	6.0	1.8
		×10 ²	×10 ²	×10 ²	×10 ²
Unknown pollen	未同定花粉	1	4	3	1
Fern spore	シダ植物胞子	7	18	8	6

表2 トイレ遺構分析種実同定結果

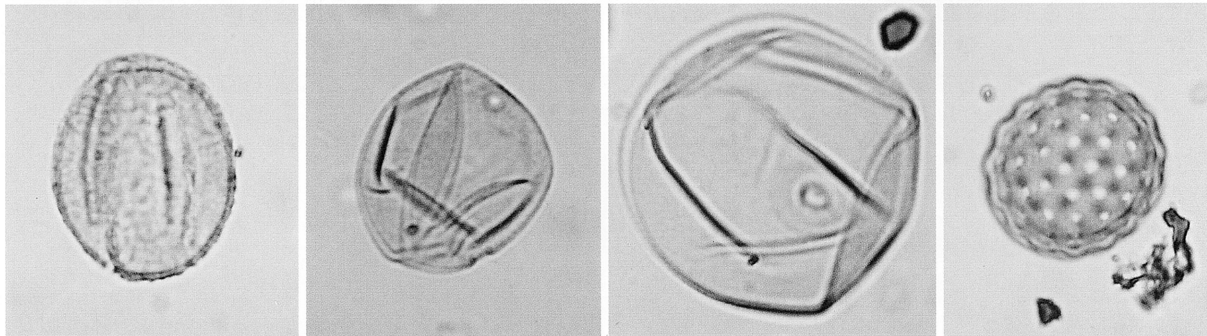
試料No.	遺構No.	分類群		部位	個数
		学名	和名		
FBC03AYS001	SK64	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	1
FBC03AYS002	SK65	Cyperaceae	カヤツリグサ科	果実	3
		<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	3
		<i>Amaranthus</i>	ヒユ属	種子	1
FBC03AYS003	SK69	<i>Vitis</i>	ブドウ属	種子	1
		<i>Oryza sativa L.</i>	イネ	果実(炭)	2
		<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	15
FBC03AYS004	SK70	<i>Chenopodium</i>	アカザ属	種子	2



1 マツ属複維管束亜属

2 スギ

3 ハンノキ属

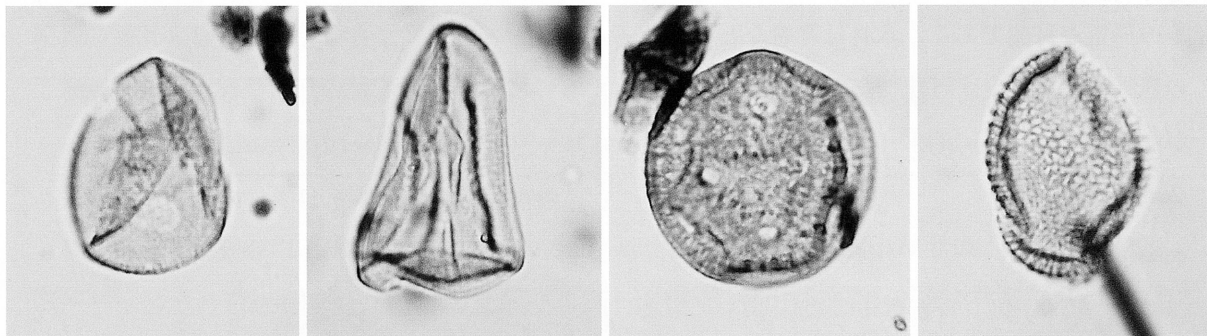


4 コナラ属コナラ亜属

5 クワ科-イラクサ科

6 イネ属型

7 アカザ科-ヒユ科

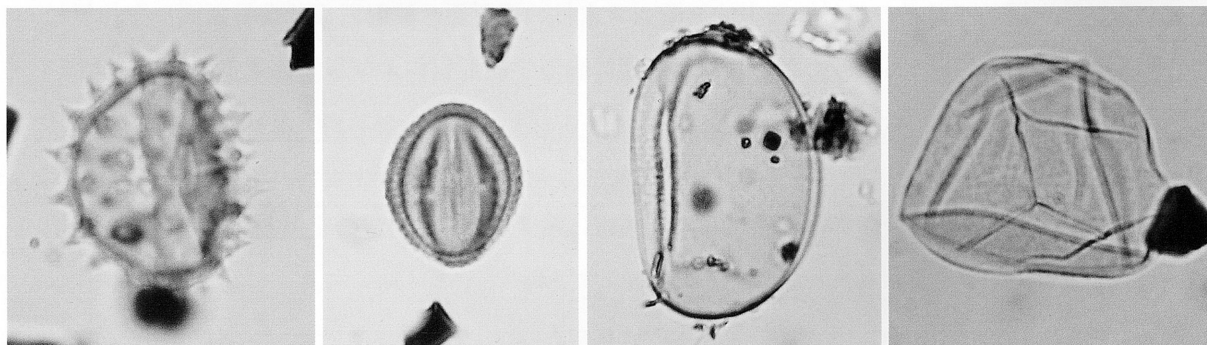


8 カヤツリグサ科

9 カヤツリグサ科

10 ナデシコ科

11 アブラナ科



12 キク亜科

13 ヨモギ属

14 シダ植物単条溝胞子

15 シダ植物三条溝胞子

図版1 荒屋敷遺跡の花粉・胞子

— 10 μm

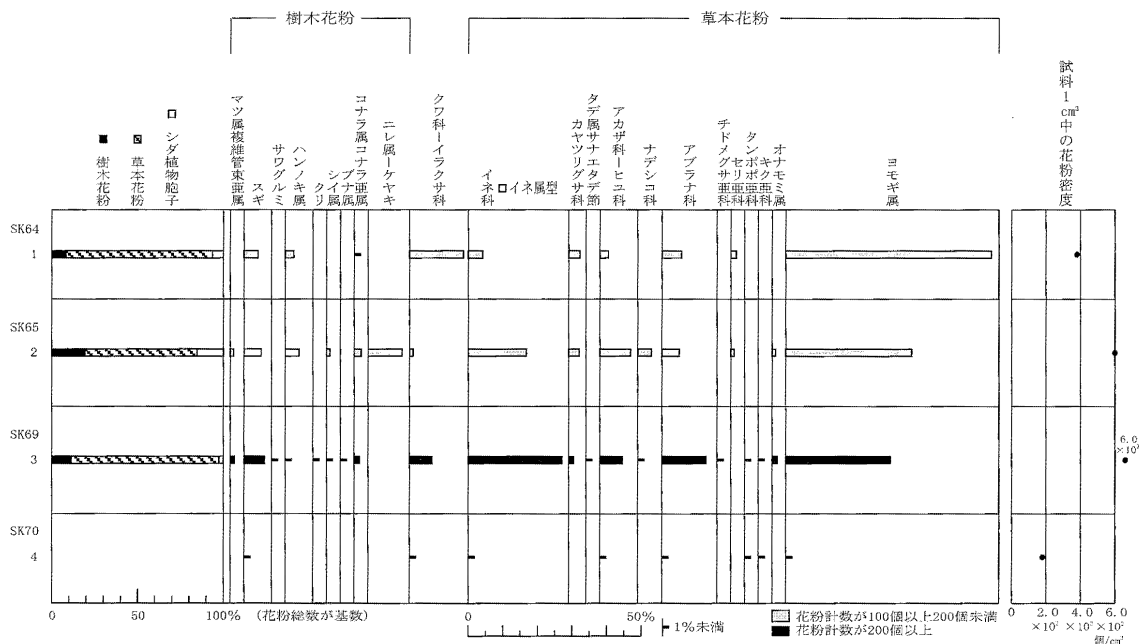


図1 荒屋敷遺跡における花粉ダイアグラム

II. 荒屋敷遺跡の樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試料

試料は、SD04'の2層(試料No.5)、SD09'12'の2層(試料No.6)、SD12'の2層(試料No.7)、SD45の3層(試料No.8)、SK65の10層(試料No.9)より出土した木材5点である。

3. 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な基本的三断面(木材の横断面、放射断面、接線断面)を作製し、生物顕微鏡によって60~600倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結果

結果を表1に、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科

図版2-1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管および垂直、水平樹脂道を取り囲むエピセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質より、マツ属複維管束亜属に同定される。マツ属複維管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木である。材は水湿によく耐え、広く用いられる。

スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科

図版2-2

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科

図版2-3

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

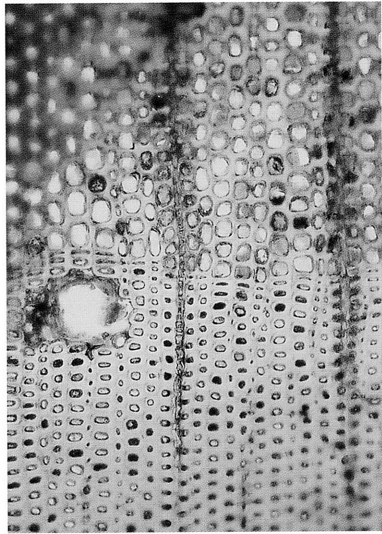
以上の形質よりヒノキに同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱、耐朽、耐湿性も高い。良材であり、建築など広く用いられる。

5. 所見

同定の結果、荒屋敷遺跡の木材は、マツ属複維管束亜属2点、スギ2点、ヒノキ1点であった。マツ属複維管束亜属は二次林性の樹木であり木材としては用いられない。スギ、ヒノキは針葉樹で良材である。いずれの樹木も温帯の中部から下部にかけて分布する。

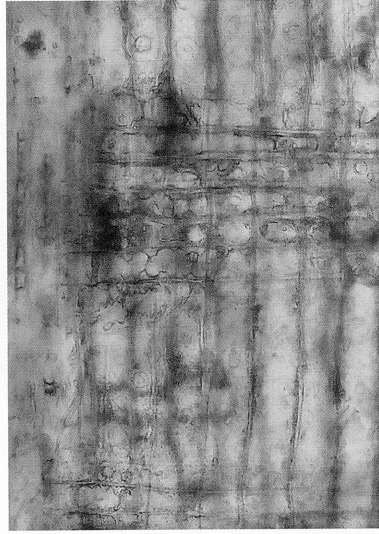
参考文献

- 佐伯 浩・原田 浩 (1985) 針葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.
 佐伯 浩・原田 浩 (1985) 広葉樹材の細胞. 木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.



横断面 : 0.2mm

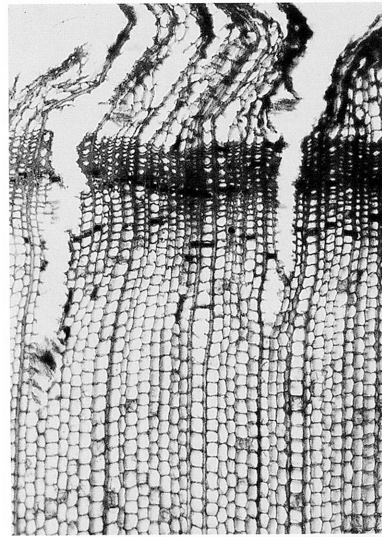
1 FBC03AYS008 マツ属複維管束亜属



放射断面 : 0.1mm

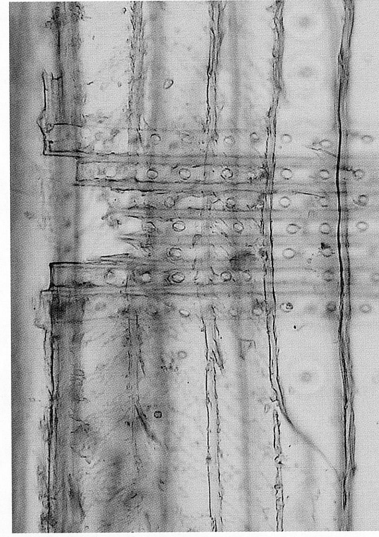


接線断面 : 0.2mm

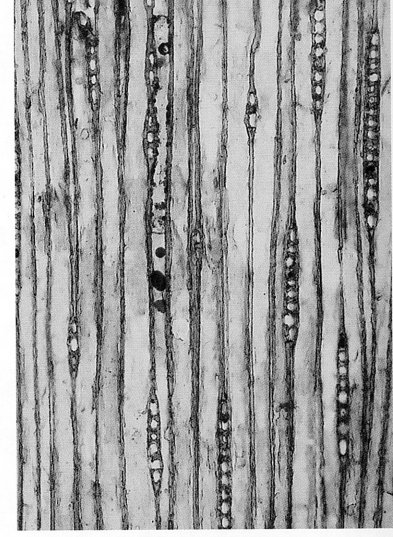


横断面 : 0.5mm

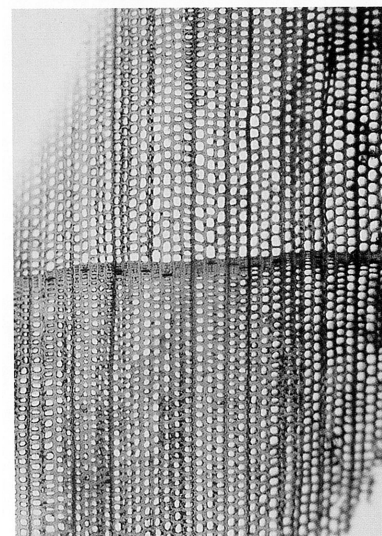
2 FBC03AYS005 スギ



放射断面 : 0.1mm

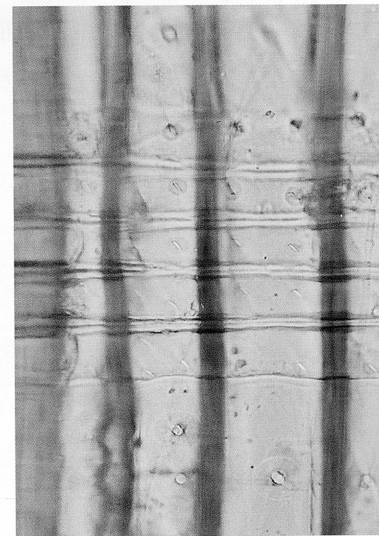


接線断面 : 0.2mm

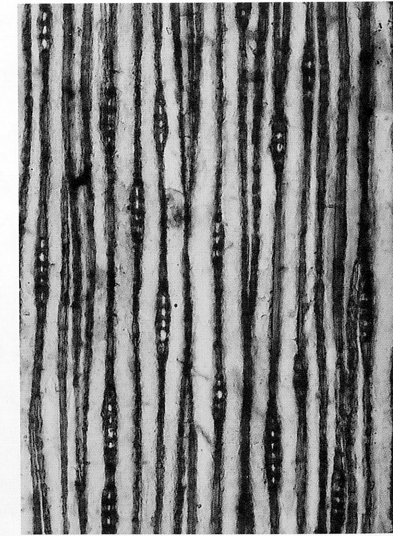


横断面 : 0.5mm

3 FBC03AYS006 ヒノキ



放射断面 : 0.05mm



接線断面 : 0.2mm

図版 2 荒屋敷遺跡の木材

表3 荒屋敷遺跡における樹種同定結果

試料No.	遺構No.	結果 (和名/学名)	
FBC03AYS005	SD04'	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don
FBC03AYS006	SD09' 12'	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.
FBC03AYS007	SD12'	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
FBC03AYS008	SD45	マツ属複維管束亜属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>
FBC03AYS009	SK65	スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don

Ⅲ. 荒屋敷遺跡における種実同定

1. はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。

2. 試料

試料は、SD09' 12' の2層（試料No.10）、SD12' の4層（試料No.11）、SK45の1層（試料No.12、No.13、No.14）およびSK70の5層（試料No.15）の計6点である。

3. 方法

試料を肉眼および双眼実体顕微鏡下で観察し、種実の同定計数を行う。同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

4. 結果

樹木2が同定された。学名、和名および粒数を表に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定根拠となる形態的特徴を記す。

[樹木]

モモ *Prunus persica* Batsch 核 バラ科

黄褐色～黒褐色で楕円形を呈し、側面に縫合線が発達する。表面にはモモ特有の隆起がある。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume 種子・幼果 トチノキ科

丸く、黒色と茶褐色の部分とに分かれ、黒色の部分に光沢がある。

5. 所見

同定された種実は、モモ核とトチノキ種子であった。いずれも大型のものばかりで食用になる種実類である。モモは中国原産で、縄文時代晩期末ないし弥生時代に日本に伝わったものである。弥生時代以降の遺跡から普通に出土し、最もよく出土する種実類のひとつでもある。トチノキは湿地や河辺の湿潤地に生育し、自然度の高いところに生育する。

参考文献

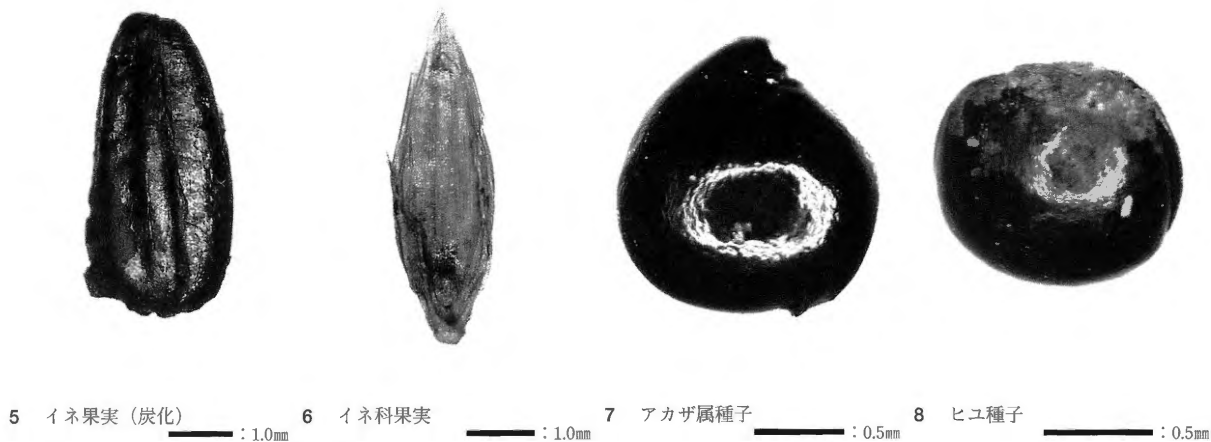
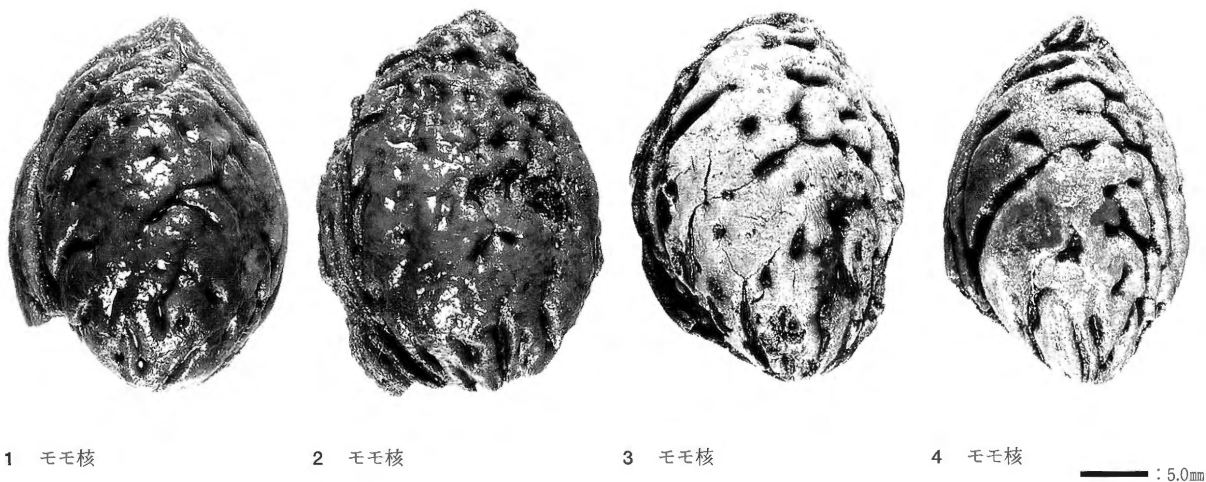
- 南木陸彦 (1992) 低湿地遺跡の種実. 月刊考古学ジャーナルNo.355, ニューサイエンス社, p.18-22.
 南木陸彦 (1993) 葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.
 渡辺 誠 (1975) 縄文時代の植物食. 雄山閣, 187p.
 金原正明 (1996) 古代モモの形態と品種. 月刊考古学ジャーナルNo. 40, ニューサイエンス社, p.15-19.

表 4 荒屋敷遺跡における種実同定結果

試料No.	遺構No.	分類群		部位	個数
		学名	和名		
FBC03AYS010	S D09' 12'	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (完)	1
FBC03AYS011	S D12'	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (完)	1
FBC03AYS012	S K45	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (完)	1
FBC03AYS013	S K45	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (半)	1
FBC03AYS014	S K45	<i>Prunus persica</i> Batsch	モモ	核 (半)	1
FBC03AYS015	S K70	<i>Aesculus turbinata</i> Blume	トチノキ	種子 (半)	1

表 5 荒屋敷遺跡出土モモ計測値

試料No.	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	
F B C 03AYS	010	24.60	18.64	14.72
	011	24.36	16.50	12.66
	012	25.73	19.53	15.56
	013	26.52	18.37	-
	014	27.12	20.65	-



図版 3 荒屋敷遺跡の種実

付章2 漆器分析

パリノ・サーヴェイ(株)

はじめに

荒屋敷遺跡は、阿賀川の支流である日橋川右岸の沖積地に位置する。日橋川は、本遺跡の西側で阿賀川に合流しており、他にもいくつかの支流が合流している。本遺跡では、発掘調査により、縄文時代～古墳時代、平安時代、中・近世の遺構（竪穴状遺構、掘立柱建物跡、柱列跡、土坑、溝跡、ピット群）が検出されている。これらの遺構からは、土器、土師器、須恵器、陶磁器、石製品等と共に木製品も多数出土している。

本報告では、木製品のうち、漆器碗について、樹種同定と漆塗膜の断面観察を行い、木材利用や漆器製作技法に関する資料を得る。

1. 試料

試料は、鎌倉時代の遺構（SK22）から出土した漆器碗1点（FBC01 A035）である。漆器碗は、外側・内側とも黒色漆が塗布されている。接合可能な破片が2片あり、樹種同定用試料は接合面から2mm角程度の木片を採取した。漆薄片用試料は、破片の端をカットして試料とした。

2. 方法

(1) 樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

(3) 漆薄片作製・観察

漆片を乾燥させた後、樹脂に包埋して固化させる。漆塗布面の断面が出るようにダイヤモンドカッターで切断し、表面を研磨する。スライドガラスに接着後、反対側も切断し、厚さ0.03mm程度になるまで研磨してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡、落射蛍光顕微鏡、反射顕微鏡を用いて観察する。

3. 結果

(1) 樹種同定

漆器碗から採取した木片は、落葉広葉樹のケヤキに同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～10細胞幅、1～60細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

(2) 漆薄片作製・観察

外側・内側とも同様の塗布断面が観察できる。下地は、炭粉を漆または柿渋に混ぜて塗布する炭粉下地である。下地の上部には、透過光下で赤褐色、反射蛍光下で黄褐色となる漆層が2層認められる。この漆層は、その特徴から混和物を入れていない透明漆が経年変化により酸化して赤色を呈していると考えられる。また、透明漆層の上部はいずれも透過光で黒色を呈し、透明から徐々に暗色に漸移している様子が見られる。反射顕微鏡による観察では黒色部分と透明の部分には違いが認められない。また、高倍率で観察すると、黒色部分は黒色ではなく濃い赤褐色を呈する。したがって、本来は漆層の黒色部分も透明漆であり、漆層は2層塗布されていると考えられる。このように見えるのは、漆薄片作製時の漆塗膜の状態に起因していると考えられる。つまり、今回の漆層は層界部分に沿って一部剥離しているような状態にあるため、薄片作製時には漆層間全体に亀裂が入ったことが考えられる。このような状態であると、不可抗力で漆層の外側部分（黒色部分）がやや厚くなってしまい、その結果他よりも色が濃く見えていることが推定される。

4. 考察

漆器碗は、碗の底が柾目となる横木取り（北野，1990）で、両面とも黒漆が塗布される。樹種は、落葉広葉樹のケヤキであった。この結果は、本遺跡で前回行った漆器碗の樹種同定結果（パリノ・サーヴェイ株式会社，2003）とも一致する。ケヤキは、ろくろの木地としてよく利用される木材の一つである。木材組織は環孔材で、散孔材のように均質とはならないが、硬く韌性があり、薄手物に適するとされる（橋本，1979）。

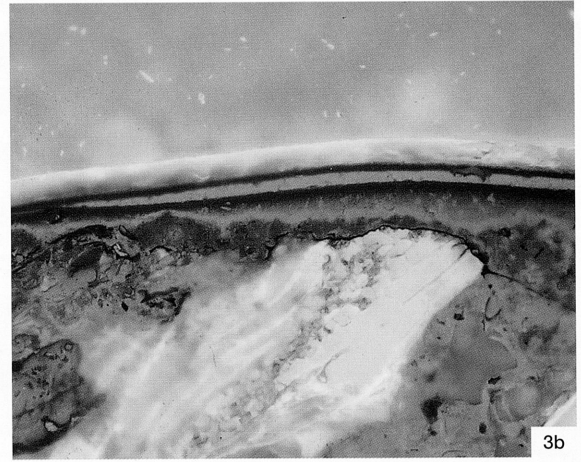
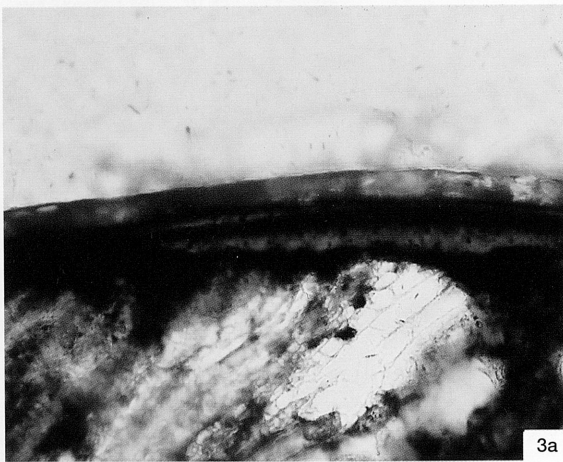
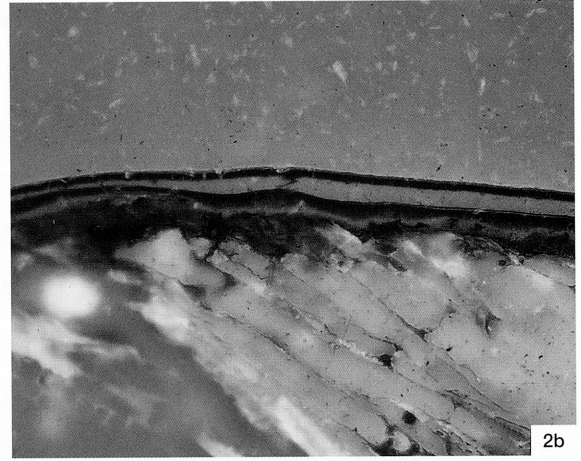
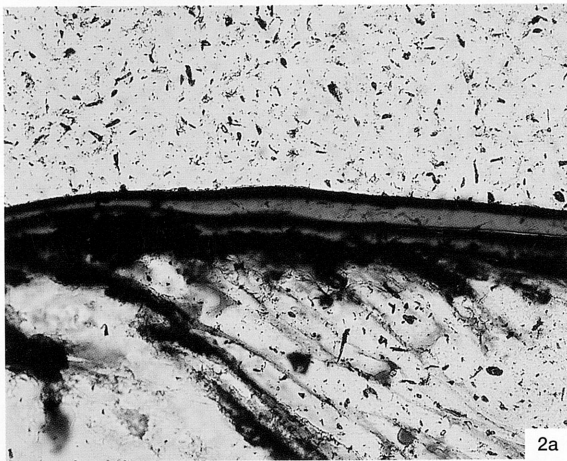
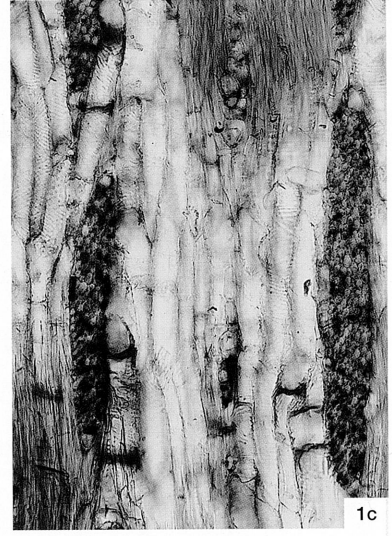
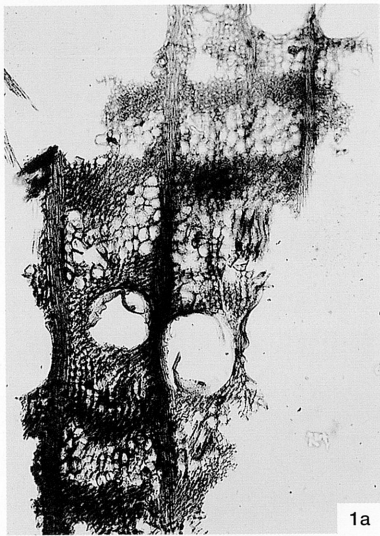
福島県内では、御山千軒遺跡（平安）、久世原館・番匠地遺跡（平安および中世）、獅子内遺跡（不明）、弓手原A遺跡（不明）等でケヤキの碗や皿が出土している（嶋倉，1983；パリノ・サーヴェイ株式会社，1993；松田，1996a,1996b）。また、これまでの県内での調査例から、古代にはケヤキの利用が多いが、15世紀以降になるとケヤキの利用が極端に減少し、ブナ属の利用が増加することが指摘されている（松田，1996a,1996b）。このことに基づけば、今回の結果は、福島県における漆器碗・皿の木材利用の傾向に一致している。

一方、漆器碗の漆断面の観察では、炭粉下地の上に透明漆を2層塗布している様子が見られた。このことから、透明漆を通して下地の黒色が透けてみえることで表面が黒色を呈していると考えられる。福島県内では、これまでに漆塗膜の断面観察を行った例が少ないが、近世を中心に調査例が豊富な東京都では、最もよくみられる手法の一つである（北野，1992,1994a,1994b,1995など）。今回の結果から、少なくとも鎌倉時代の本地域で、炭粉下地と透明漆を用いた黒色の漆器制作が行われていたことが推定されるが、類例がほとんどないため、このような手法が本地域で一般的であったかは不明である。

本地域では、漆器の製作技法については、資料蓄積段階であるため、今後さらに製作技法や樹種に関する調査を行い、地域・時代・使用樹種と漆塗りの関係について検討したい。

引用文献

- 橋本鉄男（1979）ろくろ（ものと人間の文化史31）. 444p., 法政大学出版局.
- 北野信彦（1990）近世出土漆器に関する一調査法. 考古学ジャーナル, 322, p.24-28.
- 北野信彦（1992）細工町遺跡出土漆器資料の製作技法. 「東京都新宿区 細工町遺跡 - (仮称) 新宿区立細工町高齢者在宅サービスセンター建設に伴う緊急発掘調査報告書」, p.163-173, 新宿区厚生部遺跡調査会.
- 北野信彦（1994a）尾張藩麴町邸跡出土漆器資料の製作技法. 「東京都千代田区 尾張藩麴町邸跡 - (仮) 新日鐵紀尾井ビル建設工事に伴う遺跡発掘調査報告書 -」, p.209-215, 新日本製鐵株式会社・紀尾井町6-18遺跡調査会.
- 北野信彦（1994b）丸の内三丁目遺跡出土漆器資料の製作技法. 「東京都埋蔵文化財センター調査報告 第17集 東京都千代田区 丸の内三丁目遺跡 附編」, p.1-18, 東京都埋蔵文化財センター.
- 北野信彦（1995）和田倉遺跡出土漆器資料の製作技法. 「千代田区文化財調査報告書7 江戸城前和田倉遺跡」, p.134-139, 千代田区教育委員会.
- 松田隆嗣（1996）獅子内遺跡出土木製遺物の用材について. 「福島県文化財調査報告書第320集 摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅱ 獅子内遺跡（第1次調査）」, p.579-582, 福島県教育委員会・（財）福島県文化センター・建設省東北地方建設局摺上川ダム工事事務所.
- 松田隆嗣（1996）弓手原A遺跡より出土した木製遺物の用材について. 「福島県文化財調査報告書第319集 摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅰ 弓手原A遺跡（第1次調査）」, p.291-295, 福島県教育委員会・（財）福島県文化センター・建設省東北地方建設局摺上川ダム工事事務所.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）自然科学分析（花粉・材）. 「いわき市埋蔵文化財調査報告第33冊 久世原館・番匠地遺跡 第Ⅰ篇 - 概要・附篇 -」, p.74-88, 福島県いわき市・福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育委員会文化事業団.
- パリノ・サーヴェイ株式会社（2003）樹種同定. 「福島県文化財調査報告書第405集 会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告2 荒屋敷遺跡」, p.211-248, 福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団・国土交通省東北地方整備局郡山国道工事事務所
- 嶋倉巳三郎（1983）御山千軒遺跡から出土した木質遺物. 「福島県文化財調査報告書第109集 東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ 御山千軒遺跡」, p.9-30, 福島県教育委員会・日本国有鉄道.



1 ケヤキ (FBC01 A035) a: 木口, b: 柃目, c: 板目
 2 腕内側の漆断面 (FBC01 A035) a: 透過光, b: 落射蛍光
 3 腕外側の漆断面 (FBC01 A035) a: 透過光, b: 落射蛍光

200 μ m : 1 a
 200 μ m : 1 b, c
 100 μ m : 2, 3

図版 4 木材・漆断面

報告書抄録

ふりがな	あいづじゅうかんきたどうろいせきはくつちょうさほうこく							
書名	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告3							
シリーズ名	福島県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第415集							
編集者名	高橋 信一・井 憲治							
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部 〒960-8116 福島県福島市春日町5-54 TEL 024-534-2733							
発行機関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町2-16 TEL 024-534-1111							
発行年月日	2004年2月28日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 〃	東経 〃	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あらやしき 荒屋敷	福島県耶麻郡 塩川町大字遠田 字荒屋敷 他	403	0073	37 35 34	139 52 60	2002年7月1日 ～ 2002年10月31日	2,100㎡	道路(会津縦貫北道路) 建設に伴う事前調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
あらやしき 荒屋敷	散布地	平安時代 ～ 中世	竪穴状遺構 (2) 柱列跡 (1) 掘立柱建物跡 (7) ピット群 (2カ所) 土坑 (18) 溝跡 (24) 性格不明遺構 (2)		縄文土器・土師器 須恵器・陶磁器 木製品・石製品 など		本遺跡は平安時代～中世を主体とする複合遺跡である。遺物は12世紀を主体とする在地系のかかわりの他、該期の陶磁器類(白磁・青磁・珠州系)等が出土している。性格的には日橋川沿いの自然堤防上に立地する「津」(川湊)と判断され、会津地方の歴史を考える上でも興味深い。	

※経緯度数値は世界測地系(平成14年4月1日から適用)による。

福島県文化財調査報告書第415集

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告3

あらやしきいせき
荒屋敷遺跡 (2次)

平成16年2月28日発行

編集	財団法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部	
発行	福島県教育委員会	(〒960-8668) 福島市杉妻町2-16
	財団法人福島県文化振興事業団	(〒960-8116) 福島市春日町5-54
	国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所	(〒963-0111) 郡山市安積町荒井字文部内28-1
印刷	キング印刷株式会社	(〒960-1106) 福島市下鳥渡字新町西6-1